

第2部

学部・研究科のFD活動報告

・ 法文学部、人文社会科学研究科	・ 2
・ 教育学部、教育学研究科	・ 23
・ 理学部	・ 44
・ 医学部	・ 51
・ 歯学部	・ 64
・ 工学部	・ 72
・ 農学部、農学研究科	・ 97
・ 水産学部、水産学研究科	・ 117
・ 共同獣医学部	・ 134
・ 理工学研究科	・ 152
・ 医歯学総合研究科	・ 178
・ 保健学研究科	・ 192
・ 司法政策研究科	・ 196
・ 臨床心理学研究科	・ 202
・ 連合農学研究科	・ 214

法文学部・ 人文社会科学 研究科

平成 28 年度 FD 活動報告（法文学部・人文社会科学研究科）

1. 学生による授業評価アンケート調査

【28 年度の改善点】

27 年度に続き、実質的な改訂は行っていない。解答欄に若干の修正を施したのみである。アンケート用紙の様式は後掲のとおりである。

【実施時期】

平成 23 年度から実施時期を従来の後期（12 月実施）から前期（6～7 月実施）へと変更した。これは、年末から年度末にかけての業務繁多な時期を避けるとともに、同じ後期に行われる授業公開・授業参観と時期をずらすことで、業務の分散化と学生・教員・事務職員の負担を軽減するための措置である。今年度もこれを踏襲している。

【アンケート実施概要】

アンケート調査は次の要領で行った。

実施期間：平成 28 年 6 月 20 日～7 月 8 日（三週間）

アンケート提出締め切り：平成 28 年 7 月 11 日

方法：各教員が担当授業のいずれか一つ(1 コマ)[講義・演習・実習・実験いずれも可]でアンケート用紙を配布、回収し、学生係へ提出する形で実施。

周知方法：6 月および 7 月の学科会・教授会で実施依頼（説明）し、さらにメールによる呼びかけを行った。

【集計・分析・評価】

集計については、事務補佐員の協力を得てアンケート用紙のスキャナーでの読み込みを行い、学生アルバイトを使って集計、グラフ作成を行わせた。分析・評価の担当は、法政策学科が村山陽平、経済情報学科が石塚孔信、人文学科が飯田昌子である。

分析・評価については、従来通り、学科ごとに【講義】と【演習・実習】に分けて行い、さらに【授業全般の出席状況及び出席頻度の低い授業】についての評価・分析を行った。過去 3 年間の経年変化については、各項目のなかで触れることとし、まとめて評価することをしなかった。

【調査（実施）科目数】

今年度の実施科目数と実施率（括弧内、「実施した教員数」÷「助手を除く授業担当教員から海外出張やサバティカルで授業をしない教員を除いた教員数」×100）は次表のとおりである。

(28 年度実績)

法政策学科	経済情報学科	人文学科	学部全体
12 (86%)	22 (88%)	27 (71%)	61 (79%)

昨年度の実施率と比べると、実施率がかなり上昇していることが明らかである。一昨年度（80%）と同じ水準に戻っているが、これは昨年度の経済情報学科が激減した状況から今年度は回復したことによるものであると思われる。次年度は学部改組で科目名や科目数が変化するが、更なる努力が求められる。

【講義・演習（実習・実験）】

先述のように、アンケート調査においては、講義とそれ以外の演習・実習・実験とに大別して評価を行うことにしているが、23年度からその割合を調査している。23年度の分析でも述べられているように「教員が講義とそれ以外の形態の授業、それぞれ1科目ずつのアンケートをとることができれば、より精度の高い分析が可能となるものと思われるが、学生の負担を考えるとそれも現実的ではない」ことは、現状でも妥当性があると思われる。したがって、今年度も1教員につき1授業の原則の下、アンケートを行っている。したがって、教員がアンケートをどの授業形態で行っているのか、数量的に把握することはしていない。以下にその調査結果を表にまとめた。その結果、図らずも三学科ともほぼ1:1の比率となっていることが明らかとなった。前年度と前々年度は、講義と演習でバラツキがみられていたが、今年度は、結果的にバランスよくアンケートを取れていたことになる。

（28年度実績）

種 別	法政策学科	経済情報学科	人文学科	学部全体
講 義	6	11	13	30
演 習	6	11	14	31
実 習	0	0	0	0
実 験	0	0	0	0
計	12	22	27	61

（参考：平成27年度実績）

種 別	法政策学科	経済情報学科	人文学科	学部全体
講 義	6	9	10	25
演 習	8	3	15	26
実 習	0	0	2	2
実 験	0	0	0	0
計	14	12	27	53

【今後の課題】

23年度にアンケートの書式に大幅な改訂を行ったことから、その推移をみるためにここまで同じ形態でアンケートを行ってきた。ここまでの推移をみると、23年度、24年度は90%以上の高い実施率を維持したが、25年度には70%台に落ち、26年度には80%台に戻したが、27年度は65%にまで落ち込んでいた。今年度については、26年度の水準には戻したが、まだ90%台の実施率には戻っていない。今後も授業評価の意義とその活用について意識を高め、達成率をあげていく必要があるだろう。

アンケートそのものについては、毎回のことではあるが、在来のあり方に疑問を呈する教員もいた。たとえば、現在行っているような無記名のアンケートでよいのかというような疑問である。記名、匿名の問題は、教員と学生との信頼関係をどう取り結んでいくのかという根本的な問題である。何のためのアンケートかということをもう一度考える時期にさしかかっているのかもしれない。

来年度は、学部改組後の新カリキュラムが始まり、新しい科目名でスタートする科目が多くなると思われるので、ますます、授業評価の意義が大きくなると思われる。その結果を、新しい科目の運営に役

立てることが出来るように更なる努力が必要であろう。

【法政策学科における講義についての授業評価の小括】

昨年度・一昨年度と比較して、次の7項目で評価が上昇している：「(1)-1 あなたのこの授業への出席状況について」「(3)あなたは不明な点を積極的に教員に質問した」「(4)この半年間でこの授業のオフィスアワーを利用した」「(5)授業を通して、自分にとって発見があった」「(6)この授業に対して満足している」「(14)質問や意見に対して適切に対応してもらえた」「(A)板書やプロジェクターの文字がよく読み取れた」。受講生の講義に取り組む姿勢は向上してきており、教員側の授業改善や受講生への対応にも努力があったものと思われる。

一方で、昨年度・一昨年度と同様に、「(4) この半年間でこの授業のオフィスアワーを利用した」の項目は、依然として「1：全く利用しなかった」が突出して高くなっている。今後も引き続きオフィスアワー制度の周知などを通じて、学生が利用しやすい環境を醸成する必要があると思われる。

【法政策学科における演習についての授業評価の小括】

本年度の演習に対する評価も、例年どおり講義に対する評価と比較して高い傾向にあり、すべての項目で講義に対する評価を上回っている。また、昨年度と比較して評価が低下した項目は、「(1)-1 あなたのこの授業への出席状況について」と「(a)質疑応答等が活発になされた」の2つで、それ以外の項目では上昇している。「(15)この授業に対する総合評価を10段階で回答してください」への回答も、昨年度や一昨年度と比べて高く評価する学生が多い。受講生の演習に取り組む姿勢は向上してきており、また教員側の努力もあって、全体的に良好な教育が展開できているといえる。

【経済情報学科における講義についての授業評価の小括】

昨年度と比較して、横ばいか若干であるが総体的に評価が低くなっている。(8)「この授業に対する総合評価を10段階で回答して下さい」については若干低評価に推移している。そのほかの項目についての評価はほとんど横ばいで、評価の分布の形も変化がなかった。このことから授業評価が導入されてから一定の時間を経て、教員の授業への取り組みとそれに対する学生の評価が落ち着いてきていることがわかる。その中で、例えば(3)教員への質問についての結果と(14)オフィスアワーの利用の結果といったようなその評価が連動しているものについては、比較的、改善策を模索することが出来ると思われる。また、(17)の学生生活の支援については、昨年度、一昨年度と同様に学生の不満が浮き彫りになっており、物理的に解決できる部分は教員側が早急に努力していく必要があるだろう。

【経済情報学科における演習についての授業評価の小括】

講義と同様に、昨年度と比較して、総体的に評価が横ばいか若干低くなっている。ただ、下落した部分も、その下落幅はわずかであって、このことから授業評価が導入されてから一定の時間を経て、教員の授業への取り組みとそれに対する学生の評価が落ち着いてきていることがわかる。ただ、シラバスの表記とのかい離については、埋めていく努力は必要だろう。今後はさらに、学生の演習に対するモチベーションや積極性をいかに引き出すための努力を引き続き進めていくことが必要だろう。また、例年の

ことながら、演習についてのアンケートは教員と学生が見えるところで行うことになり、どうしても講義よりも匿名性が損なわれてしまい客観的な評価になりにくい側面がある。したがって、アンケートの取り方も依然として今後の課題となるであろう。

【人文学科における講義についての授業評価の小括】

授業の進行・構成・伝わりやすさなどについての学生からの評価は高く、教員それぞれの工夫と努力が功を奏していることが伺えた。学生の出席率も高く、受講態度の自己評価も高かったことから、学生の大学生生活の満足度も高いであろうことが推察された。

一方で、学生から教員への質問やオフィスアワーの利用率の低さなどから学生と教員間のコミュニケーション不足が推察された。また、学習目標への到達度の自己評価が低いことが明らかとなった。今後は、授業の目的や目標をシラバスに記載するのみならず、授業の中で適宜学生に提示することで、学生の学習意欲のさらなる向上につながると推察された。

【人文学科における演習についての授業評価の小括】

人文学科では1年次に「人文科学基礎Ⅰ」「人文科学基礎Ⅱ」において、グループワークなどを通じてグループ内での意見交換や成果発表を行うという、授業で意見を述べる機会が増えたことと、教員の授業の雰囲気づくりの工夫が、授業での質疑応答の活発化を後押ししていると推察された。今後は、授業での学生から教員への質問などがさらに増えるような改善が望まれる。

2.授業公開・授業参観報告書

【新しい試み】

今年度は実施時期を毎年前期・後期で交互に実施するという一昨年度来の方針に従って、前期に実施した。昨年度は実施期間が4週間であったが、参観者数の減少が見られたので、今年度は思い切って実施期間を1週間に短縮してみた。また今年度は、オムニバス形式の授業を除く時間割のすべての科目を公開対象とし、授業公開に関わる手続きを大幅に簡略化した。その代わりに、参観についてはすべての授業に関して事前に担当者の承諾を得ることを義務付けた。

【実施計画】

5月26日

第2回FD委員会に実施案を提案しご審議いただく。今年度は「授業公開」を前期に実施する。

従来通りの方針

対象教員：法文学部全教員（非常勤講師を除く）（従来通り）

講義、演習、講読、実習すべて可とする（ただし共通教育科目は除く）。（従来通り）

全教員が最低1つの授業を必ず参観する。（従来通り）

他学部からの参観： 従来どおり全学に案内（従来通り）
公開される授業の「内容紹介 あるいはセールス・ポイント」を入れる。（昨年度から）
「授業公開報告書」、「参観報告書」の作成。（ 従来通り）
実施期間を1週間 （今年度から）
実施期間を前期 （前年度と別の時期に行うという一昨年度からの方針）
対象科目を時間割のすべての科目に （今年度から）

6月10日（水）

学部全教員に対し、公開授業の提供をメールで依頼しアンケートを行う。各学科会でもアナウンス。
返信先：各学科のFD委員会授業公開・参観WGメンバー（法：村山、経：澤田、人文：Cother）
回答締切：6月30日

6月11日～6月30日

「法文学部授業公開一覧表」及び「授業公開報告書」「授業参観報告書」のフォーマット作成

6月17日

教授会にて授業公開・授業参観の実施をアナウンス。

7月2日

各学科会にて「公開授業一覧表」を示し、授業参観及び報告書の提出を要請
担当者：各学科のFD委員会授業公開・参観WGメンバー（法：村山、経：澤田、人文：Cother）

7月6日（月）～7月10日（金）（1週間）

授業公開・授業参観の実施及び報告書の提出

8月31日

「授業公開報告書」「授業参観報告書」の提出最終締切

【授業公開・参観実施上の詳細】

2.3.1 授業公開・参観の手順等について

- 1) 全教員は上記期間中の担当授業をすべて公開する（講義以外も可、ただしオムニバス形式の授業と共通教育科目は除く）。
- 2) 全教員は上記期間中に公開される授業の中から、1コマ以上必ず参観する。
- 3) 授業参観者は授業を担当する教員（以下授業担当教員）に事前に参観する旨を伝える。
- 4) 参観後、授業参観者は「授業参観報告書」を授業担当教員に提出する。
- 5) 授業担当教員は、授業参観者と相談の上、意見交換会を行ってもよい（授業終了後以外の時間も可）。
- 6) 授業担当教員は、「授業公開報告書」と「授業参観報告書」を8月31日までに各学科のFD委員に提出する（参観者がいない場合は「授業公開報告書」のみを提出）。

2.3.2 他学部からの参観について

- 1) 授業公開の日程等は全学に送付する。
- 2) 参観者には「授業参観報告書」の提出を求める。
- 3) 参観する場合は法文学部学生係に事前に連絡するよう依頼する。学生係（または FD 委員会）は授業担当教員に連絡する。
- 4) 他学部からの参観について不都合がある場合、法文学部 FD 委員会の判断により、参観を認めないこともある。

2.3.3 その他

- 1) 休講の場合は授業公開を中止し、後日実施する（場合によっては実施期間後でも可）。
- 2) 参観者がいない場合でも授業担当教員は参観者を募る必要はない。
参観者が多い場合の対応は、授業担当教員に一任する（参観者に対する立ち見の連絡や教室変更、椅子の持ち込みなど）。

【授業公開報告書と授業参観報告書】

今年度の WG が昨年のお返事を参考にして、「授業公開報告書」と「授業参観報告書」を編集した。「公開報告書」では以前あった項目「授業参観者からの意見等に対する感想をお書きください。」「意見交換会で話し合われた内容についてお書きください。」「授業の改善に向けたアイデアがあればお書きください。」の回答内容が似ているため、「授業参観者からの意見等に対する感想をお書きください。」にまとめた。同様に前回の「参観報告書」の「本授業に対する感想やコメント等をお書き下さい。」がほかの質問と似ているため、削除した。

【授業公開の総括】

全教員参加による授業公開・授業参観は、今年度で 11 年目となる。これまでも授業の方法に関する様々な工夫や改善が図られており、今年度も多岐にわたる教員の努力が読み取れる回答が多く寄せられた。受講生の理解度を高め、授業内容への関心を喚起する種々の工夫の中から、ここでは特に 3 項目にまとめ、紹介したい。

● 授業内容を分かりやすく伝える工夫

受講生が授業内容を理解しやすいよう、様々な工夫がされていることが伺えた。特に、文書や図式を、パワーポイントや書画カメラ（OHC）を使ってスクリーンで見せながら解説する取組みは多く見られた。投影する資料を印刷して配布する、ということもよく行われている。また、今日の授業が学期全体の授業のなかでどの位置にあるのかを授業開始時に示す、ルーブリックを示す、など、丁寧で細やかな配慮も見られた。

● 受講生の興味・関心を高める工夫

受講生の興味・関心を高める工夫も多く見られた。中でも、受講生にカードを配布し、その日の講義内容へのコメント・質問・要望等を記入してもらい、次回の授業時に教員がフィードバックす

る、という例は多く寄せられた。大規模クラスでは特に教員がひとりひとりの理解度を確認することが難しくなるが、この方法を活用することでそれを補うことができる。また、受講生にとっても、自分の書いた内容が紹介されると、それが学習意欲にもつながり、他の受講生にとっても参考になり、さらに前回の講義内容を想起する上でも有益だと思われる。

また、パワーポイント資料と配布資料は別内容にし、受講生が適宜補足することで講義内容をより深く理解できるよう工夫した、という例は、授業への集中力を維持させる工夫、という点からも興味深い。この他にも、前回扱った教材を今回は形式ややり方を変えて再度利用する、という語学科目での例は、単に同じ内容の繰り返しではないため、受講生にとっても興味・関心を持って取り組めるよい復習活動例になっている。

● 教室の環境作りへの工夫

授業を円滑に進めるためには、教室の環境作りも欠かせない。今回の回答でも、意見を報告する前に、近くに座っている人と事前に話す時間を設けるなど、発言しやすい雰囲気作りへの配慮も複数例見られた。授業運営での工夫として参考にしたい。

このように、今回のアンケート結果から、授業改善について各教員が多大の努力を払っている様子が視えた。また、実際に授業を参観した教員からも、工夫していると感じた点や取り入れたい点として、数多くの内容が寄せられた。それらの内容を共有し、新たな工夫も加えながら、より良い授業運営に繋げたい。

【授業公開の現状と今後のあり方について】

まず、今年度を含めた5年間の授業公開・参観の状況を以下に表で示す。

	2011年度 (後期)	2012年度 (後期)	2013年度 (前期)	2014年度 (後期)	2015年度 (前期)
(A) 公開された科目数	80科目	87科目 (107コマ)	91科目 (112コマ)	88科目 (161コマ*)	231科目**
(B) 参観者数	48名	48名	46名	37名	29名
(C) 参観率 [(B) ÷ (A)]	60%	約55%	約51%	約42%	約13%
(D) 参観者のいた科目数	28科目	29科目 (31コマ*)	32科目 (32コマ)	29科目 (29コマ)	22科目
(E) 被参観率 [(D) ÷ (A)]	約35%	約33%	約35%	約33%	約9%

*コマ数には同一授業の複数回の公開あるいは参観が含まれる。

**時間割にあるオムニバス形式の授業以外の全科目

(1) 参観者数 (参観率)

今年度の参観者数は、過去最低だった昨年をさらに下回っている。また参観率も公開科目を時間割上の

すべての授業としたため、大幅に低くなっている。

(2) 被参観率

被参観率も参観者の減少および公開科目数が大幅に増えた影響で、これまでより低くなっている。

これらの数字をどのように解釈すべきかについては意見が分かれるであろうが、参観できる総授業コマ数が飛躍的に増加したにもかかわらず、参観者数自体が減っていることは歴然としており、この現実はこの制度の今後を考える上で考慮しなければならない。全学科から寄せられている意見から判断しても、授業公開そのものには肯定的で、協力する姿勢を示しながら、自らは参観しない（あるいは、多忙ゆえに機会をもちにくい）教員が依然として少なくないことが問題である。改善に向けて今後どのような方向をとるべきかについて、報告の中の「2.5. 授業公開に対する意見」を参照しながら以下で考えてみたい。

【授業公開制度の改善に向けて】

今年度の授業公開・授業参観においては、前年度に寄せられた提案を採用し、実施期間を1週間に短縮する代わりに期間内のすべての授業を原則として公開する方法が採用された。

授業公開の期間を1週間に短縮した点については、否定的なコメントが多く寄せられた。具体的には、公開する期間が短いため、他の教員の授業を参観する機会を活用することが困難であるという課題である。自身の授業を公開すること自体には抵抗が無いが、他の先生の授業を参観するとなるとある程度の期間（2週間以上）を設定した方が柔軟な対応が可能であるとするコメントが複数寄せられている。人文学科から寄せられたコメントでも「法文学部では曜日によって授業数の偏りが見られ、聞かせて頂きたい授業と自身の授業が重なったり、他の用務で出席できなかつたりする場合もある」「自分が誰かの授業を見に行くとなると時間の工面が大変だと感じる。来年は自分の授業を休講にして参観しようかと思う」との指摘がある。

今年度は期間中の授業を原則としてすべて公開する方法を採用する点を主眼とし、授業公開実施の負担を増加させないために公開期間を短く設定した経緯がある。その結果として参観が困難になってしまったことは遺憾であり、次年度以降の改善が求められる部分であると考えられる。

期間内のすべての授業を原則として公開することについては肯定的なコメント、否定的なコメントの双方が寄せられた。肯定的なものには「共通教育での授業公開のように、担当教員の所属を問わず、授業担当者全ての科目を公開すべきだと思います」（法政策学科）「今回の方法がやりやすいと感じました」（人文学科）といったものがある。すでに共通教育で実施されていることから、抵抗なく受け入れられたのかもしれない。あるいは、期間内の授業の進行度合いを考えながら公開タイミングを決定する手間が省けるという側面が評価されたのかもしれない。

否定的なコメントとしては、「すべて公開よりも、授業担当者によって選ばれた授業を参加する方が好ましい。デザインされ、工夫された授業を公開することは意味がある」が挙げられる。授業の進行状況によっては授業公開・授業参観に適さないタイミングに当たってしまうこともあるだろう。あるいは、義務的にただ公開するだけの授業公開ではFD活動としての授業公開・授業参観の目的を達成することにはつながらないという意見なのかもしれない。

上記今年度の変更点についてのコメントを集約すると、大きく2つの対処法が考えられる。1つは授業公開の期間を従来のように長く設定する方法である。しかし、「他の先生方の授業を参観すること自体は

非常に有益だが、それにまつわる事務的な作業が軽減されるのが望ましい」(人文学科)とあるように、教員の事務作業の負担減とセットで考えなければならない問題であろう。

第2に、授業公開の期間設定を行わないという方法もありうる。授業公開・参観の期間を設定するというよりも、それぞれの教員・授業のタイミングに合わせて、教員が自信のある授業を自ら選んで公開する方法である。

対処法は必ずしもこの限りではないが、次年度以降、何らかの改善の必要が高いことは間違いないと考える。

授業公開・参観の制度そのものについては、肯定的なコメントが多数寄せられている。「(参観者の有無に関わりなく)自分の授業を省みるよい機会ではないかと思っております」(法政策学科)「大学教員には、社会に役立つ人材を育成する義務があります。しかしながら、そのノウハウを学ぶ場所が極めて少ないのが現状です。したがって、公開授業という形で、他の先生のノウハウを吸収する機会があることは、鹿児島大学の教員・学生にとって、非常に有益であると思います」(経済情報学科)「自分とは異なる専門分野の授業を参観させていただくことにより、他の教員の授業方法についてだけでなく、自分の専門分野以外で蓄積されている研究成果等についても学ぶことができるので、教員にとって授業公開は貴重な機会であると思う」(人文学科)など、多くの教員が制度そのものの意義を理解し、前向きに活用しようと考えている。

しかし、「授業公開・参観の意義はあると思いますが、マンネリ化していることは否めないように感じます」(人文学科)とあるように、授業公開・参観の実施には一定の意義を見出すものの、その実施方法に改善の余地が大きい点を指摘するコメントも多い。

「毎年授業公開が実施されるが、参観者が少ないので、授業公開の方法を考える時期に来ているのではないかと思う」(経済情報学科)「従来、大学の授業は教員個人の裁量に委ねられる点が多く、また教員サイドに授業の質を高めるという意識が今ほどは高くなかった可能性がある。こうした背景からFD委員会が発足したのだと考える。したがってFD委員会の活動は、当初は委員会側から半ば強制的にFD活動を引き起こしていくタイプの活動が中心であったかもしれない。しかし、その状況は変わりつつあると考える。たとえば今回の授業公開期間中においても複数名の教員が合同で基礎演習を実施するなど、教員側の自主的なFD活動が盛んになりつつある。また合同でゼミを実施し、懇親会の場で学生を交えてゼミの進め方について議論する例も複数耳にしている。こうした動きはとりわけ若手で顕著であるが、若手がベテラン教員のアドバイスを請う形でベテランも巻き込んだ活動へと進化しつつある。教員側の自主的なFD活動が活発化するなかで、FD委員会の果たすべき役割は教員の自主的なFD活動を支援し、その成果を学科・学部・全学に共有することへとシフトしていく必要があるかもしれない。授業公開・授業参観という半強制的な(前時代的な)FD活動を今後も継続する必要があるのか、という点については検討の余地があるのではないかと考えている。」(経済情報学科)といったコメントは、授業公開・授業参観というFD活動の方法そのものに疑問を投げかけている。

また、より具体的に参観者からのフィードバック方法の改善を求める意欲的なコメントも見られた。たとえば、「今回初めて、参観者の先生から評価をいただき、非常にためになった。ただ、授業に対する問題点等のマイナス面については人間関係上指摘しづらい面もあると思うので、この点をどうにか改善していただければ、より効果のある授業公開制度になると思う」(経済情報学科)という指摘がある。単に参観者が増えたとしても、公開する側にとってメリットが少ないのではないかという意見だろう。この点については、「他大学でもあるような教授法の学位(あるいは知識やスキル)を持った職員に定期

的に授業を見てもらい、教員にフィードバックするようなシステムがあると授業の改善・向上につながりやすくなると思います」(経済情報学科)という改善提案がなされている。人材確保の問題や人選の妥当性の問題など、解決すべき課題が多いとは思われるが、検討の余地はあるかもしれない。

以上のコメントを集約すると、授業公開・授業参観制度は「教員が授業の質を向上させるためのきっかけ作り」および「意欲的な教員が同僚の授業の工夫を学ぶ場」として作用してきたと整理できるだろう。参観者がいなかったとしても、同僚の目にさらされるかもしれないという緊張感は、改めて自身の授業を見直すきっかけとして機能しているように思える。また、授業を公開した結果得られるフィードバックには不満が残るものの、同僚の授業を参観することで得られる学びは大きいとする意見が多い。

しかし意欲的な教員からすれば現状の制度には不満が残るのだろう。同僚の授業から学ぶ場は自分たちでも設定することができる(すでにしている)。せっかく公開したにもかかわらず自身の授業を参観してもらえない、改善点を伝えてもらえない。こうした声にどの程度応えていくべきかは、授業参観・授業公開という制度の位置づけとも関わるだろう。

授業公開・授業参観の制度をFD活動に意欲的でない教員に対してその重要性を理解してもらうための活動として位置づけるのか、多忙を極める学務の合間を縫って自身の教育活動を見つめなおすきっかけとして位置づけるのか、FD活動に意欲的な教員を満足させるような制度へと変容させていくべきなのか。すべてを同時に満たすような均衡点を見つけることは困難を極めると考えられるが、ターゲット・実施の目的・FD活動の現状等を改めて整理し、議論していくことは意義があると考えられる。

3. 学生による授業評価アンケート調査(人文社会科学研究科)

【授業評価アンケートの実施について】

人文社会科学研究科の「授業評価アンケート」調査は、平成18年度に同研究科教務委員会を中心として初めて実施され、平成19年度からは、同年度に法文学部FD委員会内に設けられた大学院担当グループに引き継がれ、今年度で11度目となる。

アンケートの項目内容は、継続性を重視する観点から、従来と同様にしている。昨年度と同様に、今年度も、調査の実施率を向上させるために、学部授業に対する授業評価アンケートと実施期間を同一とし、教員の周知徹底を図った。

【「授業評価アンケート」実施の手順】

今回の「授業評価アンケート」の実施の手順は、次の通りである。

- ① 期間 平成28年6月20日(月)～7月8日(金)
- ② 実施機会 各教員の担当授業のうち、1科目。ただし、博士後期課程を担当している場合は、博士前期課程と博士後期課程それぞれ1科目とした。
- ③ 実施方式 大学院の授業を開講している教員に、大学院係からアンケート依頼文、アンケート用紙、封入用封筒を10部ずつ学内メールにて送付した。教員は、授業時間中に学生に配布し、記入させ、学生自身の手で封筒に入れて封をさせた。実施後、教員はそれを受け取り、そのまま大学院係に提出した。
- ④ 分析と報告 アンケート回収後、FD委員会大学院グループで結果の分析を行い、報告書を作成した。記入済みのアンケート用紙は、資料として大学院係に保管した。各教員へは、

今後の授業改善に役立てるよう、報告書を配布するとともにアンケート用紙のコピーを返却した。

上記の手順は、前年度の手順と実施方式をほぼ踏襲したものである。平成22年度まではアンケート用紙等を各教員に大学院係窓口まで受け取りに来てもらったが、受講学生数が多くないことや、教員への周知の意味もあり、平成23年度から、大学院係より各教員へ送付してもらうよう改めている。

【実施率】

平成28年度前期に学生の受講登録がなされている科目を担当する教員数は80名であった。これに対して、アンケートを実施した教員数は41名であり、実施率は51.3%であった。過去の実施率をみると、平成18年度の61.3%、平成19年度の62.5%、平成20年度83.1%、平成21年度71.9%、平成22年度73.9%、平成23年度80.5%、平成24年度82.1%、平成25年度74.2%、平成26年度77.8%、平成27年度46.3%と推移しており、昨年度については一時実施率は下落したものの幾分上昇した。

また、専攻別に前年度との対比を示すと、法学専攻が58.3%→60%、経済社会システム専攻が21.7%→35%、人間環境文化論専攻が66.7%→58.8%、国際総合文化論専攻が78.9%→72.2%、地域政策専攻が7.7%→33.3%となり、一部の専攻を除き、実施率の上昇がみられており、丁寧に専攻会議、研究科委員会におけるアナウンスを行うなどのアンケート実施率を高める工夫が実ったともいえよう。なお、アンケートに回答した学生のべ数は102名であった。

今後とも実施率向上のために、アンケート実施に対する各教員の意識向上、アンケート実施依頼の徹底措置が求められるだろう。

【平成28年度授業評価アンケートの実施状況】

課 程	専 攻	履修登録が なされてい る教員数	アンケート が実施され た科目数	実 施 率 (%)
博士前期	法学	10	6	60%
	経済社会システム	20	7	35%
	人間環境文化論	17	10	58.8%
	国際総合文化論	18	13	72.2%
博士後期	地域政策科学	15	5	33.3%
計		80	41	51.3%

【まとめおよび改善された点】

平成 28 年度授業評価アンケートの結果については、以下のように総括できる。

今年度のアンケートでも、7 項目のすべてにおいて、5 段階評価で 4 以上の評価が全体の 93.1%～100% である。昨年も 9 割以上であった。本研究科においては、これまでと変わらず、質の高い授業が提供されており、受講生も熱心に受講しているといえる。

また、昨年度と比較すると、(3)授業の内容の理解度の項目を除くすべての項目において 4 以上の評価の割合が上昇している。

今年度は(3)授業の内容の理解度と(6)学力や興味の向上に関して、5 の評価の占める割合が昨年度に比べて低くなっている。

もちろん、今後、きめ細かな対応を求めてもよいかもしれない項目もある。すなわち、質問項目の結果や自由記述から見て取れるように「受講生の授業に対する評価」は極めて高いが、今年度に関していうならば(3)授業の内容の理解度と、(6)学力や興味の向上については評価が低くなっている。授業内容の理解度、学力や興味の向上の項目については、今後のアンケート結果の推移を注視していきたい。

過去 10 回の調査と今回のアンケート結果を比較しても全体的傾向はほぼ一貫しており、全ての調査において全項目は 5 段階評価で一貫して高い評価を得ている。こうしたアンケート結果の一致は、本研究科の授業に対する受講者の満足度が高いことを示しているといえよう。

大学院課程の授業評価アンケート調査は今回で 11 回目だが、研究科全体の実施率は 51.3%で、昨年度の 46.3%と比較して、上昇している。本アンケート調査は、授業改善のための基礎的データを収集するために不可欠なものであるから、実施率を高い水準で維持するため、これまで通り、アンケート実施に対する各教員の意識向上、アンケート実施依頼が必要であろう。

以上のように、人文社会科学研究科では、受講者から高く評価される効果的な授業が実施されていると評価することができよう。

今後とも、このレベルを維持するだけでなく、さらにより高いレベルの授業を構築していくために FD 活動に取り組んでいくことが望まれよう。

4. 平成 28 年度 TA アンケート調査結果報告

【実施の手順】

今回の「TA アンケート調査」の実施の手順は、以下の通りである。

- ① 時 期：前期 平成 28 年 7 月 22 日（金）～8 月 3 日（水）
後期 平成 29 年 1 月 11 日（水）～2 月 1 日（水）
- ② 実施対象：法文学部前・後期授業に TA として働いた人文社会科学研究科の学生全員。
- ③ 総務係を通じて、各 TA 担当者にアンケート用紙を配布（TA1 人につきアンケート用紙 1 枚を配布）。アンケート用紙は、TA 業務完了後に必要事項に記入の上、「TA 活動報告書」と併せて、法文学部総務係へ提出してもらった。
- ④ アンケート回収後、FD 委員会で結果の分析を行い、報告書を作成し、これを授業評価アンケート報告書に併せて掲載し、今後の TA に対する指導の改善に役立てる。

【回収率】

今回のアンケートには、37の回答が寄せられた。平成28年度前・後期のTA担当者(37名)の100%が回答し、昨年度の回答率91.9%に比べ、回答率が上昇した(ただし、1名が複数の授業科目のTAを担当している場合には、担当科目ごとにアンケートを提出してもらっているため、回収率が100%を越える場合がある)。

平成28年度TAアンケート調査の状況

課程	専攻	担当科目数	TA担当者数	アンケート提出者数	回収率(%)
博士前期	法学	8	7	8	114.2
	経済社会システム	9	11	10	90.9
	人間環境文化論	8	7	6	85.7
	国際総合文化論	5	5	6	120
博士後期	地域政策科学	6	7	7	100
計		36	37	37	100

【まとめおよび改善された点】

平成28年度TAアンケート調査の結果は、以下のようにまとめることができる。

一昨年度までアンケート調査を1月～2月にのみ実施したため、前期にTAを担当した学生からすべて回収するのは極めて難しかった。昨年度と今年度は7月～8月、1月～2月の2回に分けてアンケートを行ったことから、多くのTA担当者からアンケートの回答を得ることができ、TAの活動実態を知る上で有意義なデータが得られた。

「(1) 事前準備」「(2) 教員の指導等」の項目の結果から、TAは教員との間で連絡をとりつつ、業務に従事できている。また「(3) TAのメリット」と「(4) TAの負担」と比較すれば、圧倒的に「TAのメリット」が多いといえる。種々のメリットもある(※TAをやったメリットになった事柄の一覧を参照)。

上記(5) TAについての自由記述の小括において、「少数であるものの、教員とTAとの、あるいはTA間での意思疎通、連絡打ち合わせ、および過去の経験を知識として持たせることも重要であると思われる」と記した。これらのように、今後はより綿密な「報告、連絡、相談」の機会を設ける努力をすることがあってもよいであろう。

総括して、今年度も、人文社会科学研究科のTA制度は、学生へ教育経験の機会を提供し、業務の遂行も高く評価できることが確認できた。今後も継続し、さらに充実した制度となるよう努力していきたい。

5. FD講演会

第1回講演会(平成28年7月20日(水))

「ポートフォリオ入門」(教育センター 伊藤奈賀子准教授)

出席者 76名(教員67名、事務職員9名)

第2回講演会(平成29年2月15日(水))

「大学で身につけさせたい能力とアクティブラーニング」

(教育学部附属教育実践総合センター 有倉巳幸教授)

出席者 75名(教員69名、事務職員6名)

なお、同日の10時30分～11時30分に、有倉教授を囲み、学部長、副学部長、教務委員長、学生生活委員長、FD委員長による意見交換会を行った。

6. FD 調査活動

村山陽平(法政策学科准教授)

法文学部FD委員会の視察研修として、平成28年8月3日に、東京工業大学大岡山キャンパスで開催された、「大学教育改革特別セミナー：大学の戦略的成長を促す効果的な教育のありかたを考える」に参加した。東京工業大学と金沢大学の教育改革について、それぞれ具体的な報告があった。現在、本学をはじめ多くの大学で改組やカリキュラムの刷新が行われているが、その評価は、新たに導入される授業が効果的に実施できるかにかかっている。これを担保するために、報告校では教員向けに単発ではなく年に15回など体系的に深く学べるセミナーをいくつも開催するなど、FD研修が充実していることがうかがえた。このことが改革を軌道に乗せる鍵のひとつだと思われ、本学でも大いに参考にしたい。

太田純貴(人文学科准教授)

平成28年8月24日から8月28日にかけて、FD関連イベントおよび関係者との面談、面談を基にした資料・情報収集を目的として、京都に出張した。具体的には、「大学生研究フォーラム2016」(於・京都大学百周年時計台記念館)に参加した。またそこで得た知見などをもとに、FDの経験のある研究者やFDの制度設計などに携わる研究者とアクティブラーニング(AL)・PBL(Problem/Project Based Learning)の活用法についての意見交換を行い、関連する資料調査を行った。

「大学生研究フォーラム2016」では、村上正行(京都外国語大学)、中原淳(東京大学)らによるALやPBLの理論的・歴史的背景や一般的な意義について知見を取得した。また、それらを踏まえた上で、東京大学や京都大学を中心に(高等)教育機関におけるAL・PBLに関する個別的事例についての知見を得た。フォーラム中には、大学や高校などの教育機関関係者に加え、企業関係者とも(高等)教育やALについての意見交換を行なった。

また、上記フォーラムの内容を踏まえ、一般的事例や東大京大をモデルとしたAL・PBLの形式を、地方大学(鹿児島大学)にどのように応用することが可能か/応用すべきかという点に関して、杉山卓史(京都大学)、福田宗太郎(京都大学高等教育研究開発推進センター)の各氏と個別に意見交換を行なった。

平成29年2月28日から3月3日にかけて、AL・PBLの活用法についての意見交換と情報収集のため、東京と京都においてFD関係者との面談などを行った。面談者は田中一孝助教(桜美林大学)、米谷龍幸(ナカニシヤ出版)、福田宗太郎(京都大学高等教育研究開発推進センター)、杉山卓史(京都大学文学研究科)の各氏である。

田中一孝助教は、京都大学高等教育研究開発推進センターでさまざまなFD関連企画に関与した後、桜美林大学に異動した。田中氏からは、現在田中氏が桜美林大学で推進しているAL・PBLの事例・授業についての説明や、AL・PBL関連で有益な資料(例：三重大学のPBLに関する報告書・失敗事例集

など)の紹介をうけた。

ナカニシヤ出版は、近年 FD 関連の書籍を数多く出版しており、編集者の米谷氏もそのような書籍の編集に携わっている。米谷氏からは、編集者という観点から FD や PBL に関する推奨資料(例:『協同学習の技法』、『学生主体型授業の冒険』など)の紹介・説明を受けた。

ここまでの情報をもとに、現在京大で FD や AL 関係のシステム設計に携わっている福田研究員とは、出張者自身の専門(美学・芸術学・美術史)を活用した AL や PBL のあり方について面談を行った。その際、美術館における教育や地域の書店などとタイアップした AL・PBL についての事例の紹介や具体的な指針などについてご教示いただいた。

杉山准教授は、美学や哲学を専門としつつ、FD についての書籍の執筆経験もある研究者である。出張者は、哲学などの人文学と FD/AL 関係性などについて、杉山氏と知見を交換した。

付録(アンケート調査票等)

平成28年度前期 法文学部授業評価アンケート調査 (法文学部FD委員会)

この調査は、法文学部における授業改善に役立てるために行うものです。あなたの回答が成績等に影響することは一切ありません。受講して思った事や感じた事を率直に回答してください。

表と裏の両面に全部で23の設問があります。(1)から(17)まではすべての授業科目で回答してください。(A)と(B)は講義のみ回答してください。(a)と(b)は演習・実習・実験のみ回答してください。(18)は授業全般について回答し、(19)は出席頻度の低い授業全般について回答してください。(16)は記述式ですが、それ以外は基本的にはマークシート方式なので、**○印を黒鉛筆、シャープペンシルで塗りつぶして**回答してください。

科目名							
月日・曜日・時限	()月()日()曜日()時限						
授業担当教員名							
授業の形態 (1. 講義, 2. 演習, 3. 実習, 4. 実験)	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○			
学年	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○			
学生の所属学科 (1. 法政策学科, 2. 経済情報学科, 3. 人文学科)	1 ○	2 ○	3 ○				
科目の開設学科 (1. 法政策学科, 2. 経済情報学科, 3. 人文学科, 4. 現代的コース科目)	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○			

◎すべての授業科目(講義・演習・実習・実験)について回答

○あなた自身について

(1)-1あなたのこの授業への出席状況について 1. 4回以上欠席, 2. 3回欠席, 3. 2回欠席, 4. 1回欠席, 5. すべて出席	欠席多い	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	よく出席した
(1)-2[上で1または2と記入した人のみ回答してください] あなたが出席しなかった主な理由は次のどれですか (複数回答可)		1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	
1. 就職活動, 2. 授業に魅力を感じなかった, 3. 授業が理解できなかった, 4. 単位が足りている, 5. その他(具体的に書いてください)	5の具体的記述						
(2)あなたは授業に意欲的に取り組む努力をした	全く努力しなかった	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	非常に努力した
(3)あなたは不明な点を積極的に教員に質問した	全く質問しなかった	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	積極的に質問した
(4)この半年間でこの授業のオフィスアワーを利用した	全く利用しなかった	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	非常によく利用した
(5)授業を通して、自分にとって発見があった	全くそう思わない	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	強くそう思う
(6)この授業に対して満足している	全くそう思わない	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	強くそう思う
(7)シラバスで提示された学習目標に到達した	全くそう思わない	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	強くそう思う
(8)この授業に対するあなた自身の受講態度の総合評価を10段階で回答してください	低	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	
		6 ○	7 ○	8 ○	9 ○	10 ○	高

○授業について

(9)この授業はわかりやすいものであった	分かりにくかった	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	分かりやすかった
----------------------	----------	--------	--------	--------	--------	--------	----------

裏面に続きます。

(10)教員は授業の目標をはっきり示した	全く示さなかった	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	はっきり示した
(11)教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった	聞き取りにくかった	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	聞き取りやすかった
(12)教員は授業を時間どおり行った	全くそう思わない	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	強く思う
(13)教員の授業に対する意欲や工夫が感じられた	全くそう思わない	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	強く思う
(14)質問や意見に対して適切に対応してもらえた	全くそう思わない	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	強く思う
(15)この授業に対する総合評価を10段階で回答してください	低	1 ○ 6 ○	2 ○ 7 ○	3 ○ 8 ○	4 ○ 9 ○	5 ○ 10 ○	高
(16)この授業について、良かった点、改善すべき点など、感じた事や意見を書いてください							
(17)この授業を含めた学生生活全体の支援として、整備・充実してほしいものを、次のなかから2つ選んでマークしてください		1 ○ 6 ○	2 ○ 7 ○	3 ○ 8 ○	4 ○	5 ○	
1. 個人別学習の助言指導、2. 自習室、3. 自由に使える集会所やスペース、4. 参考書等の図書、5. パソコン等の情報機器、6. 奨学金、7. 授業料の減免措置、8. その他(具体的に書いてください)	8の具体的記述						

◎講義のみで回答

(A)板書やプロジェクターの文字がよく読み取れた	全くそう思わない	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	強く思う
(B)教科書や補助教材が効果的に用いられていた	全くそう思わない	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	強く思う

◎演習・実習・実験のみで回答

(a)質疑応答等が活発になされた	全くそう思わない	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	強く思う
(b)授業で教員の発問や誘導が適切であった	全くそう思わない	1 ○	2 ○	3 ○	4 ○	5 ○	強く思う

◎授業全般について回答(注:本調査を今年度初めて回答する人だけ記入してください。)

(18)あなたが今学期に履修登録した科目のうち、常に出席している科目の割合に近いのは次のどれですか	小	20% ○	40% ○	60% ○	80% ○	100% ○	大
---	---	----------	----------	----------	----------	-----------	---

◎出席頻度の低い授業全般について回答(注:本調査を今年度初めて回答する人だけ記入してください。)

(19)あなたがそれらの授業に出席しなかった理由は次のどれですか(複数回答可)		1 ○ 6 ○	2 ○ 7 ○	3 ○ 8 ○	4 ○ 9 ○	5 ○	
1. 就職活動、2. サークル・アルバイトが忙しかった、3. 単位が足りている、4. 授業が理解できなかった、5. 授業がわかりにくかった、6. 教員が授業の目標をはっきり示さなかった、7. 教員の話し方が不明瞭で聞き取りにくかった、8. 教員の授業に対する意欲や工夫が感じられなかった、9. その他(具体的に書いてください)	9の具体的記述						

ご協力、ありがとうございました。

*記入された情報は、授業改善のみに利用し、その他の目的では使用致しません。

授業公開報告書

授業担当者名	
授業参観者	
(1) 先生が授業で工夫点等をお書きください。 ※参観者がいない場合でも、必ずご記入下さい。	
(2) 授業参観者からの意見等に対する感想をお書きください。	
(3) 授業公開に対する意見や感想等をお書きください。	
<p>※ 7月31日(金)までに学科のFD委員に添付ファイルでご提出下さい。</p> <p>なお、複数の授業公開がある場合は、「授業公開報告書」は1枚にまとめて提出して下さい。</p> <p>提出先：法政策・村山：yomu@leh.kagoshima-u.ac.jp、経済情報・澤田：sawada@leh.kagoshima-u.ac.jp、 人文・Coother：coke@leh.kagoshima-u.ac.jp</p>	

人文社会科学部研究科授業アンケート

平成28年度人文社会科学部研究科授業評価アンケート

このアンケートは、授業の改善に役立てるためのものです。成績等に影響することは一切ありませんので、あなたの考えを率直に記入して下さい。アンケート用紙は授業中に記入し、あなた自身の手で回収用の封筒に入れて封をし、担当教員に渡して下さい。

全部で8つの設問があります。1～7までは5段階で評価し、該当する数字を○で囲んで下さい。8は自由に記述して下さい。

専攻名 _____

授業科目名 _____ (曜日 時限目)

教員名 _____

1. まず、授業を総合的に評価して下さい よいと思う 5 4 3 2 1 そう思わない
2. 授業のテキスト・資料等は適切でしたか そう思う 5 4 3 2 1 そう思わない
(テキスト・資料等を使用した場合のみ回答して下さい。)
3. 授業の内容は理解できましたか そう思う 5 4 3 2 1 そう思わない
4. 授業の進め方は適切でしたか そう思う 5 4 3 2 1 そう思わない
5. 授業に対する教員の熱意を感じましたか そう思う 5 4 3 2 1 そう思わない
6. 授業を通して学力や興味が増しましたか そう思う 5 4 3 2 1 そう思わない
7. あなたは授業を熱心に受講しました そう思う 5 4 3 2 1 そう思わない
8. この授業に対する意見を自由に書いて下さい

TA アンケート

平成 28 年度人文社会科学研究科 T A アンケート

このアンケートは、授業における教育支援者としての T A のあり方を教員間で検討するための資料にすることを目的としています。大学院生の T A 経験を今後へ生かしていくことができるように率直な感想や意見を書いて下さい。本アンケートは、2 月 1 日 (水) までに法文学部総務係へ提出して下さい (期限厳守)。

- ・設問 1～4 は 5 段階で評価し、該当する番号をマルで囲む (3 と 4 は該当事項があれば記述も)
- ・設問 5 は自由に記述する

専 攻 _____

担当科目名 _____

1. 授業にさいして、どの程度の事前準備等をしましたか。
- ①大いにした ②かなりした ③時々した ④あまりしなかった ⑤全くしなかった

2. TA期間中、担当科目について教員との打合せや指導の機会がありましたか。

①常時あった ②かなりあった ③時々あった ④あまりなかった ⑤全くなかった

3. TAをやって、どの程度、自分のメリットになりましたか。もしあれば具体的にどんな点かを記して下さい。

①大いにあった ②かなりあった ③いくらかあった ④あまりなかった ⑤全くなかった

4. TAになって負担を感じたことはありますか。もしあれば具体的にどんな点かを記して下さい。

①大いにあった ②かなりあった ③時々あった ④あまりなかった ⑤全くなかった

5. TAの経験を有意義なものとするために、なにか意見・提言があれば記して下さい。

教育学部・ 教育学研究科

教育学部・教育学研究科FD報告書

1章 授業アンケート回答の分析

2章 平成28年度教育学部授業公開報告

3章 教育学部・大学院合同FDシンポジウム

4章 学生FDサミット2016夏 ～北海道どさんこ大学～

5章 平成28年度教育学研究科教育改善のための調査

1章 授業アンケート回答の分析

1 授業アンケートの回収状況

平成28年度前期に授業アンケートを実施した授業科目数は58科目（オムニバス科目含む）であり、昨年度の55科目より3科目増加した。非常勤講師，特任教員，長期研修，長期休暇中等の教員を除く全93名の教員のうち61名の教員が授業アンケートを実施しており，実施率は65.6%であった。今後とも引き続き，実施率の向上方策を検討していく必要がある。

2 授業アンケート質問項目について

授業アンケートの質問項目は，昨年度のものを引き続いて使用し，4件法（4：そう思う，3：だいたいそう思う，2：あまりそうは思わない，1：そうは思わない）で学生に回答してもらった。

3 授業アンケート回答の分析

全科目平均値は【表1】に示す通りである。

【表1】全科目の平均値（平成27年度と平成28年度）

	質問項目	28年度平均値	27年度平均値	平均値差
Q1	授業はシラバスの内容に沿ったものでしたか	3.76	3.54	0.22
Q2	授業の進度は適切でしたか	3.77	3.56	0.21
Q3	授業内容を理解するためには普段の予習や復習が必要不可欠でしたか	3.09	2.92	0.17
Q4	予習や復習をしましたか	2.76	2.54	0.22
Q5	授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか	3.43	3.07	0.36
Q6	授業中質問や発言をしましたか	3.03	2.63	0.4
Q7	授業内容は理解できましたか	3.51	3.38	0.13
Q8	授業はあなたの知的好奇心を刺激しましたか	3.59	3.42	0.17
Q9	教師の話し方は明瞭で聞き取りやすいものでしたか	3.72	3.58	0.14
Q10	教師の説明の仕方はわかりやすかったですか	3.7	3.59	0.11
Q11	資料(板書，プロジェクター，配布資料等)の内容は明瞭に見てとることができましたか	3.66	3.47	0.19
Q12	授業は時間通りに行われましたか	3.74	3.55	0.19
Q13	オフィスアワーを活用しましたか	2.04	1.87	0.17
Q14	授業に対する教師の熱意を感じましたか	3.74	3.61	0.13

すべての質問項目において，昨年度を上回る結果となった。特に昨年度を大きく上回ったのは，「授業中は質問や発言がしやすい雰囲気でしたか」に対する回答である。アクティブラーニング，主体的な学びの必要性が求められている近年の教育にかかわる状況を受けて，教員が授業のありかたに工夫を凝らしていることがうかがえる。

また，平均値の上位3項目と下位3項目は以下のとおりである。

上位3項目		下位3項目	
Q 2	授業の進度は適切でしたか	Q 1 3	オフィスアワーを活用 しましたか
Q 1	授業はシラバスの内容に沿った ものでしたか	Q 4	予習や復習をしましたか
Q 1 2	授業は時間通りに行われましたか	Q 6	授業中質問や発言をしましたか

下位項目を前後の質問項目と関連付けて分析したところ、「授業内容を理解するためには普段の予習や復習が必要不可欠である」（平均値3.09）にもかかわらず、実際には「予習や復習をしていない」状況、「授業中は質問や発言がしやすい雰囲気であった」（平均値3.43）が、「授業中に質問や発言をしていない」様子が明らかとなった。必要性もあり、雰囲気が整っていたとしてもしない・できない現状をどのように変えていくのが今後の課題であろう。そのためには、「なぜ、予習や復習をしなかったのか」、「なぜ質問や発言ができなかったのか」、その原因を探る必要がある。

オフィスアワーの活用については、オフィスアワー以外に教員と個別に連絡を取り合って、授業に関する質問や相談をする学生の存在もあるため、総合的に分析しなければならない。しかしながら、オフィスアワーが十分に周知されていない可能性も否定できないため、引き続きシラバスおよび授業のなかで提示していくよう呼び掛けていく必要がある。

2章 平成28年度教育学部授業公開報告

1 授業公開の実施計画

平成28年度の教育学部授業公開は、以下のような手順で実施した。

(1) 授業公開の目的と枠組み

授業公開は、まず、最高学府としての学問等の最先端情報や動向などにに基づき、教員自らの研究向上を背景に、ひろく一般の方々にも授業を参観することにより、地域・社会貢献にするという大きな役割がある。そのため、急速に高等教育機関での教育改革が求められ、教員同士が相互に授業を公開・参観することにより、各教員が授業内容(テーマ)・授業方法など授業全般にわたっての改善と、その資質向上を目指す目的がある。

鹿児島大学教育学部は、この主旨から本年度は前期・後期とも授業公開を行った。

専任教員全員が担当授業科目一つを公開し、全教員が一つ以上の授業を参観する方法を前年度に引き続き基本的な枠組みとした。

(2) 授業公開科目調査

1) 平成28年5月18日(水)から5月27日(金)まで、授業公開の科目調査を全教員当てに一斉メールをし、行った。調査方法として、各専修・コースの世話人を通して専修・コースごとに各教員の授業公開科目をとりまとめ、教育改善委員会で集約した。

調査内容は、①授業公開科目(教育学部専任教員ひとり一科目指定)(曜日・時限・科目名・講義室)、②授業公開実施予定日(平成28年6月6日(月)～7月8日(金))中の授業実施予定日のうち、1日以上を指定、複数回の指定も可)、③授業参観受け入れ可能人数、④授業参観者の事前連絡の必要性有無の4項目とした。

2) 平成 28 年 11 月 16 日(水)から 11 月 25 日(金)まで、授業公開の科目調査を全教員当てに一斉メールをし、行った。調査方法として、各専修・コースの世話人を通して専修・コースごとに各教員の授業公開科目をとりまとめ、教育改善委員会で集約した。

調査内容は、①授業公開科目(教育学部専任教員ひとり一科目指定)(曜日・時限・科目名・講義室)、②授業公開実施予定日(平成 28 年 12 月 5 日(月)～平成 29 年 1 月 20 日(金)中の授業実施予定日のうち、1 日以上を指定、複数回の指定も可)、③授業参観受け入れ可能人数、④授業参観者の事前連絡の必要性有無の 4 項目とした。

また、本年度後期の授業公開科目としてアクティブラーニングが行われている授業かどうかも自己申告してもらった。

3) 授業公開科目一覧と授業参観報告書書式の提示

授業公開科目調査を集約し、今日学部全教員に授業公開科目一覧表(専修・コース別、実施日別)と授業参観報告書の書式を配布すると共に、授業公開の実施要項を提示した。

授業参観をした教員は、授業参観報告書を提出することを原則とした。授業公開科目一覧表は、教育学部だけではなく、全学のFD委員会を通じて鹿児島大学の全学部公開し、授業参観を受け入れる体制をした。

4) 授業公開及び授業参観の実施

- ① 平成 28 年 6 月 6 日(月)～ 7 月 8 日(金)
- ② 平成 28 年 12 月 5 日(月)～ 平成 29 年 1 月 20 日(金)

5) 授業参観報告書

授業を参観した教員は、参観報告書(別紙)を①6 月 6 日(月)～7 月 22 日(金)と②12 月 5 日(月)～2 月 3 日(金)までにそれぞれ提出し、これを教育改善委員会が集約した。

6) 授業公開のまとめ

提出された授業参観報告書をもとに、授業参観者数等を集計し、平成 28 年度教育学部授業公開のまとめを行った。

2 授業公開の実施状況

授業参観報告書を集計した結果、平成 28 年度の教育学部授業公開の実施状況は、以下の通りである。

(1) 授業公開科目数

- 1) 前期授業科目数は、全専任教員 98 名が公開した。今回は、複数科目の授業公開はなかった。
- 2) 後期授業科目数は、諸事情のためか、88 名が公開した。

(2) 授業参観者数および参観された授業科目数

1) 前期授業参観で報告提出された授業参観報告書は、14 件のみであり、極めて少なく 14%しかなかった。詳細に見てみると、同じ専修・コース内の教員相互の授業参観は 5 件で、9 件は他の専修・コースとの相互関係であった。14 件という少ない中ではあるが、教員の意識の中では、自己の専修・コース内ではなく、他専修・コースでの教育方法や情報を周知したいという意識があると考えられる。

2) 後期授業参観で報告提出された授業参観報告書は、前期よりさらに少なく、8 件しかなかった。前期の授業参観の専修・コース内は 2 件、他専修・コースでは 6 件であった。

以上の結果から、なぜ、授業参観・授業科目が少ないのかの分析と今後、報告書提出に至らず

とも、授業参観数および参観された授業科目数の増加のために手だてを考慮する必要があると考えられる。

3 授業参観報告書における記述

報告書の内容についてしてみると、他専修・コースの教員が参観しても「分かりやすい内容だった」という記載が散見できた。よく巷で言われるように研究についても小学生に分かりやすく、小学生が理解できればその説明は成功しているといわれる。学問もかくあるべきで、同じ専修・コース内であれば、「わかったような気分」になることがマンネリの一步と言われている。こうした意味ではマンネリを防ぎ、絶えず研修・精錬することは大学の教員の場合、「反省的教員」に成らざるを得ないだろう。

そこで、「本授業に対する感想・意見」から、授業改善の参考となる意見を(1)学習内容の面、(2)方法、(3)全体として、による視点から、少し取り上げることとする。

(1) 学習内容並びに授業課題の活用

- ・予習方法を提示し、とりあげるトピックが身近で自分の経験を基に考えことができる。
- ・教育法規に関する全体構造の説明があった。
- ・授業者のこれまでの経験や学校現場との関連が明確であった。
- ・学習内容を巡る最新動向に関する説明がなされていた。
- ・学生にとって身近な問題例として社会・労働問題を捉えていた。
- ・適切な資料、準備された材料と道具、TAによる支援が成されていた。
- ・学生らが陥りやすい「つまずき」を観察し、抽出し、「なぜそうするのか」という原理を説明していた。
- ・学生にとって身近な民放のドラマを教材としてとりあげ、労働と生活の課題に考えさせていた。
- ・配布資料(参考文献)が学生にとって考えさせる教材であった。

(2) 方法について

- ・5人グループの議論による授業であった。学生同士の学び合い、が学生の主体性を引き出し、受講生全員の学びを深め、学んだ知識や考え方の定着になると考えられる。
- ・受講生との対話を通じて、授業の展開が成されていた。受講生の関心を喚起する。
- ・パワーポイントによる説明と配布資料があった。
- ・予習ノートの作成をさせる。
- ・評価の可視化・LTD用自己評価の一と
- ・Moodleを日常的に活用し、グループごとに活用させている。
- ・グループで討論させている。
- ・授業の個人レッスンで、学生の能力に合わせて丁寧な指導であった。学生の目標を立てさせ、努力させていた。
- ・机間巡視が多く、教員の一方的な発言ではなく、受講生との対話の中で考える授業であった。
- ・授業の中で調べさせる時間があり、調べてまとめるということへの癖付けをされていた。
- ・グループで主体的な活動を行っている。
- ・マイクをまわし、学生の発言をさせている。・授業での参加度を高める工夫と考える。

- ・ノート作成を重視させている。
- ・新聞・児童文学・アニメなどの適切な引用が成されていた。
- ・プリント作成・配布を行っている。
- ・学生からの質問や感想記述をしていた。

(3) 全体として

- ・1つの講義の中に、講義を聞く、メモをとる、音楽を聴く、音を拾う、考える、発表するなど様々な要素がバランスよく盛り込まれており、充実した内容の講義でした。
- ・資料において図、表が多く、総力が弱い子の疾走フォーム、速い子の疾走フォームの違いがよく分かった。
- ・走運動のトレーニング例を実際にするすることで、より理解が進み、参考になった。

以上のように、授業・講義内容における参考・改善点として参考になる場合は、学生の身近な問題・経験に裏付けられた内容と、教師側が丁寧に説明をしていることであった。方法としては、多様な意見が見られ、「グループ活動」が多く、教師側の一方的な授業ではなく、学生主体の授業へと変わりつつあると捉えられる。また、教材としても新聞・児童文学・アニメ・DVD等多様な教材が使用されており、学生自ら教材を作成する力を育てている授業も見られたことである。将来的には、教員は自らが教材を作成できる力が必要であることから、アクティブラーニングの役割もここにあると考えられる。

4 授業公開のまとめ

教育学部の授業公開は、平成18年度から開始され、今年度は10回目の授業公開であった。しかし、授業参観報告は最も低く、後期では8件となってしまった。その原因として本年度は教職大学院設置前年度であり、新たな初年次セミナー授業の開講の影響もあると考えられる。さらに年々多忙化している現実が教員の研修の一環である「授業参観」の時間さえ確保できないことを考慮すれば、再度授業公開について検討する余地はあるのではないだろうか。

3章 教育学部・大学院合同FDシンポジウム

1 FDシンポジウムの目的

教育活動の実態について、学生の視点から調査・報告を行い、改善策を提言することが主な目的である。また、今後の継続的な活動のために記録を蓄積し、活用できるようにすることも重要な目的である。

2 FDシンポジウムのテーマ

テーマの決定にあたっては、学生FD委員長・副委員長がシンポジウム1ヶ月前に実施して得られた学部生141名のアンケート結果を元に、学生・教員FD委員で議論し、下記4テーマに決定した。昨年と同様の①～③に加え、今年度は新たに④を加えた。①は教育内容をより良くするため、②は

アクティブラーニングプラザ利用規定(昨年、学生主体で決定)の1年間運用後の検証などのため、③及び④は、学生生活をより良くするため、という観点から選ばれたものである。

テーマ① 履修に関して(時間割を含む)

テーマ② 第二講義棟(アクティブラーニングプラザ)について

テーマ③ 学内施設の利用について(利用時間等について)

テーマ④ 学内行事について

3 スケジュール

- | | | |
|--------------|---|--------------------------|
| (1) 日 | 時 | 平成28年12月13日(火) |
| (2) 受 | 付 | 14:50~15:00(103教室前 学生2名) |
| (3) 基 調 報 告 | | 15:00~15:30(103号) |
| | | ・趣旨説明(池川委員長) |
| | | ・学生FDサミット報告(杉原委員, 参加学生) |
| | | ・履修や時間割に関する説明(小柳教務委員長) |
| (4) グループ討論 | | 15:35~16:25(各グループ教室) |
| (5) 全体報告・討論会 | | 16:30~17:30(103号) |

4 基調報告

後で実施されるグループ討論が円滑に進むよう、教員3名(池川委員長, 杉原委員, 小柳教務委員長)および学生1名(学生FDサミット参加者)による基調報告がなされた。まず池川委員長から、FDシンポジウム開催の趣旨説明がなされた。次に杉原委員から、9月に行われた学生FDサミットの参加報告があり、この場で行う討論のヒントとなるような、各大学学生FDの取り組みやサミットの議論の内容などが紹介された。また、杉原委員とともに学生FDサミットに参加した学生による報告では、最先端の学生FD活動に刺激を受ける一方、鹿大教育学部は少人数授業による双方向型授業の実施率が高いことや、授業における教員と学生の距離が近いと感じられることなど、恵まれた環境に気づけたとの報告があった。小柳教務委員長からは、主にテーマ①の履修に関することについて、意見箱の周知と活用促進を図ること、また要望・意見は具体的なものを挙げてほしい、との説明がなされた。そして、これらの基調報告を基に、グループ討論へと進んだ。

5 グループ別討論会

グループ討論のため、参加者をA~Eの5グループに分けた。1グループの構成は、3年生を主とする学部生5, 6名, 大学院生1, 2名, 教員1, 2名を基本単位とした。各グループで討論するテーマは4テーマ中2つ(委員会指定1つ+他1つ選択)とした。討論の方法はKJ法。また、テーマ設定時の議論でも活用した学部生141名のアンケート調査結果も配布し、討論の基礎資料とした。シンポジウム150分中、グループ討論に設定した時間は50分であり、2つのテーマについて討論できたのはBグループのみ、他4グループは委員会指定の1テーマのみの討論となった。

下記は、学生FD委員が、それぞれのグループで話し合われた内容等についてまとめたものである。

- (1) A, Eグループ《テーマ①履修に関して(時間割を含む)》
- 1) エントリーシート・履修登録

改善策・要望	現状・理由
取得予定の免許についての項目を設けてほしい。	必修科目の講義が優先的に取れない。
制限科目の欠員補充のエントリー期間を設けてほしい。	事務方から教員に補充メールを送り、欠員を埋められるか、連絡することで教員も授業がしやすいから。
教育学部のエントリーシートを提出する前に、共通教育の時間割を出してほしい。	履修登録しにくい。
各専修ごとのページの後ろに書いておく、又はメールなどで知らせる。	実習に必要な科目は教育課程の後ろのページに載っているため、確認しづらい。
ネットで24時間申請可能にする。	エントリーシートの受け付け時間が短すぎる。
教育学部の履修登録を、実習前又は土日にする。	履修登録と実習期間が重複する。
下の学年が履修登録をしやすいように、学年の縦のつながりで交流を設けて欲しい。	

2) シラバス

改善策・要望	現状・理由
集中講義の時間と日程をシラバスに乗せてほしい。	スケジュール管理をしたい。
非常勤講師の方のシラバスに、概要を詳しく書いてほしい。	シラバスに白紙がある。
紙媒体のシラバスを、学生係又は科室に1冊置いてほしい。	分かりにくい。記載されているものと異なるものもある。読みにくい（ダウンロードしないと読めない）。
必ず集まらないといけないオリエンテーションの連絡を早めに送ってほしい。	年間計画案があるとスケジュール管理しやすいから。

3) 講義の時間帯

改善策・要望	現状・理由
午前小専科目・午後専門科目という決まりを作ってほしい。	履修登録がしにくい。
必修授業が重複しないようにして欲しい。	

4) 教員免許

改善策・要望	現状・理由
人数制限科目の開設日を増やす。 入学時に、取得可能な免許をあらかじめ説明する。	教員免許を取りたいのに取れない。 人数制限科目で取れる免許が減る。免許について分かりにくい。

(2) Bグループ《テーマ②第二講義棟（アクティブラーニングプラザ）について》

改善策・要望	現状・理由
ゴミ箱を増やす。	ゴミがゴミ箱からあふれているので。
掃除についての注意喚起をする（張り紙）。	もっと綺麗に使いたい。
各教室にゴミ箱（消しカスを入れる）を準備する。	
業者の方が掃除をどの程度してくださっているのか確認する。	掃除されている頻度を知りたい。
時間によって区切る。（共通の学習プラザのように）	勉強スペースと談話スペースを分けて欲しい。
換気についての注意書き（張り紙）	換気したい。
ルールを守ればいいと思う。ルールについての張り紙を用意する。	平日23時まで利用可能にしたい。
1・2年生も時間外に学生証で入れるようにしてほしい。	

(3) B, Cグループ《テーマ③学内施設の利用について（利用時間等について）》

改善策・要望	現状・理由
エレベーターを設置してほしい。	音美棟では、楽器の運びや一般の合唱団の高齢の方が、階段を上り下りするのが辛い。
ピアノの調律をしてほしい。	ピアノの調律が気になる。
文系棟とエデュカのトイレを明るくきれいにしてほしい。	文系棟とエデュカのトイレの状況が暗くて怖い。また、使いづらい。
街灯を増やしてほしい。	駐車場が暗くて怖い。
エデュカ2階のコピー機 USB 対応かつ硬貨も使えるようにしてほしい。	近くのコンビニにもなくなりコピーするのが不便になった。
教育学部内にATMを設置してほしい。	ATMが近くにあると便利。

(4) Dグループ《テーマ④学内行事について》

1) 情報に関して

改善策・要望	現状・理由
<ul style="list-style-type: none"> ・多くの学生が利用している SNS のアカウントを作成して情報を流してほしい。 ・チラシを作り、エデュカのレジに置くと情報が伝わる。 ・学生に、してほしい行事のアンケートをとると学生の関心が分かると考える。 	<p>学生の認知が十分でない。</p> <p>どのような内容かわからない。</p> <p>いつ行われているのかわからない。</p> <p>目的がわからない。</p>

2) 「学内行事としてやってほしいこと」

改善策・要望	現状・理由
<ul style="list-style-type: none"> ・学部の清掃活動をしたい。 ・教員採用試験に向けた行事を増やしてほしい。 ・就職活動の勉強会や面接練習をしたい。 	

6 全体報告会

グループ討論のまとめ（上記5）が全体場で発表されたのを受けて全体で話された若干の内容を簡潔に記しておきたい。

(1) 時間割に関して

- 1) 「スケジュール管理が難しいので、集中講義の日程を早めに明確にしてほしい」との要望に対し、「外部講師と連携しており、教務や他の教員から日程を示すことは難しい」との説明がなされた。
- 2) 「必修授業が重複しないよう、午前は小専科目・午後は専門科目という決まりを作してほしい。」との要望に対し、「以前は今より午前は小専、午後は専門という住み分けがはっきりしていた。学部改組やカリキュラムマップの作成とも関連して、必修科目の重複などについては整理されていくものと思われる。」という旨の説明がなされた。

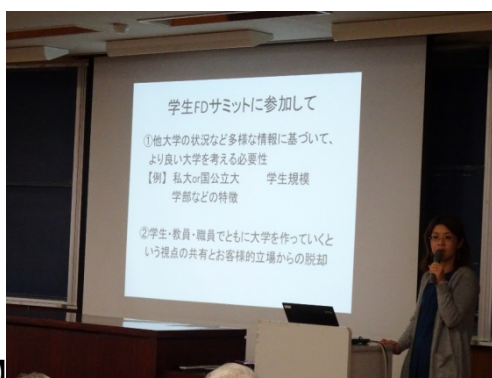
(2) コピー機（USBおよび硬貨対応）の設置について

学生の「近くのコンピにもなくなり、コピーが不便になった。エデュカ2階のコピー機を、USB対応かつ硬貨も使えるようにしてほしい。」との要望に対し、エデュカおよび大学生協に要望してみてもよいのではないかとの前向きな説明がなされた。

(3) 学内行事の情報について

学内行事について「学生の認知が十分でない。どのような内容か、いつ行われているのかわからない。」などの意見があることに対し、「掲示板や大学・学部HPでも情報を得ることができると思うが。」との疑問や、SNSなど、学生の情報確認ツールの現状を確認する質問が出された。

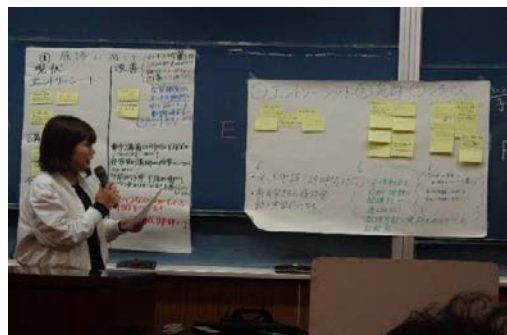
最後に、池川委員長より、FD活動を継続することの必要性と、今回の討論のまとめについて教職員・関係部署にも検討していただく機会を作りたい、とのお話があり、閉幕した。



【杉原委員による基調報告】

【集団討論の様子 ・ 全体討論会での発表】





4章 学生FDサミット2016夏 ～北海道どさんこ大学～

日時：2016年9月6日(火)～7日(水)

会場：札幌大学(北海道札幌市)

参加：全国34大学 172名

テーマ：僕たち私たちが考える理想の大学



1 学生FDサミットとは

- (1) 学生FDとは、「授業や教育に関心を持つ学生がその改善のために、大学側(教職員)と連携しながら自ら主体的に取り組む活動」を意味する。
- (2) 学生FDサミットは、全国の学生FDに取り組んでいる人たちの交流の場として2009年にスタートし、今回で13回目の開催であった。

2 活動内容

【1日目 9月6日(火)】

- 10:00～11:30 入学式（開会宣言，学長あいさつ，趣旨説明）
- 12:00～13:20 昼食（アイスブレイク）
- 13:30～14:30 演習①
- 14:30～15:30 テーマ別交流会
- 15:30～17:20 演習②
- 17:30～19:00 懇親会

【2日目 9月7日(水)】

- 9:30～10:00 オープニング（1日目の振り返り，2日目のプログラム説明）
- 10:00～11:00 演習③
- 11:00～12:30 最終プレゼンテーション
- 12:30～13:00 卒業式

本学から参加した学生は，次頁に示したテーマのうちテーマ（1）「理想の大学」を中心に演習①～③に取り組んだ。

3 演習のテーマ

（1）理想の大学

…自身の大学への進学目的や現在抱えている課題をもとに理想の大学について考える

【学生FD初心者向け】

（2）理想のカリキュラム

…自身の大学のカリキュラムをもとに理想のカリキュラムを考える

【学生FD中級者向け】

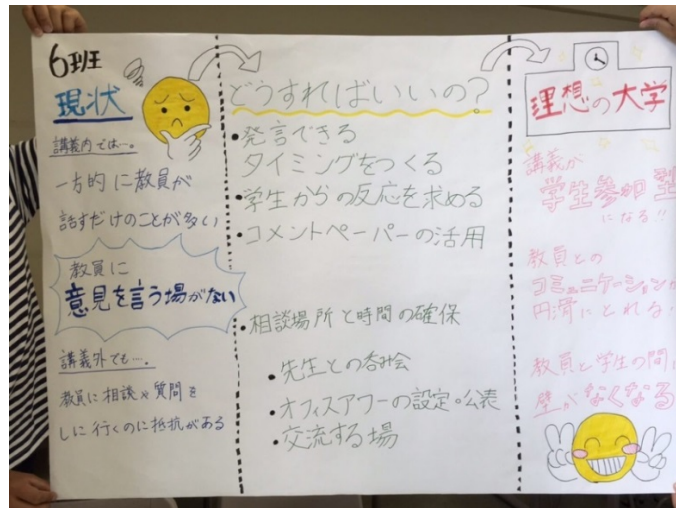
（3）理想の地域連携・大学間連携

…自身の大学の連携のありかたをもとに理想の地域連携・大学連携について考える

【学生FD上級者向け】



演習時の様子



4 学生FDサミットに参加した学生（2名）の感想

【Aさん】

① 学生FDサミットに参加して学んだこと、視野が広がったこと

まず、学生と生徒についての違いについて考えさせられた。私の考えでは、学生は自らが学びたいことを学び、生徒はある程度決められた基礎を学ぶものとする。今まで、この2つの言葉の違いについて考えることがなかった。答えは、なかったのだが違いを考えることで、自分が自発的に勉強することを再認識するきっかけともなった。

学生FDサミットには多くの大学が参加していた。その中でも、私立大学が多く国公立大学は鹿児島大学を含めて数校であった。私立大学の話を知ると、まず学生数が多いので専門の授業も大人数授業で行うため、質問なども行いづらいことや、担任の先生などが決まっても卒業まで会わないということもあるようだ。また、他学部との交流の希薄化や学校からの連絡が掲示板だけのため連絡を受け取ることが大変といった問題があげられていた。それらの問題に比べて、鹿児島大学の教育学部は少人数の授業がほとんどで、先生との学生との距離の近さを改めて感じた。また、ゼミでも一人の先生が担当する学生は数名である。他学科との授業もあるので、知り合いも増えたり、色々な情報の共有も行うことができる。学校からの連絡もメールで来るので、色々な情報を手に入れることができる。よって、他の大学よりも鹿児島大学教育学部の充実さを感じるサミットとなった。

② 今回学んだことを今後鹿児島大学でどのように生かすことができるのか

今回、学んだことのうち、今後鹿児島大学で生かすことができそうなことをあげる。一つ目は、マナーに対してのポスターを作りマナーの悪い学生に自律を促す。二つ目は、先生と学生との食事会や飲み会などのイベントを企画して、垣根を低くするきっかけを作る。三つ目は、施設の改善である。これは金銭面が大きくかかわってくるだろう。駐車場の拡大などを求めたいが、土地的にも大変だと思うので、私は喫煙所を設けることだけでも行ってほしいと思う。教育学部の人が喫煙するときは、校外に出て歩道などで吸うことになる。しかし、歩道は小学生なども登下校などで通る。あまり歩道で吸うべきではないと思うので教育学部内にも喫煙所を設けるべきなのではないかと考える。

③ 全体を通しての感想

鹿児島大学の充実さを感じた。私立はお金を持っているので、設備面も充実しているのだと思っていたが、そういうわけではなく色々な問題を抱えていることを知った。しかし、学生がFDとして学校を良くしようとするのが一番大事だと思う。学生FDを鹿児島大学にも取り入れるべきことなのではないだろうか。

【Bさん】

① 学生FDサミットに参加して学んだこと、視野が広がったこと

私が今回の学生FDサミットに参加して「理想の大学」というものについて深く考えることができた。私たちのグループでは「理想の大学」を実現していくために必要なこととして組織力と主体性が挙げられた。ここでいう組織力とは「学生」「教員」「職員」のことを指している。理想としてはこの三者がより密な関係を持ち相互に協力していける体制の確立である。

しかし、現状はFD組織の認知度が低く一部の人間の薄いつながりのみの関係であり、「理想の大学」とはほど遠いものである。私自身も今回のサミットへの参加という経験がなければ学生FDについて知ることは無かったのではないかと思う。このような現状を打開するための改善策として、学生と教員と職員のかかわりの場を作ること、学生FDの活動効果を「見える化」して学内に周知してもらうことが挙げられた。学生FDについての認知度が低いと考えられる鹿児島大学においては学内全体に知ってもらうことが最初の課題だと思う。

主体性については、学内で行われているアンケートに着目して討論が行われた。学生が真に求めている授業の内容や次の改善につながるアンケートの内容ではなく、施設や環境、文字の大きさといったことへの質問が大部分を占めているというのが現状である。授業アンケートの恒常的な見直しが必要であるという結論に至った。

しかし、ここで教員側の立場からの意見があった。学生の主体性を尊重することは大事なことであるが、学生の意見ばかりを尊重しては問題が生じてくるというものである。確かに学生のわがままが通ってばかりで「理想の大学」に近づくとは思わない。やはり大切なのは学生と大学の密な関係性だと考えさせられた。

② 今回学んだことを今後鹿児島大学でどのように生かすことができるのか

私たちの鹿児島大学において必要なことは①でも述べたように学生FDについての認識を広めることである。今回の学生FDサミットに私のようなFD初心者が派遣されたということは鹿児島大学においてFDについて詳しく研究しているような個人や団体がいないということだと考えられる。サミットに参加していた各大学では、サークルなどを通じてFD活動をしているところが多くあった。鹿児島大学の学習環境は他の大学に比べると良いものであると感じたが、その環境の中でもよりよくしていくための努力も必要であると感じた。貴重な経験をした者としてFDの周知の役に立てたら良いと思う。

③ 全体を通しての感想

今回の学生FDサミットでは自分たちのFDに対する知識の低さと関心の無さを痛感させられた。初めは話を聞いているだけでいいものだと思っていたが、そもそも学生FDとは学生主体となり教育を改善していこうというものであり、サミット参加者のほとんどは貴重な機会をより良いものにしようと一生懸命であった。軽い気持ちで参加してしまった自分を情けなく感じた。案の定話し合いの場では意見を述べることができず、周りの雰囲気には圧倒されているばかりであった。次回以降参加する学生には少しでもFDに関する知識を身につけることをおすすめする。

5章 平成28年度教育学研究科教育改善のための調査

1 はじめに

教育学研究科では、毎年、大学院生を対象に教育改善のための調査を実施している。本章はその結果報告と考察である。

大学院生からの回答には、毎年現れる要望事項がある。同じ要望事項が毎年現れるということは、十分な改善がなされていないと考えられる。こうした要望事項によって、本研究科が今後取り組んでいかねばならない内容が浮き彫りになる。

大学院の定員充足が喫緊の課題である今日にあつては、こうした調査を詳細に分析し、魅力ある大学院づくりを行っていききたい。

2 調査の実施方法

平成28年度の教育改善のための調査を以下の方法で実施した。

- (1) 調査実施時期：2016年7月20日
- (2) 本研究科1年次生34名であった。
- (3) 方法：2016年7月20日に実施した1年生全員が受講する必修授業の中で調査用紙を配布し、全員一斉に回答してもらい、その場で回収した。回答用紙は無記名であった。

3 結果と考察

以下に質問項目別に回答結果とその分析を示す。

- (1) 質問項目1：「研究科共通科目」、「コース共通科目」の授業についての意見

1) 回答結果

①満足している点とその理由

- ・話しあいが多いので、意見交換ができ、新たな知識が得られる。
- ・ディスカッション中心の授業が豊富で、ストレートから現職まで幅広く意見が聞ける。
- ・専門性が高い実践的な授業が受けられる。
- ・違う分野の講義を受けられるのがおもしろい。
- ・自分の専門外の先生の話を知ることができ、自分の考えに幅をもたせることができる。
- ・オムニバス形式は、先生ごとにテーマと方法が変わるので、大変さもあるが、刺激になり、見識も広がるのでよい。
- ・先生によって授業の内容が変わるので視野が広がった。
- ・評価規準が明確である。
- ・広い視野に立って現在の自分を見つめ直すことができている。
- ・現職の先生方の校種も様々で、他の専門の方と関わるができる。
- ・教育の分野での問題点、それらに対する対応方法を学ぶことができた。
- ・芸術スポーツ系学修コースでは、音美体と異なる分野を学んでいるが、共通点もあり、有意義な講義を受けることができた。
- ・同期が集まる機会が少ないので、貴重な時間だと思う。
- ・個々の授業がわかりやすい。他分野でも話し合いを通して理解を深めることができる。
- ・教職に必要な内容を広く浅く、狭く深くという感じで、教職を目指す人にとってはよい。

- ・新しい知見の紹介も多く、理論的であっても実際の教育現場に役立つと思うものが多い。
- ・グループ活動が多く、意見交流が盛んで有意義である。
- ・話し合い活動が多く、多角的な捉え方を共有できる。
- ・受講生との交流が十分に行われている。
- ・年齢も経歴も違う方々と意見交流を行うことで、新たな考えを吸収できる。
- ・グループ活動があったので他コースの人との交流ができてよかった。
- ・いろいろな先生方の話を聞けるので勉強になる。
- ・専門性が高く、グループワークも多いため、学習が深まり、他領域の院生との関わりをとおして刺激を受ける。
- ・専門的なことについて多面的な視点で話ができる。
- ・ディスカッション形式で様々な意見を聞くことができ、自分の考えが深化した。
- ・幅広い分野を押さえながら、一つのテーマに沿って授業していただいている。
- ・実践的な内容が多く、討論も楽しい。

②改善してほしい点とその理由

- ・時間通りに終わらないので、調整してほしい。
- ・グループ編成が固定的である。
- ・グループ分けが適当なので、配慮してほしい。
- ・課題の締め切り日と提出方法を明示してほしい。
- ・自分の専門でないものを学習しなければならない点は少しつらい。
- ・グループの人数を考えてほしい。
- ・答が見えないまま終了する回があると、気になって前に進めない。
- ・先生によってレポートの提出方法が異なる。レポートの提出方法を統一してほしい。
- ・グループ内の世話係などの役割分担決定は院生に一任してほしい。
- ・特別支援の授業数を増やしてほしい。
- ・話し合いだけして終わりということがある。そんなときは知識がほしい。
- ・先生が使う言葉が古すぎて聞いてことがないので、意味がわからない。
- ・必修は夜間しかないので通学が大変である。昼間も必修が履修できるとよい。
- ・曜日と時間帯の変更があると忘れてしまうので、基本の時間帯にそろえてほしい。
- ・レポートの提出日を考えてほしい。
- ・グループ活動の分け方を工夫してほしい。現職の先生が均等に分かれる方が現場の状況を聞くことができる。
- ・授業の内容はバラバラで関連性がないので理解しづらい。
- ・内容に生涯教育、社会教育の要素が少ない。学校教育に特化した内容ばかりだと偏りが生まれそう。
- ・オムニバスなので深まりがない。
- ・授業時間が延びる場合は予告してほしい。
- ・多くの人と話す機会を増やすため、グループの入れ替えをしてほしい。

2) 考察

話し合いという授業形態については肯定的な意見が多かった。しかし、話し合いについては班編成が固定化されている点については改善要望が出ていた。この改善要望は妥当な意見であり、

改善可能なものなので、今後、工夫していきたい。

また、複数の分野を学べるという利点を指摘した声も多かった。ただ一方でこの点を負担視する声もあった。複数の分野を学べることは教育学研究科の大きな利点である。同時に教師は、広く浅くでかまわないので、できるだけ多分野の知識をもっておくことが望ましい。

授業の分野については、特別支援、生涯教育、社会教育の要望があった。授業分野は、担当教員の専門分野にも左右される。同時に、授業分野はカリキュラム編成にも関わってくる。現時点で改善可能かどうかは不明であるが、授業分野に偏りがないように務めていきたい。

(2) 質問項目 2 : 「学修コース専門科目」の授業についての意見

1) 回答結果

①満足している点とその理由

- ・専門的で実用的である。
- ・「学びとは何か」を実践的に知ることができた。
- ・専門性があるため受講して楽しい。
- ・自分が学びたいことを深めることができる。
- ・これまでの教職経験と結びつけながら、自身の考えを強固なものにしたり、違う視点から捉え直したりと、日々勉強になっている。
- ・いろんな国の言語政策を勉強できる。自国の教育を見つめ直すのに必要な観点を習得できる。
- ・芸術スポーツは他の領域のことが学べて刺激になる。
- ・学生時代よりも実技や（学校ではない）現場調査が多く、充実している。
- ・普段は考えることのないテーマについて、ディスカッションしたり、先生の講義を聴いたりして勉強になる。
- ・（自分の専門とは）異なる範囲の知識が勉強できる。
- ・専門的な知識を勉強できる。
- ・深く勉強できる。自分のプレゼンテーションスキルをふり返り、反省できる。プレゼンテーションを行うことにより、自ら学ぶ機会が増える。
- ・自分が専攻する専門科目がそれなりの数用意されているおり、広く学ぶことができる。
- ・専門分野を学べるため、学修コース専門科目は面白い。自分の専門性を磨くことができる。
- ・自分の専門分野とのつながりが薄いと思うような授業でも、新たな視点や考えを示してくれる内容であった。
- ・少人数のため理解が深まりやすい。
- ・自分の専門性の高次化に専念することができる。
- ・多くの論文や学部時代には触れなかった内容について深く学ぶことができ、見地が広がった。
- ・時間割を動かしてくださったりして、便宜を図ってくださったのはありがたかった。
- ・自分が学習したかったことが学べるのでいいなと思う。
- ・少人数での講義が多く、意見が交わしやすい。
- ・教員が熱心である。
- ・少人数で行うので、質問対応が行いやすい。

- ・様々な分野の講義を開講していただいているので勉強になる。
- ・専門分野についてより深く学ぶことができ、満足しています。

②改善してほしい点とその理由

- ・どの科目も評価基準を最初に提示してほしい。
- ・隔年開講の授業を毎年開講してほしい。
- ・講義形式ばかりなので演習などを行いたい。
- ・5限目の場合、6限目の19時まで時間があるからと、学生に何も言わずに終了時刻を伸ばすのはやめてほしい。
- ・現職の場合、隔年開講の授業は必然的に受講できないものがある。

2) 考察

調査用紙への記載量は、満足している点の方が改善してほしい点よりも圧倒的に多かった。そのため院生の多くは専門科目に満足していると判断してよいだろう。改善してほしい点については上記の5人のみの記載であった。

今後、改善すべき点について調査から明らかになったことは、評価基準と隔年開講の授業である。

評価基準については授業内容や授業形式とも連動している。また、教員が院生に求める力にもよる。したがって、全授業を一律に同じ評価基準にすることは大学院になじまないと思われる。評価基準は各教員に一任するのが現段階では最も妥当であろう。

ただ授業開始時に評価基準を院生に周知することは必要であろう。今後は研究科運営委員会として、この点を各教員にお願いしたい。

隔年開講については、授業を担当する各教員に一任している。また各学科の事情もある。したがって、すぐに改善することは困難かもしれない。今後は、受講機会をできるだけ増やすような対策を考えていきたい。

(3) 質問項目3：研究・学習環境についての意見

1) 回答結果

①満足している点とその理由

- ・トイレが綺麗である。
- ・自分が学部生だった時より設備が良くなっている。
- ・人数に対して教室の大きさが適度である。
- ・トイレが綺麗になったので快適である。
- ・便利で利用しやすい。
- ・空調が常に可動している。
- ・自分の院生室があることはありがたい。
- ・アクティブラーニングプラザは綺麗で使いやすい。
- ・担当者の努力で綺麗な環境が保たれている。
- ・ネット環境があるので、調査しやすい。
- ・清掃が行き届いている。
- ・院生室があること。
- ・院生室とネット環境など学習に必要な環境が整えられている。

- ・ 院生室は大変便利です。
- ・ 独立した研究室があり，個人研究が進む。ロッカーもあるのでありがたい。
- ・ アクティブラーニングプラザのトイレが綺麗で使いやすい。
- ・ 院生には学習できる部屋が準備されているのでありがたい。
- ・ トイレが綺麗になったことはうれしい。

②改善してほしい点とその理由

- ・ 院生室に勉強道具を置けない，ロッカーがほしい。
- ・ ピアノの調律を望む。
- ・ エデュカに USB から印刷できるコピー機があるとありがたい。
- ・ エアコンの温度が高すぎる。
- ・ 夜間の外灯が暗く，運転中歩行者が見えにくい。21 時頃までは学内の通路を明るくしてほしい。
- ・ 院生室に電気スタンドがほしい。
- ・ アクティブラーニングプラザにもコピー機を設置してもらえるとありがたい。
- ・ 院生用のコピーカードがほしい。資料を印刷する時，毎回先生方に借りたり，事務室に行くのが大変だから。
- ・ エアコンが効かない場所（階）がある。
- ・ 講義棟の RGB 線を HDMI 端子に変えてほしい。
- ・ パソコンを使ってプレゼンをすることがあるので，HDMI ケーブルとパソコン端子用のケーブルの両方準備してほしい。
- ・ アクティブラーニングプラザのエアコンがぬるすぎて集中しにくい。
- ・ 体育棟が古く，災害時が心配である。
- ・ アクティブラーニングプラザのエアコンの温度。
- ・ 最近，鹿児島大学の WiFi がつながりにくい。
- ・ 学生が悪いと思うのですが，机の上に消しゴムのカスが残っていたり，机が乱れていたりで，教室が汚い。学生にもっと公共の場を使用しているという自覚をもってもらいたい。
- ・ 体育棟の老朽化が心配です。
- ・ コピー機や印刷機を利用できるようにしてほしい。費用がバカにならない。
- ・ 各教室に 1 台備品として PC があると発表の時に便利である。
- ・ 院生が自由に使える印刷機がほしい。
- ・ 学生証を忘れた時にも院生室（第 1 講義棟 3 階）に入れるようにしてほしい。例えばカードがなくても学籍番号で入れるとか。
- ・ コピーのしやすい環境があるとよい。個人出費がかさんだ。
- ・ 文系棟のトイレを改修してほしい。
- ・ エアコンの設定温度を 1 度下げてほしい。夏は暑くて集中できない。
- ・ 市水を全階に 1 か所でもいいから通してほしい。駐車場に許可されていない車が停まっていることがあるため取り締まってほしい。
- ・ アクティブラーニングプラザの教室が暑い。気分が悪くなる。
- ・ 授業で使用する資料の印刷費が実費なのが不満である。授業用は自由に印刷させてほしい。
- ・ 特定の棟に飲用水がないことで困っている。

- ・エアコンが寒すぎる時がある。

2) 考察

改善してほしい点については、予算措置が必要な要望が多く、改善可能性や改善時期について明確な回答を出すことは困難である。また改善要望が出ている点は、今年度新たに出された内容よりもこれまで毎年出されている要望が多い。頻度が多い要望事項については、今後、予算措置が可能になった際に優先的に対応したい。

(4) 質問項目 4：研究成果の発表について

1) 回答結果

①口頭発表

- ・すでにした……5名
- ・する予定である……26名
- ・予定はない……3名

ア) 満足している点とその理由

- ・満足できるクオリティの指導を受けられている。
- ・細かく指導していただいている。
- ・(すでにした) いろんな分野と年齢層なので、考えや結論がおもしろい。
- ・普段から丁寧に指導してくださっているので不満はない。
- ・各領域の先生方が熱心に指導してくれるので満足している。
- ・自分の専門について深く学ぶことができる。
- ・(すでにした) 多くの研究者とのつながりができた。
- ・(する予定) 定期的な学会でのポスター発表は研究の進み具合の目安になるのでよい。
- ・(する予定) 研究テーマと関係のある先生は優しく、いろいろ教えてくれる。
- ・研究に関しては先生も積極的に関わろうとしてくださるので嬉しいです。

イ) 改善してほしい点とその理由

- ・もっと指導を充実してもらいたい。
- ・(すでにした) 資金援助(多くの学会に足を運んだり、多くの学校現場に出向くためには費用がかかる)
- ・(すでにした) 発表のポイントなどについても触れてもらえると技術が身に付く。

②論文執筆

- ・すでにした……2名
- ・する予定である……26名
- ・予定はない……5名

ア) 満足している点とその理由

- ・研究について何をすべきかが明確になる。
- ・論文のレクチャーを受けることができ助かっている。
- ・実践場面に参加させていただき、修論で取り組む内容のイメージができた。
- ・書くために資料や書籍を調べることができる。
- ・入学段階から指導教員に相談したり助言をもらえるところ。
- ・ゼミの先生が論文提出の半年前から毎週指導してくれるので満足です。
- ・修論に向けてペースメーカーになってくれるところがありがたい。
- ・論文の書き方から指導していただき、また幅広い視野に立った研究内容のため勉強になるし、意欲が掻き立てられる。
- ・(すでにした) 初めてだったが、分析を深く行うことができた。

イ) 改善してほしい点とその理由

- ・できれば書き終わってから先生と相談する時間がほしいです。
- ・論文指導の授業を1年次から行ってほしい。

③作品・演奏・競技等

- ・した……0名
- ・する予定……4名
- ・予定なし……1名
- ・該当なし……28名

ア) 満足している点とその理由

- ・(する予定) 満足できる質の高い指導に助けられている。
- ・(する予定) 1年次から積極的に指導教員と話す機会がほしい。

イ) 改善してほしい点とその理由

- ・芸術系以外の人も見る機会がぜひほしい。

2) 考察

調査は1年次生を対象に7月に実施した。この段階で口頭発表および論文執筆を予定している院生が多数を占めた。このことは、自らの研究も着実に進めていることを示している。大学院に入学した以上は、学会発表や論文執筆はぜひ体験してほしい活動である。これらの活動によって、研究の進め方を体得することができる。またこれらの活動こそ研究の醍醐味なのである。

上記の結果を見るならば、本研究科所属の院生は、研究への意欲も高く、研究成果も期待できると言えよう。

理学部

平成 28 年度理学部 FD 活動報告書

平成 28 年度に理学部で実施した FD 活動は以下のとおりである。

- (1) 学生による授業評価アンケートの実施（7 月、1 月）
- (2) 授業公開および授業参観の実施（7～1 月）
- (3) FD 講演会の開催
- (4) 学生・教職員ワークショップへの参加

以下、それぞれの活動の概要を報告する。

(1) 学生による授業評価アンケートの実施

理学部における授業評価アンケートの目的は、受講学生の率直な声を担当教員に還元することにより個々の授業や学科のカリキュラムをより有益なものへと改善していくことにある。理学部での授業評価アンケートは平成 13 年度より実施されているが、その際に集計結果を教員評価のための資料として利用しないことと決めている。これは授業改善以外の目的にアンケートを転用することは授業改善の面では逆効果であるという専門家の意見とも一致している。平成 28 年度の授業アンケートは、不定期実施科目、集中講義、教職専門科目、非常勤講師担当科目を除く全科目（前期 103 科目、後期 115 科目）を対象に行われた。アンケート用紙は、授業ごとに受講者分を担当教員に渡し、適切なタイミング（原則として最終講義日）に記入させた。受講者は 13 の質問項目に、それぞれ 1～5 の 5 段階評価で回答する。以下、数値化した集計に基づいた分析を行った結果を示しているが、授業内容の量やレベルなど回答項目によっては数値の高低と評価の高低が単調な数値関係になっていないことに注意が必要である。また、自由記述欄も設けられている。授業担当教員は、（無記名で）記入されたアンケート用紙を所定の封筒に入れ、学生係に持参することとしている。

アンケート結果は、授業ごとの回収済みアンケート用紙の現物と、集計したデータを担当教員に返却した。それを参考に担当教員が授業改善を行っている。理学部全体としては、アンケートの集計結果を保存し、必要に応じて学部および学科のカリキュラム改善のための基礎データとして活用できるようにしている。以下に平成 28 年度のアンケート結果について報告する。

アンケートの回答数は述べて前期 2871 枚、後期 2258 枚であり、実施科目受講者総数に対して、前期 65%、後期 46%であった。前年度の前期 51%、後期 37%より増加した。半期単位での比較では過去 5 年間で最高値だ、特段の対策を取ったわけではなく原因は不明である（図 1 参照。なお、一昨年度までの報告書とは計算方法が異なる）。平成 29 年度以降も、回収率の更新を期待したい。

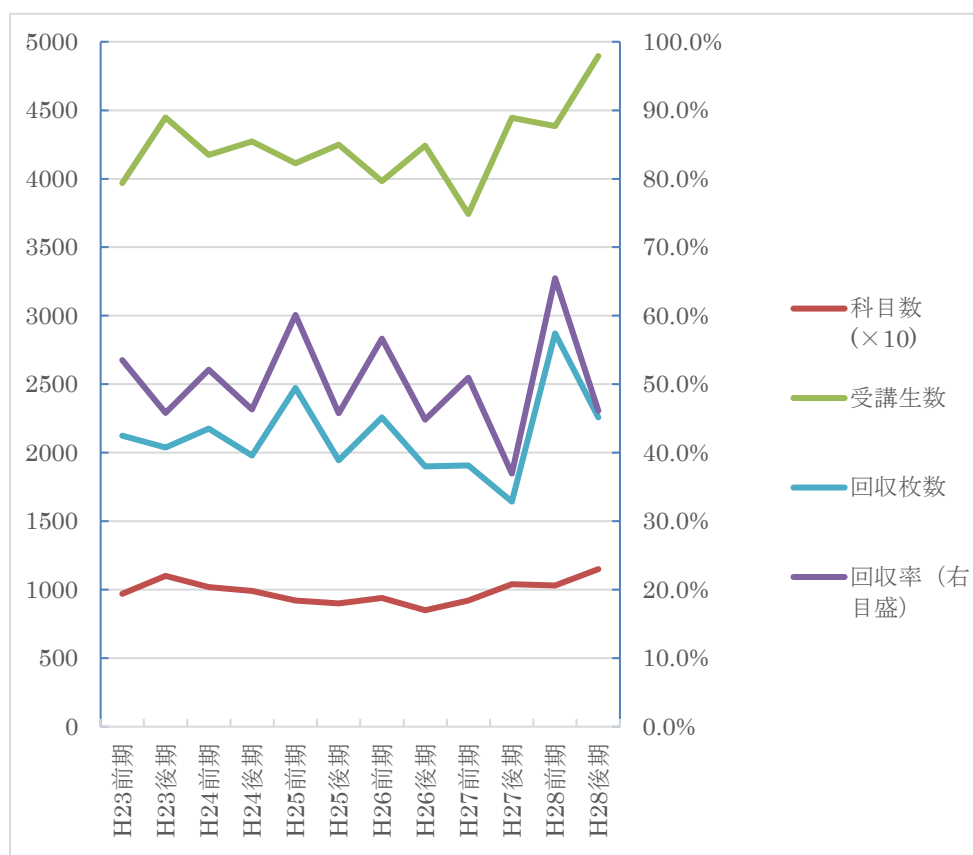


図1：授業評価アンケートの実施と回収率

平成27年度の全質問項目の評価点平均（項目毎の平均評価点の平均値）は、前期が3.67、後期が3.71で、前年度の前期3.68、後期3.67に比べると若干の変動はあるものの、平成23年度以降は、平成25年度のみ3.50および3.44であったことを除けば3.6～3.7の間にあるので大きな違いはないと見るべきである（注：一昨年度までの報告書とは計算方法が異なる）。平成25年度の低い数字に対しては、各教員が危機感を持って授業改善に取り組んだ結果が継続的に表れたのではないかというのが一昨年度の解釈であったが、平成26～28年度の3年間で平成24年度以前と同程度の値になっていることから、平成25年度だけが特異であると捉えるのが妥当だろう。さらに、これは学部全体の傾向ではなく、平成25年度のみ開講・休講や担当教員が変更された少数の科目が原因である可能性もある。もちろん、原因究明と効果的な対策としてのFD活動を考えるためには、このような推測だけでなく、検証作業が必要である。

ただし、アンケート集計で示される評価点は、項目によって数値との対応付けが異なる上に、順序数であって計量数ではない（評点4が評点2の2倍という意味を持たない）ため、その平均値のみで分析するのは不適切である。項目間での数値の比較もほとんど意味がない。（前期と後期の比較も、対象となる科目がほとんど一致しないため、年平均とした方が良いかも知れない。）

そこで、アンケート項目ごとの年次変化(今回は平成22年度から27年度の6年間)に注目すると一定の傾向があることがわかった。グラフの見やすさも考慮して、項目を「受講生の学習態度」「シラバス」「授業内容」の3つに分けて以下に示す。いずれの指標も数値が大きいほど「良、長、多」を意味する。

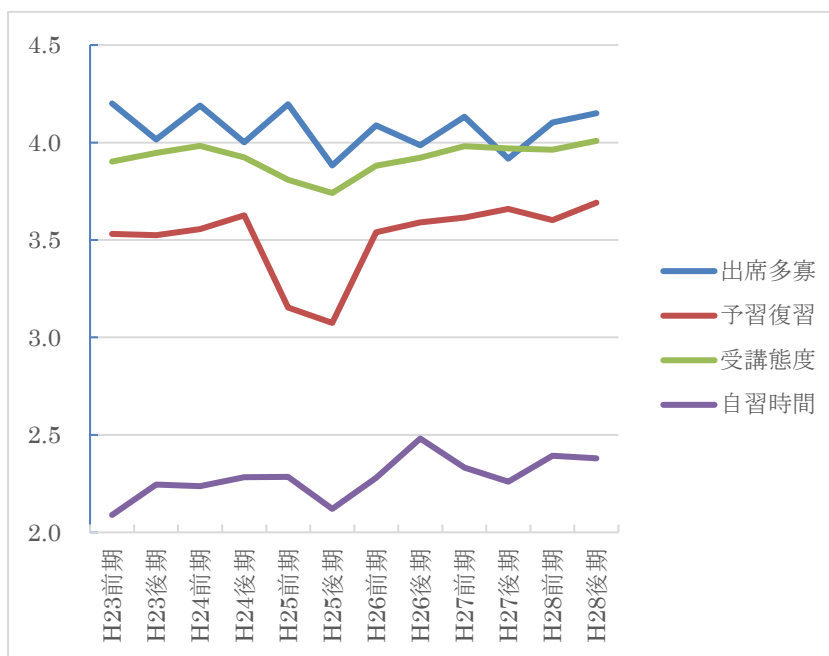


図2：受講生の学習態度に関係した指標の変化

図2は受講生の学習態度に関連した指標の変化である。平成25年度の全平均値低下の原因の1つは「予習復習時間(授業の予習・復習をし、宿題などにも積極的に取り組みましたか?)」の減少であることが分かる。「受講態度(授業中、真剣に学ぼうと心がけましたか?)」も、若干の低下がある。ここから、平成25年には学生の学習態度が低下したことがうかがえる。その理由としては後述のように教員が学生の授業意欲を掻き立てられなかったことが考えられる。しかしながら、その前後では、いずれも同程度の数値であることを考えると、主たる原因は学生側にあったと見るのが妥当だろう。とはいえ、再発を防ぐためには、これが一部の学生に留まるのか、アンケートへの回答が実態をどの程度反映しているのかなど、より深い分析が必要である。

昨年度は「出席多寡(この授業の出席状況を教えてください。)」が長期的に低落傾向であると指摘したが、平成28年度は若干反転した兆候が見られる。とはいえ、大きく回復したわけではないので長期的に注意が必要だと考えられる。そのためには、学生が欠席する理由を迫る必要がある。学生の学習意欲が低下しているとみられる平成25年度でも特段の低下が見られないからである。貧困や雇用主の不当待遇によるアルバイトの増加、ボランティア活動やサークル活動への過度の傾倒なども大きな理由と考えられ、それぞれに対して個別に有効な対策を考える必要がある。

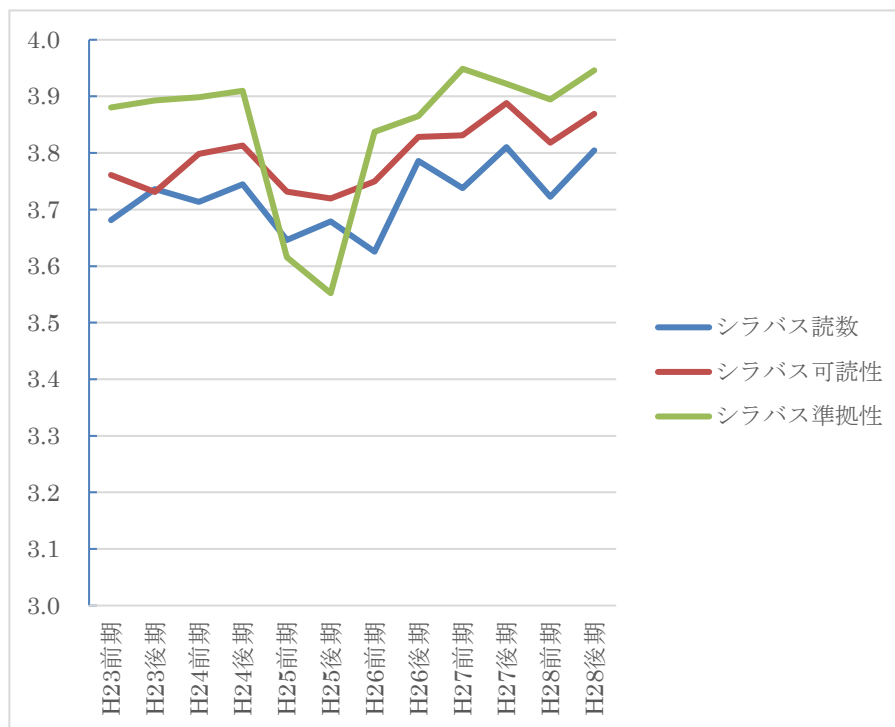


図3：シラバスに関係した指標の変化

図3はシラバスに関連した指標の変化を示す。ここでも「シラバス適切性（授業はシラバスの目的・内容にそって実施されたと思いますか?）」で平成25年度に顕著な低下がある。先に述べた学生の受講態度の低下が、ここにあるとすれば、この年度と他年度のシラバスを比較することで（反面教師として）シラバスの書き方への大きな示唆を与える可能性がある。ただし、シラバスへの適切性を過度に重視すると、受講生の理解度に応じた修正ができなくなるなどの弊害も起こるので注意が必要である。「シラバス可読性（シラバスの内容はわかりやすかったですか?）」にほとんど変化がなく、むしろ、（誤差範囲とはいえ、）微妙に上昇傾向もうかがえるので、シラバスの書き方に問題があるのではなく、シラバスの読者である受講生のアンケート評価の基準が異なっていた（過度に厳格であった）可能性も考えられよう。

回収率の際に述べた推測が正しければ、平成25年度の低下は、シラバスの読解力が学生によって大きく異なっていることが根本原因であるとも考えられる。その場合、どの程度の読解力を持つ学生を想定してシラバスを書くかという一段と難しい問題も考慮しなければならない。資料を読んで自主的に判断する力は本来、高校卒業までに修得すべき能力であると考え、シラバスを読んで授業選択を自主的に行う経験が乏しいことが原因であるならば、大学新入時などに教示・指導する必要も生じるだろう。

平成26年度以降は、3指標とも上昇傾向にあり、望ましい状況だと言えよう。

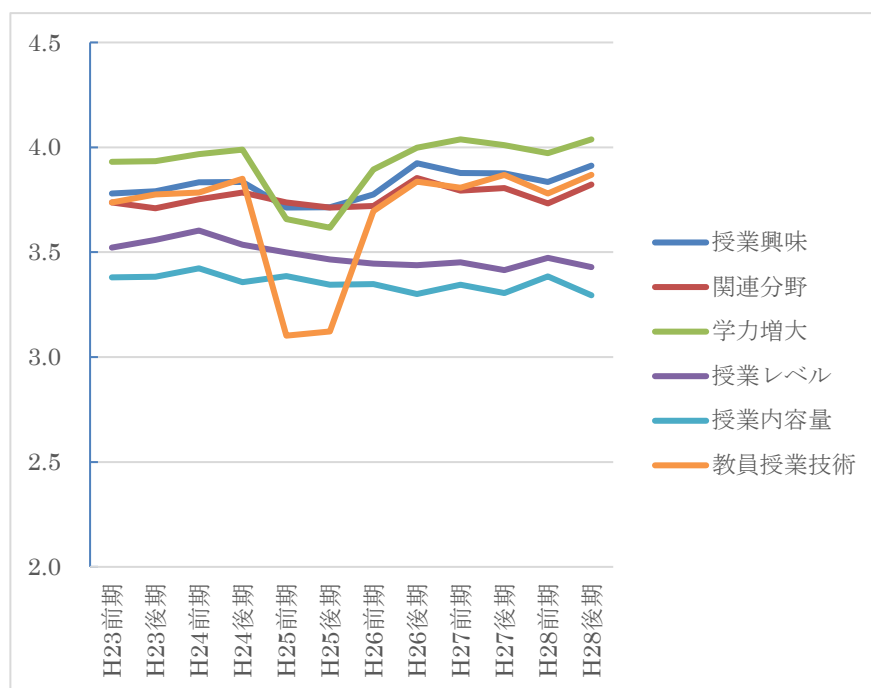


図4：授業内容に関係した指標の変化

図4は授業内容に関連した指標の変化である。これまでに見られた平成25年度での特異な減少は「学力増大（この授業は、学力（知識・技術・思考能力）の増大に役立ちましたか?）」と「教員授業技術（教員の話し方は聞き取りやすく、説明もわかりやすいと思いませんか?）」に見られる。単純に解釈すれば、これが教員の授業技量の低下を意味するが、前述の特徴、および、前後の年度ではほぼ同じ値を示していることから、受講生側に原因がある可能性も十分に追求すべきである。

長期的な傾向として「授業レベル（授業内容のレベルはいかがでしたか?）」と「授業内容量（授業内容の分量はいかがでしたか?）」の低落化がある。ただし、これらの指標はいずれも「妥当だった」が「3」なので、現在の傾向はむしろ向上と考えるべきだろう。ただし、受講生と教員とでは“妥当”と考える基準が大きく異なっている可能性が高く、大学教育全体でいえば現状の3.3～3.5が最適値である可能性もある。また、有意な差とはいえないだろうが、平成25年度を除くと、「学力増大（この授業は、学力（知識・技術・思考能力）の増大に役立ちましたか?）」や「授業興味（授業方法は興味をわかせる理解を促す上で有用でしたか?）」に微増の傾向が見られる。明確な証拠とは言えないが、これらの指標を急増させるのは難しいことを考えると、各教員の地道なFD活動の積み重ねの成果であると考えたい。

大学も教育機関である以上、授業改善の努力をすることは各教員の責務だが、その具体的な方法は自明ではない。理学部が専門とする自然科学研究と同様、様々な取り

組みや試行錯誤を通じて、得られた結果から改善を加えるという手法に則って、向上に励むべきだろう。教育は短期的または数値化が可能な方法で得られる結果が極めて限られていることも十分に意識する必要もある。こうした困難な問題にも理学的方法論を適用して改善を進めることこそ、理学部の教員が得意とする手法であるといえる。

(2) 授業公開と参観の実施

平成27年度の授業公開・参観は、昨年度の報告に記載した改善案に基づき、以下の3点について制度を大幅に変更した。第1に実施期間を大幅に拡大し、原則として(試験期間を除く)授業期間中の全てを対象とした。第2に原則として全授業を公開対象とし、非公開とする授業を申請する方式に変更した。第3に授業参観の事前申込を不要とし、報告書も書式を簡素化した。その結果、前期・後期合わせて授業参観は43件、対象となった授業が38となった。これは、昨年度の授業公開数13件、参観教員数1名と比べると画期的な増加といえる。授業参観は教員の立場から授業のやり方を实际的に学べるという点でFDの中心とすべき活動なので、今後も継続的に実施し、定着に繋げたい。

(3) 理学部FD講演会

理工学研究科および工学部との合同企画として平成28年10月13日(木)13時30分～15時30分まで、工学部理工系総合研究棟2Fプレゼンテーションルームで開催された。講師に九州大学教授の原田恒司先生を迎え、「理系(専門)科目でのアクティブ・ラーニング～失敗なんか怖くない～」と題する講演をいただいた。講演会への参加者は、教員45名(理系:12名, 工系:32名, 他学部1名)、事務・技術職員16名と学生4名の合計65名であった。詳細は理工学研究科の報告をご参照いただきたい。

(4) 学生・教職員ワークショップへの参加

平成28年10月25日に行われた、学生・教職員ワークショップ「受講生が積極的に発言・行動する授業へのヒント～番組司会の経験からのアドバイス～」に、理学部から教員4名が参加した。ワークショップの詳細は該当ページを参照のこと。

今回は講師も有名人でテーマも多く、学生や教員が関心を持つものだったので、より多数の参加を期待していたが、参加者からは内容も参加に値するものだったという感想を表明しており、参加者数を増やせなかったのは甚だ残念である。魅力的なテーマだと考えられるにも関わらず、また、学部内での周知は例年と同程度には行った上での参加数なので、周知活動のやり方を含めて根本的な方策も考える必要があるだろう。これまでの参加者からの口コミを有効利用するなど、学部単位でも様々なアプローチを試みるなどして大幅増加を実現する方策を探りたい。

医学部

平成 28 年度医学部医学科 FD 活動報告

1. はじめに

医学部医学科では平成 28 年度の FD 活動計画として、まず『医学教育分野別評価受審に向けた教職員の国内研修』を挙げ、一般社団法人 日本医学教育評価機構（以下、JACME）による医学教育分野別評価受審に向け、関連するシンポジウム等に参加し、情報収集やその報告を行うこととした。

次に『学生による授業評価アンケートの実施と、アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集』を挙げ、平成 23 年度から全学生を対象として全ての授業科目において実施している授業評価アンケートについて、学生の教育への積極的参加や、学習計画と成果並びに教員の指導等に対する評価及び改善に有効であることから、継続して実施することとした。さらに、その結果を教員にフィードバックし、結果に対する意見収集を行うこととした。

最後に『学内講師による医学教育講演会及び研修会』を挙げ、一つは平成 22 年度から実施している入学試験面接評価者講習会を継続して実施することとした。もう一つは医学科全教職員を対象とした医学教育分野別評価受審に向けたカリキュラム等の教育に関連する研修会を開催することとした。

上記 3 つの活動計画に基づき、中期目標及び年度計画に掲げられた「専任教員のうち 75%以上の FD 活動参加」の達成を目標に定め、平成 28 年度の FD 活動を行ったので報告する。

2. 医学教育分野別評価受審に向けた教職員の国内研修

FD 委員会医学科部会での検討の結果、喫緊の懸案事項である JACME による医学教育分野別評価受審に関連した研修等に教職員が参加することとした。これを受け、平成 28 年度は延べ 4 名の教職員が医学教育分野別評価に関連した説明会並びにシンポジウムへ参加した。

まず、2 名の職員が平成 28 年 7 月 25 日に JACME 会議室にて開催された「医学教育分野別評価受審に関する説明会」に参加した。この説明会では、まず JACME 理事の方から医学教育分野別評価の概要についての説明があり、次に JACME 事務局長の方から提出資料の準備と留意点についての説明があった。さらに、実際に評価を受審した大学の職員の方による事例報告と質疑応答が行

われた。

次に2名の教職員が2月23日に東京医科歯科大学にて開催された「平成28年度文部科学省大学改革推進事業（基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成）公開シンポジウム」に参加した。このシンポジウムでは、まずJACME役員の方から医学教育分野別評価制度の確立と経緯や、JACMEによる医学部認定に関する講話があった。さらに、他大学におけるトライアル評価の事例発表や受審にあたっての準備に関する報告があった。

これらの説明会及びシンポジウムへの参加によって、医学教育分野別評価制度に対する知識が向上し、受審に向けての情報収集を十分に行うことができた。

3-1. 学生による授業評価アンケート

本学科では全授業科目（実習を含む）を対象とした学生による授業評価アンケートを平成23年度から実施しており、平成28年度も同様に実施した。

まず1年生から4年生までの専門教育科目49科目については、学習と授業に対するアンケート用紙を学務課医学教務係より科目責任者に配布し、科目責任者が試験時（試験を実施しない科目については授業最終日）にアンケートを実施した。

1年生から4年生までのアンケートは、学生の学習の実態とカリキュラム、教員の指導方法について具体的な改善点を明らかにするために実施し、学生自身の学習に対する自己評価（4項目）、科目について（8項目）、講師の指導について（5項目）、全体評価（1項目）の各項目について5段階の評定尺度で回答し、さらに自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。なお、学生の記載後は学務課医学教務係に届けられ、速やかに集計した後、結果及び自由記述内容を科目責任者に報告した。

次に5年生の臨床実習では、実習開始前のオリエンテーション時にアンケートの目的や内容、実施方法を説明した後、それぞれの診療科での実習について、2週間ごとの実習終了時に授業評価アンケートを実施した。また、6年生の選択実習では、約4ヵ月間の実習の後に各自が選択をした実習先（学内、鹿児島県内、海外）について、6年次OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）終了時にアンケートを実施した。

5年生から6年生までのアンケートは、自身の学習に対する評価（6項目）、実習計画・実施について（5項目）、指導について（1項目）、全体評価（1項目）

の各項目について 3～11 段階での評定尺度における回答を集計し、自由記述欄に自由な意見を記載してもらった。

なお、アンケート用紙は無記名で、学生の記載後は学生自身によって学務課医学教務係に届けられ、教員や指導医の目に触れることが無い状況で実施した。

3-2. アンケート結果

全てのアンケート結果は医学部 FD 委員会医学科部会、医学部教務委員会医学科部会、医学科会議にそれぞれ報告した。以下にアンケート結果の概要を記載する。

1 年生から 4 年生までの専門教育科目全 52 科目中 45 科目から計 4208 枚(平均 94 枚/科目)、5 年生の臨床実習では前期(3 月下旬から 9 月中旬) 1409 枚、後期(9 月下旬から翌 3 月上旬) 1274 枚の計 2683 枚(平均 112 枚/診療科)、6 年生の選択実習では 376 枚の回答が得られた。

アンケートの自身の学習に対する評価という項目について、1 年生から 4 年生までの専門教育科目(【別表 1】参照)においては、評価平均が 3.57～3.71 と自主的な学習が十分に行われているとは言えない状況であるが、5 年生の臨床実習(【別表 2】参照)では評価平均が 4.01～4.19、6 年生の選択実習(【別表 3】参照)では評価平均が 4.09～4.45 と学年が進むにつれて自主的な学習に対する意識の向上が見受けられる。

また、臨床実習においては診療参加型実習の比率を増やしていくことが求められているが、学生の回答における診療参加型の割合は 5 年生の臨床実習では平成 27 年度と平成 28 年度がともに 37.7%、6 年生の選択実習では平成 27 年度の 45.4%に対して平成 28 年度が 43.4%と昨年度に比べあまり変化が無かった。そのため、引き続き診療参加型実習推進のための取り組みが重要な課題となるといえる。

なお、平成 28 年度はアンケート未回収の科目が 7 科目あり、今後のアンケート実施、回収の方法について改めて検討していく所存である。

【別表1】授業評価アンケート集計結果(1年生～4年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	評価平均	SD
積極的に学習した(質問・予習・復習)	1.6%	6.7%	30.7%	43.1%	17.8%	3.69	0.86
教科書や参考文献で広く、深く学習した	2.1%	9.9%	32.5%	39.9%	15.6%	3.57	0.88
原理の理解や臨床への応用を考えながら学習した	1.4%	6.9%	29.4%	44.0%	18.2%	3.71	0.84
グループ学習ではグループのために貢献した	2.1%	2.9%	30.4%	38.1%	17.1%	3.67	0.82
科目について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
シラバスには必要な情報がわかりやすく記載されていた	2.5%	3.7%	39.3%	38.6%	16.0%	3.60	0.81
学習内容は有用である	1.4%	4.1%	22.4%	44.4%	27.8%	3.94	0.82
効果的な学習方法が用いられた	2.1%	6.9%	29.5%	41.9%	19.6%	3.70	0.87
他の授業との関連や発展がよく理解できた	1.9%	6.3%	29.0%	42.7%	20.1%	3.73	0.85
科目の教育目標に沿った評価(範囲、内容、レベル)だった	1.7%	6.2%	28.6%	43.0%	20.4%	3.74	0.86
学習した領域への興味、関心が高まった	2.5%	5.2%	24.7%	42.9%	24.7%	3.82	0.90
難易度は	1 難しい	2	3 適切	4	5 易しい	評価平均	SD
	9.2%	19.7%	59.7%	9.5%	1.9%	2.75	0.74
時間数は	1 長い	2	3 適切	4	5 短い	評価平均	SD
	3.7%	6.7%	67.7%	15.5%	6.4%	3.14	0.70
講師の指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
講義・実習等によく準備されていた	1.6%	6.0%	25.0%	45.1%	22.3%	3.81	0.86
理解を促すための工夫がされていた	2.4%	7.4%	25.8%	42.9%	21.4%	3.73	0.90
質問を促し、積極的に質問に応じてくれた	1.7%	4.9%	28.0%	40.9%	24.4%	3.81	0.86
学習領域の講師として適切であった	1.9%	4.7%	23.8%	42.3%	27.3%	3.89	0.86
授業を担当した複数の講師は連携して効率的に指導した	2.9%	7.7%	29.3%	37.9%	21.7%	3.68	0.94
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	3.1%	5.3%	29.7%	39.4%	22.4%	3.73	0.88

【別表2】授業評価アンケート集計結果(5年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	評価平均	SD
積極的に実習した	0.1%	1.8%	15.4%	55.5%	27.2%	4.08	0.71
実習に関連する項目を自主学習した	0.1%	1.3%	14.0%	58.7%	25.9%	4.09	0.68
診療のルールに従って行動した	0.1%	1.0%	10.8%	59.0%	29.1%	4.16	0.65
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.1%	1.0%	9.6%	58.7%	30.7%	4.19	0.65
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.1%	1.0%	19.8%	56.0%	23.0%	4.01	0.70
実習計画・実施について						平均	SD
主な実習方法は							
診療参加型						37.7%	1.90
模擬診療型						19.6%	1.47
見学・講義						44.0%	1.93
指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.4%	1.3%	7.3%	32.6%	58.4%	4.47	0.69
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.6%	1.2%	9.0%	33.3%	56.0%	4.43	0.76

【別表3】授業評価アンケート集計結果(6年生)

自身の学習に対する評価	1 全く行わ なかった	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に 行った	評価平均	SD
積極的に実習した	0.5%	11.7%	9.8%	34.0%	43.9%	4.09	0.75
実習に関連する項目を自主学習した	0.3%	0.5%	10.4%	42.7%	46.1%	4.34	0.54
診療のルールに従って行動した	0.0%	0.3%	8.8%	38.9%	52.0%	4.43	0.49
患者・スタッフに医学生として礼儀正しく振る舞った	0.0%	0.8%	7.7%	37.2%	54.3%	4.45	0.47
グループメンバーを助け、協働して学習した	0.5%	1.6%	13.3%	36.5%	48.0%	4.30	0.64
実習計画・実施について						平均	SD
主な実習方法は							
診療参加型						43.4%	2.05
模擬診療型						21.9%	1.76
見学・講義						39.4%	2.07
指導について	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
指導医はあなたの学習を熱心に支援した	0.5%	0.0%	7.5%	17.3%	74.7%	4.66	0.49
全体評価	1 全くそう 思わない	2	3 どちらとも いえない	4	5 非常に そう思う	評価平均	SD
この授業を来年度の学生にも勧めたいと思う	0.5%	0.0%	7.5%	16.3%	75.7%	4.67	0.48

3-3. アンケート結果のフィードバックに対する教員からの意見収集

以前より授業（実習）評価アンケートの結果を各担当教員にフィードバックすることは行っていたが、平成28年度よりそのアンケート結果等に対する各担当教員からの意見を収集するという取り組みを開始した。

実施方法については、授業（実習）評価アンケート結果とともに意見収集のための所定用紙を送付し、各科目の責任者及びコースコーディネーターが担当教員の意見をとりまとめた上で、所定用紙に記入し、学務課医学教務係に提出するという形で行った。

所定用紙については、授業評価アンケート集計結果に見られる学生の要望・傾向等の分析及び評価について、学生の要望・傾向等に対する授業科目への反映について、その他（授業評価アンケートに対するご意見など）という3項目を用意し、それぞれに対する意見を記入してもらった。

意見収集の結果として、43科目延べ177名の教員から回答が得られた。学生の意見等を今後の授業へ反映させる必要があるという意見が大多数であり、PDCAサイクルの活性化という当初の目的が十分に達成されたと考えられる。

4. 学内講師による医学教育講演会

『チーム医療教育における講演会～地域で行う医療系学生実習～』

日 時：平成 28 年 11 月 15 日（火）18：00～19：00

主 催：医学部 FD 委員会保健学科部会

共 催：医学部 FD 委員会医学科部会

会 場：インテリジェント講義室

講 師：大脇 哲洋（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科地域医療学分野 教授）

対象者：鹿児島大学全教職員及び学生

参加者：66 名（当日 58 名、DVD8 名、うち医学科教員 10 名）

目 標：本学の医学教育、とりわけ離島・地域医療実習の現状を知ること、
地域で行う医療系学生実習のあり方について考える能力を身につける。

総 評：医学部医学科では医学教育分野別評価受審に向けて医学教育体制の見直しを行っており、看護学教育や歯学教育の分野でも同様の分野別評価が今後実施される見通しとなっている。この現状を踏まえ、本学医学部における大きな教育の特徴である「地域医療」にスポットを当てて、地域医療の現状や多職種連携の重要性、今後の課題等についての講話があり、上記目標の達成に大変有意義な講演会であったと考える。なお、本講演会の内容は全て録画しており、平成 29 年 3 月 28 日（火）に DVD 講演会として再度開催された。

『入学試験面接評価者講習会』

日 時：平成 28 年 12 月 20 日（火）15：00～17：00

主 催：医学部 FD 委員会医学科部会

共 催：医学部入試委員会医学科部会

会 場：保健学科会議室

講 師：佐野 輝（医学部長）

谷本 昭英（入試委員会医学科部会長）

田川 まさみ（医歯学教育開発センター長）

医学部 FD 委員会医学科部会委員

上村 裕一、西 順一郎、小片 守、岡本 康裕、吉家 清貴

対象者：医学科入学試験面接担当予定教員（前年度までの講習会未受講者優先）

参加者：36 名

目 標：本学科のアドミッションポリシーに基づく評価基準に従った公平で信頼性の高い面接評価を行いながら、受験生の能力を引き出す方法について、講義やデモンストレーション、ロールプレイで習得する。

総 評：一昨年度より一般入試（前期日程・後期日程）の面接時間が拡大したことに伴い、面接評価者にとって面接の進め方や評価基準の標準化がより重要となる一方で、面接質問事項は多様化が求められるようになった。今回の講習会は昨年度までの内容をさらにグレードアップしたものとなっており、前年度までの講習会に参加した教員が再度参加するなど、非常に多くの参加が得られ、上記目標の達成に大変有意義な講習会であったと考えられる。本講習会は今後の面接試験実施に大いに貢献するであろうと推測されており、参加者の評価も良好であったため、次年度以降も講習会を継続して実施していくことが望ましいといえる。

5. おわりに

平成28年度は前述の3つの活動計画に基づいて本学科のFD活動を行ったが、最終的な専任教員の参加率は75.3%となり、目標に定めた「専任教員のうち75%以上のFD活動参加」は達成された。

平成29年度に向けてはJACMEによる医学教育分野別評価の基準に沿って医学教育の体制を見直し、教育体制をより充実させるようなFD活動を行っていくことが、本学科の今後の発展に非常に重要であると考えられる。

まず、授業評価アンケートについては、平成28年度からアンケート結果のフィードバックに対する各教員からの意見収集を新たに実施したことで、PDCAサイクルの活性化を図ることができたため、今後も継続して実施していくべきであるといえる。

また、現在行っている入学試験面接評価者講習会を継続するとともに、その他教育やカリキュラムに関する講演会を実施していく必要があると考える。

さらに、本学科の教育が卒業後の学習等にどのような影響を与えているかを考察し、カリキュラム改善の一助となるよう卒業生アンケートの実施を新たに検討している。

今後もFD活動を通じて、本学科の大学教育及び医学教育の現状を分析し、継続的な改良につなげていくことで学生の教育環境改善に貢献していく所存である。

平成 28 年度 医学部保健学科 FD 活動報告

1. はじめに

平成 28 年度医学部 FD 委員会保健学科部会の活動として、平成 27 年度に引き続き、以下を実施した。

- 1) 学生による授業評価アンケート
- 2) 講演会

それぞれの活動について概略を述べる。

2. 学生による授業評価アンケートの実施とその結果の検討並びに授業評価結果の教員へのフィードバック

1) 対象科目と方法

実習、演習と非常勤講師による授業を除く、全ての授業科目を対象に、学生による授業評価を例年通り実施した。学生による授業評価は各授業の最終日に学生にアンケート票を配布し、無記名で記載してもらい、学生代表に回収し、封筒に入れ、厳封し、学務課に提出してもらった。授業評価の中の評価項目は以下の通りである。「学生自身の自己評価」、「授業について」、「教員について」、そして「自由記述」から構成されている。

< 授業評価アンケート >

学生自身の自己評価

101 出席状況は良好だった。

(5 : 非常に良好だった、4 : かなり良好だった、3 : 良好だった、2 : 良くなかった、1 : 非常に良くなかった)

102 授業に意欲的に取り組む努力をした。

(5 : 非常に努力した、4 : かなり努力した、3 : 努力した、2 : あまり努力しなかった、1 : 努力しなかった)

103 授業の予習あるいは復習をした。

(5 : 非常に予習復習をした、4 : かなり予習復習をした、3 : 予習復習をした、2 : あまり予習復習をしなかった、1 : 予習復習をしなかった)

授業について

201 授業科目にふさわしい内容だった。

(5 : 非常にふさわしかった、4 : かなりふさわしかった、3 : ふさわしかった、2 : あまりふさわしくなかった、1 : ふさわしくなかった)

202 シラバスの内容は明確だった。

(5 : 非常に明確であった、4 : かなり明確であった、3 : 明確であった、2 : あまり明

- 確でなかった、1：明確でなかった)
- 203 授業内容はシラバスに沿ったものであった。
(5：非常に沿っていた、4：かなり沿っていた、3：沿っていた、2：あまり沿って
いなかった、1：沿っていなかった)
- 204 授業の難易度は以下の通りだった。
(5：丁度良かった、4：やや簡単だった、3：簡単だった、2：かなり難しかった、1：
非常に難しかった)
- 205 この授業を他の学生にも勧めたいと思う。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)
- 206 この授業は自分にとって価値があった。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)

教員について

- 301 話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすかった。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)
- 302 授業は時間どおり行われた。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)
- 303 教師の授業に対する熱意を感じた。
(5：非常に感じた、4：かなり感じた、3：感じた、2：あまり感じなかった、1：感
じなかった)
- 304 授業中、オフィスアワー等で、質問や相談に丁寧に応じてくれた。
(5：非常にそう思う、4：かなりそう思う、3：そう思う、2：あまり思わない、1：
思わない)

自由記述

この授業をより良くするための意見や要望、受講者としての自分を省みた上での感想などを自由に書いてください。

2) 学生による授業評価アンケートの結果

前期開講分は 69 科目に依頼し、60 科目からアンケートを回収した (回収率 87%)。後期開講分は 48 科目に依頼し、48 科目から回答を回収し得た (回収率 100%)。前期開講、後期開講別にアンケートの中の各項目について評価点 (1～5) の平均値と標準偏差を求めた。点数が高いほど評価が良いことを示している。また、前期開講科目と後期開講科目を

合わせた全体での評価点の平均値も求め、過去5年間との比較を行った。28年度前期開講科目の平均点と28年度後期開講科目の平均点を表1に示す。表2には、過去5年間における前期・後期を合わせた科目全体での平均点の推移を示した。

表1. 平成26年度学生による授業評価の前期・後期別の点数の比較（平均点）

質問項目	前期開講科目	後期開講科目
出席状況は良好であった	4. 7 6	4. 6 8
授業に意欲的に取り組む努力をした	4. 3 7	4. 3 1
授業の予習あるいは復習をした	3. 7 0	3. 6 2
授業科目にふさわしい内容だった	4. 5 8	4. 6 5
シラバスの内容は明確だった	4. 4 5	4. 5 1
授業内容はシラバスに沿ったものであった	4. 4 6	4. 5 3
授業の難易度は丁度良かったか	4. 4 9	4. 4 7
この授業を他の学生にも勧めたいと思う	4. 3 2	4. 3 7
この授業は自分にとって価値があった	4. 4 3	4. 4 9
教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすかった	4. 3 7	4. 4 6
授業は時間どおり行われた	4. 4 2	4. 5 7
教師の授業に対する熱意を感じた	4. 4 6	4. 5 6
授業中、オフィスアワー等で、質問や相談に丁寧に応じてくれた	4. 3 1	4. 4 2

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

表2. 過去5年間の学生による授業評価の点数の推移（平均点）

質問項目	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度
出席状況	4. 6 7	4. 6 2	4. 6 8	4. 6 7	4. 6 7
意欲的な取り組み	4. 2 3	4. 2 1	4. 3 3	4. 3 2	4. 3 5
予習・復習	3. 3 6	3. 3 7	3. 6 6	3. 6 0	3. 7 0
内容のふさわしさ	4. 5 0	4. 4 8	4. 4 9	4. 4 9	4. 5 8
明確なシラバスの内容	4. 3 8	4. 3 8	4. 3 6	4. 3 8	4. 4 7
授業内容とシラバスの整合	4. 3 6	4. 3 9	4. 3 6	4. 3 9	4. 4 8
適切な難易度	4. 2 6	4. 3 3	4. 3 3	4. 3 1	4. 4 7
他学生への履修の勧め	4. 2 1	4. 2 2	4. 2 5	4. 2 5	4. 3 6
自分にとっての価値	4. 3 6	4. 3 4	4. 3 8	4. 3 7	4. 4 8
わかりやすい説明	4. 2 6	4. 2 7	4. 3 0	4. 3 1	4. 4 0
時間どおりの開講	4. 4 5	4. 4 2	4. 4 0	4. 4 0	4. 4 9

授業に対する熱意	4. 3 9	4. 3 8	4. 4 0	4. 4 2	4. 4 9
質問や相談への対応	4. 2 7	4. 2 4	4. 2 6	4. 2 5	4. 3 5

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価 質問項目の文言は表1と同じ。

3) 結果の解釈

①「学生自身の自己評価」について

平成28年度の前期と後期の比較では、後期では前期に比べ学生自身の授業に対する自己評価が3つの項目全てで低下していた。また、「授業の予習あるいは復習をした」という項目は前期、後期いずれも低い点数であったこと(3.70と3.62)は特筆すべきであると思われる。学生の授業への積極的な取り組みが十分になされていないことがうかがえる。なお、この28年度に見られた結果は27年度でも同様にみられていた。

②「授業について」と「教員について」

「学生自身の自己評価」についてとは対照的に、平成28年度の前期と後期の比較では、後期では前期に比べ学生自身の授業に対する自己評価が全てで高かった。5年間の推移については大きな変動はみられていない。

4) 学生による授業評価結果アンケート結果の教員へのフィードバック

各授業科目についての各学生からのアンケート票(自由記述も記載されたものあり)は当該科目の担当教員に返して、今後の授業方法についての参考資料としてもらった。自由記述には、特に教員に伝えたメッセージが具体的に記載されており、教員にとって貴重なフィードバックとなっていると思われる。

3. 講演会

医学部保健学科では平成24年度から看護学専攻・理学療法学専攻・作業療法学専攻の3専攻合同授業として、1年次から4年次にわたる「チーム医療授業科目群」をカリキュラムの中に組み込んでいる。

「チーム医療授業科目群」のさらなる充実に向けて、28年度は学内指導者を講師として招き、地域における取り組みと課題についての講演会を開催した(図参照)。

講演会名：地域で行う医療系学生実習

講師：鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 地域医療学分野教授 大脇哲洋 先生

日時：平成28年11月15日(火)18時～19時

場所：鹿児島大学医学部共通教育棟6階 インテリジェント講義室

主催：鹿児島大学医学部FD員会保健学科部会、共催：鹿児島大学医学部FD員会医学科部会

講演内容：地域で行う医療系学生実習に対する取り組みについて紹介され、その有用性と

今後の課題が述べられた。43名の教員、学生が聴講した。講演会の後、活発な質疑・応答がなされ、鹿児島大学医学部における今後のチーム医療教育推進に向けてのFD活動に寄与するところが大きであった。



図 講演会リーフレット

5. 終わりに

授業評価アンケートにより、教員が自覚できていない改善点が明らかになり、教員の教育力の向上につながるものと期待される。また、チーム医療の講演会を通して授業のノウハウが明確となり、担当教員間の共通理解と共同作業が促進され、4年間一貫のチーム医療カリキュラムが有効に遂行される効果が期待される。

(文責 医学部FD委員会保健学科部会長 新地 洋之)

歯学部

歯学部 FD 活動報告

1. はじめに

歯学部 FD 委員会では、学部教育や学部組織、研究、および病院組織運営などの多面的な領域について、教員の能力開発に関わる様々な活動を企画し実施している。本年度、いずれかの FD 講演会に参加した教員の割合は 92.7%（教員 137 人に対し FD 講演会に 127 人参加）に達した。鹿児島大学の目標である「75%以上の参加」をはるかに超える参加率を達成したことは、歯学部教員の FD 活動に対する意識の高さを示すものである。本報告では各活動について、その概要を記載する。

1) 平成 28 年度の事業リスト

- ・学生による授業評価
- ・授業公開・授業参観による教員相互の評価
- ・FD 講演会「共用試験の概要、作問方法について」の開催
- ・FD 講演会「e-ポートフォリオ・システムについて」の開催
- ・FD 講演会「平成 28 年熊本地震歯科救援活動報告会」の開催
- ・FD 講演会「平成 27 年度研究業績評価・表彰、ならびに歯学教育の PDCA サイクルについて」の開催
- ・FD 講演会「科研費獲得向上のポイント」の開催
- ・FD 講演会「研究教育に関する計画の立案とチームアプローチについて」の開催
- ・FD 講演会「CBT の作問に関する FD 講習会」の開催
- ・FD 講演会「今後の歯科患者急変時ならびに歯系館内傷病者発症時の対応について-急変を防ぐ！全員で取り組む R R S-」の開催
- ・教員の国内研修「歯学教育認証制度等の実施に関する調査研究 シンポジウム」参加
- ・教員の国内研修「歯学教育認証制度等の実施に関する調査研究 事業成果報告会」参加
- ・教員の「教育業績評価」の実施

2. 歯学部 FD 委員会の活動状況

1) 平成 28 年度歯学部 FD 委員会 委員構成

委員長：後藤哲哉（歯科医学教育実践学分野 教授）

委員：中村典史（口腔顎顔面外科学分野 教授）

西谷佳浩（歯科保存学分野 教授）

田松裕一（解剖法歯学分野 准教授）

事務担当：歯学教務係

2) 平成 28 年度歯学部 FD 委員会 開催状況

①第 1 回歯学部 FD 委員会（平成 28 年 4 月 28 日開催）

- 議題
- ・平成 27 年度歯学部 FD 活動報告について
 - ・平成 28 年度の FD 活動予定について

②第2回歯学部FD委員会（平成28年6月7日開催）メール会議

議題 ・ 「平成28年熊本地震歯科救援活動報告会」に関する歯学部FD委員会共催について

③第3回歯学部FD委員会（平成28年11月13日開催）メール会議

議題 ・ 11月30日の東京歯科大学山口先生を迎えての第6回FD講演会の案内について。
・ 2月10日兵庫医大岸本教授の講演について

3. 学生による授業評価

歯学部FD委員会では、歯学部教育委員会と協力しながら、「学生による授業評価」を実施し、各授業の評価を行なっている。さらに、新カリキュラム移行2年目に当たり、新規導入した科目の評価も行い今後の改善に役立てている。この授業評価は平成28年度に開講した全ての授業を対象に、各授業の終了時に適宜実施した。本年度より本調査票は無記名式とし、学生が評価記入後、各学年のクラス委員が回収し、学務課歯学教務係へ提出してもらった。得られた記入済み調査票はOCRにより読み込み処理後、集計作業が行われた。

個別のデータは集計直後、各授業担当者に生の調査票をPDF化し返送している。自由記載欄には多くのコメントが寄せられており、授業改善に直接つながるような内容が多かった。さらに、個々の授業において学生視点のフィードバックをもとに授業内容、方法等を見直し、授業改善シートを提出することとした。現在、効率的な授業改善に関するPDCAサイクルを構築すべく、歯学部教育委員会と協力しながら改善を進めている。

4. 授業公開・授業参観における教員相互の評価

歯学部教員による授業公開・授業参観による相互評価は、全学的な取り組みの一環として例年実施しており、平成28年度については12月12日（月）～12月22日（木）に実施した。この期間の歯学部における授業は原則として全て公開とし、教員はFD活動の一環として、随時授業参観することを可能とした。授業を参観した教員は、授業修了後に次のアンケートへの記載を行った。今年度も、授業参観は極めて少ない結果となった。昨年度に引き続き、授業公開への参加が少なく、歯学部FD委員会としては本年度の重大改革事項としてこの授業公開・授業参観の改革を行う予定である。

5. 平成28年度第1回歯学部FD講習会

- 1) 講師：天野修先生（明海大学教授）、鶴田潤先生（東京医科歯科大学准教授）
- 2) 講演タイトル：「共用試験の概要、作問方法について」
作問のブラッシュアップ作業と講評（グループ作業）
- 3) 日時：平成28年4月23日（土）9：00～16：00
- 4) 場所：第1総合示説室（医歯学総合研究科棟1 3階）
- 5) 参加者：歯学部教職員39名
- 6) 内容

共用試験実施機構が行うCBTはコアカリキュラムに基づいて出題されており、毎年各大学に作問が依頼される。その作問技術の向上は学生の定期試験の質的向上に寄与するばかりではなく、学生に教

育するに当たり何がコアとして考えられているかを再認識することにもつながる。今回は、共用試験実施機構に依頼し、共用試験の作問指導を行う講師を招いて CBT の問題として良問とはどのようなものかの指導を行って頂いた。なお今回は土曜日の実施ということもあり、各分野に参加人数を限定して実施した。

6. 平成 28 年度第 2 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：村永 文学 講師（病院医療情報部）
- 2) 講演タイトル：「e-ポートフォリオ・システムについて」
- 3) 日 時：平成 28 年 5 月 11 日（水）17：30～19：00
- 4) 場 所：歯学部第 4 講義室
- 5) 参加者：歯学部教員 73 名
- 6) 内 容

桜ヶ丘地区でも e-ポートフォリオが使えるようになっており、その活用が求められているがまだその利用は少ない。e-ポートフォリオの普及を目的として、実際に第 4 講義室のコンピューターを使いながら村永講師の指導のもとに e-ポートフォリオの演習を行った。また、すでに e-ポートフォリオを使っている教員でも e-ポートフォリオの知らない機能がたくさんあり非常に勉強になった。

7. 平成 28 年度第 3 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：山崎要一副病院長 他 6 名
- 2) 講演タイトル：「平成 28 年熊本地震歯科救援活動報告会」
- 3) 日 時：平成 28 年 6 月 22 日（水）17：00～18：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教員 84 名
- 6) 内 容

東日本大震災以降、大規模災害時の歯科としての対応が求められるようになり、教育でも法歯学の導入などいろいろな対応が求められてきた。そんな折、ごく近くの熊本で大規模災害が発生し、鹿児島大学歯学部もいろいろな形で活動を行った。今回は、大規模災害時における活動を検証し、今後どのような対応が必要なのか改めて整理する機会として報告会を行った。非常に関心が高く、参加者も多かった。

8. 平成 28 年度第 4 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：宮脇正一（歯学部長）、小松澤 均（歯学部教育委員長）
杉浦 剛（歯学部研究体制委員長）、後藤哲哉（歯学部 FD 委員長）
- 2) 講演タイトル：「平成 27 年度研究業績評価・表彰、ならびに歯学教育の PDCA サイクルについて」
- 3) 日 時：平成 28 年 7 月 20 日（水）17：00～18：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 88 名

6) 内 容

歯学部教育委員会、研究体制委員会との共催で前年度の研究・教育業績評価の説明ならびに、研究においては若手のベストリサーチャー賞の表彰を行った。研究体制委員会では科学研究費獲得の必要性ならびに大学院生の増加の必要性が指摘された。教育業績評価については本年が本格実施の第2回目であったのが、どのように教育業績評価を活かすかについての説明を行った。

9. 平成 28 年度第 5 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：宮脇正一（歯学部長）、杉浦 剛（研究体制委員長）、仙波伊知郎教授
- 2) 講演タイトル：「科研費獲得向上のポイント」、マルウェア問題についての説明ならびに
注意喚起
- 3) 日 時：平成 28 年 9 月 21 日（木）18：00～19：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 63 名
- 6) 内 容

現在の大学教育に関して学生のリサーチマインドの向上には教員自らの研究のアクティビティの向上は不可欠である。その、研究のアクティビティの向上には科研費の獲得は必須事項である。昨年度、同様の FD 講演会を行ったが、すぐさま次年度の科研費取得に好結果をもたらした。本年度もさらなる科研費の取得の向上を図るべく、「科研費獲得向上のポイント」を杉浦研究体制委員長に講演を行って頂いた。結果として歯学部は 2 年連続科研費取得率の増加を得た。

また、後半では仙波伊知郎教授に最近問題になっているマルウェア問題に対する注意喚起と、その対処法についてお教え頂いた。

10. 平成 28 年度第 6 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：山口朗先生（東京歯科大学客員教授）
- 2) 講演タイトル：研究教育に関する計画の立案とチームアプローチについて
- 3) 日 時：平成 28 年 11 月 30 日（水）18：00～19：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 71 名
- 6) 内 容

歯学教育において近年、研究マインドの醸成が求められている昨今、研究教育を充実させるためには科研費等の外部資金の獲得が必須であり、特に大型の研究費を獲得するためには研究チームを作って申請する方略が必要である。この FD 講演会では科研の審査員の経験があり、大型科研費の獲得経験が豊富な東京歯科大学の山口先生を講師にお招きして、平成 30 年度から行われる新科研審査制度の説明と大型科研を申請する時のチームアプローチについての講演を行って頂いた。この講演会の成果もあって平成 29 年 4 月の基盤研究等の獲得は、歯学部は今までにない高い採択率を達成することができた。

11. 平成 28 年度第 7 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：鹿児島大学歯学部
村口浩一先生（咬合機能補綴学分野）
岩下洋一朗先生（歯科医学教育実践学分野）
田松裕一先生（人体構造解剖学分野）
犬童寛子先生（顎顔面放射線学分野）

- 2) 講演タイトル：CBT の作問に関する FD 講習会
- 3) 日 時：平成 28 年 1 月 18 日（水）18：00～19：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 88 名
- 6) 内 容

共用試験歯学系 CBT において、より質の高い作問を行うとともに、作問の教育活動上の意義に対する認識を深め、教員の教育能力開発に資するために、学内の CBT 作問委員会コアメンバーおよびアドバイザーが講師を務める講習会を開催した。

12. 平成 28 年度第 8 回歯学部 FD 講習会

- 1) 講 師：垣花泰之 教授（救急救命センター）
- 2) 講演タイトル：「今後の歯科患者急変時ならびに歯系館内傷病者発症時の対応について
-急変を防ぐ！ 全員で取り組む R R S-
- 3) 日 時：平成 29 年 3 月 13 日（月）18：00～19：30
- 4) 場 所：歯学部第 3 講義室
- 5) 参加者：歯学部教職員 75 名
- 6) 内 容

教育活動時を含めて、緊急事態が発生した時の対応が重要なことは言うまでもないが、定期的にかまておかないと実効性はない。今回、緊急時対策として RRS 制度が新たに作られたので、教育時に対応できるようにすべての教員に FD として講習会を開催して頂いた。特に、普段緊急時活動のない基礎系教員に関しては、今までしらなかったことも多く、非常に有益な講習会であった。

13. 教員の外部研修会への派遣報告

- 1) 教員の国内研修「歯学教育認証制度等の実施に関する調査研究 シンポジウム」
参加者：杉浦 剛（顎顔面疾患制御学分野 教授）
日 時：平成 28 年 12 月 10 日（土）
場 所：東京歯科大学水道橋校舎新館血脇記念ホール（東京都）
概 要：

平成 28 年度文部省大学改革推進事業（基礎・臨床を両輪とした医学教育改革によるグローバルな医師養成）に基づく「歯学教育認証評価制度の実施に関する調査研究」の平成 28 年度事業報告公開シンポジウムが行われ、外部研修会として参加した。文部科学省高等教育医学教育課からの説明や歯学教育認証評価制度の評価基準、実施要項、受審マニュアル等の説明が行われ、さらには海外の制度としてオーストラリアとアメリカの評価制度に関する講演が行われた。

2) 教員の国内研修「歯学教育認証制度等の実施に関する調査研究 事業成果報告会」

参加者：田口則宏（歯科医学教育実践学分野 教授）

日 時：平成 29 年 2 月 17 日（土）

場 所：TKP 御茶ノ水カンファレンスセンター

概 要：

歯学教育認証制度は本格実施をひかえてトライアルが行われ実施に関する問題点等の検証が行われている。今回の「歯学教育認証制度等の実施に関する調査研究 事業成果報告会」はまさに本格実施直前の最終報告会として行われたものであり、歯科大学学長・学部長会議の常設委員会と専門委員会との意見交換を図り、その経過報告が行われた。

14. 教員の「教育業績評価」の実施

昨年の歯学部 FD 委員会で試行された教育業績評価について、平成 28 年度第 4 回歯学部 FD 講習会においてその概要と利用方法について説明した。

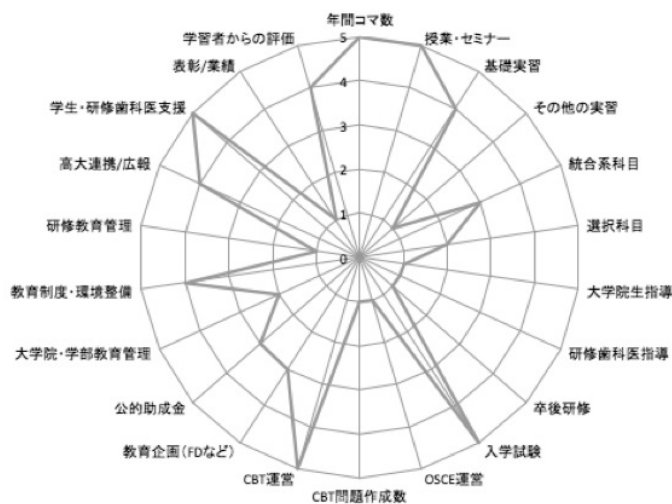
歯学部 FD 委員会では、教員の教育活動をできるだけ適正に評価することを目的に、評価方法の開発を検討してきた。今回は昨年に引き続き、日本医学教育学会業績評価委員会が発表した「教育業績評価シート」のサンプルをベースに、鹿児島大学歯学部版評価シート(図 1)を用いてレーダーチャートとして示す(図 2) ことにより教育業績評価を進めていくこととした。

現時点でこの「教育業績評価」はあくまでも自己評価であり、一昨年の教育業績評価と比較して各自の教育業績を自省するものであり、その効果や改善についてはこれから必要である。また、教員は大学院医歯学総合研究科の方からも同様の個人業績評価の提出が求められており、今後、他の業績評価との位置付けを考える必要があると思われる。

鹿児島大学歯学部 教育業績評価シート		
所属・職位など		
所属	歯科機能形態学分野	①所属と氏名を記入して下さい
氏名	後藤哲哉	
番号	職位	
1	教授	
2	准教授	
3	講師	②それぞれ選択して下さい
4	助教	
右を印をクリックして選択	教授	
選択番号	1	
評価項目		
学部教育		
評価段階	授業・セミナーの年間コマ数(1コマ=90分)	
5	30～ コマ	1/22
4	15～29コマ	
3	5～14コマ	
2	1～4コマ	
1	0コマ	
右を印をクリックして選択	30～ コマ	
評価点	5	
評価段階	授業・セミナー(総合系科目、選択科目以外)	
5	授業・セミナー全体の企画に関与し、授業・セミナーを主導的におこなった。	2/22
4	授業・セミナー全体の企画に関与し、授業・セミナーの一部を担当した。	
3	授業・セミナー全体の企画に協力した。	
2	授業・セミナーの補助をおこなった。	
1	ほとんど、あるいは全く関与していない。	
右を印をクリックして選択	授業・セミナー全体の企画に関与し、授業・セミナーを主導的におこなった。	
評価点	5	
評価段階	基礎実習	
5	実習全体の企画立案に主導的役割を担った(実習責任者等)。	3/22
4	実習全体の指導・評価をおこなった。	
3	実習の現場における指導をおこなった。	
2	実習補助をおこなった。	
1	ほとんど、あるいは全く関与していない。	
右を印をクリックして選択	実習全体の指導・評価をおこなった。	

図 1. 歯学部 教育業績評価シートの一部

図 2. レーダーチャートの例



15. 特筆すべき事項と改善例

歯学部 の FD 活動 において 特筆 すべき 事項 は、本 年度 も 8 回 の 講演 会 を 行い、その いく ずれ も 高 い 出席 率 を 得 ている ところ である。歯 学部 は 臨床 系 の 教員 を 含む ため、FD 講演 会 は 基本 的 に 臨床 業務 の 後 の 17 : 00 以降 に 始 まり、19 : 00 頃 に 終了 する こと が 多く、参加 者 には 多大 な 負担 を かけ ている が、参加 率 の 高 さ は、FD 講演 会 が 歯 学部 教員 にと っ て 有意 義 な もの と 理解 され て おり、各 教員 の FD 対 する 意識 の 高 さ を 示 して いる。本 年度、い ずれ かの FD 講演 会 に 参加 した 教員 の 割合 は 92.7% に も 達 して いる こと は FD 活動 として は 機能 して いる もの と 思 われる。

歯 学部 FD 委員 会 で 企画 して いる FD 活動 は、主 に 大き く 4 つ に 分か れ、共 用 試験 実施 機構 が 実施 する CBT の 作問 に関 する もの、歯 学 教育 認 証 評価 に関 する もの、研 究 マインド の 育成 に関 する 研 究 費 獲得 に 関 する もの、お よ び 授 業 評価、教 育 実 践 評価 である。CBT の 作問 につ いて は 毎 年 共 用 試験 実施 機構 に よ り 作問 の うち の 採 択 率 が 示 され、歯 学 認 証 評価 は 本 格 実施 を 前 に 準備 段階 に あり。本 年度 より 歯 学部 は 学生 の 研 究 マインド の 醸 成 を 目的 と した 研 究 実 践（研 究 室 配 属）を 実施 して おり、その 実施 の ため に は 各 研 究 室 の アク ティビ ティ の 向上 が 必要 であり、科 研 獲得 は 間 接 的 では ある が 学生 の 配 属 研 究 に は 不可 欠 である。FD 活動 は 歯 学部 の 科 研 費 獲得 に 貢 献 して おり、平 成 28 年度、29 年度 に かけ て 採 択 率 の 上 昇 が 見 られた。

授 業 評価 につ いて は、そ れ ぞ れ の 科目 の 評価 として 使 う だけ で なく、現 在、旧 カリキュラム から 新 カリキュラム へ の 移行 が 進 め られ て おり、新 た に 導入 され た 科目 の 評価 として も 効果 を 発 揮 して いる。一 部 の 新規 導入 科目 は 学生 の 意見 を 反映 して 実施 内容 や 実施 方法 につ いて の 変更 を 行 った。昨 年度 より PDCA サイクル の 構築 を 目的 と して、学生 の 授 業 評価 後 の「授 業 改善 シート」の 提出 と「教員 の『教 育 業 績 評価』の 実施」を 行 った。今 後 は、実 際 ど の よう な 授 業 改善 が 行 わ れ た か 検 証 も 必要 である。

一 方、ま だ 活動 が 普及 して いない FD 活動 として「授 業 公開・授 業 参 観 に よ る 教員 相 互 の 評価」が ある。この 問題 は、こ こ 数年 改善 され て おらず、対 策 が 進 ん で いない の で 平 成 29 年度 は 重要 課 題 と いた した い。

こ の よう に、歯 学部 FD 活動 は、教 育 改革 の 意識 の 高 い 教員 の 協 力 の もと に 多 方 面 で 教 育 改善 の 成果 を 得 ている。今 後 は、教員 の ニーズ に も 応 える べ く、例 え ば、アク ティブ ラー ニング に 関 する FD 研 究 会 等 も 企画 し、よ り 学生 に 反映 する よう な FD 活動 を 進 め て い きたい。

工学部

平成28年度 鹿児島大学工学部FD委員会活動報告書

はじめに

各大学は、個々の教員の教育内容・方法の改善のため、全学的にあるいは学部・学科全体で、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）の実施に努めるものとする旨の提言が「21世紀の大学像と今後の改革方策について」（平成10年10月26日大学審議会答申）においてなされた。それを受けて、平成11年9月14日より大学設置基準において努力義務が規定された。工学部においても、FD委員会は、個々の教員が限られた時間の中で行う教育効果の改善の試みを支援し、学部教育全体の質を向上させるための活動を継続的に実施している。

本報告書は、平成28年度の活動報告である。委員と学生係職員が協力して作成した。評価アンケートのデータ処理等は学科事務支援室の皆さんに作業していただいた。これらさまざまな協力に感謝を申し上げます。本報告書を読んでいただき、FD委員会自体の改善のために委員会活動に関する忌憚のない意見をお寄せいただければ幸いです。なお、工学部FD報告書の詳細版は工学部ホームページで公開している。

平成28年度鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 甲斐 敬美

平成28年度 鹿児島大学工学部ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	甲斐 敬美	（工学部副学部長，全学FD委員会委員	H27.4.1 ～ H29.3.31）
委員	余 永	（機械工学科委員，専門委員会委員	H27.4.1 ～ H29.3.31）
委員	前島 圭剛	（電気電子工学科委員，専門委員会委員	H28.4.1 ～ H30.3.31）
委員	澤田樹一郎	（建築学科委員，専門委員会委員	H27.4.1 ～ H29.3.31）
委員	二井 晋	（環境化学プロセス工学科委員，専門委員会委員	H28.4.1 ～ H30.3.31）
委員	柿沼 太郎	（海洋土木工学科委員，専門委員会委員	H27.4.1 ～ H29.3.31）
委員	湊田 孝康	（情報生体システム工学科委員，専門委員会委員	H28.4.1 ～ H30.3.31）
委員	吉留 俊史	（化学生命工学科委員，専門委員会委員	H27.4.1 ～ H29.3.31）
事務	坂口 智子	（工学系学務課課長	H26.4.1 ～ ）
事務	川崎さおり	（工学系学務課学生係長	H27.4.1 ～ ）

第1章 鹿児島大学の中期目標と工学部のFD活動

鹿児島大学の中期計画には、『進取の精神』（時代を先取りし、物事に果敢に挑戦する気風）を有する人材を育成するために、FD活動等を充実し、教員の教育力向上に向けた取り組みを展開する」と定められており、充実したFD活動の実施を求められている。工学部FD委員会では平成28年度もこの中期計画に沿って活動を行った。工学部では、全7学科の教育が日本技術者教育認定機構(JABEE)の認定プログラム教育、あるいはJABEEに準拠した教育を行っている。これまで継続的に実施してきた授業アンケートによる授業改善などのFD活動は、JABEEの求める教育改善のためのPDCAサイクルに取り込まれた形で実施されている。平成28年度の第1回工学部FD委員会において、年度内に次の活動を実施することが決定された。1) 授業アンケートの実施と授業計画改善書の作成、2) 授業公開と授業参観の実施、3) FD講演会の実施、4) 学外FD研修会への学部教員の派遣、5) 授業評価アンケートの分析、6) 報告書の作成。

第2章 工学部FD講演会および鹿児島大学FDワークショップ

2.1 工学部FD講演会

平成28年度の第1回の工学部FD講演会は、稲盛会館にて平成28年10月17日(月)14:30から16:00まで、千葉大学工学部共生応用化学科教授の斎藤恭一先生に講演をしていただいた。講演題目は「ベスト・ティーチャーになる方法」である。講演会への参加者は、87名(工学部教員:74名,他学部教員:7名,事務・技術職員:6名)であった。講演では千葉大学工学部でのベスト・ティーチャー賞の設定と廃止の顛末を紹介していただいた後、「教育力」をつける方法についてお話をうかがった。それは、他人の講義を聴いて学ぶこと(つまり感動する講義の特徴を把握すること)、教える技術を身につけること(時間(間)と空間(黒板)を制御すること)および大学から出て教えてみるということ(学生は我慢して聴いていると気づく)であった。それぞれについて具体的な説明がなされた。また、大学の製品は授業であることを強調されていた。つまり、大学にとっては、よい授業をする熱意のある先生をもっていることが最重要事項である。

2回目の工学部FD講演会は、機械工学科13号教室において、平成28年12月6日(火)16:10から17:40まで、岡山大学 理事・副学長(大学改革担当)の谷口秀夫先生に講演をしていただいた。講演題目は、「大学改革の現状と将来」で、講演会への参加者は60名(理事1名,工学部教職員45名,他学部教員6名,事務職員8名)であった。講演ではミッション再定義の確認から始まり、大学改革プランの位置づけ、国立大学改革強化推進補助金へと話は及んだ。また、入試制度の改革も求められているが、高大接続システムの改革についての全体的イメージを明確にした上で選抜方法の改革を考える必要性についても述べられた。最後に、第3期中期目標・中期計画と戦略について、岡山大学でのこれまでの取り組みおよびその成果について紹介されるとともに、今後の大学改革についての課題も示された。また、現在、岡山大学で進行中の全学60分授業・4学期制の状況についても紹介いただいた。自分たちの大学の立ち位置を知ること、改革の方向を明確にすることの重要性が強調された。

また、理工学研究科、理学部との共同開催で平成 28 年 10 月 13 日（木）13 時 30 分より 15 時 30 分まで、理工系総合研究棟プレゼンテーションルームで講演会を開催した。講師は九州大学教授原田恒司先生で、「理系（専門）科目でのアクティブ・ラーニング～失敗なんか怖くない～」と題して講演をしていただいた。講演会への参加者は、教員 45 名（理系：12 名，工系：32 名，他学部 1 名），事務・技術職員 16 名と学生 4 名の合計 65 名であった。原田恒司先生の講演に関しては、平成 28 年度理工学研究科 FD 報告書に掲載されているので、詳細はそちらを参照されたい。

2. 2 新任教員 FD 研修会

新任教員 FD 研修会が、平成 28 年 9 月 6 日（火）13:30～16:30 に郡元キャンパスの学習交流プラザで開催された。これは鹿児島大学 FD 委員会主催の研修会で、テーマは「アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実践方法」であった。参加者は、本学に平成 27 年 7 月 2 日～平成 28 年 7 月 1 日に採用された新任教員であり、工学部からは 6 人の新任教員が参加した。参加者は平成 28 年度から開講されている「初年次セミナー I」を事例とし、グループ・ディスカッション等を通じて、大学教育の質的転換に大きく関わる「アクティブ・ラーニング」の教育手法を考察し、本学が目指す教育理念の理解を深めた。工学部の参加者からは、以下の感想が届いた。

①小金丸 正明（機械工学科） 自身が教員になりたてであり、アクティブ・ラーニングの方法論を学べ、大変参考になった。グループ・ディスカッションでは他学部の先生と議論することができ、学生の学習意欲を高めるために学部ごと（理系と文系，理系でも理工と医歯等）に異なる課題があることが分かり興味深かった。共通教育は重要であるが、なるべく早い時期に専門教育（特に、学部や学科特有の実験や実習）に触れさせることが重要であると感じた。

②田淵 大介（機械工学科） 所属も経歴も異なる先生方とともにアクティブ・ラーニングの進め方についての討論を行うなかで、授業に関する様々な経験談や方法論を聞くことができ、非常にためになった。特に、授業において学生を一個人として認識することの重要性をあらためて確認することができた。今回の経験を今後の教育研究活動に活かし、主体的に行動できる学生を育てられるよう努力していきたい。

③渡邊 俊夫（電気電子工学科） 今回の研修会に参加して、学生の能動的な学習を促すために、授業をどのようにデザインするのが有効であるかを考える契機となった。また、今年度の初年次セミナーの実際の授業の様子や、医学部や歯学部，農学部など他学部での教育の状況についても直接に話を聞くことができ有意義であった。これらの知見を今後の授業に生かしていきたい。

④永山 務（電気電子工学科） これまで馴染みの無いアクティブ・ラーニング形式の授業について学んだ。私は講義を聞いてノートに取る従来形式の授業も正しい専門知識を学ばせるためには必要であると考えています。しかし、それだけでは学生の主体性が育ちにくく、他の学生との意見交換や知識を共有する機会もないので、研修を通して、アクティブ・ラーニング形式と従来形式の授業を組み合わせれば、より多くの学生が育つ良い授業にできるのではないかと思います。

⑤朴 光賢（建築学科） 他学科の先生方とアクティブ・ラーニングについて、特にその目的と方法について議論できたことは大変有益だった。アクティブ・ラーニングこそ本来あるべき教育の姿ではないかという点でグループの皆さんの意見が一致した。建築学科では設計授業において学生が描いてきた図面を基に学生と教員が話し合う「エスキス（図面チェック）」があり、まさにそこで互いがアクティブにラーニングできると改めて思い、その重要性を痛感した。

⑥新地 浩之（化学生命工学科） 効果的なアクティブ・ラーニングを行うために重要なことは何かを、分野の異なるメンバーで話し合い、理解を深め合った。これからの大学教育では、学生が主体的に講義に取り組むことがますます重要になってくるので、アクティブ・ラーニングを取り入れた講義の進め方について議論することができ大変有益であった。この経験を今後の教育研究活動に活かしたい。

2. 3 学外 FD 研修

平成 28 年 7 月 1 日に建築会館で開催された「2016 年度 JABEE 建築学・建築工学及び関連のエンジニアリング分野審査講習会」に参加した。JABEE の基本方針や認定基準の考え方、認定・審査の手順と方法、自己点検書の作成方法などについて受講し、審査側の視点や他の参加校の対応状況を知ることができた。また、従来のエンジニアリング系学士課程（WA 対応）の認定から修士課程を含む建築系学士修士課程（UIA/CA 対応）の認定へと移行した国内 5 大学のうち、武庫川女子大学と明治大学の担当者から国際的通用性の観点からみた意義や実務的な課題について報告があった。来年度予定されている継続審査の受審のみならず、今後の建築学科の中長期的な方向性を検討するに際しても有用な情報を得ることができた。（小山雄資，建築学科）

第 3 章 学生による授業評価とそれを生かした授業

3. 1 学部授業評価アンケート分析結果

3. 1. 1 学部平均値の推移とその分析結果

図 3.1.1(1)は、講義・演習科目の授業評価アンケート結果の工学部全体の平均値に関して、平成 26～28 年度までの 3 年分の授業評価の推移を示している。なお、「工学部平均値」は、まず各設問に対する講義・演習科目の評点を学科毎に平均した後、学科ごとの科目数で重みづけて平均化して得られた値であり、学科ごとの科目数の違いが考慮されている。

講義・演習科目に関するアンケートの質問項目は、①シラバスの内容と実際の授業との一致性、②授業の今後の有用性、③授業の興味深さ、④授業の理解度、⑤教材等の適切性、⑥レポート等の理解への効果度、⑦授業目標の達成感、⑧文字の明瞭性、⑨声の明瞭さ、⑩教員の熱意度、⑪質問等に対する教員の対応度、⑫レポート等の評価への満足度、⑬出席回数、⑭予習・復習の時間数、⑮総合的満足度である。

図 3.1.1(1)より、平成 28 年度は、平成 26、27 年度に比べ、ほとんどの項目において評価が向上あるいはほぼ横ばいであることが見て取れる。②役立つ、③興味、④理解、⑤教材、⑮満足度については平成 27 年度より若干評価が下がっているが、平成 26 年度と比較するとほぼ同じかやや上がっており、全体的には横ばいであると考えられる。また、⑭予習・復習については、他の項目よりも低くなっており、改善の余地があるが、この 3 年間では徐々に向上している。⑩教員の対応、⑫返却も、相対的にやや低い評価になっている。これは、質問の量、オフィスアワーの利用の有無、レポートの有無によっても学生の評価基準が各講義で均一でないため評価は難しいが、質問のしやすい雰囲気づくりや電子メールの活用などの工夫が必要であると思われる。

次に、平成 26～28 年度の実験系科目に関する授業アンケート結果を図 3.1.1(2)に示す。実験系科目についても講義・演習科目と同様に科目数で重みづけして平均を算出している。実験科目は数が少ないため、昨年までと比較すると違いが目立つかもしれない。

実験系科目の質問項目は、①シラバスの内容と実際の実験との一致性、②実験グループの人数の適切さ、③実験装置の適切さ、④実験時間の適切さ、⑤教材の理解への貢献、⑥講義との関連、⑦理解度、⑧目標達成、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑪安全教育の実施、⑫TA の熱意、⑬予習の度合い、⑭主体的に実験に取り組めたか、⑮総合的満足度である。

図 3.1.1(2)より、例年とほぼ同様な傾向が見られる。⑬予習については、全項目の中で比較的低い評価となっており、平成 26 年度から徐々に低下してきていたが、平成 28 年度では向上した。予習して実験に望む習慣を付けるための指導が良かったと思われる。

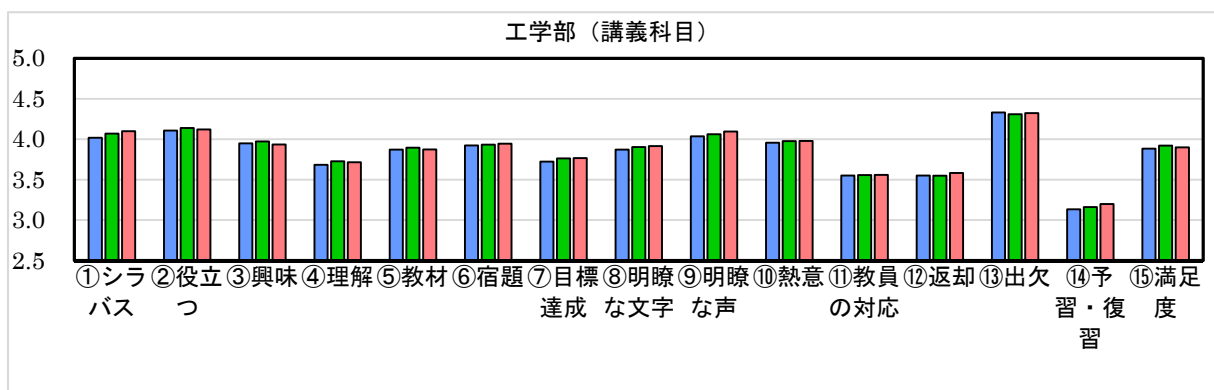


図 3.1.1(1) 講義・演習科目の結果（工学部全体の平均）（平成 26～28 年度）

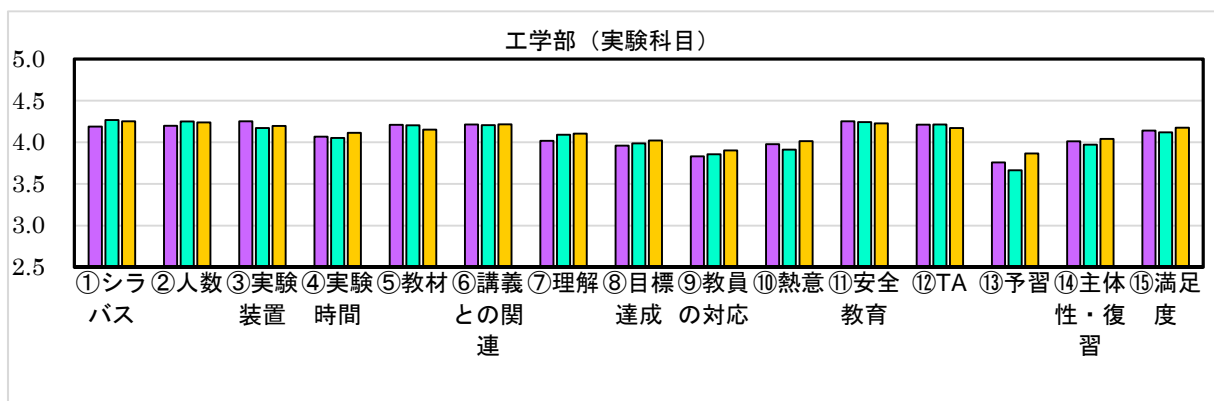


図 3.1.1(2) 実験系科目の結果（工学部全体の平均）（平成 26～28 年度）

3. 1. 2 機械工学科の推移とその分析結果

機械工学科の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの評価結果を図 3.1.2(1)に示す。この図は、前期及び後期（1年間）に開講された科目に対する各アンケート項目の評点の平均点について、平成 26 年度から平成 28 年度(3 年間)までの評点の推移を示している。

図3.1.2(1)から、「⑬出欠」が高い評点を維持しながら平成26年度から少しの低下が見られるが、その以外のほぼ全ての項目の評点は、平成26年度から平成28年度にかけて全体的に右上がりの増加傾向を示している。その以外、「⑪教員の対応」と「⑭予習・復習」の評点は平成26年度からあまり変化がなく横ばいになる傾向を続けると見受けられる。これらは、各教員による継続的な授業改善の成果であると判断できる。今後も授業評価アンケートの推移を確認しながら授業改善を継続することが重要である。

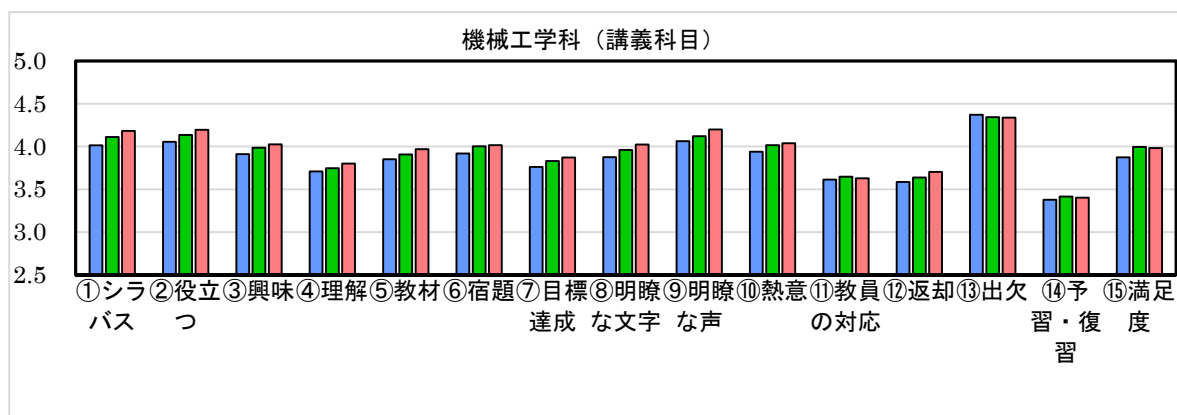


図 3.1.2(1) 過去 3 年間の開講科目における評価点の推移（平成 26～28 年度）

一方、平成 28 年度開講科目の評価点の平均値、最高点及び最低点を表 3.1.2 と図 3.1.2(2)に示す。これらの表及び図から、ほとんどのアンケート項目の最大値は 4.2～5.0 の範囲、平均値は 3.4～4.2 の範囲にあり、高い評価であることが分かる。また、昨年度の平均点と比較して本年度は平均点が向上しており、各教員が授業内容等の改善や学生に勉強する時間を確保させる工夫を行い努力していると判断される。なお、「①シラバス」、「④理解」、「⑧明瞭な文字」、「⑬出欠」と「⑭予習・復習」については、最高点と最低点の差が大きい。今後も、平均点より大幅に低い科目の担当教員には、その事実を認識してもらい、授業改善を積極的に実施し、努力してもらう必要がある。

項目	②	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
平均値	4.18	4.19 5	4.02 5	3.8	3.96 5	4.01 5	3.87	4.01 5	4.19 5	4.03	3.63	3.70 5	4.34	3.41	3.98
最高点	4.53	4.45	4.45	4.22	4.34	4.34	4.22	4.32	4.45	4.34	3.86	4.21	5.00	4.49	4.35
最低点	3.00	3.64	3.49	2.87	3.18	3.20	3.53	2.36	3.40	2.89	3.06	3.02	3.50	2.41	3.23
昨年度の平均	4.11	4.14	3.99	3.75	3.91	4.01	3.83	3.96	4.12	4.02	3.65	3.64	4.35	3.42	4.00

表 3.1.2 平成 28 年度開講科目における評価点のばらつき

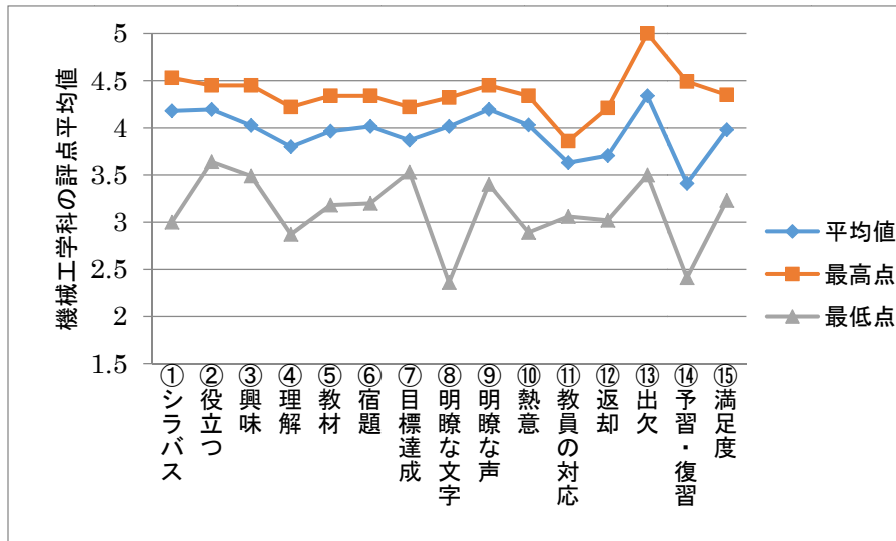


図 3.1.2(2) 平成 28 年度開講科目における評価点のばらつき

3. 1. 3 電気電子工学科の推移とその分析結果

図 3. 1. 3(1)および図 3. 1. 3(2)に、電気電子工学科の過去 3 年分（平成 26 年度から 28 年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す。図 3.1.3(1)が講義科目を、図 3.1.3(2)が実験科目を示している。講義科目ではほぼ全ての項目で、過去 3 年間顕著な変化は見られず、ここでは細かい変化について考察する。教員への直接の評価に関する項目⑧明瞭な文字、⑨明瞭な声、⑩熱意、⑪教員の対応などの評価は横ばいか上向きの変化である。それに対して学生の学習の成果に関する項目④理解、⑦目標達成、⑭予習・復習などは低下傾向であったり、低調である。これらは③興味が低下傾向であることと関連している可能性がある。別のアンケートで将来の目標について明確な学生と明確でない学生の二極化の傾向が指摘されており、このような傾向と一致している可能性がある。学生の興味を引き出し、学業の目的を明確化して、全体的に評価を伸ばしていくことが重要と思われる。実験科目についてはおおむね高い評価が得られており、昨年度一時的に低下しているが持ち直しており、今後も高い評価が得られるように改善を続けていく。

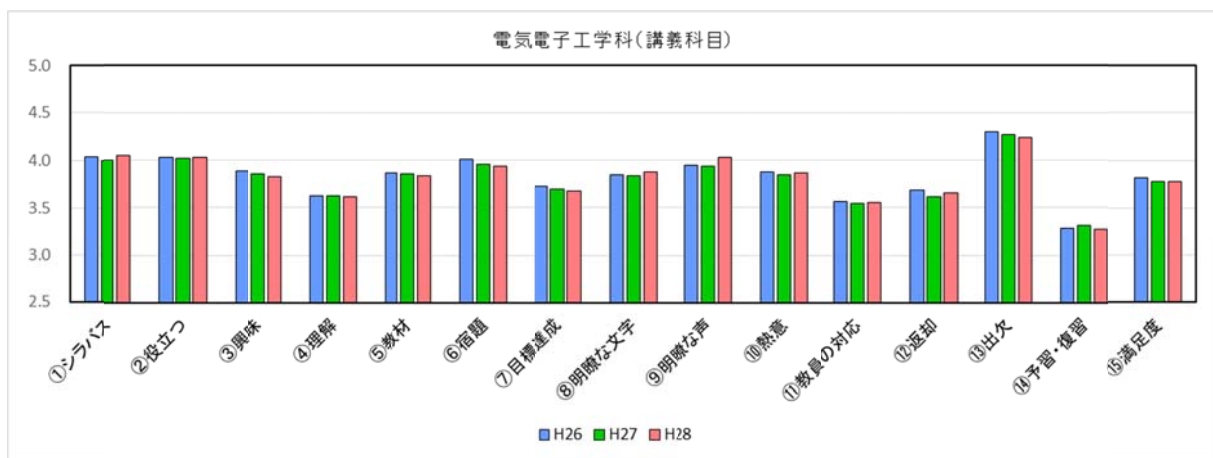


図 3.1.3(1) 電気電子工学科講義科目の授業評価アンケート結果の推移（平成 26～28 年度）

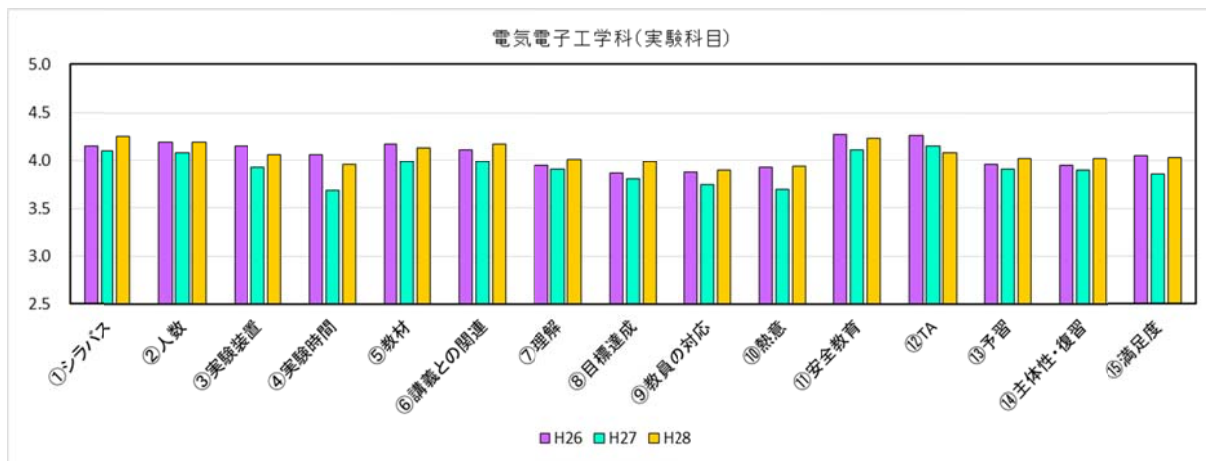


図 3.1.3(2) 電気電子工学科実験科目の授業評価アンケート結果の推移 (平成 26~28 年度)

3. 1. 4 建築学科の推移とその分析結果

前年度報告と同様に、建築学科では、建築設計演習の科目が全学年にあり、講義形態は、講義とも実験とも異なるが、アンケートでは、これを講義科目に含めている。また、実験科目は、1科目だけで比較しにくいので、講義科目についての授業アンケート結果を分析することとする。図 3.1.4 は、建築学科の講義科目の授業評価アンケート（前期および後期）で過去 3 年間の年度ごとの結果を示している。⑫返却、⑭予習・復習を除き、評点が 4 前後の高い水準を推移している。項目によっては、若干の漸減傾向を示しているが、大きな低下ではなく問題ではない。⑫の返却については、教員側の改善が望まれる。⑭予習・復習については、前年度および前々年度報告においても設計演習科目がその他科目に比べて非常に高く、科目間における自習時間のかたよりの問題が指摘されており、これに対する工夫・調整が望まれる。

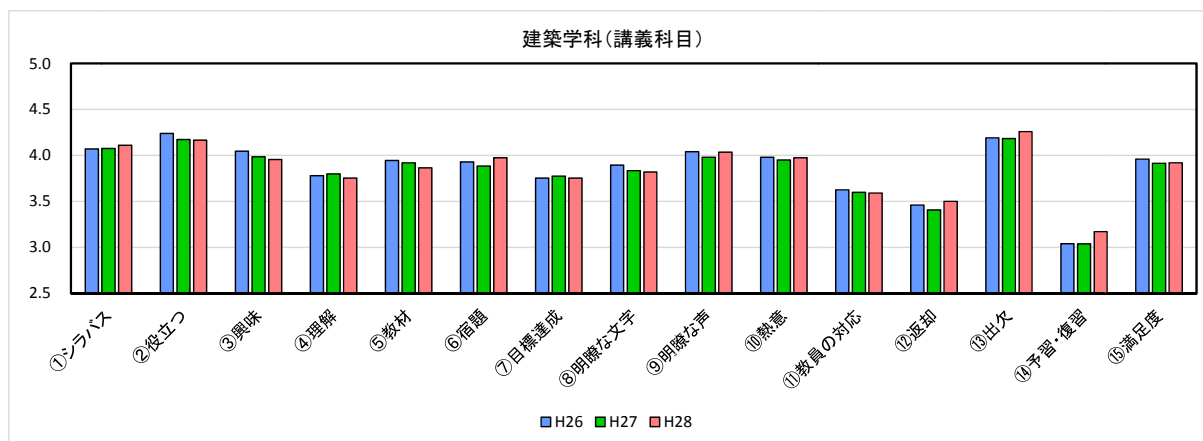


図 3.1.4 建築学科の講義科目の授業評価アンケート（講義科目）の結果（平成 26~28 年度）

3. 1. 5 環境化学プロセス工学科の推移とその分析結果

最近 3 年間（平成 26~28 年度）の講義科目と実験科目の授業評価アンケート結果を図 3.1.5(1) と(2)にそれぞれ示す。新カリキュラムへの移行途中であり、教員側の取り組みに関する項目であ

る、①シラバス、⑤教材、⑧⑨明瞭な文字と声、⑩熱意について年次的に向上している。学生が感じている⑪教員の対応は工学部とほぼ同じで、満足度は工学部全体を上回っている。例年問題となっている、予習復習に関しては工学部平均を大きく下回っている。講義の予習に取り組む学生が少ないことは感じられるが、復習は実態を反映しているか疑問がある。宿題に取り組むには復習が必要なはずであり、学生は回答する際に復習と宿題を別にとらえていると思われる。実験科目では予習が重要であるが工学部平均を下回っている。⑫TAの対応は、工学部平均を大きく上回っており、TAによる支援によって高い満足を感じているようである。講義に関しては学生自身が、復習をしている、という意識を感じられるような方策が必要で、実験に関しては主体的な予習を求めるように改善すべきである。

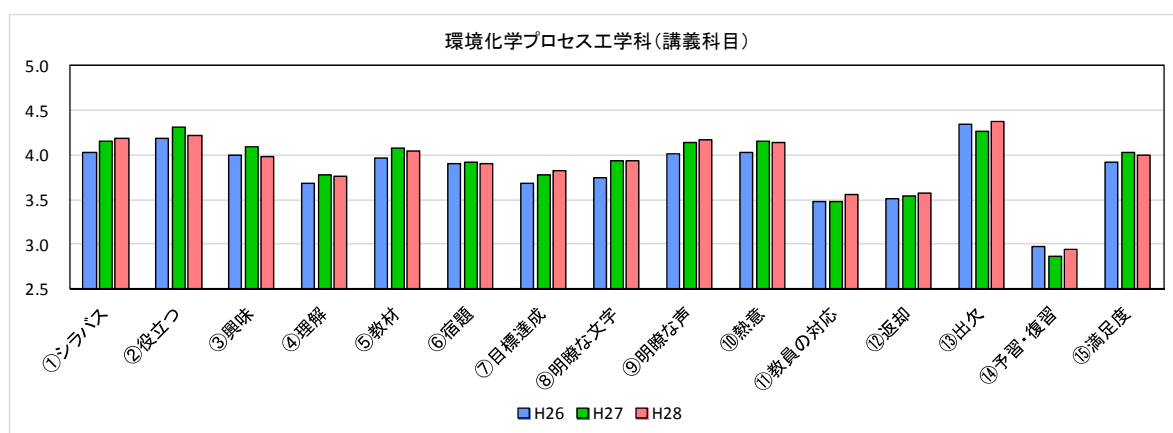


図 3.1.5(1) 環境化学プロセス工学科における講義科目アンケート結果(平成 26～28 年度)

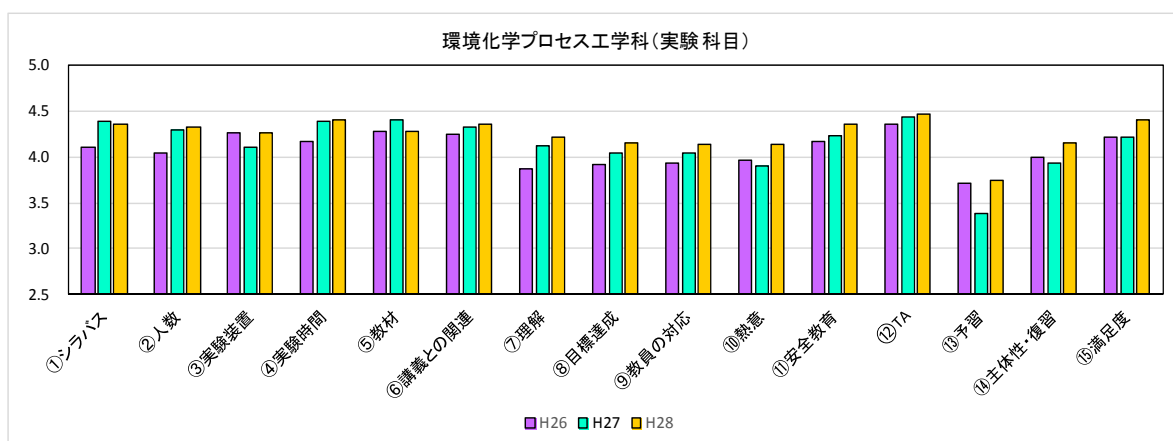


図 3.1.5(2) 環境化学プロセス工学科における実験科目アンケート結果(平成 26～28 年度)

3. 1. 6 海洋土木工学科の推移とその分析結果

海洋土木工学科において、平成 26～28 年度の 3 年間に実施した、講義・演習科目の授業評価アンケートの結果を図 3.1.6(1) に示す。本学科における平成 28 年度の評価は、いずれの項目に対しても、工学部の平均値を上回った。また、①シラバスの内容と実際の授業との一致性、⑥レポー

ト等の理解への効果度，⑨声の明瞭さ，そして，⑭予習・復習の時間数の4項目の評価は，徐々に増加しており，特筆に値するであろう。ただし，平成28年度の⑭予習・復習の時間数の評価は，工学部の平均値より約0.1高いものの，他の項目と比較して大きく下回っている。講義内容やその周辺領域に対して，より大きな関心を学生に持たせるといった，更なる改善が要求される。

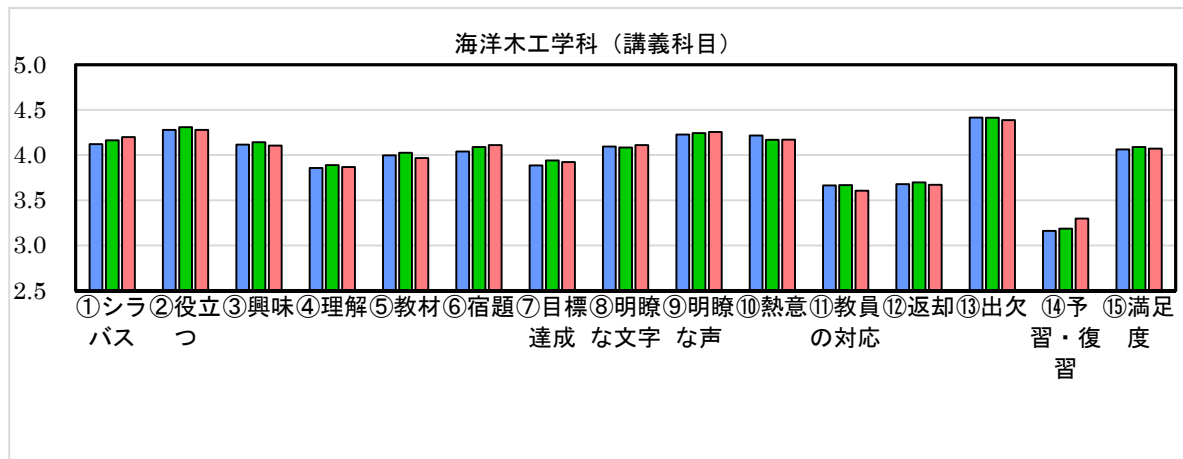


図 3.1.6(1) 海洋土木工学学科の講義・演習科目のアンケート結果 (平成26~28年度)

また，海洋土木工学学科において，平成26~28年度の3年間に実施した，実験系科目の授業評価アンケートの結果を図3.1.6(2)に示す。ここで，アンケートの実施科目数は，4科目であった。本学科における平成28年度の評価は，いずれの項目に対しても，工学部の平均値を上回った。しかしながら，本学科において，平成28年度の評価は，⑦理解度，⑧目標達成，⑨教員の対応，そして，⑮総合的満足度の4項目を除く11項目に対して，この3年間で最も低い値を示している。特に，③実験装置の適切さと，⑫TAの熱意は，評価が徐々に低下しており，注意する必要がある。

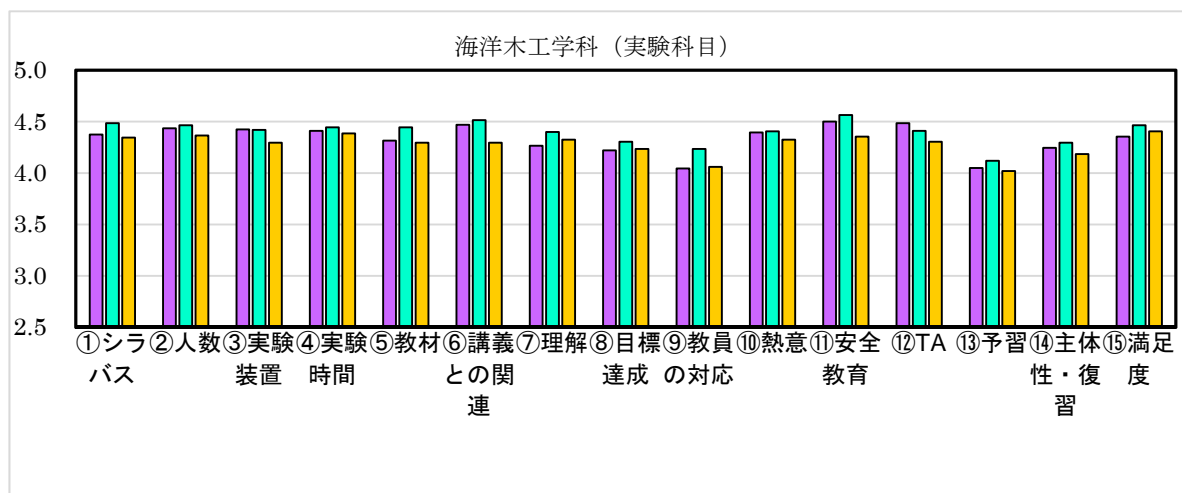


図 3.1.6(2) 海洋土木工学学科の実験系科目のアンケート結果 (平成26~28年度)

3. 1. 7 情報生体システム工学科の推移とその分析結果

平成 21 年度の改組により情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合されて誕生した情報生体システム工学科が、卒業生を送り出したのは今年度で 5 回目となる。FD 授業評価アンケートは、平成 21～28 年度の 8 年間収集されており、これらのデータから経年変化の分析（平成 26～28 年度）と今年度の工学部平均値との比較分析を行うこととする。

講義系科目に関するアンケートの質問項目は、①シラバスの内容と実際の授業との一致性、②授業の今後の有用性、③授業の興味深さ、④授業の理解度、⑤教材等の適切性、⑥レポート等の理解への効果度、⑦授業目標の達成感、⑧文字の明瞭性、⑨声の明瞭さ、⑩教員の熱意度、⑪質問等に対する教員の対応度、⑫レポート等の評価への満足度、⑬出席回数、⑭予習・復習の時間数、⑮総合的満足度であった。

講義系科目の集計結果を図 3.1.7(1)に示す。数値的には、「⑪教員の対応」、「⑫レポート等の評価への満足度」、「⑭予習・復習の時間数」を除く項目の評価は 3.5 を超えており、ほぼ満足できる水準である。また、今年度の「⑭予習・復習の時間数」の評価は、昨年度と同様に 3.0 に達し、改善が保持されたものと考えられる。しかし、「⑪質問等に対する教員の対応」と「⑫レポート等の評価への満足度」を除くすべての項目について昨年度よりも点数が下がっている。この点は次年度以降に改善する余地があると考えられる。また、今年度の工学部平均値と比較すると、「⑬出席回数」を除く科目で工学部平均より 0.13 から 0.27 ポイント低くなっている。この点も次年度以降改善が必要な点である。

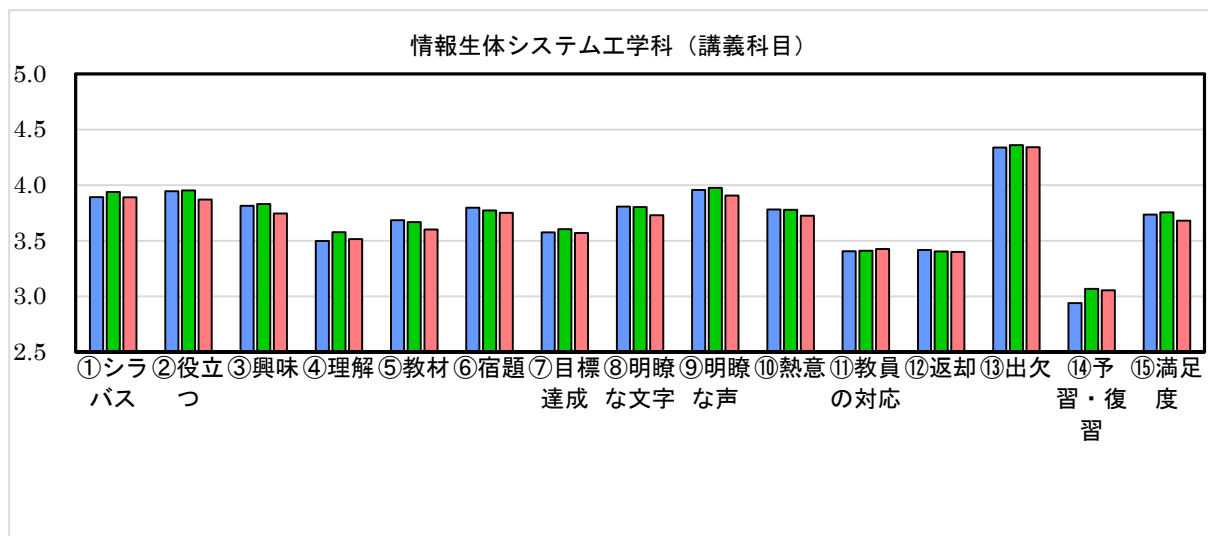


図 3.1.7(1) 情報生体システム工学科の講義科目授業評価アンケート結果の推移 (H26～28)

実験系科目の質問項目は、①シラバスの内容と実際の実験との一致性、②実験グループの人数の適切さ、③実験装置の適切さ、④実験時間の適切さ、⑤教材の理解への貢献、⑥講義との関連、⑦理解度、⑧目標達成、⑨教員の対応、⑩教員の熱意、⑪安全教育の実施、⑫TAの熱意、⑬予習の度合い、⑭主体的に実験に取り組めたか、⑮総合的満足度であった。

実験系科目の集計結果を図 3.1.7(2)に示す。

今年度の評価は、すべての項目について 3.5 以上であり満足できる水準である。また、実験テーマによってアクティブラーニングの要素を取り入れた動画教材を準備したものがあり、その結果として「⑬予習の度合い」、「⑨教員の対応」および「⑭主体的に実験に取り組めたか」の項目が昨年度と比較して大きく向上した。一方で、昨年度大きく向上した「⑫TA の熱意」が下がってしまった。TA は毎年変わるため前の年度の教育を受け継げないことから、毎年の TA 教育と指導が必要である。また、今年度の工学部平均値と比較すると、講義系科目と同様に評価が低く、すべての項目について学部平均を下回っており、改善の余地があると考えられる。

以上のように、講義系科目及び実験科目のアンケート結果の推移及び分析から、情報生体システム工学科での授業は、アンケート点数の評価としては今年度も昨年度と同様に、教員及び TA の努力により十分な水準を保っていることが分かった。しかしながら、全体的に前年よりも評価が下がっており、また工学部平均と比較して低い評価となっていることから、来年以降も工学部平均値に近づけるように改善が必要である。

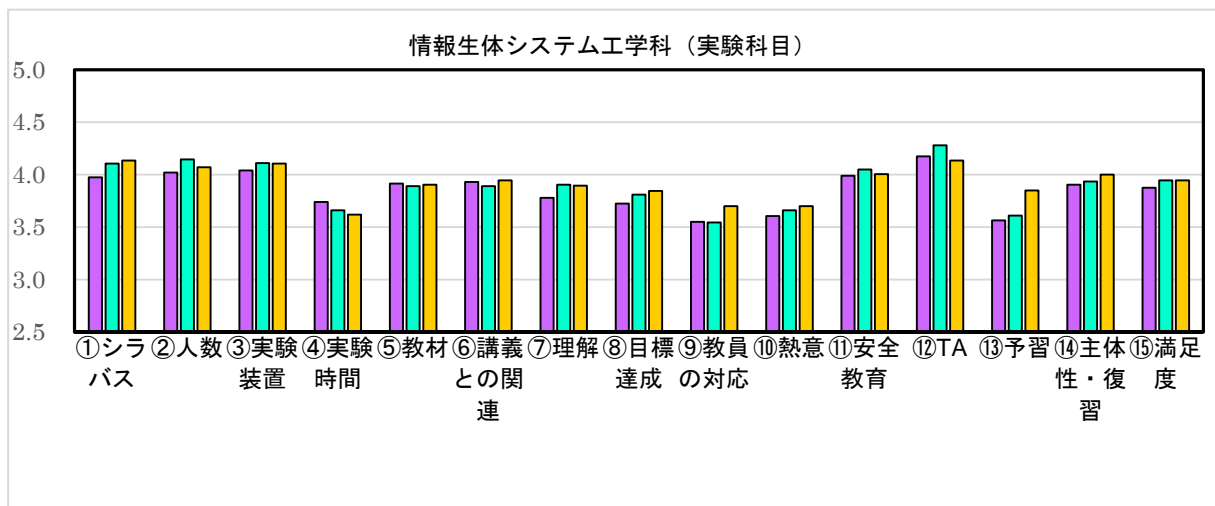


図 3.1.7(2) 情報生体システム工学科の実験科目授業評価アンケート結果の推移 (H26~28)

3. 1. 8 化学生命工学科の推移とその分析結果

平成 28 年度のアンケート集計結果を平成 26~27 年度分と合わせて図 3.1.8 に示す。図を見ると、項目④、⑦、⑪、⑫、⑭を除き評価は概ね 4 前後となっており、工学部・他学科と比較しても遜色のない結果であった。評価の低い項目の内、まず項目⑭“予習・復習”の評点 2.89 は工学部 3.21 より低いものの他の項目と比較して大きな上昇傾向にあり、特に 28 年度は大きく上昇した。教員の意識改革が進んでいるものと考えられ、今後に期待がもたれる。次に項目⑪“教員の対応”が低く、各教員が学生に対して十分なケアが行えていないことが示された。財政の劣悪化や諸業務の肥大化が最大の本業である教育を侵食し始めていることが危惧される。項目⑫“返却”も低い。レポート等は JABEE 用のエビデンスとして保管する教員もいると考えられ、その際、時間的・財政的にコピーする余裕がないことが一因として考えられる。

しかし今後、アンケート結果や報告書を目の当たりにし、更に教員各自が意識改革して少しでも改善がなされることを期待する。

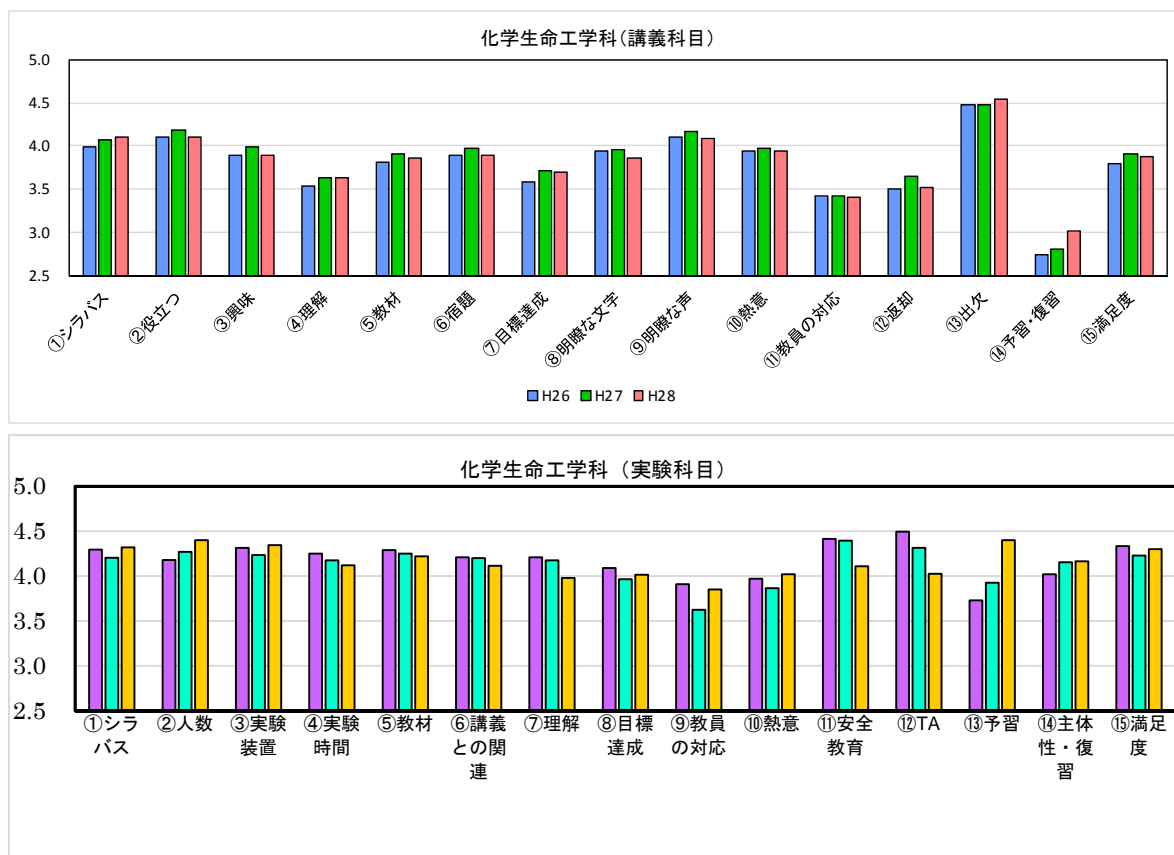


図 3.1.8 化学生命工学科におけるアンケート結果（平成 26～28 年度）

3. 2 授業計画改善書の各学科の活用状況

3. 2. 1 機械工学科の活用状況

学科のFD委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目GPAとともに専攻教育評価委員会が整理して分析を行っている。専攻教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「専攻教育評価委員会報告書」としてまとめている。授業計画改善書は、専攻内に設置されたパソコンのフォルダ内に各年度、各期ごとに整理され、全教員に閲覧できるように公開されている。また、この報告書は冊子とCD-ROMの形で保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

3. 2. 2 電気電子工学科の活用状況

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケート回答用紙（実施済みのもの）と共に学科事務室や会議室のJABEE用保管庫にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として工学部FD委員が管理し、JABEE活動の一環として、専攻（学科）FD委員会において授業改善に取り組む資料として活用している。

3. 2. 3 建築学科の活用状況

教員は、授業評価アンケートの集計結果に基づいて、授業計画改善書を作成し、次年度以降の授業に反映させることとなっている。また、授業アンケートの全科目の評点は学科内で閲覧可能であり、問題点を共有することとしている。本学科では、平成19年度より授業満足度の評点と授業担当時間を用いて、教員の教育貢献度を評価するシステムを導入している。この結果も学科内で閲覧可能にしている。

3. 2. 4 環境化学プロセス工学科の活用状況

年2回学期末に開催される学科の教員間ネットワーク会議において、FD委員会のアンケート調査より返却された前期／後期授業科目の授業改善書、ならびに次学期開講予定科目のシラバスの提示を行っている。授業計画改善書は学科内の資料室にエビデンスとして保管してきたが、今後は電子ファイル化し教員が自由に学科サーバよりダウンロードして確認できる体制を整えた。このような継続的な取り組みにより、評価の再確認と改善を図っている。

3. 2. 5 海洋土木工学科の活用状況

工学部FD委員会が学生に対して実施する、専門科目の授業アンケートの結果に基づき、授業担当教員は、授業計画改善書を作成してFD委員に提出する。FD委員は、これを学科教育システム評価委員会に提出する。また、授業担当教員は、専門科目の学習目標の達成度を自身で評価し、この結果も学科教育システム評価委員会に提出する。学科教育システム評価委員会は、提出された授業計画改善書と、学習目標の達成度評価を比較・検討し、学科会議で報告する。そして、学科会議で提起された教育上の問題点等に関して、学科内の基礎科目部会、環境システム科目部会、建設システム科目部会や、JABEE WG及び教務委員会等で検討し、改善方法を策定する。このようなPDCAサイクルを構築し、授業計画改善書と、学習目標の達成度評価の両者を活用しながら、教育の点検及び改善を継続的に実施している。

3. 2. 6 情報生体システム工学科の活用状況

情報生体システム工学科では平成22年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能な状態で管理を行っている。各教員による授業改善への取り組みおよび結果を教員全員で共有することで、学科全体の教育内容の継続的な改善に貢献している。また、改組のためにJABEE申請は再出発となったが、学科JABEE委員会の下に作られている教科グループWGにおいて、半期に1度、全開講科目について担当教員による報告と振り返りを実施し、科目の内容の見直しなどの検討の際に、資料として活用している。

3. 2. 7 化学生命工学科の活用状況

授業計画改善書は応用化学工学科応用化学コースの時代から引き続き同一の理念の下で活用を図っている。すなわち、授業計画改善書を、卒業生アンケート集計結果、授業参観報告書およびそれに対する回答書等とともに、各教員が分析、評価し、必要に応じて互いに連携する科目の担当教員グループで作るカリキュラム小委員会において、十分な教育効果が達成されているかどうか

か討論されている。検討した結果や問題に対する対策は学科内教育プログラム改善検討委員会において報告され、全体カリキュラムとの整合性も考慮しつつ、最も効率の良い方法で運用できるよう検討され、必要な改善がなされている。このように、授業計画改善書等のFD 活動書類を資料として、教員間で協力・連携そして切磋琢磨するシステムが構築され、その中で授業内容・方法の改善もなされている。平成28年度には、授業アンケート評価結果を利用して、エクセレントレクチャー賞を決定する仕組みが構築されている。

第4章 学科におけるFDとJABEEへの取り組み

4. 1 JABEE認定プログラムを実施している学科での取り組み

4. 1. 1 機械工学科

機械工学科は、平成16年度にJABEE認定の審査を受けた。平成18年度のJABEE中間審査において、平成16年度に評価Wの指摘を受けていた全ての評価項目を改善している。平成21年度実施のJABEE再審査では、評価Cを受けた項目が10箇所あり、W以下の評価を受けた項目は無く、6年間のJABEE認定継続が認められた。平成27年度実施のJABEE再審査では、評価Cを受けた項目が11箇所あったが、W以下の評価を受けた項目も無く、さらに6年間のJABEE認定継続が認められた。

本学科は、平成22年度から広範囲にわたる機械工学領域の教育研究を3つのコース（生産工学コース、エネルギー工学コース、機械システム工学コース）で分担実施している。各コースは、複数の研究室により構成され、それぞれにコース長をおいている。この3名のコース長と副専攻長から組織される「専攻教育委員会」において、学科の教育プログラムを点検していたが、平成25年度からその役割は「コース長会議」に移管された。この「コース長会議」を基に、学科の教育環境のさらなる改善と実施体制の強化が図られている。学科内には、さらに、教務委員会委員、FD委員会委員、JABEE委員会委員等からなる教育の現状を分析する委員会としての「専攻教育評価委員会」と、JABEE認定のための審査資料作成を行う「専攻JABEEワーキンググループ」があり、平成27年度にはJABEE認定の再審査を受けるため審査項目や評価項目の確認などを検討して、JABEE認定の再審査の実施を行っていた。また、平成26年度は、「専攻教育評価委員会」において、PDCAサイクルの「評価」を実践強化するために運営規程の検討・修正を行うとともに、教育環境に関するアンケートを実施した。さらに、「専攻JABEEワーキンググループ」では、学習・教育到達目標の達成度評価方法を提案して、4年生の卒業時におけるJABEE修了判定の評価を行った。これらの委員会およびワーキンググループによって、教育方法や教育改善に関する実質的に活動が実施され、促進するように継続的に検討が行われている。

4. 1. 2 電気電子工学科

電気電子工学科では、平成19年10月にJABEE中間審査を受け、平成20年5月に3年間の継続認定を受けた。その後、平成22年11月にJABEE継続審査を受け、平成23年5月に6年間の

継続認定を受けた。今年度（平成 28 年 10、11 月）、JABEE 継続審査を受審し、6 年間の継続認定が認められた。

今年度は、専攻（学科）FD 委員会を計 4 回開催し、その他専攻会議や電子メールでの議論、シラバス点検などで学科の教育改善に取り組んできた。今年度の専攻 FD 委員会を含む学科の教育改善活動は以下の通りである。

- (1) シラバスの点検：専攻 FD 委員会において、全シラバスを点検し、シラバスの整備を行っている。
- (2) 授業評価アンケート結果等を活用した授業改善：専攻 FD 委員会において、授業評価アンケート結果、授業計画改善書等をもとに授業の検証を行ない、必要に応じて担当教員と連絡を取っている。
- (3) 新入生アンケートと追跡アンケートの実施：新入時とその 1 年後にアンケートを行い、学生の実態を把握し、改善のための資料としている。
- (4) 学生定期面談の実施：各期末の指導教員による学生定期面談を義務化し、指導・助言する体制を整えている。
- (5) 教員間連絡ネットワークの構築：科目間連携会議を基礎科目と各コース専門科目で行い、専攻 FD 委員会で結果を議論している。
- (6) 社会からの要望調査の実施：来学された企業採用担当者にアンケートで、学科卒業生からは直接社会からの要請を調査し、教育改善に役立てている。また、今年度は卒業生アンケートを実施し、同様に教育改善に反映していく。

4. 1. 3 建築学科

建築学科では、平成 26 年度に JABEE の中間審査を受審し、次の JABEE 審査に向け、新基準への対応等を行っているところである。建築学科における最近の FD 活動と JABEE 関連の主な取組は以下のとおりである。

- (1) JABEE 学習教育目標の更新および公開ホームページの更新：学習教育目標 G のコミュニケーション能力の項目中にチーム力の育成を追加し、該当する授業科目を決定した。また、学習教育目標が記述されている公開ホームページを更新した。
- (2) 学習教育目標別の総合的な達成度（計算式）評価手法の更新：各学生に対して、授業科目の成績（達成度）から学習教育目標別の総合的な達成度を計算する評価手法について、教員団で検討を重ね、作成した。
- (3) JABEE 達成度（計算式）評価シートの作成：各学期のはじめに行われる教員と学生の個人面談の際に、学習教育目標の達成度を相互確認するための JABEE 達成度評価シートを教員団で検討を重ね、作成した。
- (4) JABEE 達成度（計算式）評価システムの作成：卒業時に全ての学生に対して、学習教育目標の達成度を評価するためのエクセルマクロによる計算システムを技術員の支援のもとで作成した。
- (5) 教員の教育負担と教育貢献度の評価：教員の教育負担を調べて教育貢献度を評価し、資料に基づいて授業の分担を検討した。

- (6) 期末および中間授業アンケートの実施：期末授業アンケートだけでなく、中間授業アンケートも実施した。中間授業アンケートは、グループ形式で実施し、進行中の授業の改善を促した。
- (7) カリキュラムマップの更新：カリキュラムマップを整備し、問題点を検討し、共通教育改革や新任教員の着任に伴って一部内容を変更した。
- (8) 次の JABEE 審査に向けた自己点検に関するシートの作成検討：次の JABEE 審査に向けた自己点検に関するシートを教員団で作成検討中である。

4. 1. 4 海洋土木工学科

本学科の FD 活動は、JABEE プログラムの実施・点検に沿った教育改善の一環として、次のような確立した手順で行なわれている。すなわち、工学部 FD 委員会が学生に対して実施する、専門科目の授業アンケートの結果に基づき、授業担当教員は、授業計画改善書を作成して FD 委員に提出する。FD 委員は、これを学科教育システム評価委員会に提出する。また、授業担当教員は、専門科目の学習目標の達成度評価を行ない、この結果も学科教育システム評価委員会に提出する。学科教育システム評価委員会は、提出された授業計画改善書と、学習目標の達成度評価の結果を比較・検討し、学科会議で報告する。そして、学科会議で提起された教育上の問題点等に関して、学科内の各委員会で検討し、改善方法を策定する。

なお、本学科では、エンジニアリング・デザイン教育の充実を図っている。まず、3年次には、「海洋土木デザイン工学 I」において、エンジニアリング・デザインの実例を学ぶ。そして、実際のプロジェクトの調査方法や、代替案を立案し、発表する。次に、4年次には、「海洋土木デザイン工学 II」において、3～4人程度のグループで、知識、情報や技術を駆使して、社会的・技術的な問題点を自ら発見して解決することを体験する。そして、その成果をポスターセッション形式で発表する。こうして、学生のチーム力を養いながら、課題発見能力や、問題解決能力の高い技術者の養成を試みている。

4. 1. 5 化学生命工学科

化学生命工学科の前身である応用化学工学科応用化学コースが、平成 18 年度の審査により JABEE 認定を受け、平成 29 年 3 月 31 日まで継続して認定されている。JABEE に関する情報は学科ホームページを通じて広く公開されており、学習・教育目標と JABEE 基準との対応、学習・教育目標を達成するための授業課題の流れ、授業時間などの情報を閲覧することが可能になっている。また、教育改善のためのアンケート調査が、環境化学プロセス工学科および同窓会との共催による講演会の際に既卒業・修了生を対象に 1 回、年度末に新卒業・修了生を対象に 1 回、計 2 回継続的に実施され、結果は教室会議および学科ホームページを通じて情報共有、公表されている。アンケート項目中の共同利用施設に対する評価結果は学科長名で各施設長等へ送付され、改善等の一助としてもらうとともに、学科と施設等との連絡網の構築を図っている。さらに、JABEE に対応した学科独自書式の自己点検表（ポートフォリオ）を学生自らが作成して継続して改善する仕組みを導入している。新入生については初年度に重点的なケアが必要であるとの考えから、後期が開始される時期に全学生の面談を担当教員が行い、単位の取得状況、サークル活動やアルバイトと勉学との両立状況、進路の検討状況についてインタビューを実施、指導している。これら

の活動は平成 26 年度に工学部で新生に対して導入されたアドバイザー制度・学生相談員制度に先んじて行ってきたものであり、これらの新制度発足後もそれらと矛盾の無いように自己点検表制度等を継続的に運用している。平成 28 年新生に対しても、これまでのインタビュー活動から得たノウハウも活用して、学生相談員の活動を効果的に取り入れ、より良い指導をすることができた。また、授業公開・参観についても積極的に取り組んでいる。具体的には、各教員が年間 1 科目は必ず講義を公開し、どの科目に誰が参観するかを定め、全教員が必ず他の教員の参観を受ける仕組みを導入している。

以上のような取り組みを継続的に実施しているが、更なる改善を目指し、学科内に教育プログラム改善検討委員会を設置して検討を重ねており、PDCA サイクルを構築している。

4. 2 JABEE を受審していない学科での取り組み

4. 2. 1 環境化学プロセス工学科

本学科では平成 16 年度より継続してきた JABEE 認定を平成 26 年度に終了し、これに代わる取り組みとして、平成 26 年度入学生より公益社団法人化学工学会の認定資格である「化学工学技士（基礎）」の取得を意識した新カリキュラムを実施しているほか、本学を試験会場とした団体受験を実施している。今年度は昨年度に続き 9 月上旬に学科教員全員が講師となり受験対策用の補習を行った。合格率は昨年度（51%）に比べて上がり（53%）、4 年生は 13 名受験のうち 9 名が合格して合格率が 69%、3 年生は 34 名が受験し 17 名が合格して 50%であった。目標としている合格率は 60%であり、合格率アップに向けた教育上の対策が必要である。

学科の FD 活動においては、学期末および学期中間に行われる学生授業アンケートやその結果に対する授業改善計画書の作成、FD 講演会への参加などに取り組んでいる。さらに、本学科教職員は、原則として前期末および後期末に開催される教員間ネットワークに参加している。教員間ネットワークは開講期の直前に開催されるもので、各教員がどのような講義を行うのかシラバスを公開して教員間の相互理解を深めている。今年度は授業改善計画書を電子ファイル化して学科のサーバにおくことにより、学科教員がいつでも閲覧できる仕組みを作った。

学生には個人の学習達成目標の到達度を再確認・自己評価させる意味で、学科図書文献室にてポートフォリオを印刷できるコーナーを設置している。学部 1, 2 年生には年 2 回、全教員が面談員となり定期個別指導（学生面談）をチーフアドバイザーの教員が企画し実施することで、学修指導ならびに生活指導を行い学生と教員との間のコミュニケーションをとっている。3 年生には後期の研究室配属後に研究室で面談を実施しているほか、4 年生には卒業研究の検討会の記録ならびに従事記録の作成を義務づけている。

4. 2. 2 情報生体システム工学科

情報生体システム工学科は、平成 21 年度に情報工学科と生体工学科・生体電子工学コースが統合されて新学科となり 8 年間で経過した。今年度は、新学科の卒業生を送り出して 5 年目となる。JABEE への取り組みは平成 21 年度より新たにスタートしており、8 年間の資料の収集が終了し

たこととなる。

情報生体システム工学科では、教育企画委員会と、FD 推進委員会により、学科の教育改善などの FD 活動を担っている。FD 推進委員会の下には、教科グループ WG（情報基礎科目，ソフトウェア科目，工学基礎・教養科目，語学科目，実験科目）が設置されており，前期と後期の終わりに全教員による科目ワーキングを開催し，各科目の履修状況，単位取得状況，講義内容，成績評価基準などを報告し，学科の教育内容についての評価・検討を行っている。ここ数年，学生の数学の学力低下が懸念されており，工学基礎・教養科目 WG では，数学に関する授業の内容を科目間で調整している。また，ソフトウェア科目 WG でも同様に，プログラミング言語に関する講義や演習の内容を検討し，科目間での調整を行っており，昨年度は開講期の変更を決定した。さらに，実験科目 WG では，昨年度末の計算機システムの導入に伴い，実験機器の更新や内容の見直しを検討している。

情報生体システム工学科では，授業計画改善書を教員間で互いに閲覧し，各教科グループ WG で積極的に活用できるように学科事務室に保管・管理している。また，1 年生には，高校における数学・理科の詳細な履修状況，志望動機，進路希望などを調査する新入生アンケートを実施して，学生への指導の参考にするとともに，カリキュラム改善に役立てている。

第 5 章 GPA 制度の現状と学習成果

平成 18（2006）年度の FD 報告書において，GP 制度の現状と問題点の整理がなされ，GPA の推移，分布，GP 制度と JABEE との関係，授業アンケート調査結果との関係について調査・検討がなされた。平成 19（2007）年度と平成 20（2008）年度は年間 GPA の推移，年間修得単位数の推移，入学者数に対する卒業者数の割合の推移が調査された。平成 21（2009）～平成 27（2015）年度も平成 20（2008）年度の調査を継続し，GPA と授業アンケートデータの関係が調査され，学習成果と学習の質の関連性についての分析が試みられた。本年度も継続しこれらの調査・分析を試みた。

5. 1 年間 GPA の推移

図 5.1.1 に，平成 15（2003）～平成 28（2016）年度入学生の年間 GPA の平均値を経過年数別に示す。在学 1 年目の年間 GPA の平均は，平成 20（2008）年度入学生までは 2.5 程度を推移していたが，それ以降はばらつきがみられるが 2.3～2.4 付近まで低下傾向が見られた。本年度入学生では，昨年度に続いて以前の 2.5 程度まで回復した。調査開始以降，在学 2 年目の年間 GPA 平均値は，1 年目よりも低下し 3 年目に至って 1 年目

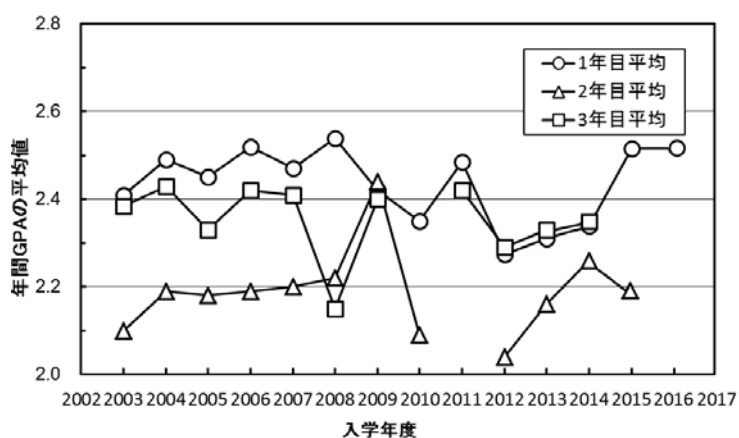


図 5.1.1 学年別年間 GPA の入学年度による相違

と同程度かやや低いレベルまで回復する傾向があるが、近年は2年目に2.2付近まで落ち込むことがあり、3年目で2.3程度にしか回復しない。年間GPAの推移について、1年目は学生自身に緊張感があり、講義の多くが共通教育科目であるため、年間GPAが高くなるが、2年目は大学生活に慣れて勉強意欲が希薄になり、GPA低下を招くと考えられる。3年目は講座配属や就職を控え、再びやる気が出るので、GPAが回復すると考えられる。

入学年度毎の比較では、平成15(2003)年度の年間GPAは、工学部でGPAが導入された年であり、この年度の入学生に対しては教員側も試行錯誤的状況にあったため、平成16(2004)年度以降入学生のそれと比べて全般的に低い傾向がある。一方、平成16(2004)年度以降入学生に対しては、平成19(2007)年度まで、年間GPAの推移には特に大きな変動が見られない。これは、GPA制度下における各教員の教育方法がある程度確立し、継続的な改善が実施されている結果であると考えられる。しかし、平成20(2008)年度～平成24(2012)年度の年間GPAは、非常に変化に富んでいる。この原因は定かでないが、今後の更なる調査・分析が望まれる。

平成22(2010)～平成23(2011)年度の年間GPAの一部のデータが得られていないので定かなことは言えないが、表5.1.1の平成28(2016)年度の年間GPAの結果より、在学1年目の年間GPAに対し在学2年目の年間GPAが低くなること、在学2年目の年間GPAに対し在学3年目の年間GPAが高くなることなど従来同様の傾向が見て取れる。平成24(2012)年度は、在学1年目と在学2年目の年間GPAがそれぞれ従来のレベルよりかなり低下したが、平成25(2013)年度以降は回復傾向にあり、本年度入学生では、前述の通り1年目のGPAが昨年度と同様に平成19(2007)年度以前のレベル2.5まで回復した。この学年の2年目、3年目のGPAが上昇するかどうかが次年度以降の推移を検討したい。

表 5.1.1 平成28(2016)年度の学年別年間GPA

○1年目平均	2.52
△2年目平均	2.19
□3年目平均	2.36

5. 2 年間修得単位数の推移

図5.2.1に年間修得単位数の平均値を年度ごとに算出した結果を示す。途中年度のデータが欠落しているが、本年度解析した平成29(2017)年3月におけるデータを過去のデータに追加入して図に示した。解析は、昨年度と同様、平成28(2016)年度における在学1年目の1～2期生、在学2年目の3～4期生、在学3年目の5～6期生が平成28(2016)年度に取得した単位数の平均値を求めることによって行った。ただし、確定GPAが1.5未満の学生のデータは除いている。

在学1年目の1～2期生および在学2年目の3～4期生に取得した単位数は、途中多少の増減はあるが、統計を取り始めてからの傾向として上昇しているように見受けられる。また、在学3年目の5～6期生が取得した単位数(途中年度の解析結果がデータ不足で欠落している)は、年によって大きく変動しているが、おおむね横ばいか微増の傾向のように見られる。1～4期では共通教育科目や基礎的な専門科目が主であり、これらの科目を入学してからの2年間でほぼ単位取得し、3年生の専門科目に集中できるような履修状況になっているとうかがえる。最近3年間の傾向としては、在学1年目1～2期生の平均の年間修得単位数が40単位近くに迫っているのに対して、

在学2年目の3～4期生の平均が38単位近く、在学3年目の5～6期生の平均が35単位近くと低下している。学生の貪欲な学習意欲を引き出す方策が必要と考えられる。

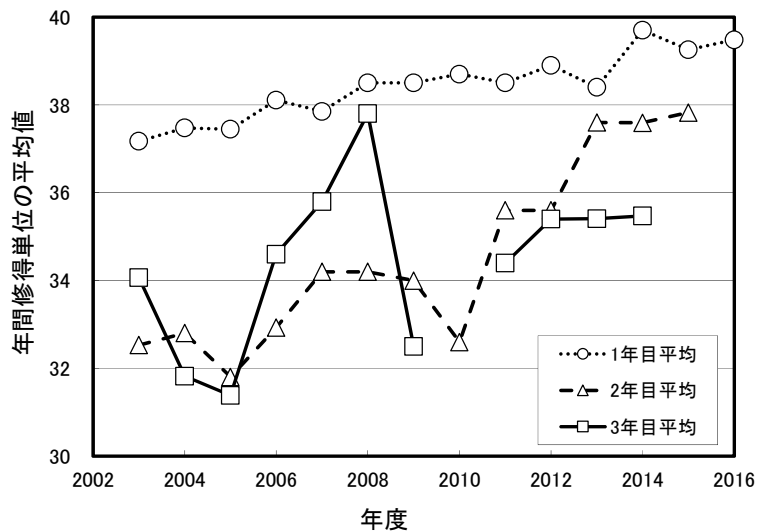


図 5.2.1 年間修得単位数の平均値

5.3 卒業者数と卒業延期者数の割合の推移

図 5.3.1 に、卒業者数と延期者数の合計に対する卒業者数の占める割合の経年変化を示す。統計を取り始めた平成 14 (2002) 年度以降、概ね 0.93～0.98 の間で推移している。年度ごとに割合が異なる理由を考察することは困難であるが、一定の傾向が見られないことから、外的要因による変動や留学など学生個人による影響と推察される。外的要因による変動として、平成 21 (2009)～平成 24 (2012) 年度の卒業者の割合は低下しており、景気低迷の影響と考えられる。平成 25 (2013)、平成 26 (2014) 年度は 0.96 程度と高めであったのが、最近 3 年間では、やや低下傾向を示している。平成 28 (2016) 年新卒対象の就職活動では選考開始が 8 月に後ろ倒しになるなど、前年度とスケジュールが大きく変更され、上手く就職活動を進められなかった学生がいた可能性がある。

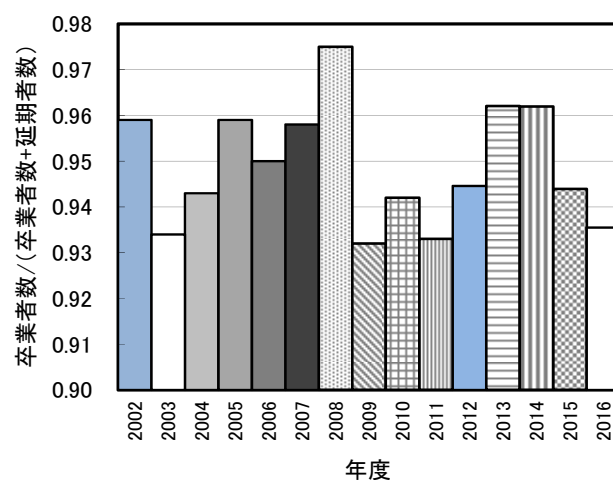


図 5.3.1 卒業者数と延期者数の合計に対する卒業者数の占める割合の経年変化

5. 4 学習成果と質の向上

昨年度に引き続き、それまでに蓄積されてきた講義・演習科目の授業評価アンケート項目から学生の学習の質と関連があると考えられる「学習目標の達成⑦」、「予習・復習⑭」、「理解④」、「満足度⑮」の評点を取り上げて、これらと GPA の関係を調べることで、学習成果と質の向上について検討する。

5. 4. 1 学習成果と質の向上の経年変化

平成 16 (2004) 年度から平成 28 (2016) 年度までの全講義・演習科目の「学習目標の達成⑦」、「予習・復習の時間⑭」、「理解④」、「満足度⑮」の工学部平均値および工学部全体の GPA の科目平均値の推移を図 5.4.1 に示す。平成 16 (2004) 年度から平成 21 (2009) 年度までは、これらの評点増加の傾きは比較的大きく、その後は緩やかに大きくなっている。目標達成⑦、満足度⑮と理解④の傾向は類似しており、学生は理解できれば満足感と達成感を得ることを示している。予習・復習⑭については、平成 23 (2011) 年度まで増加している点が著しく、教育改善の効果が現れているものの、それ以降の伸びが小さいことが問題である。平成 27 (2015) 年からわずかに上昇傾向にあり、これを伸ばす方策が望まれる。

一方、工学部全体での科目平均 GPA は、授業アンケートの評点の変化傾向とのリンクは見られない。学生の満足度という観点での授業の質は経時的に向上しているが、必ずしも学習成果の向上にはつながっていないのが現実である。授業への満足度は高どまっており、今後は学習成果をいかに高めていくか、が課題である。次節では、平成 28 (2016) 年度における科目ごとに、上記の授業アンケート評点 4 項目と科目平均 GPA の相関を調査する。

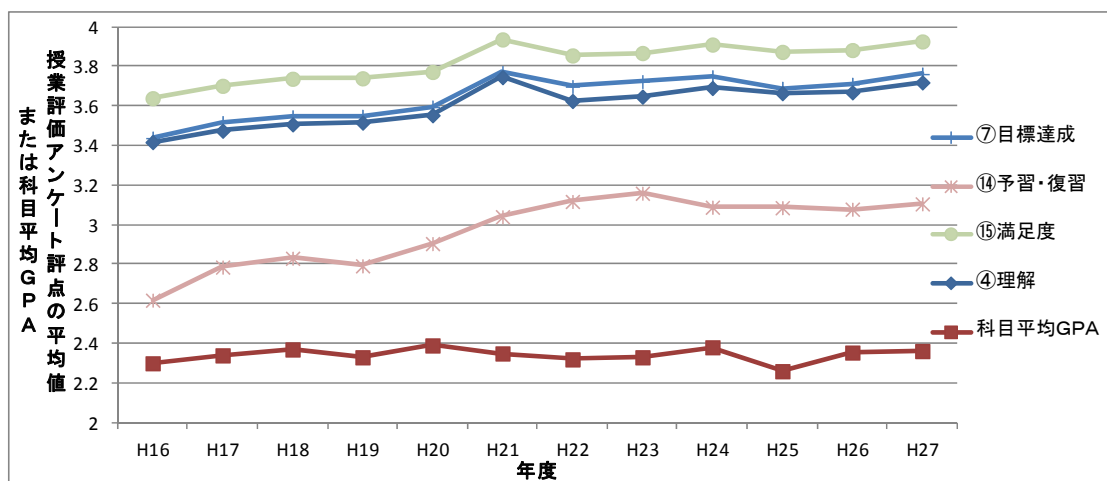
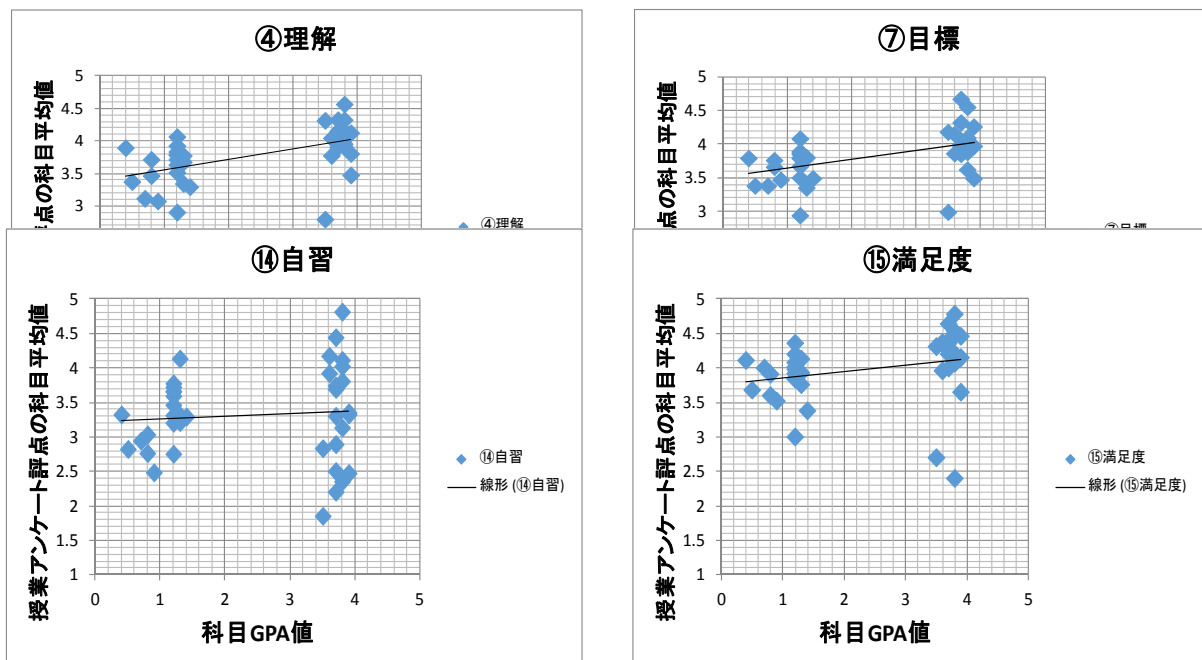


図 5.4.1 年度別の授業評価アンケートと科目平均 GPA の学部平均値

5. 4. 2 平成 28 年度の学習成果と質の向上

平成 28 (2016) 年度の科目平均 GPA が 1.5 未満の 19 科目と GPA が 3.5 以上の 20 科目を抽出して、科目平均 GPA と授業評価アンケート 4 項目の科目平均との相関関係を調べたものを図 5.4.2

に示す。平成 27 (2015) 年度までの調査により、全体的な相関関係の傾向は平成 22 (2010) 年度から平成 27 (2015) 年度まで変わっていないことが示されたこと、GPA の中間値の集団では傾向が現れていないことから、平成 28 (2016) 年度は両端の GPA 値を持つ集団の傾向にもとづいて評価した。全体の傾向としては例年通りだが、「理解④」について丸で囲んだもの、つまり理解が低くても高い GPA 値を得ているケースは問題である。「予習・復習の時間⑭」について、例年通りばらつきが大きく、全体的には時間と GPA 値の相関は小さいものの、低 GPA 値の科目では、高い GPA 値の集団で見られる、丸で囲んだ長い時間の予復習が行われていないことから、少ない学習時間では高い GPA 値は得られないことを示している。同時に、学習時間が少なくても高い GPA が取れる状況があることも示され、必ずしも健全と言えない。学生に自ら進んで学習させる方策も必要であるが、学生が宿題に取り組む場合には必ず復習をしているはずであり、実態を表していない可能性がある。学生が復習を自覚できるように、調査項目の問い方を工夫しても良いと思う。



5.4.2 平成 28 (2016) 年度の科目平均 GPA と授業評価アンケートの科目平均の相関

第 6 章 特筆すべき取り組みや改善事例

工学部では平成 28 年度にエクセレント・レクチャー表彰制度が制定された。当該年度中に実施した共通教育科目・専門教育科目の実施状況、授業評価アンケート、授業計画改善書などの資料に基づき、各学科で定めた選考方法によりそれぞれの学科よりエクセレント・レクチャーを 1 名選出し、年度末までに工学部長に報告することになっている。次年度 4 月の教授会において表彰式が実施され、副賞として 1 名につき 5 万円が支給され自己収入に充当される。また、受賞者は工学部ホームページで紹介される。さらに、工学部の FD 講演会において講演を依頼するこ

とも検討されている。平成 28 年度の受賞者は次の 7 名である。片野田洋教授（機械工学科）、堀江雄二准教授（電気電子工学科）、朴光賢助教（建築学科）、水田敬助教（環境化学プロセス工学科）、木村至伸准教授（海洋土木工学科）、大野裕史助教（情報生体システム工学科）、金子芳郎准教授（化学生命工学科）。

第 7 章 平成 28 年度の工学部 FD 活動の総括と今後の FD 活動

7. 1 平成 28 年度の FD 活動の総括

第 1 章で述べたように、工学部では平成 28 年度の第 1 回工学部 FD 委員会において、既に学部に着したこのような活動を本年度も継続して遂行することが決定され、それらの活動が実施された。本年度実施した FD 講演会、新任教員 FD 研修会および学外 F D 研修会への教員派遣の概要は第 2 章でまとめた。各学科における授業評価アンケートの分析と授業計画改善書の活用状況については第 3 章でまとめた。第 4 章では学科における FD 活動と JABEE の関連について記載した。第 5 章においては、学習成果と質の向上について調査・分析を実施した。また、前期に 40 科目、後期に 34 科目を授業公開の対象とした。これらの公開科目に対して、工学部教員による授業参観は 30 件実施された。ただし、参観の実施は、学科間で大きな差がある。

本年度は各部局において全専任教員の 75%以上が FD 活動に参加することが求められていた。工学部主催および学内で実施された FD 関連の企画に参加した教員は 103 名で 84.4%の教員が何らかの行事に参加した。学科ごとの内訳は、機械工学科 83.3%、電気電子工学科 72.7%、建築学科 100%、環境化学プロセス工学科 90%、海洋土木工学科 84.6%、情報生体工学科 73.9%、化学生命工学科 100%であった。その他の FD 活動も含めると 90%以上の教員が FD 活動に参加した。

7. 2 今後の FD 活動

工学部は平成 16 年度から授業アンケートを行い、その結果を受けて各教員が授業改善のための計画を策定しながら、分かりやすい授業の実施を目指してきた。10 年間のトレンドで見ると改善はされているが、この数年は変化がなくなっていることや、各科目単位で見るとアンケートの評価には大きな分布が存在する。このことはまだ改善の余地が残されていることを示している。平成 28 年度から工学部ではエクセレント・レクチャー表彰制度が実施された。これはその年度に最も優れた教育を行った教員を各学科から 1 名表彰する制度である。平成 29 年度には表彰された教員による講演会の実施なども予定しており、これをきっかけにして、今後さらに分かりやすい授業がなされることと、その結果として学生の講義の理解度が深まり、その授業に対する満足度も向上することが期待される。

農学部・ 農学研究科

平成 28 年度
鹿児島大学農学部・農学研究科 **FD** 活動報告書
(概要)

鹿児島大学農学部 **FD** 委員会

平成 28 年 4 月

第1節 平成28年度農学部FD活動の記録

まえがき

農学部 FD 委員会は、委員長、副委員長（教務副委員長が兼任）、および各学科から選出された委員4名、および、教務係長で構成されている。委員会では、さまざまなFD活動計画や取りまとめ、また、全学FD委員会や、全学FD活動への対応について協議した。

今年度の農学部のFD活動の特筆すべき点は、教授会後の時間を使ってFDミニ講演会を企画し、学部FD委員が「大学IRコンソーシアム 学生アンケート2015」の結果と学部内の授業評価アンケートおよび授業参観の参観報告書の注目点をダイジェスト解説した。これによって、大学IRコンソーシアムのようなIR活動の価値を各教員に知らせることができただけでなく、授業参観や授業評価アンケートの集計分析がいつでも大学や学部のホームページ上で閲覧でき、活用も可能であることを示すことができた。

さらに今年度の特筆点として、学生による授業評価アンケートの集計で、各質問項目間の相関分析を行うことで、「学生の授業満足度」と「板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか」という項目の間の相関が極めて高いことが判明した（本報告書15-18ページにも掲載）。

このような分析から次年度もアンケートを活用したIR活動で農学部FDを発展させていく予定である。

1. 農学部FD活動組織（FD委員会の構成と活動状況）

委員長 坂巻祥孝

副委員長 大塚 彰（教務委員会 副委員長兼任）

委員 下桐 猛（生物生産学科）

委員 花城 勲（生物資源学科）

委員 奥山洋一郎（生物環境学科）

事務担当者 河本政展（教務係長）

FD-WEB 管理・データ処理 池田日出男（技術専門職員）

第1回農学部FD委員会 平成28年5月10日（火）

議題：1. 平成28年度FD委員会の活動計画について

1) 平成28年度農学部授業公開・授業参観の実施について

2) 平成27年度FD報告書作成の分担について

2. その他

1-1) 平成28年度農学部授業公開・授業参観

農学部では、平成15年度後期より公開授業・授業参観の取り組みを実施している。平成22年度からは、授業公開科目と授業参観参加希望科目の登録をFD-WEBで行うよう

にし、今年度もこの FD-WEB を活用することとした。その使用法は教授会ならびに学部教員へのメーリングリストにて説明し、周知した。FD ウィークは一昨年から1週間延長して、2週間設けている(前期6月6-17日、後期10月24-11月4日)。FD ウィークの2週間は学部教員が行っている授業・実験は原則すべて公開とした。のべ参観件数は昨年同様96件であった。一人で複数の授業を参観する教員も多く、実参加者を数えると農学部全教員の72.4%(76名中55名)が授業参観をした。また、例年参観報告書未提出が散見されるため、FD ウィークはじめと、終了間際に「参観報告書提出のお願い」をFD委員会から電子メールにて案内する。また、参観報告書は、授業名と参観者名を伏せてFD講演会などで公開することを目指した。

(前期)

- 5月18日(水): 公開授業の実施についてのお知らせ(教授会)
- 5月23日(月)~5月27日(金): 公開不可能な授業科目調査
- 5月30日(月)~6月17日(金): 授業参観予約
- 6月6日(月)~6月17日(金): 授業公開(農学部FDウィーク)
- 6月6日(月)~6月24日(金): 授業参観報告書作成・提出

(後期)

- 9月21日(水): 授業公開の実施についてお知らせ(教授会)
- 10月3日(月)~10月7日(金): 公開不可能な授業科目調査
- 10月10日(月)~11月4日(金): 授業参観予約
- 10月24日(月)~11月4日(金): 授業公開(農学部FDウィーク)
- 10月24日(火)~11月11日(金): 授業参観報告書作成・提出

授業担当者と授業参観者には、可能な限り、授業参観終了後に意見交換をお願いした。また、参観者には、FD-WEBを通じて、授業参観報告書を作成・提出いただいた。

本年度の授業参観には、前期39名、後期41名の参加があった。これらの内一人で複数の授業を参観する教員も多く、のべ参加件数は94名であったが、参加名簿から実参加者を数えると農学部全教員76名中55名が授業参観をしたことが分かった(長期海外出張教員1名を除く)。有意義な取り組みであった。

公開授業参観報告

食料生命科学科 花城 勲

H28年度は前期開講の専門科目である「栄養生理化学」の授業を参観した。本講義では主としてパワーポイントを使用するが、適宜ホワイトボードを併用するスタイルで進められた。受講学生へ配布されているスライド資料は、トピックごとに分類がなされた上で通し番号を付した形となっており、非常に参照しやすいもので、教員による口頭での解説や重要箇所へのマーキングの指示を学生が必要に応じて書き込むことが容易に可

能な適切なサイズであった。

講義では冒頭に、本科目がカバーする内容全体の中での、当日の授業内容の位置づけと既習内容との関連、および前回講義内容の概説がなされ、当日授業内容の理解を促すのに効果が高いと感じられた。また、説明した事項の理解を促すための練習問題を講義中に学生に解かせた上で解説を加える、という工夫は説明事項の理解を深めさせる効果と同時に、聴講が主となる学生にとっては授業時間中に一息つけるアクセントともなり、集中力の維持にも役立っていると見受けられた。

本学部における公開授業参観の実施も一定の年数を経ており、これまでに参観した授業から多くの参考事例を学ぶことが出来たと個人的には考えている。しかし、ある一人の教員が参観可能な科目数はある程度限られてしまうため、個々の教員が授業参観から得られた気づきを学部教員全体で共有できるよう、具体的事例を収集、類型化した上で汎用的な事例を抽出するなどの取り組みがあっても良いのではないだろうかと感じている。

公開授業参加報告

農学部教務委員会副委員長 大塚 彰

今回は鮫島吉広教授の「比較酒文化論」を参観させていただいた。木曜1限目に開講され、焼酎学コースの学生を中心に20名ほどが受講する比較的小規模な講義であった。プリントが配布され、同時に内容の解説がパワーポイントで行われていたが、板書も要所要所に散りばめられており、熱心な学生らは、しっかりとノートをとっていた。講義のスピートは、話の聞き取りと内容の理解、そして板書の書き写しが余裕をもってできるように、また単調にならないようにメリハリが付けられており、かなり配慮されていると感じた。年を重ねるごとに、あれもこれも教えたいという欲求が強くなるにつれて、年々講義で使用する情報量が多くなり、気が付けば講義の大半を一方的な話に費やしている、ということが

多々ある私にとって、90分という限られた講義時間で使用する情報の「質と量」の大切さを改めて認識させてもらう大変良い機会となった。情報の精選と効果的な使用を心掛けて、講義を構築していきたいと思った。

公開授業参加報告

生物生産学科 下桐 猛

家畜生産学講座3年生対象の「動物遺伝資源学」(岡本新教授)の講義を参観した。25名程度の受講生であり、102講義室は適切であると感じた。当日は「細胞遺伝学による動物遺伝資源の評価」という内容であった。まず、最初にこれまでの内容について小テストが実施され、学生の理解度を確認していた。続いての講義は、パワーポイントを使ったスライドと時折ホワイトボードに板書する形でわかりやすく説明がなされていて、受講学生に配慮されていた。特に、受講生にとって初見と思われる核型解析のところは、わかりやすい例をもとに親切に深く説明されていたので、よかったのではないかと思う。学生はスライドや板書をノートに必死に書写していて、寝ている学生はいなかった。個人的に、次年度か

ら動物分子遺伝学を担当する予定であり、その中に染色体の話題も入れる予定だったので、とても参考になる講義でした。

平成 28 年度 農学部 FD ミニ講演会

平成 28 年 11 月 16 日(水)の教授会終了後に農学部 FD ミニ講演会を行った。講演者は農学部 FD 委員の坂巻祥孝准教授であった。参加教員は農学部 76 名中(長期海外出張者 1 名を除く)59 名であった。

本年度はテーマを「大学 IR コンソーシアム「学生調査 2015」から見える鹿大農学部生の意外な特徴」とし、大学 IR コンソーシアム「学生調査 2015」のアンケート結果を紹介すると同時に、2015 年度の農学部の授業アンケートや授業参観の報告書のとりまとめ結果を一部紹介した。また、後者の授業アンケートや授業参観の報告書のとりまとめ結果については、農学部の FD 報告書として全学の FD 員会ホームページおよび農学部の FD ホームページから閲覧可能であることを紹介した。



写真. H28 年度 農学部 FD ミニ講演会の様子(平成 28 年 11 月 16 日 農学部 101 講義室に於いて)

多忙の中、教授会後に参加してくれた教員たちの集中を切らさないため 20 分の講演と約 10 分の質疑応答とした。講演では、鹿児島大学も参加している「大学 IR コンソーシアム」の説明およびそこで全国一斉に実施される「学生アンケート」の大まかな趣旨・内容説明が行われた後、この学生アンケートで、以下のようなことが浮き彫りになったと紹介がなされた。

I. 他の国立大学グループ平均と比較した鹿児島大学学生の特徴（まとめ）

表 2-1. 授業を通じた学習経験

- (1) 1 年生：.取りたい授業を履修登録できてない！
学生が自らの考えや研究を発表する経験少ない！
- (2) 上級生： 自ら文献や資料を調べる機会が多い。
仕事に役立つ知識やスキルを学ぶ者が多い。

表 2-2. 授業内外の学習状況

- (3) 上級生：1 年生に比べて、授業をつまらなく感じる人が減る。
教員に親近感を感じる人が多い。
例えば、将来のキャリア相談をしたなどの例が多い。

表 2-4. 入学後の能力変化

- (4) 1 年生：入学後一般的な教養が増えた。
- (5) 上級生：リーダーシップ、人間関係構築力、協調性、コミュニケーション力、
時間の有効活用力が特によく増えている。

表 5-3. 大学教育に対する満足度

- (6) 上級生：大学教育に対する満足度は概して高い

II. 鹿児島大学他学部と比較した農学部生の特徴（まとめ）

表 2-4. 入学後の能力変化(上級生)

- (1) 異文化の人々に対する知識が増えた。
グローバルな問題の理解が深まった。
- (2) コンピューターを使う能力が上がった。
数理的な能力が上がった。

表 2-2. 授業内外の学習状況、

表 5-1.大学への適応感、表 5-3.大学への満足度

- (3) 教員に親近感を感じている学生が多い。

表 5-3.大学への満足度

- (4) 日常の授業・実習への満足度は高い。

これらについてのデータの紹介があったのち、質疑応答では、今回のアンケートデータは、農学部が学生のグローバル化に力を入れていることに対する効果の表れであり、とてもやる気が出た。とても興味深いデータであり、もっと細かいところまで、読み解いていきたい。などの意見が出され、好評のうちに講演会は終了した。

1-2) 平成 27 年度後期および平成 28 年度前期 農学部授業評価アンケートの結果とりまとめ

1-2) -a 授業評価アンケートの目的と公開実績

本授業評価アンケートの結果は、授業形態別（講義か演習かの比較）および(実験か実習かの比較)、授業規模別（5人以下、6-10人、11-30人、31-50人、51-100人の比較）にとりまとめて農学部水産学部共通のAgri-Fish-Web (<http://staff.agri-fish-web.jp/base/login/login.php>)上でも閲覧できる。このデータはH20年からH28年前期までが同システム上に蓄積されている。

一方、本稿ではまず、授業形態や授業規模ではなく、学科の違いに着目してこのアンケートを比較して、学科ごとの授業、実習などの特徴と受講学生の感想の特徴を浮き彫りにすることを目指した。これに続いて、アンケート項目の項目間の相関関係を分析し、授業に臨む教員のどのような点が、学生の興味・満足度を高め、最終的に学生自身の自習・予習行動につながるのかを推定することを目指した。

1-2) -b アンケート項目と調査規模

なお、平成27年度後期および平成28年度前期の講義・演習に関するアンケート結果はH27後期 110/124科目(実施科目率90.2%)：4037件、H28前期 98/114科目(実施科目率86.0%)：3320件に基づいて集計している。

アンケートは「授業・演習用」と「実験・実習用」の2タイプを準備した。授業演習用ではアンケート項目は、1. 授業を受けた学生自身の出席、自習行動に関する項目（質問101-103）、2. 授業自体への評価・感想(質問201-207)、3. 授業担当教員への評価・感想（質問301-306）に分けられる。実験・実習用では、1. 授業を受けた学生自身の出席、自習行動に関する項目（質問101-104）、2. 授業自体への評価・感想(質問201-206)、3. 授業担当教員への評価・感想（質問301-306）に分けられる。具体的な各質問項目および回答選択肢は以下のとおりである。なお回答選択肢横の（ ）内の点数は、相関分析などの統計処理用につけている点数で、実際のアンケート用紙には記載されていない。

【講義・演習用】

質問101 この授業の出席状況を教えてください。

すべて出席(4点)、1回欠席(3点)、2回欠席(2点)、3回以上欠席(1点)

質問102 この授業に関連のある参考書、論文、雑誌などを読みましたか

はい(4点)、いいえ(1点)

質問103 この授業について、1コマあたり、どの程度予習や復習をしましたか（レポート作成を含む）

90分以上(4点)、60分～90分(3点)、60分未満(2点)、しなかった(1点)

質問201 この授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか。

そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、そう思わない(1点)

質問202 この授業内容の水準はどうでしたか。

高かった(4点)、妥当だった(3点)、少し低かった(2点)、かなり低かった(1点)

質問203 この授業の分量はどうでしたか。

多かった(4点)、妥当だった(3点)、やや少なかった(2点)、かなり少なかった(1点)

- 質問 204 この授業は、知力や学力の向上に役立ちましたか。
そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、
そう思わない(1点)
- 質問 205 この授業は将来役立つと思いますか。
そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、
そう思わない(1点)
- 質問 206 この授業の学習目標は達成できたと思いますか。
そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、
そう思わない(1点)
- 質問 207 この授業は総合的に見て満足できるものでしたか。
そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、
そう思わない(1点)
- 質問 301 この授業はシラバスに沿って進められましたか。
そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、
そう思わない(1点)
- 質問 302 板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか。
そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、
そう思わない(1点)
- 質問 303 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明は分かりやすいと思えましたか。
そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、
そう思わない(1点)
- 質問 304 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか。
そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、
そう思わない(1点)
- 質問 305 講義・演習中やオフィスアワー等で教員に質問をしましたか。
質問した(4点)、質問しなかった(1点)
- 質問 306 305で「質問した」と答えた人は質問に対する教員の対応に満足しましたか。
そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、
そう思わない(1点)

【実験・実習用】

- 質問 101 この実験・実習の出席状況を教えてください。
すべて出席(4点)、1回欠席(3点)、2回欠席(2点)、3回以上欠席(1点)
- 質問 102 この実験・実習に関連のある参考書、論文、雑誌などを読みましたか。
はい(4点)、いいえ(1点)
- 質問 103 この実験・実習について、1コマあたり、どの程度予習や復習をしましたか(レポート作成を含む)。
90分以上(4点)、60分~90分(3点)、60分未満(2点)、しなかった(1点)
- 質問 104 この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか。
そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、
そう思わない(1点)
- 質問 201 この実験・実習から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか。
そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、
そう思わない(1点)
- 質問 202 この実験・実習の内容のレベルはどうでしたか。
高かった(4点)、妥当だった(3点)、少し低かった(2点)、かなり低かった(1点)

- 質問 203 この実験・実習の分量はどうでしたか。
 多かった(4点)、妥当だった(3点)、やや少なかった(2点)、かなり少なかった(1点)
- 質問 204 この実験・実習は、知力や学力の向上に役立ちましたか。
 そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、そう思わない(1点)
- 質問 205 この実験・実習の学習目標は達成できたと思いますか。
 そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、そう思わない(1点)
- 質問 206 この実験・実習は総合的に見て満足できるものでしたか。
 そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、そう思わない(1点)
- 質問 301 この実験・実習はシラバスに沿って進められましたか。
 そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、そう思わない(1点)
- 質問 302 板書や使用した教科書と教材は実験・実習等の理解に役立ちましたか。
 そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、そう思わない(1点)
- 質問 303 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明は分かりやすいと思えましたか。
 そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、そう思わない(1点)
- 質問 304 教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか。
 そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、そう思わない(1点)
- 質問 305 実験・実習中やオフィスアワー等で教員に質問をしましたか。
 質問した(4点)、質問しなかった(1点)
- 質問 306 305で「質問した」と答えた人は質問に対する教員の対応に満足しましたか。
 そう思う(4点)、どちらかと言えばそう思う(3点)、あまりそう思わない(2点)、そう思わない(1点)

1-2) -c 結果と考察 (学科間比較)

平成 28 年度前期講義・演習について(図 1-2)

101-103 は受講生自身の出席状況や自習状況を問う設問である。図 1 の 101 は実験・実習の出席状況を示しており、いずれの学科でも「すべて出席」が 50-60%と明確な差はない。授業に関連のある参考書、論文、雑誌等を読みましたかという問い(102)に対しては、「はい」と答えた割合が 30-40%でいずれの学科もほとんど差がない。一方、予習復習については「しなかった」が生物生産学科のみで 20%を超えている。これらから、受講生自身の出席状況や自習状況については学科間の差は明瞭ではないものの、生物生産学科については学生が自習できるような課題を出すなどの注意が必要かもしれない。

授業内容自体に関する評価・感想(201-207)では、「202 この実験・実習のレベルはどうでしたか」および「203 この実験・実習の分量はどうでしたか」の設問ではいずれの学科も「妥当だった」が 80%を超えた。一方「201 この授業から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか。」、「204 この授業は、知力や学力の向上に役立ちましたか。」

「205 この授業は将来役立つと思いますか。」「206 この実験・実習の学習目標は達成できたか」「206 この授業は総合的に見て満足できるものでしたか。」という問いについては、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」を足し合わせた場合、どの学科も 85%を超えているものの、いずれも生物生産学科で数ポイントずつ低い傾向が認められた。大きな差ではないが、これまでは視られなかった差であることから、今後のために注意が必要と思われる。

授業担当教員への評価・感想（301-304）では、いずれの問いでも約 90%が「そう思う」あるいは「どちらかといえばそう思う」と答えており、教員の説明や態度に満足していることが垣間見える。ただし、設問 303「教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明は分かりやすいと思いませんか」では、生物生産学科のみで、数ポイント低い傾向が認められ、207 の授業満足度と同様であったことから、この点に満足度を下げている要因があるのかもしれないと考えられた。

平成 28 年度前期実験・実習について(図 3-4)

101-103 の出席状況や自分で文献を読んだか、また自習時間を見ると（図 3）では、生物生産学科がいずれの項目でも他学科より 10 ポイント以上低い。通常すべて出席が前提の実験・実習であるにもかかわらず生物生産学科ですべて出席の学生の割合が 80%を切っていること、予習復習を全くしなかった学生の割合が 30%もあることなどの問題が認められ、改善の工夫が必要と考えられる。一方 104「この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか。」の設問に対し「どちらかと言えばそう思わない」「そう思わない」の和が 40%を超えている生物環境学科では、103「この実験・実習について、1 コマあたり、どの程度予習や復習をしましたか（レポート作成を含む）」の予習復習時間 1 コマ当たり 90 分以上が 20%以上もおり、高度な実験・実習が行われていることが推測される。このことは 202 「この実験・実習の内容のレベルはどうでしたか」、203「この実験・実習の分量はどうでしたか」の設問とともに「高かった」と「多かった」が生物環境学科で最も多かったことから裏付けられる。

実験実習で 201「この実験・実習から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか。」や 204 「この実験・実習は、知力や学力の向上に役立ちましたか。」、205 「この実験・実習の学習目標は達成できたと思いますか。」、206 「この実験・実習は総合的に見て満足できるものでしたか。」の項目(図 3-4)はいずれも、生物資源化学科で「そう思う」の割合が高かった。ただし、「そう思う」、「どちらかと言えばそう思う」の両回答を合計するといずれも 90%以上で高く、学科ごとの明瞭な差はない。

授業担当教員への評価・感想の項目（301-306）はすべてについて、「そう思う」、や「質問した」人の割合が、生物資源化学科で高く、つづいて、生物生産学科、そして、すべて低めだったのが生物環境学科であった。ただし、これについても「そう思う」、「どちらかと言えばそう思う」の両回答を合計するといずれも 90%以上で高く、学科ごとの明瞭な差はない。

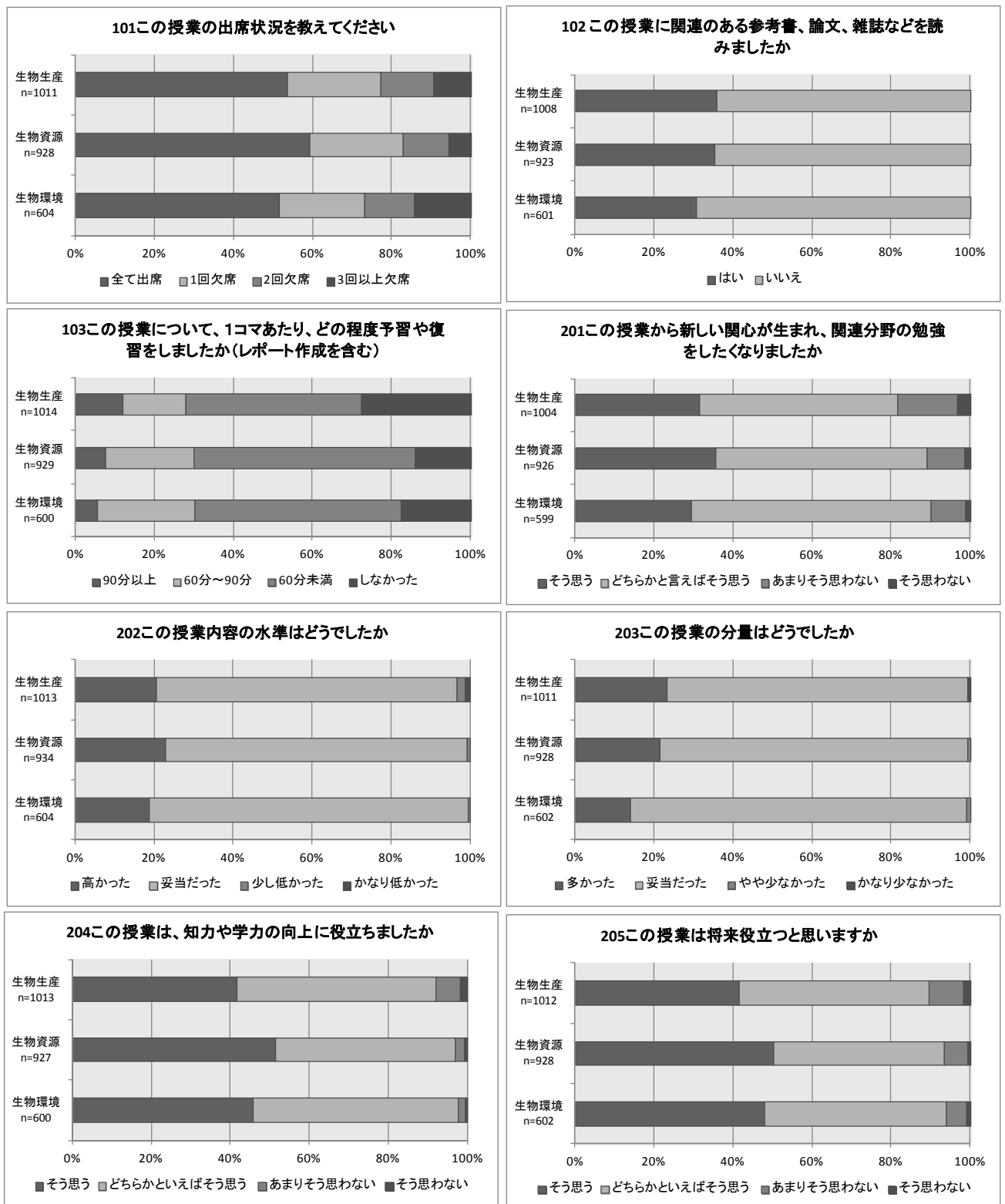


図 1. 平成 28 年度前期 授業評価アンケート（講義・演習）の学科間比較[質問 101-205]

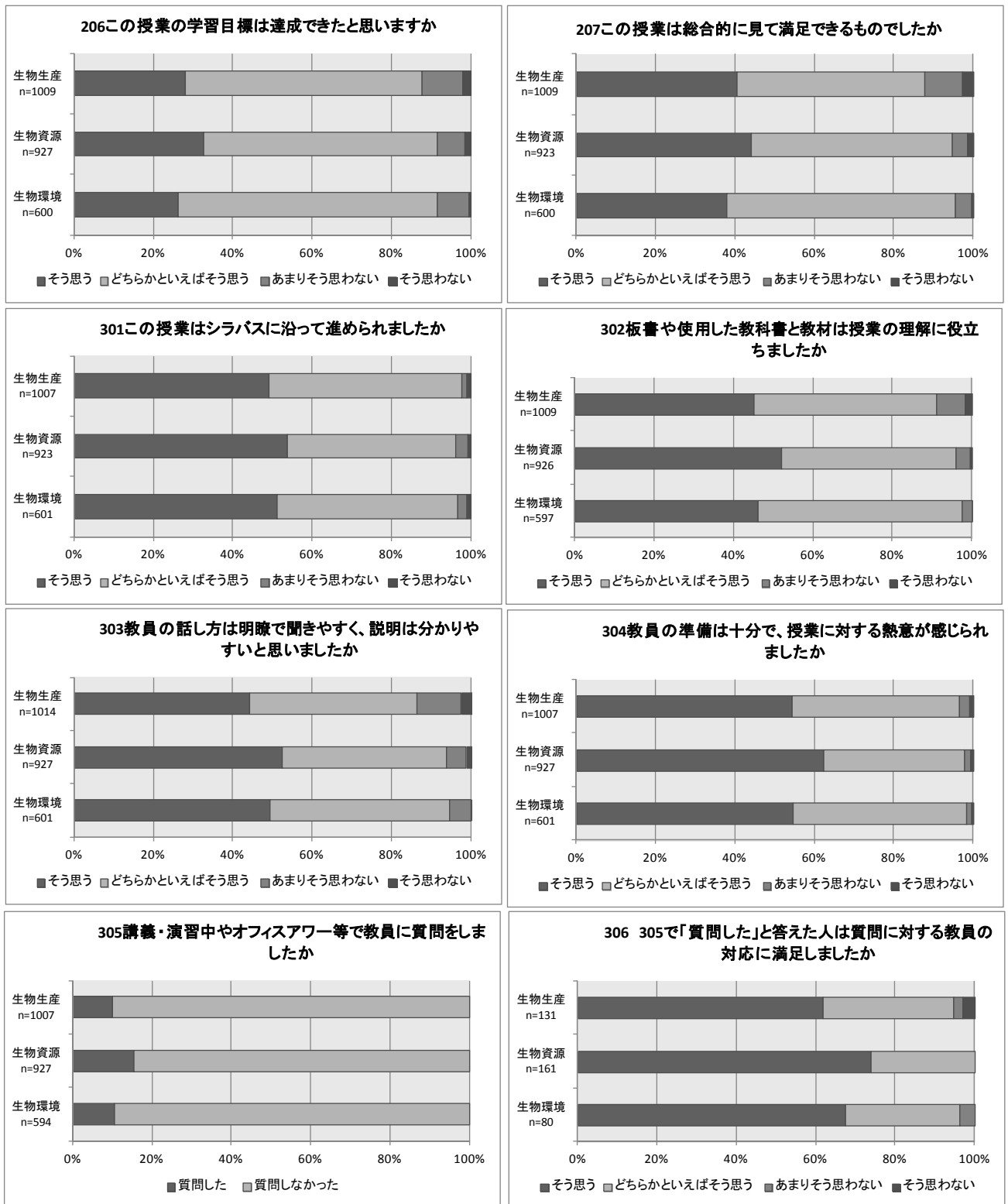


図 2. 平成 28 年度前期 授業評価アンケート（講義・演習）の学科間比較[質問 205-306]

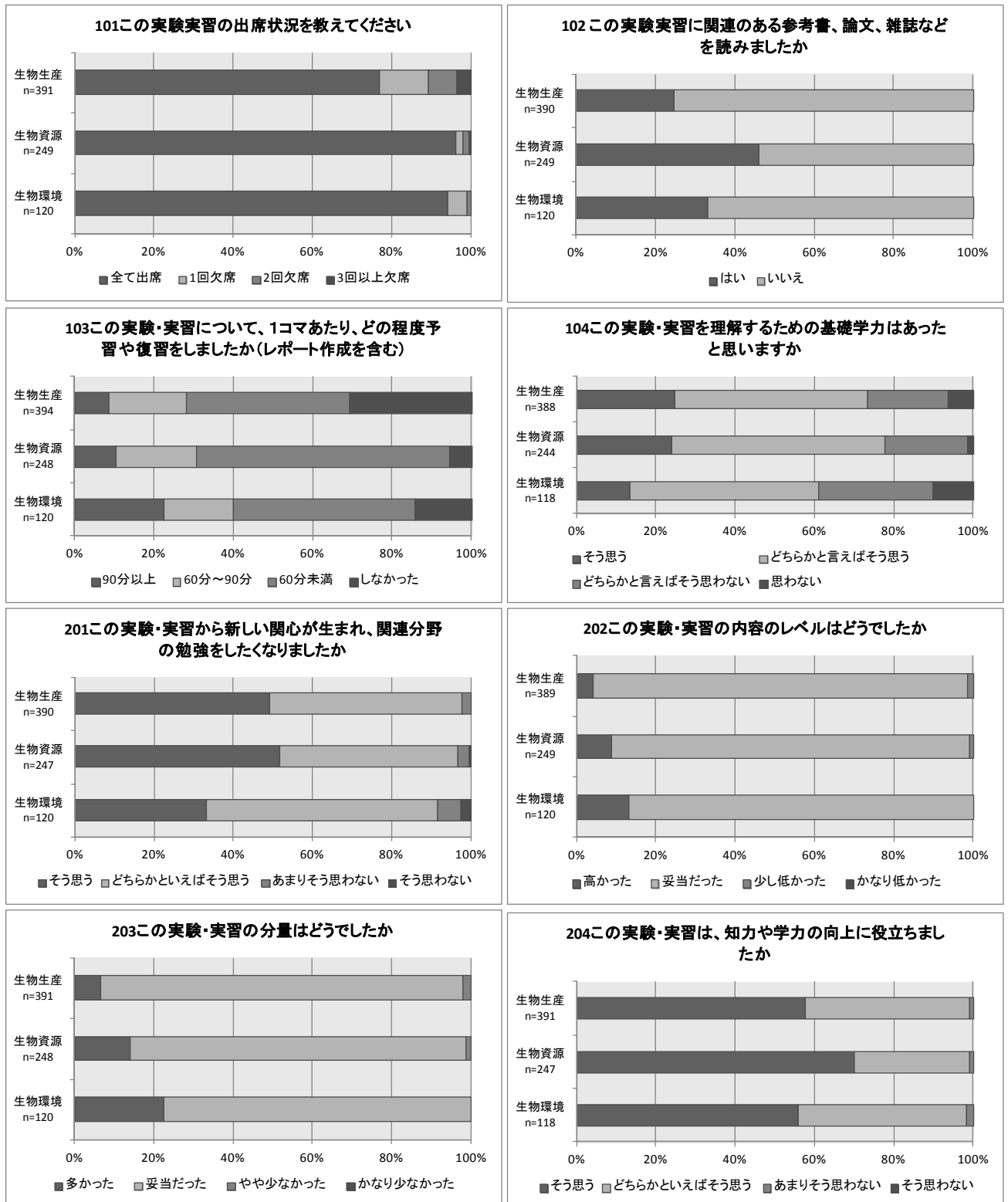


図 3. 平成 28 年度前期 授業評価アンケート（実験・実習）の学科間比較[質問 101-204]

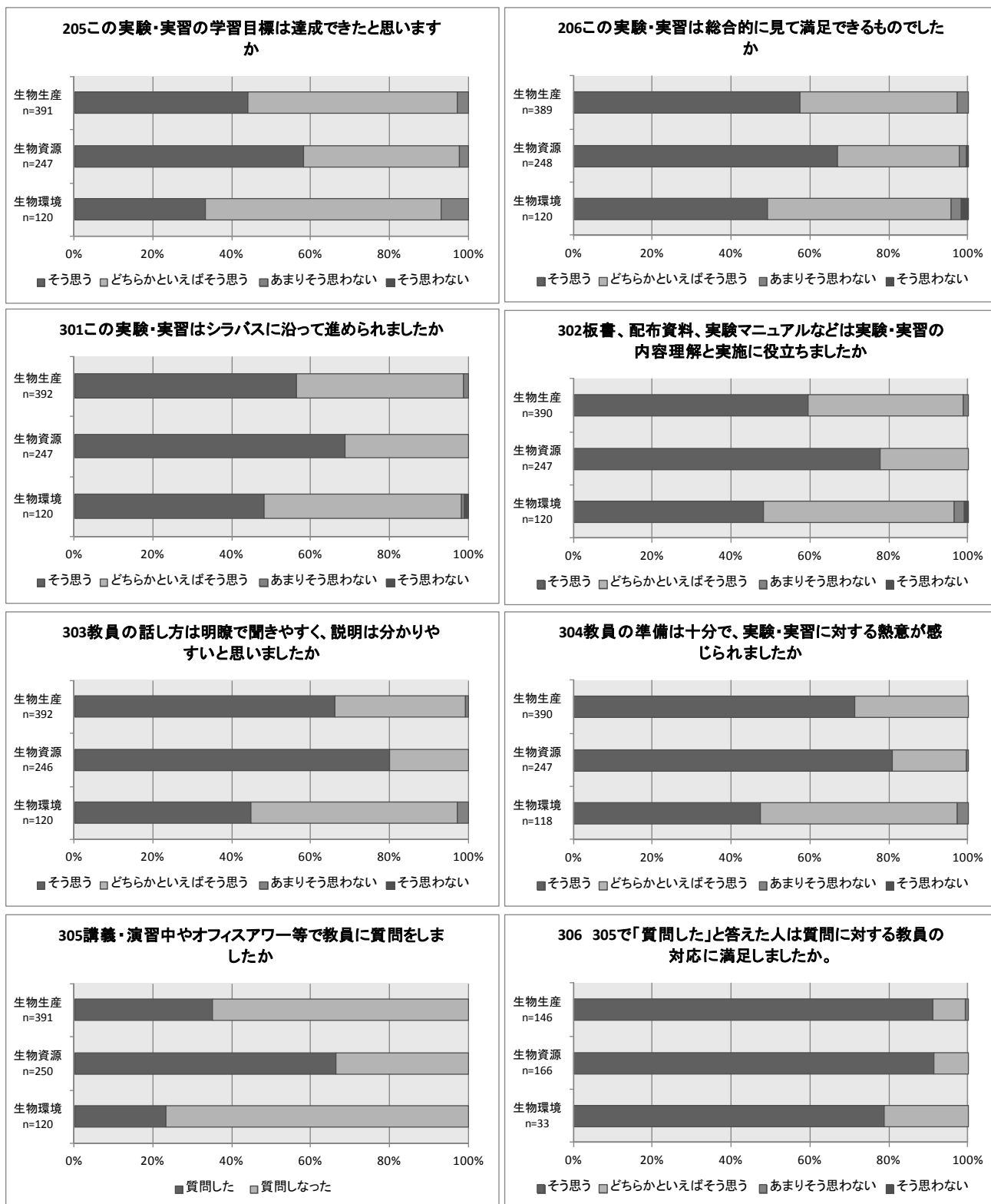


図 4. 平成 28 度前期 授業評価アンケート（実験・実習）の学科間比較[質問 205-306]

1-2) -d 結果と考察（アンケートの各設問への回答間の相関関係）

学生個人単位での各質問項目間の相関関係（図5上段、図6上段）

個人単位の質問項目間の相関関係を求めることで、学生個人にとって各質問項目が互いにどういった関係性を持ったものなのか、学生の中にある一般的な傾向を知ることができる。図5（講義・演習）図6（実験・実習）の上段の相関行列は回収された2,545件、776件のアンケート回答を分析した結果である（無回答含む）。

授業自体への評価・感想（質問201-207）の質問201、204、205、206、207は互いに相関係数0.5-0.6程度の正の相関を持っているものが多い。これらの間の因果関係は不明であるが、学生自身が“知力・学力の向上に役立つ”（講義・演習204、実験・実習204）、“将来役に立つ”（講義205）と思えば、あるいは“目標を達成した”（講義・演習206、実験・実習205）と思えば、“満足度”（講義207、実験206）は相対的に高いようである。この傾向は講義・演習でも実験実習でも同様であるが、実験・実習の方が相関係数はわずかに大きいようであり、“役立つ”と“満足”の関係が学生自身の実感としてより密接なものを読み取れる。

講義・演習の満足度（207）に対して教員の評価項目（301-306）で相関係数高かったのは302“板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか”と303“教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明は分かりやすいと思えましたか”の2項目であり、教員の熱意などよりも、現実的に授業理解に役立ったかどうかを学生が素直に評価していることが読み取れる。

学生自身の行動に関する項目（講義・演習101-103、実験・実習101-104）は特に講義・演習ではその他の項目と相関関係がなく、101“出席回数”、102“関連文献を読んだか”、103“どのくらい予習をしたか”などの学生の自主的な学習行動を伸ばす要因は見つけられない。実験・実習については305“教員に質問したか”と102“関連文献を読んだか”の間に弱い正の相関が認められた。ただし、質問があつて、関連文献を読んだのか、関連文献を渡されて質問に行ったのかなどの因果関係は不明である。また、101“出席回数”と302“板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか”にも弱い正の相関が認められた。これについても、因果関係は不明だが、教材の重要性は実験の方が高いことを間接的に示しているのかもしれない。

305“教員に質問したか”と306“教員の回答に満足したか”については講義・演習でも実験・実習でも学生個人レベルではほとんどの質問した学生が満足しているため、相関係数は生の大きな値となっている。

授業科目単位での各質問項目間の相関関係（図5下段、図6下段）

授業科目単位の質問項目間の相関関係を求めることで、受講生全体の平均的な満足度や役立つ実感が高かったり、学生の自習時間が長い授業には、教員のどのような努力が効果的なのかを推測することができる。図5（講義・演習）、図6（実験・実習）の下段の相関行列は、それぞれ回収された講義演習68科目各科目の平均値 および実験実習30科目の各科目平均値の相関を分析した結果である（無回答含む）。

講義・演習科目における授業自体への評価・感想(質問 201-207)の 質問 201、204、205、206、207 は互いに相関係数 0.55-0.9 程度の正の相関を持っているものが多く、学生個人単位で見場場合よりも相関係数が高くなっている。この傾向は実験・実習科目の質問 201、204、205、206 でも同様であり、新しい関心が生まれた科目 (201) については、学力向上の役に立つと感じたり (204)、達成感があったり (205) して、最終的な満足度 (207) も高いものと推測される。

一方、学力向上の役に立ったり (204)、最終的な満足度 (207) が高いのは、どのような授業担当教員への評価・感想 (301-306) に起因するのかを両者の相関関係から考察すると、204、205、206、207 のどの項目についても、302 “板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか” と最も高い正の相関が得られている。またそれに続く、担当教員への評価としては、301 “この実験・実習はシラバスに沿って進められましたか”、303 “教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明は分かりやすいと思いましたが”、304 “教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか” の3項目がほぼ同等で質問項目 204-207 と比較的高い正の相関が得られている。また、これらの項目は 201 “この実験・実習から新しい関心が生まれ、関連分野の勉強をしたくなりましたか” とともに高い正の相関を示しており、学生は教員が丁寧かつ熱心に授業をしているかを見て、それに強い影響を受けていると推察される。

ただし、これらの傾向に対して、講義・演習科目の 101-103、および実験・実習科目の 101-104 の授業を受けた学生自身の出席、自習行動に関する項目は、これら担当教員への評価 (301-306) とは関係なく、相関関係が認められない。特に、出席率とはいずれの項目も全く相関関係が認められなかった。今回、唯一弱い相関関係が認められたのは、実験・実習科目の個人別相関でも弱い相関が認められた、305 “教員に質問したか” と 102 “関連文献を読んだか” の間である。また、講義・演習の授業への評価感想 (201-207) との相関では、103 の “予習復習時間” が 204 “知力学力の向上に役立ったか” と弱い正の相関があった。これは、宿題をたくさん出した結果、予習復習時間が伸びて役立つと思うようになったのか、あるいは、役立つと思ったから予習復習時間を取ったのか、因果関係が不明である。

1-2) -e 相関分析の結論

全体としてみれば、301 “この実験・実習はシラバスに沿って進められましたか”、302 “板書や使用した教科書と教材は授業の理解に役立ちましたか”、303 “教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明は分かりやすいと思いましたが”、304 “教員の準備は十分で、授業に対する熱意が感じられましたか”

の4項目でよい評価が得られるよう丁寧に熱心に行われた授業は学生の関心が上がり、役に立つと思え、満足度が向上する。ただし、学生が自ら文献を調べるようになったり、予習・復習の自習時間が延びるようになるためには、これらの努力では足りず、今回のアンケートで検出できていない他の要素をもって、授業の工夫をする必要があるものと推察された。

H28前期 学生個人別相関(講義・演習)																
	101	102	103	201	202	203	204	205	206	207	301	302	303	304	305	306
101	1.00															
102	0.02	1.00														
103	0.05	0.32	1.00													
201	0.10	0.24	0.21	1.00												
202	-0.02	0.17	0.18	0.17	1.00											
203	0.01	0.11	0.16	0.01	0.35	1.00										
204	0.09	0.20	0.20	0.51	0.21	0.03	1.00									
205	0.08	0.21	0.16	0.51	0.19	0.01	0.59	1.00								
206	0.17	0.16	0.17	0.45	0.12	-0.03	0.46	0.48	1.00							
207	0.08	0.19	0.15	0.50	0.15	-0.06	0.56	0.55	0.60	1.00						
301	0.07	0.09	0.06	0.31	0.16	0.06	0.36	0.36	0.40	0.46	1.00					
302	0.08	0.13	0.11	0.39	0.15	-0.01	0.50	0.45	0.46	0.57	0.48	1.00				
303	0.02	0.12	0.12	0.37	0.12	-0.08	0.45	0.43	0.41	0.55	0.44	0.57	1.00			
304	0.06	0.13	0.08	0.32	0.15	0.03	0.39	0.39	0.36	0.46	0.44	0.47	0.58	1.00		
305	0.03	0.24	0.21	0.14	0.10	0.01	0.14	0.15	0.13	0.16	0.11	0.13	0.14	0.16	1.00	
306	0.00	0.21	0.20	0.12	0.08	-0.03	0.10	0.11	0.11	0.13	0.07	0.08	0.11	0.11	0.96	1.00

H28前期 科目別相関(講義・演習)																
	101	102	103	201	202	203	204	205	206	207	301	302	303	304	305	306
101	1.00															
102	0.04	1.00														
103	0.16	0.61	1.00													
201	0.02	0.20	0.33	1.00												
202	-0.05	0.33	0.45	0.13	1.00											
203	0.06	0.20	0.27	-0.20	0.50	1.00										
204	0.14	0.34	0.53	0.77	0.25	-0.20	1.00									
205	0.02	0.26	0.35	0.76	0.07	-0.27	0.81	1.00								
206	0.17	0.23	0.28	0.69	-0.18	-0.31	0.68	0.64	1.00							
207	0.04	0.17	0.31	0.78	-0.04	-0.34	0.82	0.75	0.83	1.00						
301	0.14	0.18	0.26	0.70	0.16	-0.11	0.72	0.62	0.58	0.72	1.00					
302	0.05	0.10	0.28	0.74	0.06	-0.28	0.83	0.67	0.73	0.90	0.77	1.00				
303	0.00	0.13	0.27	0.65	-0.04	-0.41	0.74	0.64	0.61	0.81	0.67	0.82	1.00			
304	0.13	0.24	0.27	0.66	0.13	-0.17	0.71	0.65	0.55	0.74	0.73	0.79	0.82	1.00		
305	-0.04	0.52	0.47	0.24	0.38	0.10	0.33	0.34	0.21	0.24	0.20	0.23	0.25	0.33	1.00	
306	-0.04	-0.08	-0.12	0.00	0.10	-0.04	-0.09	-0.01	-0.01	-0.02	0.08	-0.01	0.12	0.05	0.09	1.00

図5. 平成28年度前期 授業評価アンケート(講義・演習)の全質問項目間の相関係数(上段: 学生個人別相関、下段: 授業科目別相関関係)
セルの塗りつぶし: 赤: $r \geq 0.8$ 、褐色: $0.8 > r \geq 0.7$ 、黄: $0.7 > r \geq 0.6$ 、薄い黄: $0.6 > r \geq 0.5$

H28前期 学生個人別相関(実験・実習)																
	101	102	103	104	201	202	203	204	205	206	301	302	303	304	305	306
101	1.00															
102	0.38	1.00														
103	0.16	0.38	1.00													
104	0.25	0.31	0.33	1.00												
201	0.39	0.41	0.23	0.43	1.00											
202	0.48	0.47	0.25	0.28	0.44	1.00										
203	0.42	0.47	0.25	0.25	0.42	0.67	1.00									
204	0.43	0.46	0.27	0.33	0.59	0.50	0.48	1.00								
205	0.45	0.46	0.27	0.38	0.62	0.45	0.46	0.67	1.00							
206	0.43	0.45	0.22	0.36	0.66	0.44	0.43	0.69	0.73	1.00						
301	0.42	0.42	0.26	0.35	0.55	0.46	0.47	0.60	0.64	0.66	1.00					
302	0.51	0.45	0.28	0.35	0.55	0.51	0.51	0.63	0.64	0.68	0.64	1.00				
303	0.48	0.44	0.20	0.29	0.55	0.48	0.50	0.64	0.64	0.69	0.65	0.73	1.00			
304	0.46	0.46	0.23	0.32	0.56	0.49	0.51	0.66	0.66	0.68	0.67	0.72	0.76	1.00		
305	0.43	0.50	0.26	0.27	0.49	0.46	0.49	0.51	0.50	0.52	0.51	0.57	0.56	0.58	1.00	
306	0.13	0.19	0.13	0.04	0.22	0.12	0.09	0.22	0.22	0.24	0.19	0.29	0.26	0.30	0.73	1.00

H28前期科目別相関(実験・実習)																
	101	102	103	104	201	202	203	204	205	206	301	302	303	304	305	306
101	1.00															
102	-0.11	1.00														
103	0.03	0.64	1.00													
104	-0.30	0.47	0.34	1.00												
201	0.00	0.16	-0.10	0.41	1.00											
202	0.26	0.19	-0.05	-0.36	-0.08	1.00										
203	0.25	0.31	0.39	-0.24	-0.26	0.50	1.00									
204	0.17	0.39	0.22	0.32	0.73	-0.08	-0.16	1.00								
205	0.24	0.18	0.12	0.38	0.67	-0.33	-0.17	0.72	1.00							
206	0.08	0.31	0.08	0.37	0.80	-0.17	-0.24	0.85	0.83	1.00						
301	0.22	0.27	0.26	0.44	0.46	-0.33	-0.19	0.68	0.79	0.74	1.00					
302	0.16	0.33	0.18	0.49	0.67	-0.18	-0.22	0.82	0.83	0.82	0.81	1.00				
303	0.25	0.20	-0.17	0.33	0.74	-0.08	-0.25	0.72	0.77	0.77	0.62	0.82	1.00			
304	0.14	0.15	-0.19	0.33	0.69	-0.07	-0.35	0.66	0.71	0.78	0.64	0.82	0.91	1.00		
305	0.27	0.22	0.04	0.11	0.45	-0.06	-0.16	0.61	0.64	0.55	0.61	0.75	0.72	0.65	1.00	
306	0.46	0.20	0.28	0.04	0.11	0.29	0.19	0.10	-0.07	0.01	0.00	0.09	-0.01	-0.01	-0.05	1.00

図6. 平成28年度前期 授業評価アンケート（実験・実習）の全質問項目間の相関係数(上段：学生個人別相関、下段：授業科目別相関関係)
セルの塗りつぶし：赤： $r \geq 0.8$ 、褐色： $0.8 > r \geq 0.7$ 、黄： $0.7 > r \geq 0.6$ 、薄い黄： $0.6 > r \geq 0.5$

第2節 全学 FD 活動への参加

今年度も全学 FD 委員会開催の学生・教職員ワークショップに教員4名が参加した。以下に平成28年10月25日開催の生・教職員ワークショップ「授業アンケートの結果をどう授業に活かすか」に参加した教員の感想を掲載する。

学生・教職員ワークショップ「受講生が積極的に発言・行動する授業へのヒント ～番組司会の経験からのアドバイス～」に参加して

生物生産学科 坂巻祥孝

平成28年10月25日、「受講生が積極的に発言・行動する授業へのヒント ～番組司会の経験からのアドバイス～」というテーマの下、学生教職員ワークショップが郡元キャンパス学習交流プラザ2階 学習交流ホールで開催され、東京のテレビ局で活躍されているアナウンサーの方に、ご講演いただき、「受講生が積極的に発言・行動する授業」のためのアドバイスを教員・学生向けにいただいた。

通常、会場に手を挙げさせても、手はあがらない。これは「こんなこと言っても良いのかな？」「あんなこと言って失敗だったかな？」と会場の参加者が思うからであって、マイクを向けるとそのような人もしゃべることができる。ことをその場で実演いただいた。そして、「失敗こそ宝である」、「つかみ」「柱」を意識して授業を組むと良いことも、講演の中から学べた。

その後のワークショップでは、各班の発表内容を取りまとめると、受講生が積極的に発言する授業のために(1)話しやすい授業の雰囲気づくり、(2)質問しやすい仕組み、(3)情報量過多による一方的授業の回避、(4)学生の力を引き出す仕組み、という4項目が大切であるという結論であった。また、具体的に対策として、多くの班が着目したのは雰囲気づくりのための、「つかみ」や学生同士の「グループワーク」の採用である。また、情報量過多の対策として予習復習の大切さやコミュニケーションペーパーの利用、とともに、教員が我慢して授業の時間を削り学生たちに話し合わせ考えさせる時間を取るというアイデアなども挙げられた。

このワークショップこそ、学生と教員が入り混じった、まさに「受講生が積極的に発言・行動する授業」になっていたと、アナウンサーの講師の先生がおっしゃっていた。その通りであり、この講師の先生がたった40分の講演で作られた、この会場の雰囲気作りがとても効果的であったと思った。

水産学部・ 水産学研究科



よりよい教育環境を創るために

学生と教職員による、学生のための
ファカルティ・ディベロップメントの取り組み



2016

鹿児島大学水産学部 FD 委員会

1. はじめに

鹿児島大学水産学部および大学院水産学研究科では改組に伴って、平成27年度から新しいカリキュラムが始まりました。大学院（修士課程）では、グローバル化の一環として熱帯水産学国際連携プログラムが創設され、フィリピン大学ビサヤス校、タイ国カセサート大学、インドネシア国サムラトランギ大学、マレーシア国トレンガヌ大学、ベトナム国ニャチャン大学の水産学系研究科と連携して、現在6ヶ国6研究科で運営がされています。いずれも今年度で2年目を迎え、平成29年3月には、熱帯水産学国際連携プログラムに登録した学生が初めて修了しました。

このような新しい取り組みが順次行われる中、平成28年度FD委員会では、学生から如何にして忌憚のない意見を吸い上げるか、また、収集した意見の分析結果を速やかに担当教員に伝え、授業改善に役立てるかを課題として活動に取り組んできました。教職員を対象とした研修では、学生の立場に立って改めて就職活動を見直す講演会を開催したり、新カリキュラムについて自由な意見交換を行うワークショップを開催いたしました。この一年間のFD委員会の活動を振り返り、以下のようにとまとめました。

2. 授業アンケートと授業改善

FD委員会では受講生に対し、各学期末に授業アンケートを行っています。受講生の抱く満足度を計ることを中心に据えた質問を設定し（表2.1）、回答の集計結果から各科目の評価を行いました。ここでは、平成27年度後期および平成28年度前期の授業アンケートについてまとめます。

授業アンケートでは、受講生の満足度に応じ、満足した点あるいは満足できなかった点について具体的な記述ができる様式になっています。各質問項目における科目の平均値を図2.1～図2.2に示します。平成27年度後期、平成28年度前期ともに科目種（講義・演習、実験・実習、乗船実習）別の満足度（Q2）では、いずれの科目種でも「授業内容に満足した」と答えた割合は80%を超えており、ほとんどの受講生が学部で開講している科目に満足していることがわかります。一方で、「授業内容に満足した」よりも「授業内容に満足していない」と答えた割合が高い科目もあったことから、これらの科目では授業アンケートの回答をもとに授業改善を行う必要があります。

講義・演習科目と実験・実習科目では、受講の動機を尋ねる質問において平成27年度後期、平成28年度前期ともに「必修科目だから」、「単位修得のため」と答える割合が高くなっています。Q2で「授業内容に満足した」と回答した受講生がQ3の「特に満足した点」については「興味や関心を抱かせる内容だった」を回答する割合が比較的高いものの、他の回答との差はあまり無く、履修の動機が積極的でなくても教員の説明のわかりやすさが授業内容の理解につながり、その結果、受講生の興味や関心を呼び起こして学習意欲をかきたてた、ということが窺え、教員の指導方法の改善に対する効果が現れていたことが示唆されます。乗船実習科目では、必修の有無で履修した動機に違いが現れますが、講義・演習科目などと比べると興味を持って履修・乗船し、満足度も高いことがわかります。

講義・演習科目で「授業内容に満足していない」と答えた受講生の中で、講義への取り組みが積極的であったかどうか（Q4-1）については回答にばらつきがみられました。また、満足できなかった点（Q4-2）は回答率から「内容がよく理解できなかった」、「興味や関心がわからない」、「教員の説明がわかりにくい」が主です。Q4-2の記述欄には、パワーポイントのスライド送りが速い、内容が難しすぎる、など授業についていけないことを窺わせる意見もありました。満足できなかったと回答した受講生のうちの約半数は、Q4-1の「この科目の学習に積極的に取り組んだか」という質問に対し積極的に取り組んだと回答しています。必修科目として履修したが授業内容が理解できず、それでも必修だからと頑張ったが何かを得られたという実感なく不全感だけが残る結果になったと推察できます。分野分属以降の必修科目でこのような受講生をどのようにサポートするかが課題であると思います。

実験・実習科目では平成28年度前期で満足できなかったとの回答があり、満足できなかった点にはばらつきがありますが、「教員の説明がわかりにくかった」「教員からのアドバイスやサポートがなかった」と答えた割合が若干高いです。授業内容に満足した点（Q3）で「教員からのアドバイスやサポートがあった」の回答が多かった授業は、複数の教員、技術職員、TAが指導にあたる演習や実験・実習、ミニツツペーパー、Moodleやメールで学生とやりとりをしている講義、乗船実習などでした。満足度が低い受講生のみならず全体の満足度を上げるには、演習・実験・実習での複数指導、質問をする手段を口頭以外にも設ける、ミニツツペーパーなどで受講生の授業の理解度をモニタリングする、などが有効であると考えられます。

授業アンケートの集計は従来、FD委員会が行っていましたが、集計作業に時間を要するために担当教員が期末の講義終了後にアンケート結果を速やかに確認し授業改善に役立てることができるかというところとそうでない場合もありました。そこで、平成28年度後期からアンケートを紙媒体からMoodleに全面移行し、担当教員がリアルタイムでアンケートの回答結果を把握し、授業改善に役立てられるようにしました。また、アンケートのMoodleへの全面移行にともない、満足度を計ることを中心に据えた質問設定から、アンケートの項目と記述回答を増やして受講生から多くの具体的な意見を収集し、授業改善に役立てられるような質問設定に変更しました。授

表 2.1 水産学部授業アンケートの質問項目

Q1. 科目を履修した動機（複数選択可）	
(答) この授業に興味を持ったので	回答 1
この授業に学習意欲がかき立てられたから	回答 2
履修しやすい曜日や時間帯だったから	回答 3
必修科目だから	回答 4
単位修得のため	回答 5
Q2. 授業内容に満足した はい or いいえ	
「はい」の場合→Q3へ	
「いいえ」の場合→Q4-1、Q4-2へ	
Q3. 特に満足した点（複数選択可）	
(答) この授業は興味や関心を抱かせる内容だった	回答 1
この授業によって学習意欲がかき立てられた	回答 2
授業の内容が理解できた	回答 3
教員の説明がわかりやすかった	回答 4
学習について教員からのアドバイスやサポートがあった	回答 5
その他	回答 6
Q4-1. この科目の学習に積極的に取り組んだか	
(答) 強くそう思う、そう思う、あまりそう思わない、そう思わない	
Q4-2. 満足できなかった点（複数選択可）	
(答) 授業の内容がよく理解できなかった	回答 1
授業の内容に興味や関心がわかかなかった	回答 2
教員の説明がわかりにくかった	回答 3
学習について教員からのアドバイスやサポートがなかった	回答 4
その他	回答 5

業アンケートの Moodle での実施については、学生部教務課の特任専門員（Moodle 担当）である榮徳啓介氏に大変ご尽力いただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。

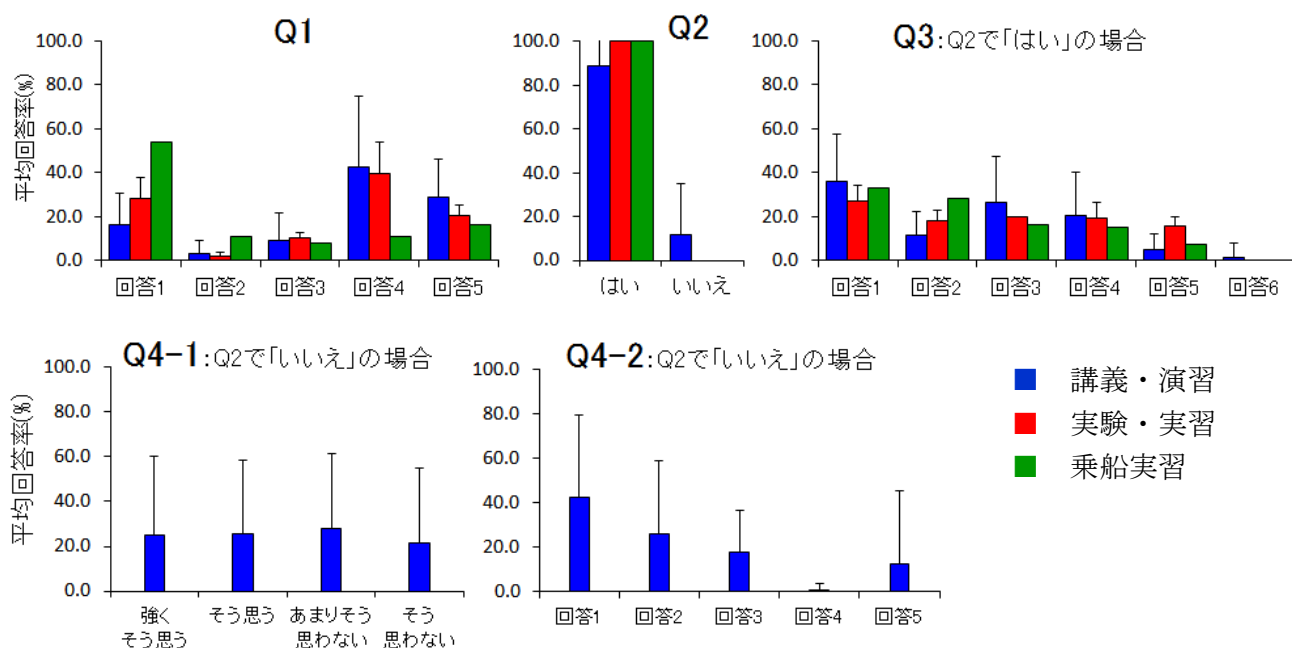


図 2.1 平成 27 年度 後期開講科目の授業アンケートの集計結果

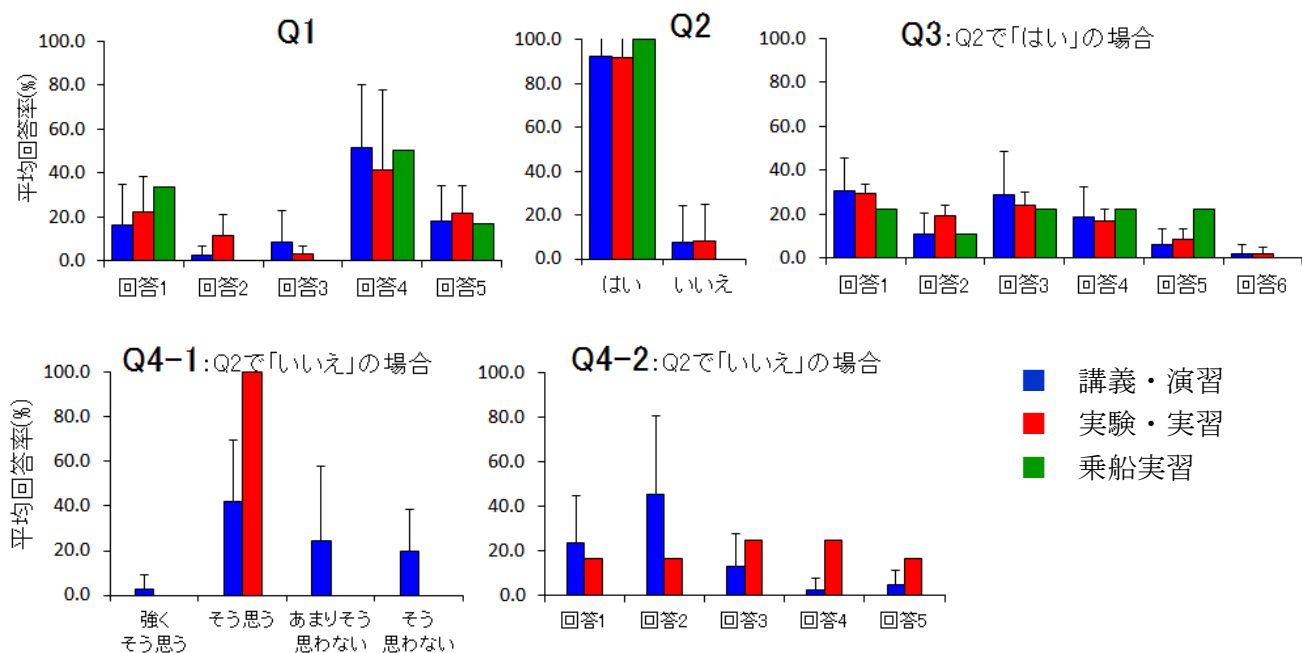


図 2.2 平成 28 年度 前期開講科目の授業アンケートの集計結果

3. 授業公開・参観と授業改善

授業公開については昨年度までと同様に、はじめに全教員を対象としたアンケートを通じて授業公開科目を募り、授業公開科目リストを作成、周知して授業公開を実施しました。平成28年度前期、サマーセッション、後期では、下記に示す合計36科目で授業公開が行われました。

前期（計15科目）

プランクトン学、生物海洋学、養殖経済論、漁具漁法学、資源生産管理学、資源生産管理学
海洋生態学、電子工学基礎、基礎水産資源学、食品衛生学、水産資源生物学、水産生物学
水産生物学、水産物流通論、水産政策論

サマーセッション（計7科目）

Management of Tropical Fisheries、Aquatic Sciences、Fisheries Resource Sciences
Aquaculture、高度分析・調査実習 CHE、高度分析・調査実習 BBI、高度分析・調査実習 BCH

後期（計14科目）

藻類学、資源利用管理学、資源利用管理学、分子生物学、水産商品需給論、フードビジネス論
水産増養殖学、水産経済学、水産マーケティング論、公衆衛生学、水産科教育法2
科学英語（漁業工学分野・漁業生産サブ）、実験計測機器基礎、数理資源学演習

授業公開に関するアンケートに関しては、従来の様式では質問項目が複雑で回答するのに時間を要するとの意見があったことから、FD委員会で検討して質問項目を必要最小限に留め、「参観可能日」と「授業の特徴や参観時のポイント」の2項目のみに簡素化して、後期から新しい様式に変更しました。これにより、FD委員会で作成する授業公開リストの作成も容易になりました。

授業公開に関するアンケートは教員宛メールを通じて複数回実施したり、FD委員が同じ分野に所属する教員や身近な教員に直接働きかけたことで、授業公開に応じてくれる教員は少なくなく、また、授業参観日はいつでも可能であるとの回答がほとんどを占めました。しかしながら、実際に授業参観が行われたのは前期で1科目のみであったことから、サマーセッションではFD委員自らが授業参観に参加して改善方法を検討しました。FD委員会での議論では、「90分間の授業（実験科目では180分間）をすべて参観するのは時間的な負担が大きく、ついつい後回しになってしまう。」などの意見があり、それに対する改善策として「授業の一部のみを参観して、授業参観した教員と科目担当教員の間でのディスカッションに重点をおいた方がより効果的である。」との提案もありました。後期の授業公開では授業参観数を増やすために、「教員数削減の中での大学教育の質の保証と向上」というテーマで平成29年2月にFDワークショップを実施することを案内し、各分野で新カリキュラムについての議論が授業参観を通じて活発になるように積極的に働きかけましたが、実際に授業

参観をした教員は4人に留まりました。近年、教員数が削減される中で、ますます教員の業務が多忙になる中で、授業参観数を増やすのは困難なことであり、今後の課題として残されました。

4. FD 講習会「水産学部の就活～その現実と課題」

平成29年1月18日に教職員を対象とした研修会としてFD講演会を開催し、「水産学部の就活と教員の役割」と題して水産経済学分野の佐野雅昭教授にお話をして頂きました。講演では(1)水産学部の就職実態、(2)水産業界が求める人材像、(3)教員が留意すべき事項の3つについて順を追って解説されました。

講演では、まずかかる3つの前提として、大学教育における就職活動の重要性を再認識するために、大学生活が就業による自己実現をはかり、社会人として活躍するための準備期間であり、学生には常に就職を意識した行動や学習が期待されることが強調されました。また、大学教員は就職という教育成果が客観的に示されることを常に意識すべきであるとの指摘がありました。

こうしたことを踏まえた上で、(1)水産学部の就職実態を概観すると、おおむね専門性を活かした就職を実現できている学生像が浮かび上がり、2011～2015年度の業界別就職動向では、食品製造・食品流通産業への就職が43.1%、漁業・養殖業関連が9.1%、環境関連産業が4.9%、水産系公務サービス・団体が6.0%、教員(水産・その他)が3.5%などとなっていることが報告されました。ただし、現状では水産学部生はおおむね専門性を活かした就職が可能となっているものの、直近の動向として、就職活動が短期集中型へとシフトし、幅広いエントリーや、じっくりと企業研究する時間が減っていることから、学生・教員には、早期の準備を整えることが求められることとなります。

(2)水産業界が求める人材像とは、水産学部が卒業生や水産系企業に対して実施したアンケートを分析した結果、複数の専門知識を有した人材であり、そのためには食品業界の動向を理解しており、食品衛生学や水産経営学の知識があることは必須との説明がなされました。それ以外にも、ビジネスパーソンとしての基礎が完成されていることが重要視され、明るさ、活力、誠実さ、積極性、実行力、柔軟性、文章作成能力などがキーワードになっているとのことです。

以上の点を後景として、(3)教員が留意すべき事項としては、学生の就職活動の支障となるような研究室運営および研究活動は控える必要があること、また、大学院への進学者を優先した研究室運営や、就活スケジュールを無視した研究計画の作成、学生の希望を考慮しない卒論指導などは特に問題が大きいことが指摘されました。以上をまとめると本講演会



を通じて、最後の教育機関である大学では、学生の就職を改めて重視した教育体制を構築することが何よりも重要であることが提案されたといえます。

なお、FD 講習会には合計で 58 人の参加者があり、その内訳は教員 45 人、事務職員 7 人、技術職員 6 人で、専任教員の出席率は 83% でした。

5. FD ワークショップ「教員数削減の中での大学教育の質の保証と向上」

平成 29 年 2 月 6 日に教職員を対象とした FD ワークショップを開催し、「教員数削減の中での大学教育の質の保証と向上」のテーマの下、参加した教職員が 6 つのグループに分かれてディスカッションを行いました。まず初めにアイスブレイキングを兼ねて、各参加者が“KATARUTA”（カードゲームの一種）を使いながら現カリキュラムに関する意見を述べ、その後具体的な議論に移りました。議論では、効率的なカリキュラムや講義方法、新カリキュラムの問題点、退職教員の担当科目の引継ぎ方法、オムニバス形式の講義の問題点について集中的に行われ、グループディスカッション後の報告会では各グループより様々な意見が発表されました。多くのグループから、講義に対する教員の負担が増加する中では講義の統廃合が主な解決策と意見が出る一方で、受講人数の増加による講義の質の低下、科目数減少による各分野の人材育成目標の達成が難しくなる、などの問題点も提起されました。また他学部との合同科目の設定や非常勤職員の積極的な採用などの意見も提案される一方、現教員の講義内容の改善や指導力の向上を促すことで科目数を減らさずに対応できるのではないかという意見も出されました。特にグローバル化に伴う英語開講での講義が増加している現状では、教員の技術向上が必要であると考えられます。

新カリキュラムの問題点については、これまでと同様に、カリキュラム変更後に入学した学生が卒業した後に検討すべきだという意見が出る一方、変化に対応するためには速やかに検討に入るべきだという意見も見られました。



退職教員が担当していた科目の引継ぎに関しては、教員が退職する前に引継ぎを確実に済ませておくこと、退職教員の非常勤講師としての活用すること、カリキュラム企画委員会が主導になって科目の継続についての検討をすることなどが対処法として挙げられました。またオムニバス形式の講義に関しては、講義内容を各教員間で擦り合わせた上でのシラバスの作成、学生の理解のために各担当教員が共通のテキストを使用するなどの提案がなされました。

最後に越塩学部長から、教育の負担が増加することによる研究力の低下は決して避けなければならないこと、学部における教育・研究の成果が今後の水産学部教員数の増減に繋がり、これが学部教育の質へ直結していることなどがコメントされました。

なお、FDワークショップの参加者は教員 37 人、事務職員 3 人の合計 40 人でした。

6. 大学院授業アンケートの実施

水産学部では、学部で開講される全科目について授業アンケートを行っています。一方で大学院修士課程では平成 25 年度から授業アンケートを実施しており、平成 26 年度には近年の留学生の増加なども考慮して、アンケートの質問項目を日英併記に変更しています。アンケートの様式を図 6.1 に示します。平成 27 年度からは、サマーセッションで来鹿した熱帯水産学国際連携プログラムの学生にも記入を依頼し、講義内容や英語での開講について貴重な意見を得ることができました。また、平成 28 年には Moodle により集計・分析を容易かつリアルタイムにして、担当教員自身でアンケートの結果を確認できるようにしたり、受講人数が少ない科目ではアンケートをなくしたりする等の工夫を行っています。

水産学研究科では英語による授業の割合が高く、英語による必修科目を日本人学生も受講します。「今まで学習してきた内容を改めて英語で学べた。」「専門用語の英単語がある程度わかるようになった。」等の肯定的な評価も多い一方で、「専門用語が多く、用語の解説が欲しかった。」「全てが英語なので、ある程度英語力がないと厳しい。キーポイントは簡単な英語で短く書いてあると理解しやすいと思う。」「テスト内容のアナウンスだけは日本語でしてほしいです。」等のアンケートを行わなければ教員が気づきにくい指摘もありました。また、実用的な英語能力を養成する科目も設定しており、「日常で英語を話す機会があまりないので、その機会を得られたことがまず第一に良かった。また、自分の考えを英語でまとめるというのが身になった。」等の評価を得ています。

水産学部および水産学研究科では改組を行っており、例えば、平成 26 年度以前入学生では 3 分野に分かれていた組織の一部が融合して平成 27 年度入学生以降、新たな分野になりました。平成 30 年度入学生までは、学部卒業時の所属分野より広い範囲で研究科の授業を受講することになります。当該分野の研究方法を学ぶ特別指導の授業では「自分の分野のみならず、他分野の研究について学ぶことができた。他分野の研究は理解できない難しさだったが、勉強しなくてはならない(水産学を学ぶ学生としての)ので、よい機会となった。また、人に伝える技術を得ることができた。自分の研究をいかに専門用語を使わずに伝えるか、修業になった。」という意見がある一方、平成 27 年

度には「基礎知識を一切持っていない分野の話題は授業についていけなかったので、その点のフォローがあればよいかと思います。」という意見もありました。そのような意見を基に平成 28 年度の授業を行った結果、その分野の特別指導では否定的な意見が出なくなりました。

水産学研究科では修士論文研究や指導教員による総合型指導などで研究能力を個別の指導で高めるほか、各種授業でどのように教育効果をあげていくか、さらに検討が必要であると思います。

大学院水産学研究科 授業アンケート (Graduate school of fisheries class questionnaire)

このアンケートは、受講生の皆様とともに授業改善に取り組むための基礎資料として活用します。集計結果のみを授業担当者にお知らせしますので、回答内容が成績に影響することはありません。あなたの考えを率直に記入して下さい。(This survey will be used to improve the class. This survey will never be connected with your grading. Only a summary of the questionnaire will be given to the teacher.)

受講科目名： 学籍番号： 氏名：
(Class name) (Student number) (Name)

所属分野 (該当する□にレ点)： (Please check your field)

【平成 27 年度以降入生】

【平成 26 年度以前入生】

- 水圏科学 (Aquatic Science) 水産生物・海洋学 (Fisheries biology and oceanography)
 水産資源科学 (Fisheries Resource Sciences) 養殖学 (Aquaculture)
 水産食品科学 (Fisheries Food Sciences) 漁業工学 (Fishing technology)
 水産経済学 (Fisheries economics) 水産経済学 (Fisheries economics)
 水産環境保全学 (Aquatic Environment Sciences) 食品資源・利用学 (Biochemistry and
 その他 (Others) technology of marine food and resources)

上記の質問で、「その他」を選択した場合は所属大学・機関名を記入してください。

(Please type the name of University/Institution which you belong, if you check the "Other" in the above question.)

Q1. この科目を履修して良かったと思う点を自由に記述してください。

(Please describe the good points in this class freely.)

Q2. この科目の改善すべき点について自由に記述してください。

(Please describe the improvable points in this class freely.)

図 6.1 大学院修士課程の授業アンケート様式

7. 卒業時アンケート・修了時アンケート

水産学部では教育 PDM の中で掲げられている学部教育目標及び各分野のカリキュラム目標に対する達成度の調査として、卒業時アンケートを卒業式直前に実施しています。アンケートでは、学部教育目標及び各分野のカリキュラム目標に基づく質問、及び卒業後の進路決定に際して情報収集や相談をどのようにして行ったかを合わせて質問するような設問としました。平成 25 年度から大学院生に対しても修了時アンケートを実施しました(学部回答者数 107 名、修士回答者数 27 名)。ここでは、平成 27 年度の卒業時・修了時アンケートについてまとめます。

卒業時アンケート及び修了時アンケートの設問項目を図 7.1 及び図 7.2 に示します。各質問は「①十分にそう思う」「②ある程度そう思う」「③少し思う」「④全く思わない」の 4 段階で評価してもらいました。項目 A では学部の教育目標に対する満足度を図るために全員共通で 6 つの質問を行い、項目 B では国際化に関する質問(平成 26 年度から追加)を、項目 C は就職・進学に関する質問、項目 D では分野ごとに質問を変えて、満足度を 4 段階で評価してもらいました。アンケートは、項目 A、B、C は全体で、項目 D は分野ごとに集計しました。結果を図 7.3 及び図 7.4 に示します。

項目 A(教育目標)に関する質問では、「少し思う」を加えると、全体として教育目標に掲げた各能力を修得できたと考える学生がほとんどでした。しかし、質問 A-2「地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する知識を修得した」及び A-3「基礎学力が身につく、生涯学べる能力を習得した」に関しては、平成 26 年度調査と比較して、「①十分にそう思う」、「②ある程度そう思う」と回答した学生の割合はほぼ変わらないものの、「①十分にそう思う」の割合が卒業生、修了生とも減少しており、知識の習得に対する学生の自信のなさが示唆されます。平成 27 年度のみ傾向であるのか、次年度以降の結果も踏まえて、今後検討が必要であると思われる。

質問 A-4 の「水産技術者として必要な英語能力が向上した」項目に対しては、昨年度と同様に「少しそう思う」「全く思わない」を選択する学部生が多いが、修了生では「ある程度そう思う」を加えた肯定的な回答数が半数を超えました。しかし、こちらでも「①十分にそう思う」と回答した修了生の割合は減少しており、次年度以降の傾向も踏まえて分析する必要があると考えられます。

国際化に関する項目 B の結果に関しては、卒業生、修了生ともに英語力の向上や異文化理解、国際交流に興味はあるものの(質問 B-13~B-17)、実際には取り組んでいない傾向(B-8~B-11)が見受けられました。また、昨年度と比較して質問 B-8~B-11 で「①十分にそう思う」、「②ある程度そう思う」と回答した学生が減少しており、自発的に参加しようとする学生が減少している傾向が伺えます。今後、国際交流に参加する機会を増やしていくことで、改善が期待できるのではないかと考えられます。

質問 C-18 の就職・進学に関しては、卒業生、修了生ともに傾向が似ており、「十分にそう思う」「ある程度そう思う」が 70%を超えており、希望する職種につくことができた学生が大半であると考えられます。また、今年度は修了生で「十分にそう思う」と回答した割合が半数を超え、就職セミナーなど就職支援に関する取り組みの効果が現れつつあると思われる。

以上から、卒業時・修了時アンケートの結果、学部・大学院の教育目標はおおむね達成できていると考えられます。

平成27年度 卒業時アンケート (学部生用) 学部生はこの面の質問に答えて下さい

1. (設問1) 学部生は①にマークし, 下記Aに進む. 大学院生は②にマークし, 裏面Aに進む

A. 水産学部が掲げる下記の教育目標について、貴方自身が修得できたかどうかを総合的な観点から評価してください。
①～④を選び、別紙のシートに数値をマークしてください。(設問2～7にすべて回答)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

質問項目 (全員回答)
2. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する知識を修得した
3. 基礎学力が身につく、生涯学べる能力を習得した
4. 水産技術者として必要な英語能力が向上した
5. 情報処理能力が身に付いた
6. 報告書作成、プレゼンテーション能力が身に付いた
7. 現場対応能力が備わった

B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。
評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問8～17にすべて回答)

8. 在学中に海外研修 (Advanced Lecture on Tropical Fisheries など) に参加しましたか?
9. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか?
10. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
11. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
12. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか?
13. これから、英語の力 (語学力) を伸ばしていこうと思いますか?
14. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか?
15. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか?
16. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか?
17. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか?

C. 就職・進学について、ご回答ください。(全員回答) (設問18に数値をマークしてください)
①十分にそう思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定

18. 貴方が修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた
--

D. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。
評価は、下に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。
(設問19～25のうち1つ選択)
①十分にそう思う (当てはまる) ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

専門分野別の質問項目 (1つ回答)
19. 水産生物・海洋学分野 水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれを取りまく海洋環境の両面から総合的に理解できる必要で実践的な知識・技術が身に付いた
20. 養殖学分野 水産生物の養殖分野において必要で実践的な知識・技術が身に付いた
21. 食品・資源利用学分野 食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
22. 漁業工学分野 漁業・船舶・海事分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
23. 水産経済学分野 水産物流通・経済関連の分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
24. 海洋センター 海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に必要で実践的な知識・技術が身に付いた
25. 水産教員養成課程 水産教員またはそれに近い分野の教員になるための必要で実践的な知識・技術が身に付いた

ご協力、ありがとうございました。

図 7.1 卒業時アンケートの様式

平成27年度 修了時アンケート (大学院生用) 院生はこの面の質問に答えて下さい

1. (設問1) 学部生は①にマークし、裏面Aに進む。大学院生は②にマークし、下記Aに進む

A. 水産学研究科が掲げる下記の教育目標について、研究科入学時と比較して貴方自身が修得できたかを総合的な観点から評価し、①～④を選び、別紙のシートに数値をマークしてください。(設問2～7にすべて回答)

①十分に思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

質問項目 (全員回答)

- | |
|--------------------------------------|
| 2. 地域・国際両面で、資源・環境・食料分野に関する高度な知識を修得した |
| 3. 基礎学力が向上し、生涯学べる能力を修得した |
| 4. 水産技術者として英語論文などの内容を正確に理解し、要約できた |
| 5. 情報活用能力が向上し、自ら学ぶ技術が身に付いた |
| 6. 調査・研究のプロセス全体を進めることができた |
| 7. 就職のメリットとなるビジネス知識等を学んだ |

B. グローバル化に関する考え、取り組みについて、ご回答ください。

評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください。(設問8～17にすべて回答)

8. 在学中に海外研修 (Advanced Lecture on Tropical Fisheries など) に参加しましたか?
 9. 在学中に英語の力を伸ばすための取り組みを何かしましたか?
 10. 在学中に、異文化理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
 11. 在学中に、他民族について理解を深めるための取り組みを何かしましたか?
 12. 入学前と比較して、英語の力は向上したと思いますか?
 13. これから、英語の力 (語学力) を伸ばしていこうと思いますか?
 14. これから、異文化理解を深めていきたいと思いますか?
 15. これから、他民族について理解を深めていきたいと思いますか?
 16. これからの就職先等では、国際的に活躍すること、または国際的な知識や理解が期待されますか?
 17. これから、国際的に活躍していきたいと思いますか?

C. 就職・進学について、ご回答ください。(全員回答) (設問18に数値をマークしてください)

①十分に思う ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない ⑤未決定

18. 貴方が修得した知識や技術が活かせて、希望する職種等に就職・進学できた

D. 貴方が所属している分野の項目についてのみ、ご回答ください。評価は、上に示した①～④を選んで、別紙のマークシートに数値をマークしてください (設問19～24のうち1つ選択)

①十分に思う (当てはまる) ②ある程度思う ③少し思う ④全く思わない

専門分野別の質問項目 (1つ回答)

- | |
|---|
| 19. 水産生物・海洋学分野
水圏資源生物の維持・管理を資源生物とそれをとりまく海洋環境の両面から総合的に理解できる高度で実践的な知識・技術を身に付けた |
| 20. 養殖学分野
水産生物の養殖分野において高度で実践的な知識・技術を身に付けた |
| 21. 食品・資源利用学分野
食品に関する利用開発・品質管理、バイオマス資源としての水産物の有効利用に高度で実践的な知識・技術を身に付けた |
| 22. 漁業工学分野
漁業・船舶・海事分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた |
| 23. 水産経済学分野
水産物流通・経済関連の分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた |
| 24. 海洋センター
海洋生態系の多様性あるいは漁場の環境保全、海洋環境の開発と管理に関する分野に高度で実践的な知識・技術を身に付けた |

ご協力、ありがとうございました。

図 7.2 修了時アンケートの様式

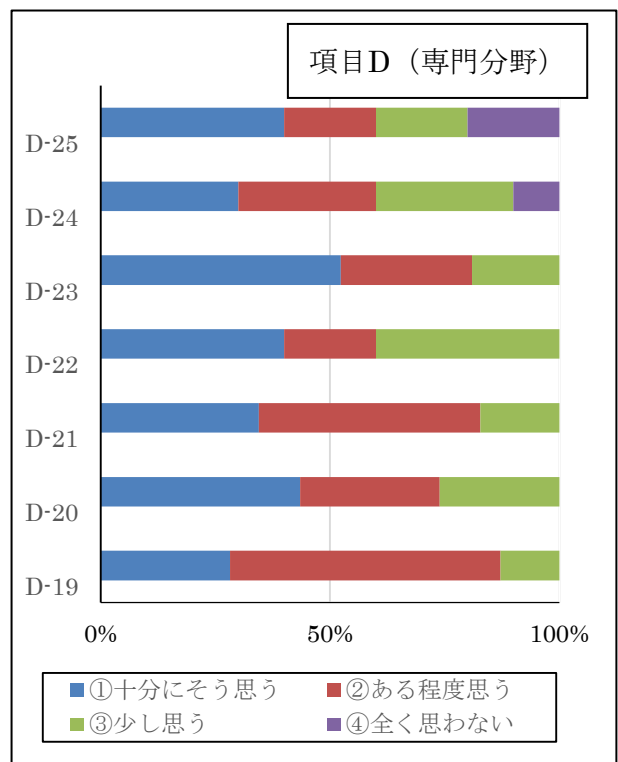
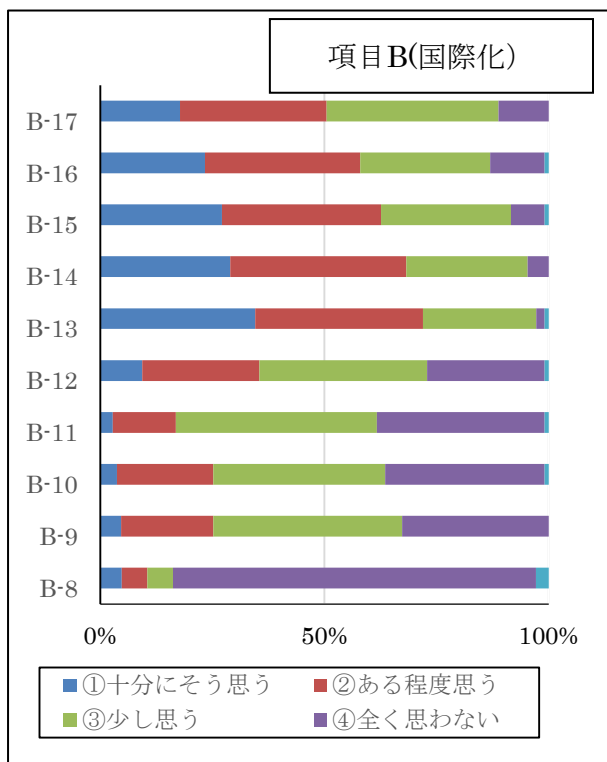
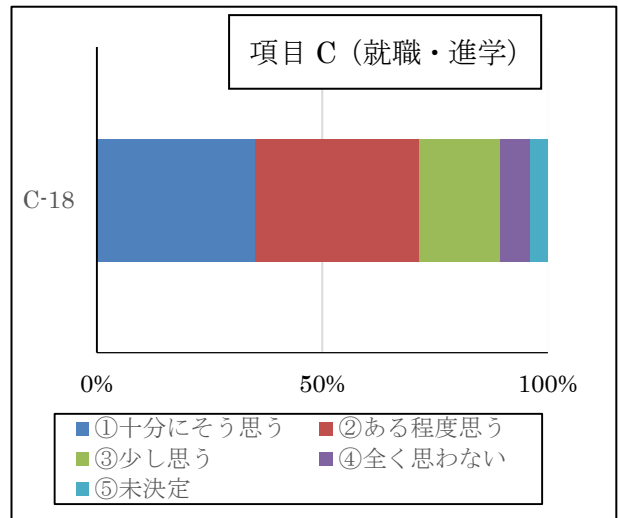
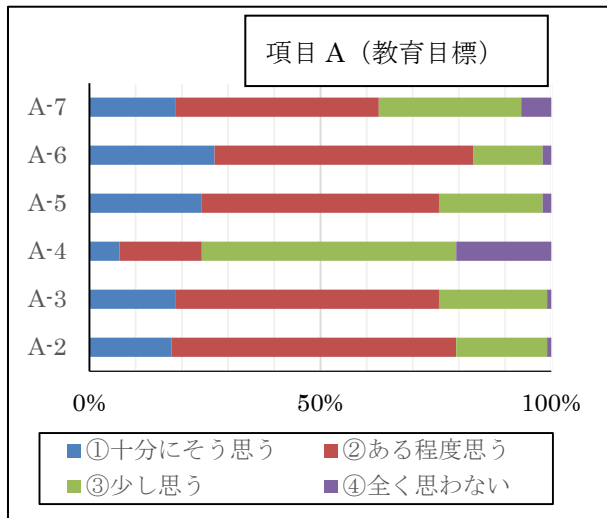


図 7.3 平成 27 年度卒業生に関する集計結果

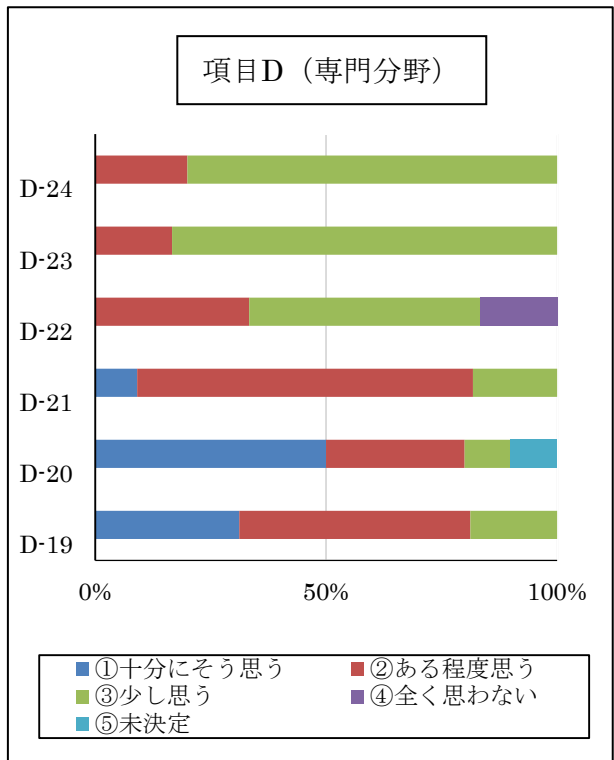
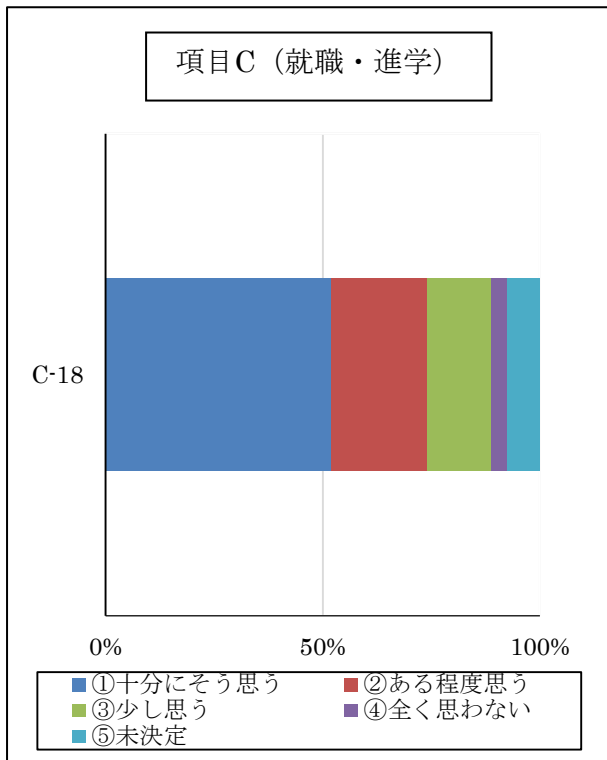
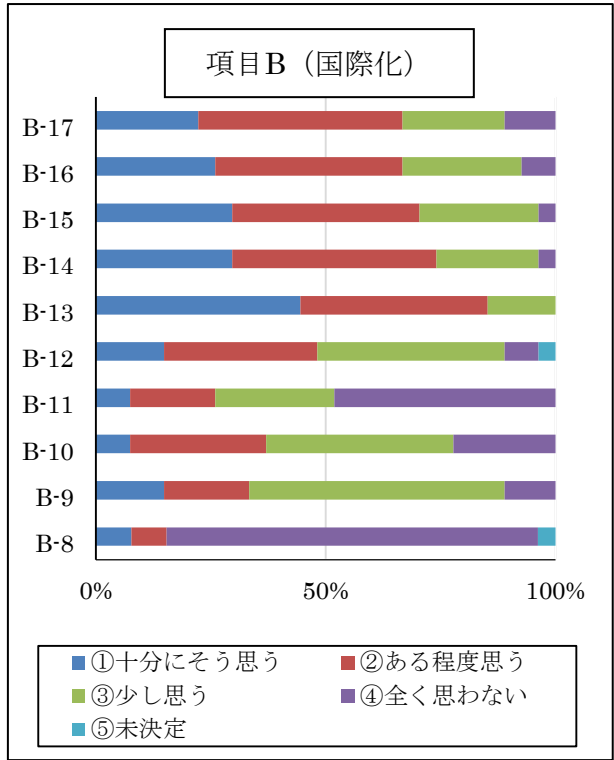
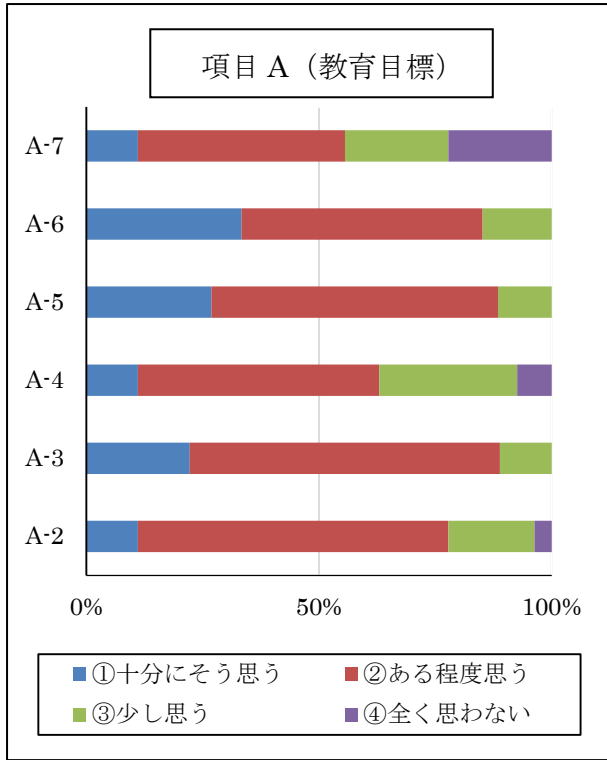


図 7.4 平成 27 年度修了生に関する集計結果

8. おわりに

平成 28 年度 FD 委員会では、委員会の業務を可能な限り簡素化するとともに、授業アンケート、授業公開、FD 講習会、ワークショップなどの結果を教育改善に速やかに、かつ、最大限活かせるような活動を行ってきました。

平成 28 年度後期からは「期末授業アンケート」の質問項目を受講生が回答しやすいように改善し、従来の紙媒体から Moodle に全面移行しました。また、平成 29 年度前期から授業開講期間中に担当教員が授業改善に取り組むことができるように「中間授業アンケート」を新しく導入することを決定し、そのための準備を進めました。

受講生が回答した授業アンケートの結果をもとに、各教員が作成する「授業改善報告書」についても、従来の紙面による提出を廃止し、すべて電子媒体での提出に変更しました。これまで提出された授業改善報告書は FD 委員会で保存されるだけで、あまり有効に活用されることがありませんでした。そこで、平成 28 年度後期からは水産学部ホームページの教職員専用サイトに掲載することにし、教員間で情報を共有して有効に活用できるようにしました。また、年度末に発行している FD 報告書（パンフレット）も印刷物での配布を廃止して、水産学部ホームページに掲載することに変更しました。

これらの取り組みによって FD 委員会の業務がずいぶん軽減されました。同時に、授業アンケート用紙の購入やアンケート集計作業のためのアルバイト雇用料などの経費を大幅に節減することができ、その代わりとしてアンケートデータを保存するパソコンの購入などに予算を有効に使うことができました。

「ネクタイを外して襟元を楽にして、若手からベテランの教員まで、そして事務職員、技術職員を含めた水産学部のすべての教職員でお互いの意見を尊重しつつ自由な雰囲気、学生の立場に立って議論し、新しいアイデアを取り入れながら教育改善を進めていく。」これが FD 活動の原点であると思います。FD 本来の活動が次年度以降もさらに活発化され、機能的に発展していくことが、今後の水産学部、水産学研究科の教育の質の向上に繋がると考えます。



編集：鹿児島大学水産学部 FD 委員会

委員長：江幡恵吾

副委員長：佐久間美明

委員：石川 学、塩崎一弘、仁科文子、佐々木貴文、福田隆二、郡山 茂

鹿児島県鹿児島市下荒田 4-50-20 099-286-4111（代表）

共同獣医学部

第1節 平成28年度共同獣医学部FD活動の記録

I. 共同獣医学部FD活動組織（FD委員会の構成と活動状況）

委員長 大和 修 教授

委員 白石光也 准教授

委員 安藤匡子 准教授

委員 石川真悟 助教

事務担当者 今村哲郎 学務課長、河本政展 教務係長、鬼塚剛生 教務係員

第1回共同獣医学部FD委員会

日時：平成28年4月19日（火）9：26～10：23、場所：農・獣医共通棟2階22セミナー室

出席者：大和、白石、安藤、石川、陪席者：事務部（今村、河本、鬼塚）

- 議題
1. 平成28年度FD活動計画について
 2. 平成28年度学部各種委員会活動経費要求について
 3. 平成28年度FD活動の役割分担について
 4. 平成27年度FD報告書について
 5. その他

- 報告事項
1. 全学FD委員会からの報告について
 2. その他

第2回共同獣医学部FD委員会

日時：平成28年7月5日（火）9：00～9：46、場所：農・獣医共通棟2階22セミナー室

出席者：大和、白石、安藤、石川、陪席者：事務部（今村、河本、鬼塚）

- 議題
1. 合同FD研修会および情報交換会について
 2. その他

- 報告事項
1. その他

その後、その都度、個別事項について、メール会議にて対応した。

II. 授業公開と授業参観の取り組み

共同獣医学部では、農学部所属の平成15年度後期より授業公開・授業参観を実施している。平成24年度より共同獣医学部が発足し、本年度は共同獣医学部所属の学生が1～5年生となったが、6年生は農学部所属となるため、授業公開と授業参観のスケジュールは農学部と同様に実施した（農学部報告書参照）。

なお、平成28年度後期より山口大学共同獣医学部も本取り組みに一部参画することになり、両大学の教員が互いに参観できるような仕組みとし、参加者拡大を図ると共に、本取り組みの内容をより一層充実したものとした。

実施については、例年どおり、授業公開に関する周知は事務経由でメールにて行い、授業参観参加希望申込みは授業担当者と参観希望者間の直接のやりとり（メールおよび電話）で行われた。授業担当者と授業参観者には、可能な限り、参観後に意見交換をお願いすると共に、参観者には様式の配布を行って、授業参観報告書を作成・提出してもらった。また、平成26年度からは授業担当者に参観者からの報告書に対する対策書を作成・提出してもらい、本取り組みのPDCAサイクルを確立している。

本年度の獣医学科教員の授業参観参加者数は、前期23名、後期24名、のべ47名の参加があった。本誌取り組みの実施方法を改善することにより（前述）、本年度の参加者数を大幅に増加させることがで、参加率で

は教員数ベースではほぼ 100%となった。参考までに、平成 27 年度はのべ 21 名、平成 26 年度はのべ 28 名、平成 25 年度はのべ 14 名、平成 24 年度はのべ 21 名の参加者であった。次年度以降、高参加率を維持するとともに、さらに参加者拡大を目指す。

III. 学生による授業評価

平成 28 年度前期・後期の 2 回、学生による授業評価のアンケートを実施した。共同獣医学部では、山口大学と共通の授業評価アンケートを作成し、実施している。様式は下記のとおりである。

平成 24 年度共同獣医学部	
授業評価アンケート 講義・演習用)	
授業科目番号: _____	受講者氏名 _____ <small>(氏名の記載は任意です。)</small>
授業科目名: _____ () 遠隔授業システム 教員名: _____	
<p>このアンケートは、授業をより良くするために行うものです。</p> <p>* 回答者の成績に影響することは全くありませんので、あなたの考えを率直に記入してください。</p> <p>* この回答用紙は機械（OCR）で読み取り集計しますので、該当する番号の前の○印を塗りつぶしてください。</p>	
<p>1 あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ 括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です)</p> <p>○1. 90%以上(14回以上) ○2. 80～90%(12～13回) ○3. 60～80%(9～11回) ○4. 40～60%(6～8回) ○5. 40%未満(6回未満)</p>	
<p>2 あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>○1. 3時間程度または以上 ○2. 2時間程度 ○3. 1時間程度 ○4. 30～50分程度 ○5. 30分未満</p>	
<p>3 この授業内容の水準はどうでしたか？</p> <p>○1. 高かった ○2. やや高かった ○3. 妥当だった ○4. やや低かった ○5. 低かった</p>	
<p>4 この授業の分量はどうでしたか？</p> <p>○1. 多かった ○2. やや多かった ○3. 妥当だった ○4. やや少なかった ○5. 少なかった</p>	
<p>5 教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思いませんか？</p> <p>○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない</p>	
<p>6 板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか？</p> <p>○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない</p> <p>○6. この授業は該当しない</p>	
<p>7 授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？</p> <p>○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない</p>	
<p>8 この授業はシラバスに沿って進められましたか？</p> <p>○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない</p>	
<p>9 あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない</p> <p>○6. 答えられない</p>	
<p>10 あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない</p>	
<p>11 この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない</p>	
<p>* 以下は、遠隔授業システムに関する質問です。該当する場合 授業科目名の横にチェックありのみ回答してください。</p>	
<p>12 教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？</p> <p>○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない</p>	
<p>13 教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？</p> <p>○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない</p>	
<p>14 教員の授業の進め方はスムーズでしたか？</p> <p>○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない</p>	
<p>15 授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？</p> <p>○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない</p>	
<p>16 対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？</p> <p>○1. そう思う ○2. ややそう思う ○3. どちらとも言えない ○4. あまりそう思わない ○5. そう思わない</p>	
<p>自由記述</p> <p>この授業についての意見・要望・感想などを自由に書いてください。</p> <div style="border: 1px solid black; height: 80px; width: 100%;"></div>	
<p>ご協力ありがとうございました。 共同獣医学部ファカルティ・ディベロップメント委員会</p>	

ここに記載している「遠隔授業」とは、遠隔授業システムを使って、教員の映像や音声、授業の資料等をリアルタイムで送信あるいは受信して行う授業である。共同獣医学部では、この「遠隔授業」に関する設問を用意し、学生の授業環境に対する満足度を測っている。

本年度は共同獣医学部所属の 1-5 年生に対して実施し、共同獣医対象の共通教育科目と専門教育科目において、前期 52 科目（講義・演習：42 科目、実験・実習：10 科目）、後期 47 科目（講義・演習：36 科目、実験・実習：11 科目）、計 99 科目分の回答が集まった。

次のページより、今年度のアンケート集計結果を紹介する。

●アンケート集計結果（全科目集計）

【講義・演習科目】前期：42科目、後期：36科目

No.	質問項目	回答	28前期	% (28前)	28後期	% (28後)
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上	1109	83.4%	860	80.9%
		80～90%	193	14.5%	178	16.7%
		60～80%	27	2.0%	23	2.2%
		40～60%	1	0.1%	1	0.1%
		40%未満	0	0.0%	1	0.1%
		計	1330	100.0%	1063	100.0%
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。授業1回あたりの時間)	3時間程度または以上	324	23.8%	306	28.4%
		2時間程度	289	21.3%	259	24.0%
		1時間程度	454	33.4%	321	29.7%
		30～50分程度	127	9.3%	107	9.9%
		30分未満	166	12.2%	86	8.0%
		計	1360	100.0%	1079	100.0%
3	この授業内容の水準はどのようでしたか？	高かった	352	25.8%	338	31.2%
		やや高かった	420	30.8%	329	30.4%
		妥当だった	568	41.7%	402	37.2%
		やや低かった	17	1.2%	8	0.7%
		低かった	5	0.4%	5	0.5%
		計	1362	100.0%	1082	100.0%
4	この授業の分量はどうでしたか？	多かった	424	31.2%	414	38.3%
		やや多かった	424	31.2%	311	28.8%
		妥当だった	508	37.4%	350	32.4%
		やや少なかった	4	0.3%	4	0.4%
		少なかった	0	0.0%	1	0.1%
		計	1360	100.0%	1080	100.0%
5	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、専門用語や理論などの説明はわかりやすいと思われましたか？	そう思う	655	48.2%	624	57.4%
		ややそう思う	417	30.7%	294	27.0%
		どちらとも言えない	187	13.8%	125	11.5%
		あまりそう思わない	76	5.6%	32	2.9%
		そう思わない	25	1.8%	12	1.1%
		計	1360	100.0%	1087	100.0%
6	板書やビデオ、コンピュータ並びに教科書やプリントなどの教材は、効果的に使われていましたか？	そう思う	654	47.9%	602	55.4%
		ややそう思う	432	31.7%	297	27.3%
		どちらとも言えない	169	12.4%	115	10.6%
		あまりそう思わない	83	6.1%	48	4.4%
		そう思わない	26	1.9%	21	1.9%
		この授業は該当しない	0	0.0%	3	0.3%
		計	1364	100.0%	1086	100.0%
7	授業中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う	656	48.1%	557	51.5%
		ややそう思う	347	25.5%	267	24.7%
		どちらとも言えない	315	23.1%	226	20.9%
		あまりそう思わない	25	1.8%	17	1.6%
		そう思わない	20	1.5%	14	1.3%
		計	1363	100.0%	1081	100.0%
8	この授業はシラバスに沿って進められましたか？	そう思う	737	54.6%	642	59.7%
		ややそう思う	416	30.8%	271	25.2%
		どちらとも言えない	177	13.1%	132	12.3%
		あまりそう思わない	15	1.1%	19	1.8%
		そう思わない	4	0.3%	11	1.0%
		計	1349	100.0%	1075	100.0%

No.	質問項目	回答	28前期	% (28前)	28後期	% (28後)
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	386	28.3%	371	34.4%
		ややそう思う	575	42.2%	418	38.7%
		どちらとも言えない	320	23.5%	219	20.3%
		あまりそう思わない	57	4.2%	52	4.8%
		そう思わない	14	1.0%	15	1.4%
		答えられない	10	0.7%	5	0.5%
		計	1362	100.0%	1080	100.0%
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	そう思う	405	29.3%	394	36.1%
		ややそう思う	658	47.5%	449	41.2%
		どちらとも言えない	211	15.2%	181	16.6%
		あまりそう思わない	75	5.4%	52	4.8%
		そう思わない	35	2.5%	14	1.3%
		計	1384	100.0%	1090	100.0%
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	538	41.2%	493	45.7%
		ややそう思う	491	37.6%	354	32.8%
		どちらとも言えない	192	14.7%	157	14.6%
		あまりそう思わない	61	4.7%	51	4.7%
		そう思わない	23	1.8%	23	2.1%
		計	1305	100.0%	1078	100.0%
※12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	571	61.4%	439	62.9%
		ややそう思う	240	25.8%	168	24.1%
		どちらとも言えない	74	8.0%	61	8.7%
		あまりそう思わない	34	3.7%	21	3.0%
		そう思わない	11	1.2%	9	1.3%
		計	930	100.0%	698	100.0%
※13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	533	57.4%	430	61.7%
		ややそう思う	249	26.8%	171	24.5%
		どちらとも言えない	83	8.9%	62	8.9%
		あまりそう思わない	45	4.8%	21	3.0%
		そう思わない	18	1.9%	13	1.9%
		計	928	100.0%	697	100.0%
※14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	532	57.3%	410	59.2%
		ややそう思う	255	27.4%	174	25.1%
		どちらとも言えない	97	10.4%	71	10.2%
		あまりそう思わない	31	3.3%	27	3.9%
		そう思わない	14	1.5%	11	1.6%
		計	929	100.0%	693	100.0%
※15	授業中は、授業に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	517	54.9%	398	56.8%
		ややそう思う	271	28.8%	173	24.7%
		どちらとも言えない	96	10.2%	79	11.3%
		あまりそう思わない	36	3.8%	34	4.9%
		そう思わない	22	2.3%	17	2.4%
		計	942	100.0%	701	100.0%
※16	対面式の講義と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	435	46.8%	339	45.0%
		ややそう思う	239	25.7%	209	27.8%
		どちらとも言えない	129	13.9%	117	15.5%
		あまりそう思わない	87	9.4%	46	6.1%
		そう思わない	40	4.3%	42	5.6%
		計	930	100.0%	753	100.0%

※設問 No.12～16 は、遠隔授業科目のみ対象の設問

【実験・実習科目】前期：10科目、後期：11科目

No.	質問項目	回答	28前期	% (28前)	28後期	% (28後)
1	この授業にどれくらい出席しましたか。	90%以上	276	97.2%	301	93.5%
		80~90%	8	2.8%	20	6.2%
		60~80%	0	0.0%	1	0.3%
		40~60%	0	0.0%	0	0.0%
		40%未満	0	0.0%	0	0.0%
	計	284	100.0%	322	100.0%	
2	この授業において、時間外学習をどれくらい行いましたか。授業1回あたりの時間)	3時間程度または以上	80	28.1%	93	28.5%
		2時間程度	30	10.5%	36	11.0%
		1時間程度	79	27.7%	77	23.6%
		30~50分程度	42	14.7%	55	16.9%
		30分未満	54	18.9%	65	19.9%
	計	285	100.0%	326	100.0%	
3	この実験・実習を理解するための基礎学力はあったと思いますか？	そう思う	65	23.1%	97	29.9%
		ややそう思う	117	41.6%	111	34.3%
		どちらとも言えない	72	25.6%	89	27.5%
		あまりそう思わない	22	7.8%	22	6.8%
		そう思わない	5	1.8%	5	1.5%
	計	281	100.0%	324	100.0%	
4	教員の話し方は明瞭で聞きやすく、実験・実習の方法などの説明はわかりやすいと思われましたか？	そう思う	141	50.0%	213	65.3%
		ややそう思う	94	33.3%	87	26.7%
		どちらとも言えない	31	11.0%	22	6.7%
		あまりそう思わない	12	4.3%	4	1.2%
		そう思わない	4	1.4%	0	0.0%
	計	282	100.0%	326	100.0%	
5	板書や配布資料、実験マニュアルなどは、実験・実習の内容理解と実施に役立ちましたか？	そう思う	151	53.4%	210	64.2%
		ややそう思う	93	32.9%	90	27.5%
		どちらとも言えない	31	11.0%	25	7.6%
		あまりそう思わない	7	2.5%	2	0.6%
		そう思わない	1	0.4%	0	0.0%
	計	283	100.0%	327	100.0%	
6	実験・実習中やオフィスアワーでの質問に対する教員の対応に満足しましたか？	そう思う	162	57.0%	214	66.0%
		ややそう思う	85	29.9%	75	23.1%
		どちらとも言えない	30	10.6%	33	10.2%
		あまりそう思わない	5	1.8%	2	0.6%
		そう思わない	2	0.7%	0	0.0%
	計	284	100.0%	324	100.0%	
7	動物を扱う実験・実習は、安全性に重点が置かれていましたか？	そう思う	156	54.9%	213	65.5%
		ややそう思う	77	27.1%	70	21.5%
		どちらとも言えない	19	6.7%	21	6.5%
		あまりそう思わない	4	1.4%	0	0.0%
		そう思わない	1	0.4%	0	0.0%
		この授業は該当しない	27	9.5%	21	6.5%
	計	284	100.0%	325	100.0%	
8	この実験・実習は、シラバスに沿って進められましたか？	そう思う	164	57.3%	228	70.2%
		ややそう思う	86	30.1%	63	19.4%
		どちらとも言えない	33	11.5%	31	9.5%
		あまりそう思わない	1	0.3%	1	0.3%
		そう思わない	2	0.7%	2	0.6%
	計	286	100.0%	325	100.0%	

No.	質問項目	回答	28前期	% (28前)	28後期	% (28後)
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	そう思う	111	38.8%	148	45.5%
		ややそう思う	122	42.7%	125	38.5%
		どちらとも言えない	44	15.4%	46	14.2%
		あまりそう思わない	4	1.4%	3	0.9%
		そう思わない	1	0.3%	1	0.3%
		答えられない	4	1.4%	2	0.6%
		計	286	100.0%	325	100.0%
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	そう思う	115	40.6%	151	46.5%
		ややそう思う	141	49.8%	144	44.3%
		どちらとも言えない	21	7.4%	26	8.0%
		あまりそう思わない	4	1.4%	2	0.6%
		そう思わない	2	0.7%	2	0.6%
		計	283	100.0%	325	100.0%
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	そう思う	155	55.0%	194	59.9%
		ややそう思う	99	35.1%	103	31.8%
		どちらとも言えない	21	7.4%	26	8.0%
		あまりそう思わない	4	1.4%	0	0.0%
		そう思わない	3	1.1%	1	0.3%
		計	282	100.0%	324	100.0%
※12	教員の音声は聞き取りやすかったと思いますか？	そう思う	27	42.9%	22	68.8%
		ややそう思う	19	30.2%	6	18.8%
		どちらとも言えない	8	12.7%	4	12.5%
		あまりそう思わない	5	7.9%	0	0.0%
		そう思わない	4	6.3%	0	0.0%
		計	63	100.0%	32	100.0%
※13	教員やモニター画面の映像は見やすかったと思いますか？	そう思う	26	41.3%	22	68.8%
		ややそう思う	21	33.3%	4	12.5%
		どちらとも言えない	10	15.9%	5	15.6%
		あまりそう思わない	3	4.8%	0	0.0%
		そう思わない	3	4.8%	1	3.1%
		計	63	100.0%	32	100.0%
※14	教員の授業の進め方はスムーズでしたか？	そう思う	26	41.3%	22	68.8%
		ややそう思う	20	31.7%	6	18.8%
		どちらとも言えない	13	20.6%	4	12.5%
		あまりそう思わない	2	3.2%	0	0.0%
		そう思わない	2	3.2%	0	0.0%
		計	63	100.0%	32	100.0%
※15	授業中は、実験・実習に集中できる環境や雰囲気であったと思いますか？	そう思う	27	42.2%	23	71.9%
		ややそう思う	15	23.4%	5	15.6%
		どちらとも言えない	15	23.4%	3	9.4%
		あまりそう思わない	1	1.6%	1	3.1%
		そう思わない	6	9.4%	0	0.0%
		計	64	100.0%	32	100.0%
※16	対面式の実験・実習と遜色ない、一体感・臨場感のある授業だったと思いますか？	そう思う	22	34.9%	20	58.8%
		ややそう思う	12	19.0%	6	17.6%
		どちらとも言えない	14	22.2%	5	14.7%
		あまりそう思わない	7	11.1%	3	8.8%
		そう思わない	8	12.7%	0	0.0%
		計	63	100.0%	34	100.0%

※設問 No.12～16 は、遠隔授業科目のみ対象の設問

IV. 合同 FD 研修会

1. はじめに（目的および概要）

平成 24 年度から設置された鹿児島大学および山口大学共同獣医学部では、情報通信技術（Information and Communication Technology; ICT）のひとつである双方向遠隔授業システムが導入されて、両大学の教員による講義・実習が実施されている。また一方、平成 25 年度からは、帯広畜産大学、北海道大学、山口大学および本学の 4 大学によって、欧州獣医学教育認証機構（EAEVE）による認証獲得に向けた教育改革事業（文部科学省国立大学改革強化推進事業「国立獣医系 4 大学群による欧米水準の獣医学教育に向けた連携体制の構築」）が開始されており、南に位置する山口大学および本学は合同でこれに取り組んでいる。これらはいずれも質の高い世界標準の教育の上で成り立つものであり、双方の学部にも属するすべての教員の教育技術の向上、すなわち Faculty Development（FD）がより一層求められている。

そこで、通常両大学で独自に行う FD 活動に加えて、平成 26 年度より実践的に行う合同研修会を実施することが合意された。これによって、両大学教員のコミュニケーションを一層深めることができ、共通あるいは個別に抱える課題や問題点を把握し、相互の協力、補完および相乗効果によって、教育レベルを向上させることが可能となる。初回（平成 26 年度）は、山口大学共同獣医学部主催で平成 27 年 2 月 17 日（火）に山口大学で実施され、第 2 回目（平成 27 年度）は、鹿児島大学共同獣医学部主催により、平成 27 年 9 月 14 日（月）に鹿児島大学で実施された。

第 3 回目の本年度（平成 28 年度）は、山口大学共同獣医学部主催により、平成 28 年 8 月 18 日（木）に山口大学で実施され、それに鹿児島大学共同獣医学部教員 29 名および職員 2 名が直接山口大学へ赴いて参加した。また、当地に赴けなかった教員 7 名および職員 1 名は双方向システムで同時受信した基調講演を聴講した。木曾康郎 山口大学共同獣医学部長による挨拶の後、筑波大学医学医療系所属の三輪佳宏講師による基調講演が、遠隔システムを用いて両大学へ配信され、その後に 4 分野（カリキュラム改正、公衆衛生、伴侶動物臨床、産業動物臨床、大学院教育）に分かれてワークショップが実施された。両大学を合わせると 70 数名が本研修会に参加した。研修会終了後には、研修会参加者による情報交換会も行われた。以下に、本年度実施された合同 FD 研修会の詳細について報告する。

なお、本学共同獣医学部教員（3 名の職員は含まず）の参加は 36 名であり、本研修会への本学教員の参加率は 80.0%（全教員 45 名として計算）であった。

2. 研修会次第

日時：平成 28 年 8 月 18 日（月）14 時～18 時 15 分

場所：山口大学共同獣医学部（山口大学主催）

14:00～14:05 iCOVER 1F 101 教室（遠隔システムにより鹿児島大学に第 301 講義室に配信）

学部長挨拶（山口大学 共同獣医学部 学部長 木曾康郎 教授）

14:05～15:30 iCOVER 1F 101 教室（遠隔システムにより鹿児島大学に第 301 講義室に配信）

基調講演（筑波大学医学医療系 三輪佳宏 講師）「見る技術・見せる技術」

15:45～17:15 教育ワークショップ（参加者敬称略、下線：司会進行役）

1) カリキュラム <連合獣医棟 1F 大会議室> （15 名）

テーマ：平成 30 年度以降のカリキュラム変更について

山大：奥田優、日下部健、加納聖、大濱剛、臼井達哉、森本将弘、櫻井優、坂井祐介、谷健二

鹿大：松元光春、藤田秋一、白石光也、有村卓朗、辻尾祐志、鬼塚剛生

2) 公衆衛生（病態予防）<連合獣医棟 4F セミナー室> （15 名）

テーマ：公衆衛生関連実習（獣医公衆衛生学実習 1-3、食品加工実習）のシラバスの作製と統一

山大：高野愛、渋谷周作、西垣一男、三宅在子、豊福肇、清水隆、渡邊健太、木村透

鹿大：松尾智英、田仲哲也、中馬猛久、安藤匡子、松鶴彩、正谷達膳、堀江真行

3) 伴侶動物臨床 <動物医療センター2F 臨床実習室> (15名)

テーマ：伴侶動物臨床関連カリキュラムの見直し

山大：馬場健司、下川孝子、水野拓也、根本有希、中市統三、伊藤良樹、板本和仁、原口友也、西川晋平

鹿大：浅野淳、遠藤泰之、桃井康行、矢吹映、畑井仁、三浦直樹（

4) 産業動物臨床 <連合獣医棟 1F 小会議室> (12名)

テーマ：産業動物臨床実習のシラバス作成など

山大：柳田哲矢、田浦保穂、檜山雅人、高木光博、角川博哉、谷口雅康

鹿大：帆保誠二、石川真悟、畠添孝、窪田力、安藤貴朗、橘由里香

5) 大学院教育 <学部長室> (18名)

テーマ：大学院教育関連の議題等

山大：木曾康郎、佐藤宏、岩田祐之、佐藤晃一、度会雅久、事務（数名）

鹿大：宮本篤、三角一浩、三好宣彰、小原恭子、大和修、楠原良成

17:30～18:10 各教育ワークショップからの進捗状況報告（司会進行：高木）

報告者：カリキュラム改正（奥田）、公衆衛生（病態予防）（清水）、伴侶動物臨床（馬場）、産業動物臨床（谷口）、大学院教育（木曾）

18:10～18:15 閉会の言葉（宮本篤 鹿児島大学共同獣医学部学部長）

19:00～21:00 情報交換会（KKR あさくら）

3. 各部の内容

1) 学部長挨拶（14:00～14:05）

山口大学共同獣医学部の iCOVER 1F 101 教室で実施され、同時に鹿児島大学共同獣医学部の 301 教室に、双方向遠隔授業システムによって接続・配信された。14 時から山口大学共同獣医学部 FD 委員会委員長の高木光博 教授が進行し、木曾康郎 学部長の挨拶により研修会が開始された。

木曾学部長の挨拶では、来年に EAEVE 事前診断が実施されるため、その準備に入っていること、山口大学と鹿児島大学は VetSouth Japan として学部および大学院教育を一体化し、これまでの活動の成果を生かして発展しなければならないことなどが述べられた。

2) 基調講演（14:05～15:30）

講師：三輪佳宏 筑波大学医学医療系分子薬理学 講師

（日本サイエンスビジュアルイゼーション研究会 幹事）

演題：見る技術・見せる技術

要旨：三輪先生のご専門であるサイエンスビジュアルイゼーションにおける「見る技術・見せる技術」を例にして、「魅せるスライド&伝わるプレゼン」についての具体的技法につい



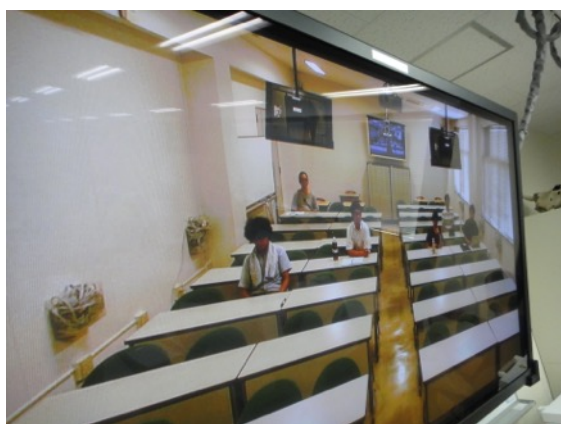
て講演頂いた。まず、筑波大学大学院の共通科目に「The Presentation（人に伝わるプレゼンテーションを学ぶ）」というオムニバス講義があり、それが学問領域の異なる全学部の学生向けに実施されているため、全学部生にたいして同じレベルの高い満足度が与えることが困難であることが紹介された。その科目の中で三輪先生が自ら行われている講義（見る技術・見せる技術）を、我々教員向けに作り替えたプレゼンテーションを実際に披露して、そのプレゼンテーションの中で「何を、どう考えて、どんな工夫をしているのか？」を「たねあかし」という構成で講演された。一方、講演の中間地点で、聴衆である各教員の自己診断テストを実施して、興味を維持する工夫もなされていた。本来、プレゼンテーションの3要素は、信頼（Ethos）、感情（Pathos）および論理（Logos）であり、これらのどこに各教員のプレゼンテーションに比重がおかれているかを判断する自己診断テストになっていた。後半では、この3つの要素に属する様々な個別因子について解説する形で進められた。個別因子の解説そのものが、最初に行われたプレゼンテーションの工夫の「たねあかし」となっていた。まず、信頼（Ethos）においては、オープン率（聴衆が受ける真の効果）を上げる工夫、ミラー効果（講師の緊張度が聴衆に伝わること）、インスタント・モデリング（なりきり効果）などが説明された。次に、感情（Pathos）においては、強い印象と記憶や納得感を与える工夫として、メタモルフォーゼ（伏線→中間→再登場）などやり方が説明された。論理（Logos）は、元々大学教員が重要視するところであるが、学生の納得感「わからないことがわかるようになる」ところであるため、情報が正確にわかりやすく論理的に伝達できているかを評価する必要があると説明された。そのためには、「間（ま）」、「スライドの統一感・一貫性（使い回しはNG）」、「使用する言葉や図と説明の一致（混乱を避けるため）」、「反復（メタ情報の蓄積・メッセージの強化）」など、工夫の凝らす必要があることが説明された。



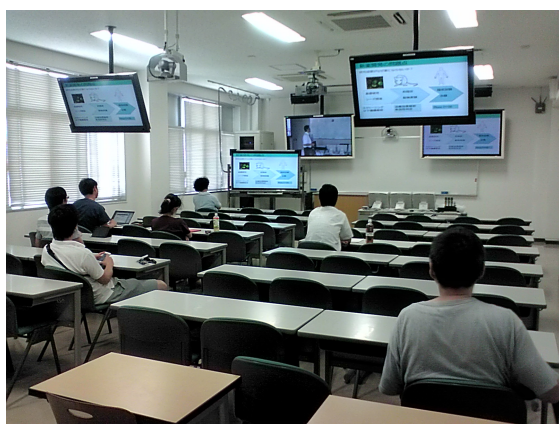
聴講する教職員（山大iCOVER 101教室）



聴講する教職員（山大iCOVER 101教室）



鹿大で聴講する鹿大教員（iCOVERモニター）



鹿大で聴講する鹿大教員（鹿大301教室）

3) 教育ワークショップ (15:45～17:15)

(1) カリキュラム改正

テーマ：平成30年度以降のカリキュラム変更について

本教育ワークショップでは「平成30年度以降のカリキュラム変更について」というテーマで、共同獣医学部一期生が卒業となり大幅なカリキュラム変更が可能となる平成30年度4月に向け、現在の問題点の把握とその改善方法について議論を進めることを目的に開催された。

冒頭に司会進行役である山口大学奥田先生より、本ワークショップでの議論のポイントとして、1. 平成30年4月にカリキュラム変更することの可否、2. 比較的高学年に負荷が大きい現在のカリキュラムをどう変更するか、3. EAEVE 認証に関わる実習時間をどう確保するか、4. 一部科目間における講義内容の重複をどう改善するか等の4点が挙げられ、これらのポイントについて議論が行われた。

1について参加者間での同意が得られたことから、以下のポイントについて議論が進められた。2については、両大学教員から高学年の負荷が大きい反面、低学年は比較的授業数も少なく、特に1年時には専門教育が実施されていないことから、1年次から専門教育を実施することでより負荷の平均化が図れるのではないかと提案があった。また、1日あたりの授業数を増やすことで集中講義などの負担を軽減する案も出された。今後の検討については、両大学間の協議会においてワーキンググループを立ち上げ、上記案も含め協議を進めることが了承された。3については、鹿児島大学有村先生より現時点のカリキュラムでも鹿児島大学では対応可能であるとの説明があった。4については、両大学の教員より現状の報告や問題点の指摘があり、本問題の理解を深めた。また担当教員間でのより緊密なコミュニケーションが重要であるとの認識を共有した。

また両大学において、高学年における英語教育の実施が求められていることから、新規科目の設置または専攻演習の利用など、その対策について検討する必要性が示された。今後は、協議会におけるワーキンググループにおいて本問題について議論を進めることが了承された。また、1単位科目における試験の実施時期を起因とする問題について山口大学教員から説明があり、今後この問題について継続した調査と検討が必要であるとの認識が得られた。



(2) 公衆衛生 (病態予防)

テーマ：公衆衛生関連実習（獣医公衆衛生学実習 1-3, 食品加工実習）のシラバスの作製と統一

清水先生の司会進行により、初めに、全員が自己紹介を行った。

両大学の実習実施担当者が各実習ごとにわかれ、それぞれの大学における現在の実習実施項目についてお互いに説明した。これをベースに、両大学で共通のシラバスとなるように、話し合った。見学実習の施設や細かな実験手法などは異なっても、学習項目として一致するように調整した。山口大学では見通しがついていて、鹿児島では検討中の項目もあり、これらについては引き続き調整していくことになった。獣医公衆衛生学実習Ⅱと食品加工実習の一部は課題として残ったが、獣医公衆衛生学実習Ⅰ・Ⅲについては、両大学で一致したシラバスを作成することができた。

メール連絡では難しかった細かい内容やバックアッププランについても話し合えたことから、有意義なワークショップとなった。



(3) 伴侶動物臨床

テーマ：伴侶動物臨床関連カリキュラムの見直し

A. カリキュラムの内容と実施順序の見直しについて

a) 画像診断学について

- ・開講時期が早すぎて、病気を知らない状態で各論的な講義が行なわれているため学生がついてきていない。
- ・現在は、画像診断学 1、2 の中で総論と各論が入り混じっていて完全に分けることができない。
- ・各病気の話をする際に、画像診断の細かい話まではできないため、画像診断の各論は必要であるとのことから、4 年生 1Q で画像診断学総論、5 年前期で画像診断学各論を行うことが提案された。
- ・総論と各論の配分は必ずしも 1:1 である必要はなく、クォーターのコマ数にとらわれず、必要に応じて増減できることが望ましい。獣医放射線学が内容と比較してコマ数が多いため、その中に総論的な話を組み込めないか協議する。
- ・開講時期は、既存の科目との入れ替えが現実的であるため、5 年前期の血液病学や運動器病学との入れ替えが提案された。科目の入れ替えや配分の変更には当事者同士のすり合わせが必要であるため、血液病学（奥田先生）、運動器病学（藤木先生）、放射線学（中市先生）と協議していただき、桃井先生が意見を集約する。結果は時期カリキュラム改正時に提案。

b) カリキュラム全般について

- ・現状のカリキュラムはコアカリに準拠しているが、コアカリは科目間での差異が大きく、コマ数が足りない科目と余る科目が存在している。また、重複していたり、飛ばされていたりする部分があるため学生負担を軽減するためにもカリキュラムの根本的な見直しが必要。
- ・例、臨床病理学と血液病学、内分泌病学との内容の重複。16 コマから半分の 8 コマにすることは難しいかもしれないが、よりコンパクトにすることは可能なのでは？一方、臨床病理学という科目を虫食いにすべきではないという意見も。
- ・現状ではクォーター制があるため、科目間の過不足を補うことが難しく、配分の不均衡が起こっている。
→クォーター制にしばらくは科目編成が可能かどうか？
- ・担当者が異なる事で話す内容や重点を置くポイントに違いがでていることも課題。
- ・総単位数の削減についてはここでは判断できない。
- ・今変えられる部分と長期的にみて変える必要がある部分を整理する必要がある。可能であれば、少人数（2、3 人）での調整が望ましい。

c) 外科系の科目について

- ・麻酔学のモニタリングで、心電図などを習っていない。生理学で教えているはずだが、基礎ができていない。また、外科学の総論がなくなったため、ショック、心肺蘇生などを教える科目がない。今は、麻酔学で行っている。
→短期的には三浦先生の呼吸器・循環器病学で心電図、聴診、呼吸モニターの話をも最初の 1、2 回で行う。
また、循環器のショックのコマに救急心肺蘇生を入れ込む等の検討を行う。
- ・心肺蘇生に関しては、外科学総論を復活させたり、手術学に組み入れたりできないか？鹿児島大学では、エマージェンシーの講習として行う予定だが、正規の講義ではない。ゆくゆくは講義に入れ込むことを担当教員同士で検討する必要がある。

B. OSCE の実施時期について

- ・本年度の OSCE トライアルは、山口大学が 6 月初旬、鹿児島大学は 7 月初旬に行われた。山口大学でのトライアルは 1Q の試験期間と被っており学生負担が大きかった。鹿児島大学では、OSCE の 1 週間後に CBT が行われたがあまり不満はでなかった。
- ・次年度より、OSCE の実施時期を 7 月初旬に統一することが提案された。

C. 伴侶動物診断治療学実習 A・B の試験について

- ・山口大学では、伴侶動物診断治療学実習 A は試験を実施し、B は OSCE を試験の代わりにした。鹿児島大学は A、B ともに試験は行っておらず、各回の担当者がレポートや小テストなどで評点している。評点の方法は各自に任されている。

→山口大学の教員間で意見調整し、問題なければ試験なしの鹿児島大学の方法に統一する。

D. 単位を落としている学生の取り扱いについて

- ・現在、4年から5年でハードルがあり5年から6年は進級可能。
- ・単位を落としている場合、ポリクリがあるため再履修は困難であり授業は受けずに試験のみ通れば OK にしている科目もあり大学によっても授業によっても扱いが異なるため、統一させる必要があるのではないかな？

→再履修の授業にでるためにポリクリを休むのは本末転倒である。現実的には試験のみ通過すれば OK にするしかないのでは？

→臨床以外の単位を落としている場合もあるため、上記で統一していいかは検討する必要がある。

E. EAEVE 認証に関する情報交換

- ・山口大学では夜間診療を 10 月から開始し、2 月もしくは 3 月から学生を受け入れる予定。21~2 時までオンコール待機。それ以降は看護師と学生で見回り当直。
- ・鹿児島大学では、19 時~10 時半まで電話受付。週担当獣医師が 1 名、サポートのオンコール獣医師が 1 名、看護師 1 名の体制。10 月から受付時間を 24 時まで延長し、実習生は 1 晩 2 名ずつ宿直予定（夜間帰宅させるのが危険なため）。宿直施設は病院とは別の場所があり、診療後、学生は病院内に自由に入れない。4 月からは 24 時間体制へ移行し、受付は教員と学生で行う。非臨床系教員が実習教員として入る。学生を 24 時間病院に置くためには教員がいないといけない。教員の手当では通常は裁量労働制だが夜間診療の時のみ時間勤務制。7.5 時間以上は手当がつくがうち、4 時間は休憩。代休はないが夜勤の日は日勤なし。大学の祝日や土日は休診だが、休診日は獣医師会の夜間診療が動いている。診療頭数は多い時で一晩 3、4 件。ゼロの日ある。実際の救急症例は少ない。EAEVE 認証のためには、学生の教育、収入の増加、地域との連携という 3 つの目的が満たされている必要がある。
- ・労務と生徒の安全確保が課題。



(4) 産業動物臨床

テーマ：産業動物臨床実習のシラバス作成など

配布資料：資料 1：H27 合同 FD 産動 WG 議事録

資料 2：産業動物総合臨床実習シラバス山大（田浦案）

資料 3：産業動物総合臨床実習（田浦案）

A. 産業動物総合臨床実習の内容に関する検討

a) 資料 1 について

・昨年度のワークショップの内容について確認。豚診療学については、本年度は田浦教授が配信で行ったが、現在鹿児島大学で豚を専門とする教員を公募中であることを確認し、着任した場合には、鹿児島大学の配信を検討することとする。

b) 資料2および3について

- ・産業動物総合臨床実習の山口大学、鹿児島大学それぞれの15日間でのシラバスの内容の確認。山口大学のシラバスに5日間の鹿児島大学診療ローテーションが組み込まれているが、鹿児島大学のシラバスでは診療ローテーションが3日間となっていたため、5日間で統一することを確認した。
- ・鹿児島大学診療ローテーション以外の内容が山口大学と鹿児島大学で異なっているが、統一する必要があるのかを協議。今回のWGでは統一しないで進めると決定したが、学部で統一すると決まった場合には今後の協議を行う。
- ・山口大学の内容の、防疫訓練実習の内容を臨床実習に組み込んでいかどうかについて協議。産業動物のDay one skillに防疫が入っているため、臨床実習に入れてもいいのではないかと考えているが、今年実際に行ってみてその教育効果について判断し、次年度以降継続するかどうかは検討することとした。
- ・鹿児島大学診療ローテーションの評価法について検討し、基本的にはレポートにて評価することとした。山口大学の学生のレポートについては、山口大学の教員にレポートを提出し、山口大学側で評価できるようにするかどうかについて今後協議することとした。
- ・レポートおよびEAEVE認証のために、カルテの作製法を統一するかどうかについて協議した。鹿児島大学、特に牛については群単位で診療するハードヘルスが多いため、実習でカルテを作成させることについては想定していなかった。カルテ作製法の統一については、今後協議することとした。
- ・鹿児島、山口それぞれどちらかでしか開講していない内容については、別の大学の教員はコマ担当には付けず、教科担当だけでいいのではないかと協議を行い、別の大学で開講している内容については、今日か担当教員のみをつけることを確認した。
- ・シラバスの概要、一般目標および教科書等の項目について確認し、これらを両大学で内容を統一する必要があるかどうかについて協議。内容と同様に、今回のWGでは統一しないで決めると決定したが、学部で統一すると決まった場合には今後協議することとした。
- ・今年のシラバスにOSCE、CBTで合格している必要があるといった内容が入っているが、今年の5年生は実際に合格しているわけではないからはずすこととしたが、来年以降は必要になることを確認した。

B. その他

6年次の産業動物参加型臨床実習について

- ・6年生の産業動物参加型臨床実習の実施は山口大学、鹿児島大学で別々に行い、内容についても統一せず、それぞれの大学ごとに決めることとした。



(5) 大学院教育

テーマ：大学院教育関連の議題等

将来的な大学教育、すなわち、EAEVE 認証取得後の学部教育を修了した学生を受け入れる大学院の教育体制について議論され、今後の大学院教育の内容、質、体制について、一定のコンセンサスを得た。

4) 各教育ワークショップからの進捗状況報告

司会進行：高木

報告者：カリキュラム改正（奥田）、公衆衛生（病態予防）（清水）、伴侶動物臨床（馬場）、産業動物臨床（谷口）、大学院教育（木曾）

各報告者から簡潔にワークショップで話し合われた内容について説明があり、適宜、質疑応答が実施された。報告内容は、上記の各ワークショップの報告書に記載済み。合同研修会修了後に、会場玄関にて参加者による記念撮影が行われた。



各ワークショップの報告（伴侶動物臨床）



各ワークショップの報告（大学院教育）

5) 閉会の挨拶

宮本篤 鹿児島大学共同獣医学部学部長より、今年度の合同FD研修会も非常に有意義であったことが述べられた。



合同FD研修会修了後の合同写真撮影

4) 情報交換会

合同 FD 研修会終了後、マイクロバス 2 台で情報交換会会場まで移動し、山大の木曾学部長の挨拶の後、山大の度会教授および鹿大の安藤(匡)准教授の進行で、新任教員等の紹介が行われ、当日研修会の内容等についての話し合いが行われた。



V. 国立獣医学系大学連携教育システム（Glexa）の利用に関わる教員研修会

日時：2017年2月13日 15～16時

場所：農共同獣医共通棟 302 講義室（山口大学発信で双方向システムで接続）

出席者：鹿児島大学共同獣医学部教員十数名ならびに山口大学共同獣医学部教員多数

第1部「Glexa の操作など技術的講習」（北海道大学・菊地先生）

第2部「Glexa の利用事例」（北海道大学・石塚先生）

質疑応答

E-ラーニングシステムである Glexa を利用した自学自習用デジタルコンテンツの充実が、学部における重要な課題の一つとなっている。しかし、Glexa の利用状況は、授業資料等の配布が中心となっているのが現状である。そこで教員によるデジタルコンテンツ作成の一助となるよう、Glexa 操作の基本的技術および北海道大学での利用事例に関する講習会が開催された。本講習会は山口大学で開催され、双方向授業システムにより鹿児島大学に配信された。鹿児島大学からは 18 名の教職員が出席した。

第1部では「Glexa の操作など技術的講習」のタイトルで、北海道大学共同獣医学部の ICT 担当である菊地先生より、Glexa の基本的機能および操作方法に関する講習が行われた。実際に Glexa を使用する際に必要である「クラスの作成」、「コンテンツの作成・編集削除」、「成績の集計・管理」、「授業資料の UP」について、その機能と共に Glexa での操作方法が簡潔に説明された。また自学自習用教材の作成については、Glexa の有用な機能である「Quiz」、「Motion」、「掲示板」、「Power Point 変換ツール」などについて北海道大学での事例も交えながら説明された。第2部では「Glexa の利用事例」のタイトルで、北海道大学共同獣医学部の石塚先生より北海道大学での実際での応用例が紹介された。北海道大学での「試験」、「レポート課題」、「自学自習」、「アンケート」、「回覧」などへの応用事例について、Glexa を利用する利点と共に現時点での問題点についても言及された。また、海外での E-ラーニングの利用状況についても説明があり、日本での利用は海外と比べても低く、今後より発展させていく必要があることが示された。しかし、Glexa 自体が発展途上のシステムであり、今後行われるバージョンアップについても簡潔に説明された。さらに E-ラーニングコンテンツの作成に問題となる著作権についても詳しく説明があった。また、最後の質疑応答では、山口大学および鹿児島大学から多くの質問があり、活発な議論が行われた。

本講習会は、基本的な Glexa の機能から、実際の獣医学教育における様々な利用形態について説明された。さらに、コンテンツ作成における著作権など現実的な問題にも言及され、Glexa の初心者だけでなく上級者にとっても技能のステップアップに有益な講習会であった。



第2節 全学FD活動への参加

I. 鹿児島大学FD委員会への出席

第1回 日時：平成28年4月15日（金）9：00～10：05 場所：共通教育棟1号館5階 第1会議室

議題 1. 平成28年度FD委員会活動計画について

2. 平成28年度FD経費予算要求について

報告 1. 平成27年度FD経費執行状況報告について

第2回 日時：平成28年5月27日（金）9：00～9：38、場所：共通教育棟1号館5階 第1会議室

議題 1. 平成28年度FD活動計画・経費要求について

報告 1. 平成28年度FD委員会ワーキンググループについて

2. 平成28年度大学教育再生戦略推進費 大学教育再生加速プログラム（AP）

「高大接続改革推進事業」の申請について

3. 平成28年度FD・SD関連フォーラム・セミナー等の情報について

4. その他

第3回 日時：平成28年6月24日（金）9：00～9：30、場所：共通教育棟1号館5階 第1会議室

議題 1. 新任教員FD研修会の開催について

報告 1. 平成28年度FD経費配分額について

2. 各WGの検討内容について

3. その他

第4回 日時：平成28年7月22日（金）9：00～9：45、場所：共通教育棟1号館5階 第1会議室

議題 1. FD・SD 合同フォーラムの開催について

報告 1. 各WGの検討内容について

2. 大学IRコンソーシアム調査について

第5回 日時：平成28年9月23日（金）9：00～9：45、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

議題 1. 学生・教職員ワークショップの開催について

2. 大学IRコンソーシアム「学生調査2016」の実施について

3. FDガイド第12号の作成について

報告 1. 学IRコンソーシアム「学生調査2015」の報告について

2. 各WGの検討内容について

3. その他

第6回 日時：平成28年11月25日（金）9：00～10：05、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

議題 1. 国立大学法人鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメント委員会規則の一部改正について

報告 1. 学生・教職員ワークショップについて

2. 平成28年度年度計画の目標達成について

第7回 日時：平成29年1月27日（金）9：00～10：15、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

議題 1. 鹿児島大学における教学IR体制の整備に向けて(継続)

2. 各部局における教育業績評価の仕組みの現状調査について

3. FDガイド第13号の作成について

- 報告 1. 学生・教職員ワークショップについて
2. 学術研究院制度における「鹿児島大学働き方モデル(仮称)」の導入について

第8回 日時：平成29年2月24日（金）9：00～10：00、場所：共通教育棟1号館5F 第1会議室

- 議題 1. 国立大学法人鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメント委員会規則の一部改正について
2. 平成28年度FD活動報告及びその評価について
3. 平成29年度FD活動計画について

- 報告 1. FD関連情報の収集について

II. 学生・教職員ワークショップWGの活動およびワークショップへの参加

平成28年度学生・教職員ワークショップ 「受講生が積極的に発言・行動する授業へのヒント ～番組司会の経験からのアドバイス～」

目的：講演をヒントに参加者全員で討議を行い、真に効果的な授業を実現するためのアイデアを異なった立場から考え、よりよい授業の実現を目指しましょう！

日時：平成28年10月25日（金）16:10～19:10

場所：郡元キャンパス 学習交流プラザ 中2階 学習交流ホール

対象：教育に関心のある学生、教育に関わっている全教職員

学生：各学部より推薦を受けた学生、自主参加希望者

教員：各学部、学共施設等の学生教育に関わっている教員、教務委員、FD委員

職員：各学部学生系職員、学生部職員

内容とスケジュール（司会進行：松木FD委員、報告：坂巻FD委員）

16:10 開会挨拶（清原理事、FD委員会委員長）

16:15 主旨説明（半田FD委員）

16:25 講演（アナウンサー）

17:10 グループ討議

17:10 説明（大和FD委員）

17:15 グループ討議

18:30 発表（大和FD委員）

19:00 アンケート記入

19:05 まとめ（半田FD委員）

19:10 閉会（松木FD委員）



ワークショップ風景

理工学研究科

平成28年度 鹿児島大学大学院理工学研究科FD委員会活動報告

はじめに

大学院設置基準第五章第十四条の三（教育内容等の改善のための組織的な研修等）で「大学院は、当該大学院の授業及び研究指導の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」とされている。理工学研究科の教育理念・教育目標に基づき教育の内容及び方法の改善を図るため、理工学研究科のファカルティ・ディベロップメント委員会（以下、FD委員会）は設置された。

理工学研究科の教員は、研究科と併せて理学部と工学部を兼担し、教育・研究に当たっている。そのため、研究科におけるFD活動は学部でのFD活動と重なる活動もあるが、授業の改善など独立して行っている部分もあるが、年度の始めに立てた計画に従って実施している。

平成28年度は、前年度に続いて（1）学生による授業アンケートとそれに基づいた各教員による授業改善計画書の作成、（2）FD講演会の実施、（3）理工学研究科構成員の活動等の自己点検、（4）学生の研究活動と教育成果の点検を実施した。本報告書においては、これらの活動の概要について報告する。

なお、本報告書は学部FD委員を兼務する理工学研究科FD委員各位のとりまとめや事務職員と事務支援室職員によるアンケート調査の整理等の協力により完成したことを明記し、深謝する。

平成28年度鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会
委員長 甲斐 敬美(全学FD委員会委員)

平成28年度 鹿児島大学理工学研究科ファカルティ・ディベロップメント委員会委員

委員長	甲斐 敬美	全学FD委員会委員（工学部副学部長）	H27. 4. 1～H29. 3. 31
委員	余 永	機械工学専攻	H27. 4. 1～H29. 3. 31
委員	前島 圭剛	電気電子工学専攻	H28. 4. 1～H30. 3. 31
委員	澤田 樹一郎	建築学専攻	H27. 4. 1～H29. 3. 31
委員	吉留 俊史	化学生命・化学工学専攻	H28. 4. 1～H29. 3. 31
委員	柿沼 太郎	海洋土木工学専攻	H28. 4. 1～H29. 3. 31
委員	淵田 孝康	情報生体システム工学専攻	H28. 4. 1～H30. 3. 31
委員	松本 詔	数理情報科学専攻	H28. 4. 1～H29. 3. 31
委員	半田 利弘	物理・宇宙専攻	H27. 4. 1～H29. 3. 31
委員	伊東 祐二	生命化学専攻	H28. 4. 1～H29. 3. 31
委員	相場 慎一郎	地球環境科学専攻	H28. 4. 1～H29. 3. 31

第1章 平成28年度鹿児島大学理工学研究科のFD活動

1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画と理工学研究科のFD活動（甲斐 敬美）

鹿児島大学の中期目標・年次計画の大学院課程におけるFDに関連が深い項目を表1.1にまとめた。これらの計画にそって、理工学研究科のFD委員会ではFD活動を実施した。

表1.1 鹿児島大学の中期目標・年次計画の大学院課程におけるFDに関連が深い項目

中期目標	中期計画
【A1】「進取の精神」を発揮して課題の解決に取り組むことのできる多様な人材を育成する。	【B2】大学院課程において、専門性を活かしつつ地球的課題に取り組むことのできる人材を育成するために、課題解決型学修（PBL：Problem Based Learning）等、多様な学修機会を平成31年度までに整備してその成果を評価・検証する。
【A2】地（知）の拠点として、地域課題の解決に取り組むことのできる人材を育成する。	【B4】鹿児島島の特色（島嶼、火山等）を活用し、自治体等との連携に基づいて把握した地域課題やニーズを踏まえ、地域志向意識を醸成し、地域課題解決の基盤となる汎用的能力の育成を図る「地域志向一貫教育カリキュラム」を平成30年度までに整備するとともに、その成果を基礎として、地元就職率向上を目指す「地域キャリア教育プログラム」を平成31年度までに整備し、本プログラムの受講者を年間150人以上に増やす。これらの人材育成にあたっては、試験結果や共通ルーブリックに基づくレポートやプレゼンテーションの評価、ポートフォリオ等のデータを収集・分析してその成果を評価・検証する。
【A3】教育目標の達成に向け、体系的カリキュラムを整備するとともに、学修成果を可視化し、教育内容・方法の改善サイクルを確立し、全学的な教育の内部質保証システムを整備する。	【B8】在学生や卒業生の要望、卒業生に対する社会からの評価を収集し、教育センター高等教育研究開発部及び担当教員を中心とした情報分析体制を平成30年度までに整備し、分析結果を大学全体で共有した上で具体的な教育改善策を実施する。
【A4】学術研究院制度や国際認証制度等を活用し、教育の質の向上を図る教育研究体制を整備する。	【B10】教員の指導力向上を図るため、新任教員等に対する研修制度を立ち上げ、必要に応じて教育学部や附属学校、教育センター高等教育研究開発部から教員を派遣し、カリキュラム開発や指導法、教育相談等に関する研修会を全教員に向けて定期的で開催し、平成28年度までに全専任教員の75%以上の参加を達成する。
【A36】学内規則を含めた法令遵守の徹底により、大学活動を適正かつ持続的に展開する。	【B77】研究活動上の不正行為や公的研究費の不正使用を防止するため、鹿児島大学における研究活動に係る行動規範、オーサーシップ・ポリシー、公的研究費の不正使用防止対策に関する基本方針について、教本やパンフレット等を作成し、講習会を実施する機会を増やすなどにより教職員や関係する学生に周知徹底する。また、外部資金の申請等には講習会への参加を義務付ける。更に法令遵守に関わる相談受付、助言等のための環境を整備する。

1.2 理工学研究科FD委員会（甲斐 敬美）

理工学研究科は平成21年度から部局化に伴って新しい理工学研究科としてスタートした。前期課程は工学系が6専攻、理学系が4専攻の10専攻から選出された各委員から構成されている。平成28年度は理工学研究科のFD委員会を2回行った。平成28年5月11日に第1回の理工学研究科FD委員会を開催した。本委員会では、平成28年度FD活動計画について議論を行い、次の項目を実施することが承認された。(1)FD講演会の実施、(2)学生による授業評価アンケート実施及び授業計画改善書の提出、(3)他機関主催FD研修会への教員派遣、(4)「理工系国際コミュニケーション海外研修」発表会。第2回（平成29年3月2日）の委員会では、平成28年度研究科FD活動報告書の作成について、分担の確認と内容について検討を行った。

第2章 理工学研究科FD講演会とFD活動

2.1 理工学研究科FD講演会（半田 利弘）

平成28年度の理工学研究科FD講演会は、理学部、工学部、理工学研究科FD委員会の共同主催として企画され、平成28年10月13日（木）13時30分～15時30分まで、工学部理工系総合研究棟2Fプレゼンテーションルームで開催された。慣例により本年度は理学部FD委員が企画・進行を担当した。講師としてお招きした九州大学教授原田恒司先生は、現在の所属が基幹教育院であるが、以前は理学部に所属しており、専門は素粒子物理学理論である。今回は、「理系（専門）科目でのアクティブ・ラーニング～失敗なんか怖くない～」と題して講演していただいた。講演会への参加者は、教員45名（理系：12名，工系：32名，他学部1名），事務・技術職員16名と学生4名の合計65名であった。

講演に先立ち、半田理学系FD委員長からの趣旨説明に続き、近藤研究科長から開会挨拶として、鹿児島大学の第3期中期計画に、アクティブ・ラーニング型授業を50%以上とすることを平成31年度までに達成することが掲げられていることが紹介され、この講演を参考に各教員が具体的対応ができるようになるだろうとの期待を込めた紹介がなされた。引き続き、講演者の経歴および所属等について簡単な自己紹介がなされた後、講演となった。

まずは、アクティブ・ラーニングとはどのようなものかを原点に立ち返って改めて見直すとともに、その基礎となる概念や考え方を九州大学での実状を踏まえた紹介がなされた。妥当な人数の設定を含め、アクティブ・ラーニングを実現するためには、問題点が発生しないようにするためには仕組みとしての工夫が必要であることが具体的な事例として紹介された。

アクティブ・ラーニングとは授業に参加している学生が主体的に活動することによって授業内容を身につけるといふ学習形態である。これに応じて後半では講義自体がアクティブ・ラーニングとして実施されたことが極めて印象的である。参加者は、まず指定された席に座りグループ分けされている。これは参加者の所属や年齢、性別などを考慮して、異なる立場と推定される人間を意図的に混在させる構成となっていた。この状況からグループ内での精神的敷居をなくすためのアイスブレイクが実践された。アイスブレイクの実際には様々な手法があり得るが、その一例として実際に使用できるものが示され、その効果のほどを参加者が直接評価できるようになっていた。続いて、クリッカーというシステムの紹介と、それをを用いたグループ学習の授業例も実演され、参加者には非常に具体的で参考になる体験学習であった。

今回の講義を通じて分かったことは、アクティブ・ラーニングなど教育改善には確実な理論や絶対の方法がないと認識することであろう。これは、教育の専門家ではない理系研究者でも実践を通じて改善を図ることも十分に可能であり、理系の方法論によって実践と検証を踏まえて順次改善を図ることが重要であることが強く認識される講演会であった。

2.2 海外実習報告（余 永，伊東 祐二）

理工学研究科では、「グローバルに活躍できる理工系人材」を育成することを目標に、グローバル人材育成支援室を設置し、平成27年度から、大学院共通科目として「理工系国際コミュニケー

ション海外研修 (Graduate Overseas Engineering and Science Studies for Innovation: GOES)」を開講し、その中で、海外での語学研修と、大学、企業などでのインターンシップを行っている。平成 28 年度も、Q2 期に 16 名、Q4 期に 2 名の学生、合計 18 名が参加した。その概要を以下に示す。

開講期	実習場所	参加人数	語学研修先	インターンシップ先
Q2	ノースダコタ	M2：1 人	ノースダコタ州立大学	ノースダコタ州立大学研究室
Q2	ニューヨーク	M2：1 人、 M1：2 人	カプランインターナショナル (語学学校)	建築設計事務所、州立ニューヨーク・シティ大学研究室
Q2	サンディエゴ	M1：3 人	サンディエゴ州立大学付属語学学校	設計・建築事務所、科学博物館
Q2	サンディエゴ・サンノゼ	M1：8 人	サンディエゴ州立大学付属語学学校	精密機器販売、IT 関連、材料、検査機器、電気設備、食品関連企業
Q4	サンノゼ	M1：2 人	サンノゼ州立大学附属語学学校	ロボット専門商社、電子部品販売

一方、日本学術振興会・二国間共同研究の支援を受けて、平成 28 年 9 月 12 日～10 月 3 日の間、総合理工学専攻の博士後期課程 1 年生 1 名がスペイン・ザイディン研究所の Delgado 博士およびアウラデイ研究所の Becana 教授の研究室に滞在した。ザイディン研究所では、第 6 回植物 NO 研究会に参加して研究発表と情報収集を行い、アウラデイ研究所では、先方の大学院生らと共同で植物ヘモグロビン遺伝子の変異植物の特性を解析した。

また、こちらも日本学術振興会・二国間共同研究の支援により平成 28 年 10 月 3 日～11 月 20 日の間、生命環境科学専攻の博士後期課程 2 年生 1 名がタイ・スラナリ工科大学の Teamroong 教授の研究室に滞在し、先方の大学院生らと共同で根粒菌の遺伝子破壊に取り組んだ。期間中、マレーシア・ペナンで開催された第 4 回アジア窒素固定会議にタイの大学院生らとともに参加した。

さらに、生命化学専攻博士前期課程 1 年生 1 名が、文部科学省による海外留学プログラム：トビタテ留学 JAPAN に採択され、平成 28 年 9 月 12 日～平成 29 年 3 月 3 日の期間、トロント大学総合病院においてメディカルイラストレーションおよびサイエンス CG の技術について学んだ。

2.3 他機関主催 F D 研修会参加報告

2.3.1 芝浦工業大学 2016 年度 AP シンポジウム (甲斐 敬美)

平成 28 年 12 月 17 日に芝浦工業大学 (東京都) 芝浦キャンパスにて開催された「芝浦工業大学 2016 年度 AP シンポジウム」に参加した。テーマは「アクティブ・ラーニングによる理工系人材育成と成果の可視化～課題と実践事例」であった。基調講演は文部科学省口頭教育局の河本達毅氏によって「大学教育再生加速プログラム (AP)「高大接続改革推進事業」について」という演題で行われた。その後、芝浦工業大学、金沢工業大学、東京電気大学および福岡工業大学より AP 取組み紹介がなされ、最後にパネルディスカッションが行われた。

PDCA サイクルを十分に機能させるためのひとつの手段としてアクティブ・ラーニングが存在するが、それぞれのプロセスにおける重要な取組みをまとめると次のようになる。

Plan：3 ポリシーの設定と具体化・詳細化、プログラムの学習・教育目標の設定、学修成果と学修時間を保証するシラバスの策定

Do：反転授業、アクティブ・ラーニング手法の開発と普及、e-ラーニングとの連携による授業

外学修時間の保証, さらには PBL, デザイン教育

Check : 達成度評価用ルーブリックなどの開発, など各種評価手法の導入

Act : e-ポートフォリオシステムの構築により, 学びの振り返りと教育改善, 教職学協働のワークショップの組織的实施

2.3.2 大学コンソーシアム京都主催FDフォーラム(半田 利弘)

平成29年3月4・5日に京都で開催された, 大学コンソーシアム京都主催の「第22回FDフォーラム」に参加した。その内容を以下で報告する。

主催の大学コンソーシアム京都は公益財団法人で法人としては1994年に発足しており, 現在は, 京都にある50の大学・短大と行政, 経済団体などが加盟している。本フォーラムは大学教職員のFDに対する意識を高め, 大学教育の改善に資することを目的として, 1995年から①FD活動の普及, ②大学教育, 授業改善に関する実践・研究報告, 人的交流の場の提供, ③京都におけるFD活動の情報発信をテーマに, 毎年開催されているもので, 全国からの参加がある日本最大級のFD企画である。

今回は, 「大学の教育力を発信する ～教養教育改革と現代社会～」をテーマとし, 京都コンサートホールおよび隣接する京都府立大学教養教育共同化施設 稲盛記念会館にて開催された。

初日前半は, 京都コンサートホールの大ホールに於いて, 以下の3件の講演が行われた。

1. 「新しい入試の役割—選抜から接続へ—」

林 哲介(京都三大学教養教育研究・推進機構 特任教授)

2. 「学びと成長を見据えた高大接続・高大連携—アクティブラーニングでつなぐ, つながる—」

日比嘉高(名古屋大学大学院文学研究科 准教授)

3. 「高大接続の改善を見直したカリキュラムと評価の改革—京都大学教育学部特色入試の試みを中心に—」 鬼塚哲郎(京都大学大学院教育学研究科)

林氏の講演は, 戦後に行われた大学での教養教育とそれを取り巻く社会情勢の歴史的変遷を概観したもので, 25年毎の大きな区切りごとにまとめていた。1945年からの第1期では, 戦前教育の反省に立つ教育目標が高度経済成長期の理工系倍增計画の流れに押し流され, 1970年からの第2期では, エリート教養主義から大学の大衆化が進んだことへの対応が不十分だったことを指摘した。そこでは, 「理念・目的の実現のための真剣な努力・工夫がなされることを期待するとともに, 大学人の見識を信じるものである」という大学審議会の答申に答えられなかったという意識が示された。1995年からの第3期では, 先の見えない世界がもつ社会的不安感を社会も大学も払拭することができないことから“高等教育の危機”がもたらされているという解釈が示された。ここから, 大学が教養教育の目的や意義をきちんと示せないまま, 「民主社会に貢献する市民の養成」という目的は“神棚”に祀ってしまったことが問題であり, 実際の教養教育が「適応型能力」という非学術的・非教養的なものに浸潤されたことを指摘していた。こうした反省に立った上で, liberal arts の目的や意義を大学自身が根本から見つめ直し, 細分化され全体像が見えなくなっていく現代社会でこそその意味を広く示し, 第4期が始まると予想される2020年以降へと準備する必要があると結んでいた。

日比氏の講演は, 下村文科大臣が示した, いわゆる「文系学部不要論」に対して, これが根拠

に乏しいことを統計資料に基づいて示した上で、大学に求められている教養教育を実施する上での困難を指摘し、大学にできることや大学教養で学ぶべきことは何かについて提案を行っていた。

鬼塚氏の講演は、これらに比べるとずっと具体的な事例紹介であり、自分たちが大学で行っている授業「キャリア・Re-デザイン」の内容を紹介した。これは、低単位・低意欲層向けのキャリア科目であるが、授業中に学生個人を本名ではなく別名で呼ぶことや毎回授業の振り返りをするなど、学生が主体的に行動する仕掛けを具体的に紹介した上で、定期試験からその効果を読み解き、それと教養教育との関係を述べていた。

初日後半は、前者の講演を受け、会場から集めた質問に対してシンポジストが答える形式で京都3大学教養教育研究推進機構の児玉英明氏の進行のもと、パネルディスカッションが行われた。今回の直接のテーマ以外ではFD活動への参加者がなかなか増えない問題が指摘された。長年の経験者からも、うまい方法が見つけれないとの発言があり、この問題の難しさが浮き彫りとなった。引き続き行われた情報交換会では、シンポジストを含め、九州地区を含む幅広い地域からの参加者と意見交換を行うことができ、こちらも有意義であった。

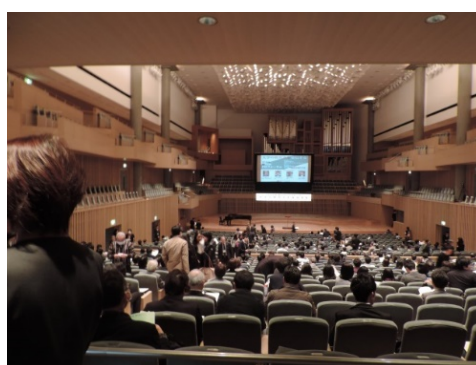
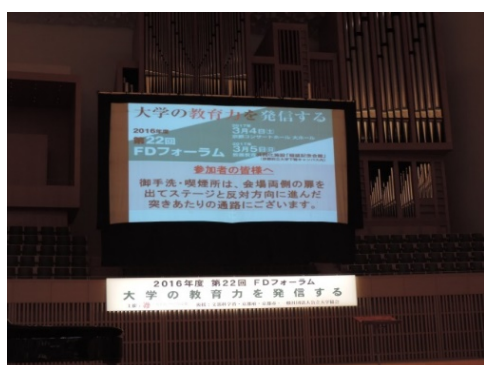
2日目は、会場を隣接する京都府立大学にある教養教育共同化施設「稲森記念会館」にて15の分科会に分かれて発表や議論が行われた。

- 1) イマドキの大学教育と「よい学び」
- 2) 理系基礎教育のデザインをめぐって
- 3) 教育の多様化の中での女子大学という選択
- 4) 自大学の文脈を踏まえたFDの企画・運営
- 5) 学部ゼミナールでいかに学習成果を高めるか。
- 6) 教学改革を担う「中間的リーダー層」教員のホンネと希望
- 7) 大学と劇場、博物館、美術館
- 8) 健康医療系専門教育：学ぶ側の主体性、満足度、理解度を引き上げる
- 9) 学生の学生による学生のためのラーニングコモンズ
- 10) 教養教育としての自校教育 ～「建学の精神・理念」の具体化にまつわる課題と展望～
- 11) 学生の主体的な学びと自律性を育む教育の可視化を探求する
- 12) 「アクティブ・ラーニング」から「インタラクティブ・ラーニングへ」
- 13) 授業とフィールドワーク ～教室の中と外をどうつなぐか～
- 14) 災害復興支援活動における現場の教育力
- 15) 教養としてのライフスキル

いずれも大勢の参加者があり賑わっていたようだが、出席する分科会は事前に指定することになっており、私は第2分科会「理系基礎教育のデザインをめぐって」に出席した。大学教育学会の小笠原正明氏の発表は「リベラルアーツとしてのSTEMの展望」であった。STEM(Science, Technology, Engineering, Mathematics)の扱いについてであり、日本の工学部の歴史と特徴を紹介した上で、STEMを教養教育と基礎専門教育とに分割していた理由と結果を分析し、これらを「統合」ではなく「インテグレート」する形を探る必要があるとの内容だった。湘南工科大学の水町龍一氏の発表は「入学者の数学力の変化と目指すべき数学教育」として入試や簡単な数学の試験の結果分析に基づく内容であった。入試成績との相関からは“学力不問入試”への批判がある一

方、中等教育で修得すべき知識や思考の訓練不足をどのようにして補うかも重要である指摘がなされた。金沢工業大学の青木克比古氏の発表「金沢工業大学の数理教育」では、同学で早くから行われている学生主体の教育の状況が紹介され、当初は「非現実的」と言われた体制が今や時代の注目を集める効果的な教育体制と見なされていること、それでも常に改革を続けていることなどが紹介された。これらは有意義な内容ではあったが、いずれも工学部の話に終始した感があり、理系基礎教育として語るならば、理学系（あるいは医学系）も視野に入れた発表が望ましかった。

最後に、会場にいた全員が3班に分かれて議論を行い、自らが考えることを披露し合うことで関連する議論を深めることができた。



2.3.3 第23回大学教育研究フォーラム（伊東 祐二）

平成28年3月19-20日に京都大学吉田キャンパスにて開催された、京都大学高等教育研究開発推進センターの主催による「第23回大学教育研究フォーラム」に参加した。以下のその概要とそこから得た私見について報告する。

昨年の工学系の塗木先生による同報告でも書かれていたように、本フォーラムは、20年以上にわたり、大学教育の最新動向や知見に関する情報交換や交流の場として、全国の大学・高等教育機関からの多く参加があり、大学教育に関わる優れた実践と研究の成果共有と蓄積に貢献してきた。本年も日本全国から785名の参加があり、年々拡大しているように思われる（昨年は600名）。

1日目は、個人研究口頭発表、個人研究ポスター発表から始まり、特別講演、学術セミナーが続ぎ、MOSTフェロー発表会後に、メインシンポジウムが行われた。

個人口頭発表では、アクティブラーニング（Active learning: AL）のセッションに参加し、4つの発表を聞いた。最初は、芝浦工業大学の井上雅裕氏による「アクティブラーニングの質保証およびジェネリックスキル育成のためのプロジェクトマネジメント教育の現状と展望」という講演で、研究プロジェクトの立案から実施に至るまでのプロジェクトマネジメントを学生に担当させ、それを通して、イノベーション創出に向けた総合的能力をもつ人材育成を行うといった取り組みの紹介であり、実際にいくつかのプロジェクトが実用化に近づいているとのことであった。

2番目は、学校法人河合塾教育研究部の高井靖雄氏による「大学のアクティブラーニング調査から見てきたこと」という内容で、大学へアンケートと聞き取り調査を行い、アクティブラーニングにはいくつかのパターン（例えば、課題解決型、知識定着型等）に分類されることを示し、その実施に向けた課題や問題点を指摘する内容であった。印象的だったのは、アクティブラーニ

ングの取り組みが、本当に学生の主体的対話的深い学び（ディープラーニング）に結びついているのか、またそれをどのように評価するのが大きな課題であること、現在大学で盛んにおこなわれている、カリキュラムポリシーなどの策定も政策的な観点からのもので、学習者の立場に立った策定が必要である旨が語られていた。また、高校での進路指導において、従来の（１）大学ランキング、（２）生徒の適性に加え、（３）大学の教育内容が重視される傾向にあることも強調されていたことが印象深い。３番目は、東北大学災害科学国際研究所の邑本俊亮氏による「被災地訪問による課題解決型アクティブラーニングで「学生の生きる力」を育む」といういわゆる、課題解決型の取り組みを紹介する発表であった。最後は、「AL ベストティーチャーの表彰制度の設計と効果に関する一考察」という演題で、司会の山口大学教育センター教授の林透氏によるものであり、山口大学におけるAL（アクティブラーニング）ポイント制度の解説と、学生の授業評価に基づいた教員表彰制度の取り組みを紹介していた。このような制度により、教員のインセンティブやALの質的向上には貢献できるが、ここでも、実質的な学生のディープラーニングへの到達をどのように評価するかが、問題となっていたように思う。

午前のセッションの後半では、新井紀子氏（国立情報学研究所社会共有知研究センター長）による特別講演「人工知能が大学入試を突破する時代、人は何をすべきか？」も聞いたかったが、最近のカリキュラム設計に関する勉強をしたいと思い、並行開講されていた深堀聰子氏（国立教育政策研究所高等教育研究部長）による学術セミナー「学問分野別学修成果アセスメントから学位プログラム設計へ」を聴講した。ここで認識を新たにしたのは、大学教育は、（教員が）何を教えたかではなく、（学生が）何を身に着けたかによって評価されるという点である。この達成のためには、従来型の、卒業までに提供される科目を、例えば124単位を修得することで学位を授けるといった単位積み上げ型のカリキュラム設計ではなく、教育目的（理念）のもとに作った目標を達成するための科目のデザイン・選定を行う、つまり、目標達成のために科目・カリキュラムを逆向き設計することが必要であることが強調された。ただ、この改革を推進する上で、大学教員側の旧来の考え方が障壁となっていることも触れられていた。

最後に、メインシンポジウムが、「アセスメント・イン・アクション—評価の新しい形—」と題して、土井隆雄氏（京都大学宇宙総合学ユニット特定教授）、平田オリザ氏（東京藝術大学COI研究推進機構特任教授）、錦織宏氏（京都大学医学教育推進センター准教授）によって行われた。京都大学の北野正雄理事（教育・情報・評価担当）の挨拶と京都大学での取り組み紹介の後、土井氏が、「有人宇宙活動のための人材育成について」、平田氏が、「知識の量を量る試験から、学ぶ仲間を選ぶ試験へ」、錦織氏が、「医学教育における学生・研修医の評価」という題材で、宇宙、演劇、医学という異なる分野の人材育成とその評価に関する講演を行った。特に、土井氏が、有人宇宙学での教育目標として、1. 習ったことを実践できる。2. 創造できる、3. 100%の力を発揮できる、とわかりやすく端的な目標を上げていたのが印象的であった。一方、平田氏は、近い将来実施される入試制度改革に触れ、基礎的な知識・技能に加え、思考力・判断力・表現力の評価、さらには主体性、多様性、協働性が問われるような入試が行われるようになるが、基本的には、大学のミッションステートメントに合致した入試を行うことが重要になるとも述べた。その後の情報交換会の後、1日目は終了し、2日目は、一般発表や事例発表が行われた。

このフォーラムを通して、アクティブラーニングやカリキュラム設計に関するいくつかの講演

や事例発表を通して、これらを実践する上での注意点、問題点などを考える良い機会になった。
是非、他の教員の皆様も、一度は参加されることをお勧めしたい。

第3章 学生による授業評価

3.1 博士前期課程の授業評価アンケートの分析結果

3.1.1 工学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（前島 圭剛）

平成23年度から平成28年度までの工学系専攻の授業評価アンケート結果を比較したものを図3.1.1に示す。平成28年度は前年度と比較して概ね同じ評価であったが、①出席と②予復習は0.1程度の増加がみられた。これらの項目が増加していることは学生の学習に対する姿勢が良好になっていることを示しており、その結果として④理解度が向上することが期待されるが図3.1.1ではそれが見られない。学生の学習の仕方か教員の教え方の問題かこの結果だけでははっきりしないが、継続的に改善を進めていく必要があると思われる。過去6年間の傾向を見ても上昇傾向の結果はほぼないため、これまでとは異なるアプローチで改善の効果がある可能性がある。

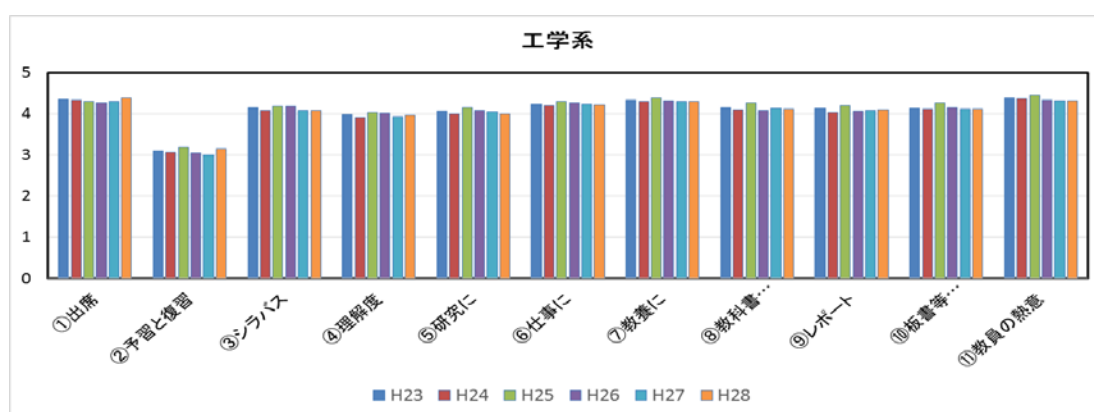


図 3.1.1 博士前期課程（工学系専攻）授業評価アンケート結果の推移

3.1.2 理学系専攻の授業評価アンケートの結果報告（松本 詔）

概ね例年並の評価であると言えよう。「出席」を除くすべての項目で昨年度を上回っている。「出席」も微減であって例年並となっており、大きな変化はない。「予習と復習」の項目は他の項目と比較して例年のように低い評価であり、また昨年度の大幅な減少からは回復している。

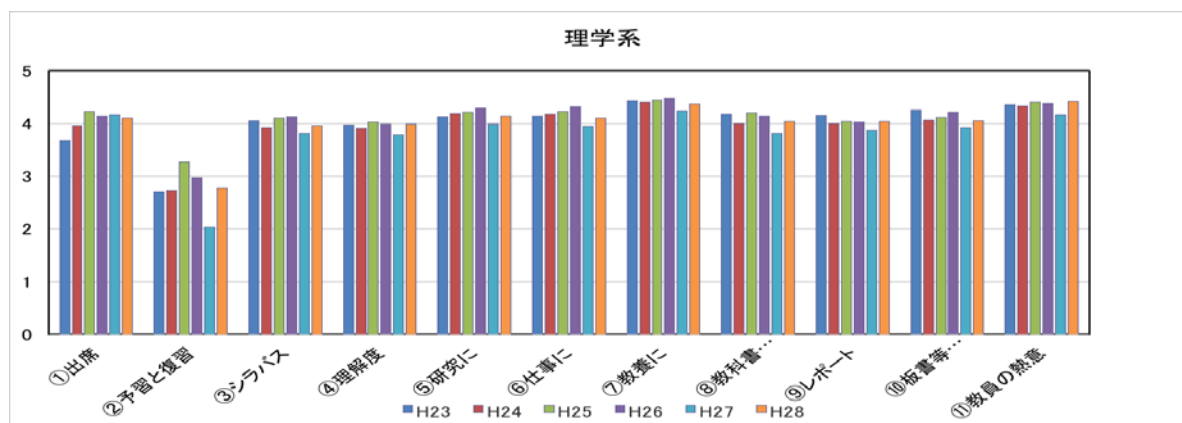


図 3.1.2 博士前期課程（理学系）授業評価アンケート結果の推移

各専攻とも、多くの項目で昨年度よりも上昇が見られる。昨年度はクォーター制への移行のために教員・学生共に混乱があったのではないだろうか。いくつかの講義の慌ただしさが授業評価アンケートに反映されていたのかもしれない。いずれにせよ今年度は回復しているので、クォーター制移行の混乱は一時的なものであると期待される。

3.2 博士前期課程の各専攻における授業評価アンケート分析結果

3.2.1 機械工学専攻（余 永）

機械工学専攻の講義科目に対して実施された授業評価アンケートの結果を図 3.2.1 に示す。この結果は、主なアンケート項目の評価点について 1 年間に開講された科目で平均した点の過去 6 年間における推移を示している。

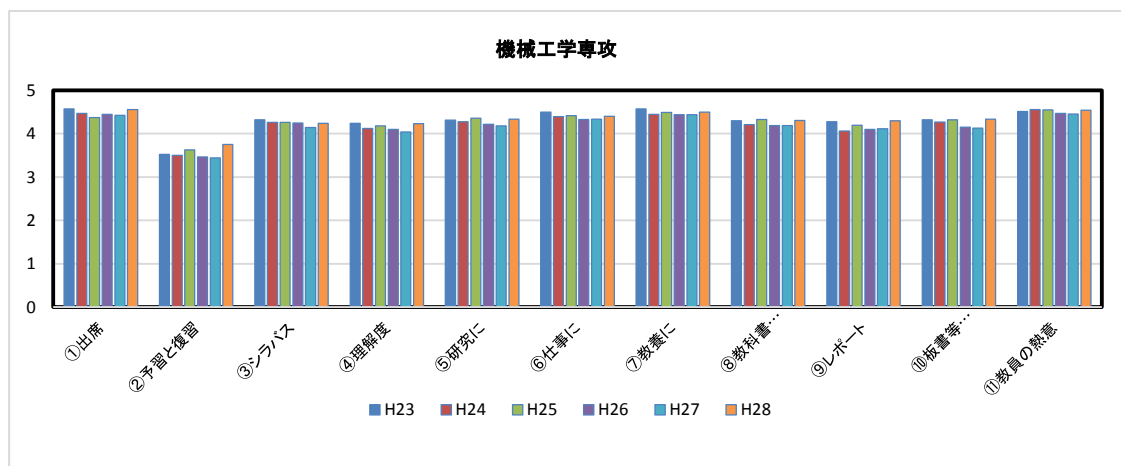


図 3.2.1 機械工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

平成 19 年度後期から理工学研究科 FD 委員会として新規にアンケートの実施を始めたことによるアンケート項目の変更があった。また、平成 21 年度にはアンケート項目の簡素化と精査が行われた。今回は、アンケート項目変更のない平成 23 年度からのものとして考察する。

図 3.2.1 より、平成 23 年度からはほぼ横ばいの傾向を示しているが、平成 28 年度からは前年度に比べ全項目の評点が上がっていることがわかる。これらはいずれも高い水準を維持していることから、教員による授業改善への成果が現れていると考えられる。ただし、項目①の「出席」について、高い水準を維持しているが、平成 23 年度より平成 25 年度の評点がやや低くなり、平成 28 年度からは平成 23 年度の水準に戻っている。

項目②の「予習と復習」について見ると、平成 23 年度からの横ばいから平成 28 年度が上がっている。教員が課すレポート等による授業の予習・復習の方式が定着しながら改善したといえる。

項目③の「シラバス」、項目④の「理解度」、項目⑤の「研究に（役立つ）」については、平成 23 年度以降は高い点を維持して平成 28 年度が上昇している。教員が授業改善に意識して取り組んでいる結果であろう。

項目⑥の「仕事に（役立つ）」と項目⑦の「学業に（役立つ）」については、役立つと考えている学生が多い。項目⑪の「教員の熱意」についても高い点を維持している。

今後も継続的な授業評価アンケートの実施と分析により、教員と学生の意識改善に役立てていくことが重要である。

3.2.2 電気電子工学専攻（前島 圭剛）

図 3.2.2 に、電気電子工学専攻の過去 6 年分（平成 23 年度から 28 年度）の授業評価アンケート結果の推移を示す。平成 28 年度の評価を前年度と比較すると、①出席と②予復習が増加したほかは前年度よりも低下している。また、過去 6 年の評価を見ると、平成 25 年度までは増加傾向だった評価がそれ以降低下傾向を示している項目が多いように思われる。近年電気関連の業界は様々な変化が起こっている。また、学生の気質も変化していることが言われている。このような変化に対して授業の改善が追いついていない可能性が考えられる。これらの変化に対応して、評価が改善するように努力していく必要がある。

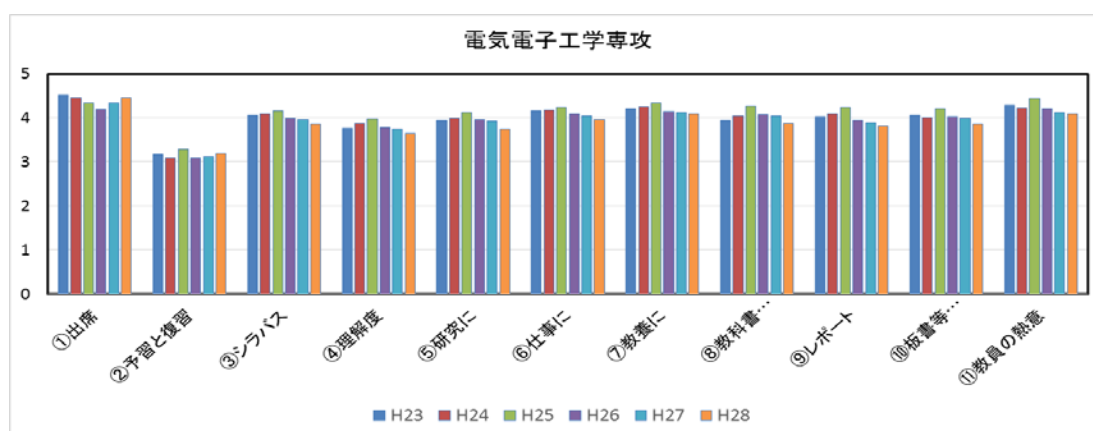


図 3.2.2 電気電子工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.3 建築学専攻（澤田 樹一郎）

建築学専攻の講義科目の授業アンケートの前後期別の年度ごとの評点平均値の推移を図 3.2.3 に示す。多くの項目において、平成 25 年度がピークを迎え、低下の後、微増傾向を示している。また、「②予習と復習」の評点の低下傾向が年々続いている。今後、科目ごとの詳細な分析などにより、評点の現状維持又は向上への方策を考える必要がある。

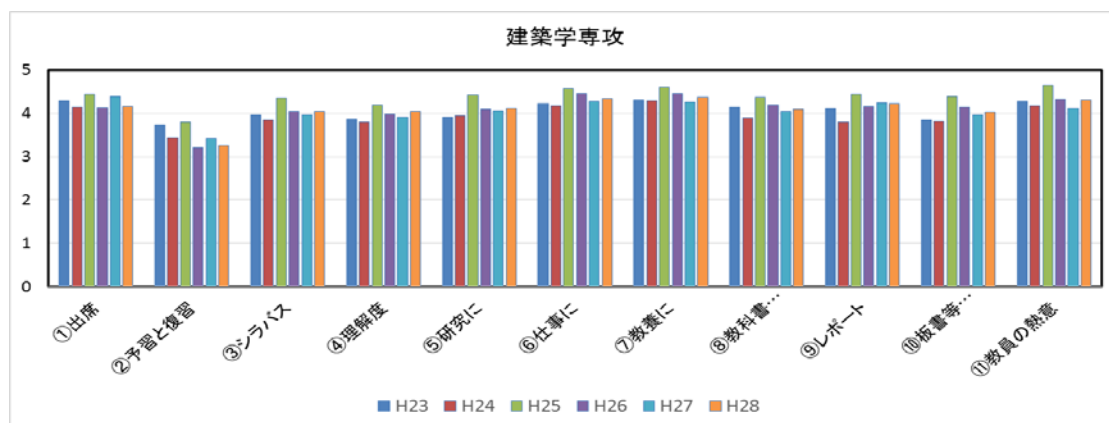


図 3.2.3 建築学専攻の講義科目の授業アンケート結果

3.2.4 化学生命・化学工学専攻（吉留 俊史）

化学生命・化学工学専攻の最近6年間（平成23～28年度）の授業アンケート結果を図3.2.4に示す。項目②“予習と復習”の評価が甚だ低いのを除き、ほとんどの項目で4.0付近であり、総じて高い評価を受けている。項目⑤⑥⑦⑩⑪は最近3年間で上昇傾向にあったが、平成28年度は全て若干減少した。これら4項目は理工学研究科（工学系）でも3年間下降傾向で、28年度も下降しており全体的な傾向である。財政の劣悪化や諸業務の肥大化が最大の本業である教育を侵食し始めていることを危惧する。項目②の評価は2.93と他項目より著しく低く、工学系の3.16よりも低い。しかし、他項目とは異なり、大きく上昇傾向にあり、特に平成28年度は更に大きく上昇した。教員の意識改革が起こっているものと考えられ、改善の傾向が顕著である。

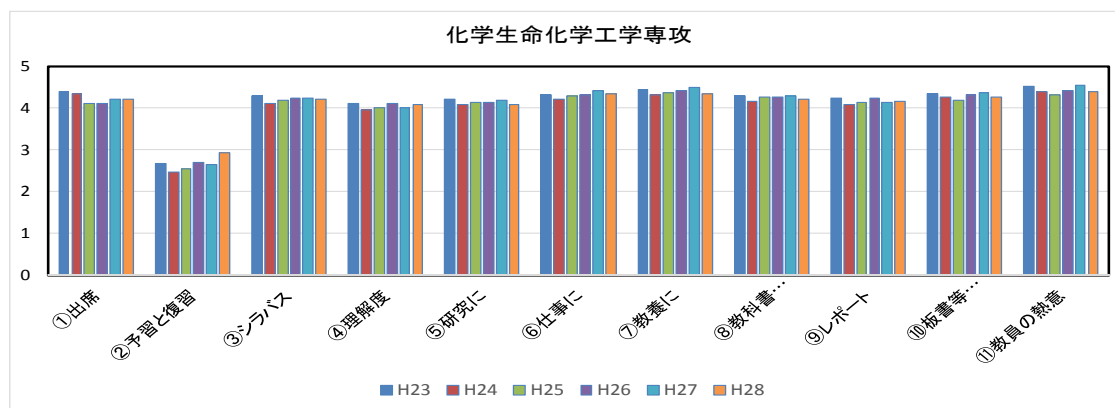


図 3.2.4 化学生命・化学工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.5 海洋土木工学専攻（柿沼 太郎）

海洋土木工学専攻において、平成23～28年度の6年間に実施した授業評価アンケートの結果を図3.2.5に示す。ここで、各項目に対する、アンケート実施科目全体の平均評価を示している。①「授業にどれだけ出席しましたか。」の評価は、平成27年度に大きな低下が見られたが、平成28年度に回復した。ただし、この平成28年度の①の評価は、理工学研究科及び工学系の平均値よりも、それぞれ、約0.2及び0.3低い。また、平成28年度の②及び⑥～⑪の評価は、例年と同様の結果であり、いずれも、理工学研究科及び工学系の平均値を上回っている。ただし、②「予習と復習は1コマ（90分）の授業に対して、どれくらいしましたか。（レポート作成時間も含まれます）」の評価は、他の項目と比較して依然低い。単に、レポートの提出回数を増やすのみならず、講義の内容や、その周辺領域に対して、より深い関心を持つよう大学院生を導くといった努力が必要であろう。一方、平成28年度の、③「この授業のシラバス記載内容は受講申請に役立ちましたか。」、④「授業はほぼ理解でき、学習目標は達成できそうだ。」、そして、⑤「授業の内容は自身の研究を進める上で役立つと思う。」の評価は、この6年間で最も低く、理工学研究科及び工学系の平均値を下回った。特に、これら3項目に関して注意を要する。

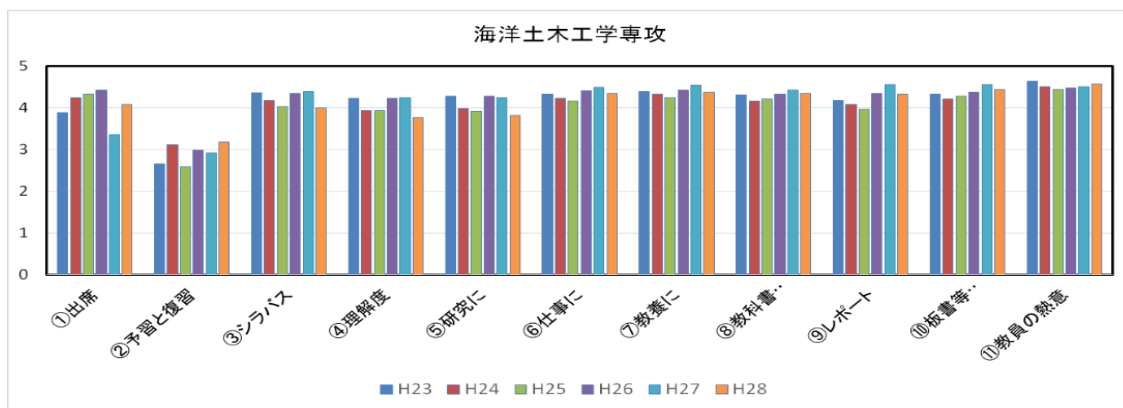


図 3.2.5 海洋土木工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.6 情報生体システム工学専攻（瀧田 孝康）

平成 21 年度に改組が行われ、情報工学専攻と生体工学専攻生体電子工学講座が統合して情報生体システム工学専攻が立ち上がり、8 年が経過した。情報生体システム工学専攻の FD 授業評価アンケートは平成 21 年度から 28 年度分の 8 年間のデータが収集されていることになる。ここではその 8 年間のうち直近の 6 年間の経年変化を見ることにする。今年度の FD 活動報告書では、情報生体システム工学専攻のデータと平成 28 年度の工学系専攻の平均値及び平成 28 年度の理工学研究科全専攻の平均値と比較することによって評価と論評を加えたい。

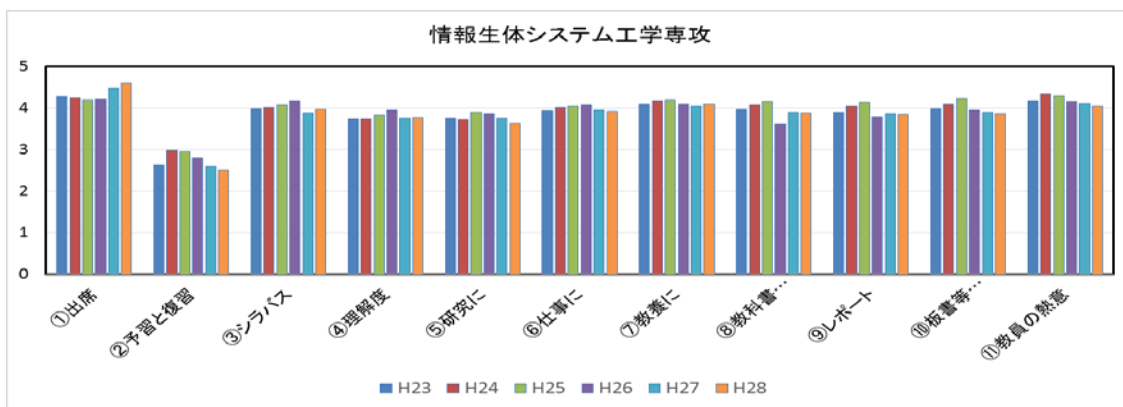


図 3.2.6 情報生体システム工学専攻の授業評価アンケート結果の推移

比較対象となった 11 項目について情報生体システム工学専攻の集計結果を図 3.2.6 に示す。集計した科目数は、81 科目（前期 40 科目、後期 41 科目）科目であった。

6 年間の推移を見ると、「①出席」を除く項目について、平成 27 年度以降評価が下がっているものが多い。特に「②予習と復習」、「⑤研究に」の項目が著しく下がっており、学生の講義に対する取り組みや期待度が下がっていることが推察される。一方で「③シラバス」は昨年度と比較して大きく向上しており、昨年度の反省が生かされた結果となった。また「⑪教員の熱意」が平成 24 年度以降徐々に下がってきている。数値的には 4.0 を超えているが、教員サイドの授業への意識改革も必要だと思われる。

平成 27 年度「①出席」の項目の評価は、前年よりさらに評価が上がったが、「②予習と復習」

の項目は、平成 24 年度から下がっており、今年度は 6 年間で最低の点数となった。自宅課題を課すなどの対応が必要だと思われる。また、「①出席」を除くすべての項目で専攻の平均値と比べて、評価が低くなっている。これらの点は、次年度以降、改善すべき課題である。

3.2.7 数理情報科学専攻（松本 詔）

数理情報科学専攻は、昨年度は受講者が少人数だったため授業評価アンケートを行わなかった。そのため H27 年度のグラフが表示されていないことに注意されたい。今年度のデータを一昨年度以前と比較すると、「出席」は改善されているが、それ以外の多くの項目では点数が下がっている。概ね例年通りの講義が行われたはずなので、なぜ今年度の評価が下がったのか原因は不明である。来年度以降の推移を注視する必要があるだろう。

しかしながら、本専攻の講義の多くでは受講数が 10 人に満たない。アンケートの結果に一喜一憂するよりも、学生から直接意見を聞くなどした方が授業改善に結びつくのでは無いだろうか。

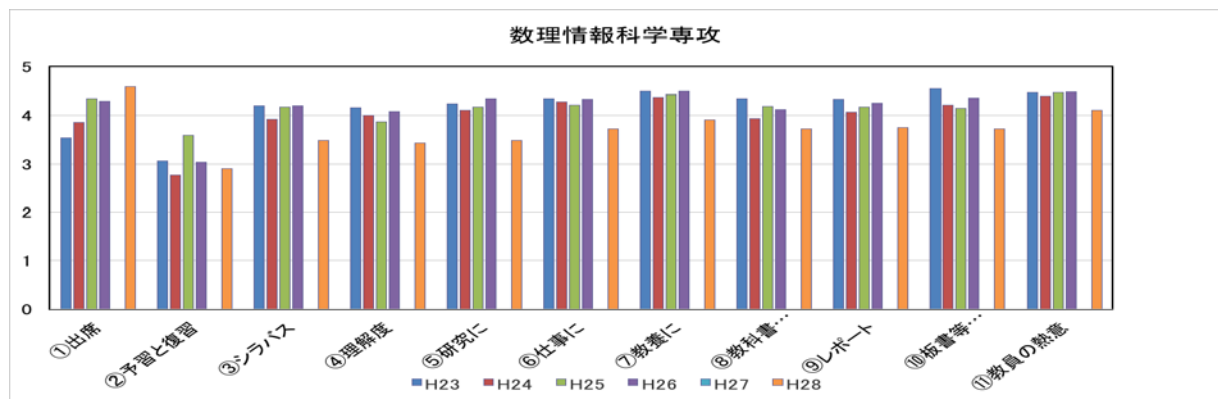


図 3.2.7 数理情報科学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.8 物理・宇宙専攻（半田 利弘）

本専攻での学生による授業評価アンケートの回答項目別評点について、平成 23 年度から平成 28 年度までのアンケート結果を比較したものを図 3.2.8 に示す。回答を科目毎に平均した上で、開講期を問わず 1 科目毎に同一重みで平均した。

ほとんどの項目が 4 点程度であるが、自学自習時間についての回答値だけが目立って低い。しかし、言葉による回答番号を単純に数値化しているため数値自体は意味を持たないため、このような項目間との比較も意味があるとはいえない。受講生数等の条件が異なるため、他専攻との比較は余り意味がない。

したがって、過去 6 年間の変化についてしか述べることはできないが、この間で劇的な変化、継続的な変化は見られない。昨年度の報告では H25 年を境に出席率が回復に転じているが、それはたとしていたが、それは有意な違いとは言えないとしていた。実際、H28 年度は過去 3 年間に上昇した程度だけ減少しており、やはり揺らぎの範囲内での変動であったといえる。実際、前年との比較で見ると、①のみが減少、②～⑪は全て増加しており、これはその前年の傾向とまったく逆である。授業評価の高低と出席とが逆相関になっていることになるが、素直に考えると、こ

の傾向は不可解である。

前年度以前の報告書でも述べられているが、こうした状況を見ると、ここから授業の評価や改善について指針を示すのは限界がある。回答選択の相関を調べることも含め、授業アンケートだけに頼らない、他の手段による授業評価も併せた上での分析が必要であろう。

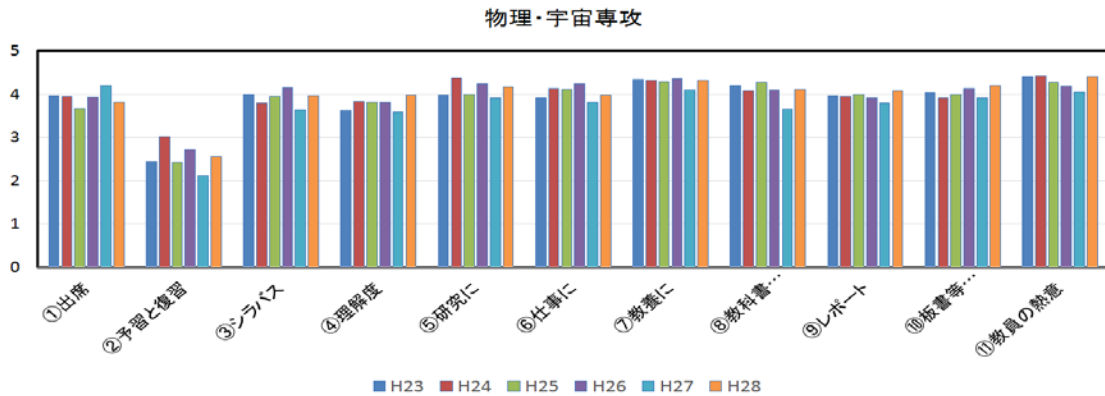


図 3.2.8 物理・宇宙専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.9 生命化学専攻 (伊東 祐二)

平成 23 年度から平成 28 年度までのアンケート結果を比較したものを図 3.2.9 に示す。平成 28 年度は、総じて例年と同程度のスコアであり、昨年度は、特に、②の予習復習の項目が低かったため、本年度はその評価が回復した結果となった。現況としては、まだ十分とは言えないが、昨年度に比べると 11 項目中 9 項目でスコアは微増しており、教員の努力の結果と推察される。本年度のスコアで、理学系ならびに研究科全体と比べた場合、⑤研究に⑥仕事に⑦教養に役に立つといった項目が理学系、研究科の平均をいずれも上回っており、講義の内容が学生の要求にかなり合致していることを示す一方で、学生の理解度を確実なものとするポートなどの項目⑨は、相対的に低いことから、授業方法の改善に向けた取り組みが今後の課題であると考えられる。

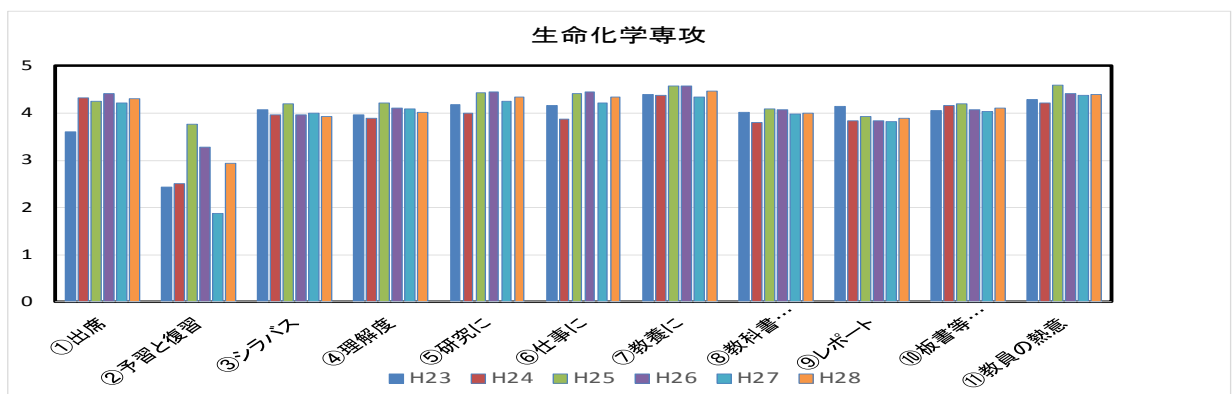


図 3.2.9 生命化学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.2.10 地球環境科学専攻 (相場 慎一郎)

平成 23 年度～平成 28 年度のアンケート結果を図 3.2.10 に示す。全体として、「②予習と復習」

以外の各項目は 4.0 以上であり、全般的によい結果となっている。「④理解度」、「⑤研究に」、「⑥仕事に」は専門の理解度と類似するのは理解できるが、「⑦教養に」「⑪教員の熱意」がさらに高い評価ということは、教員側が、受講生の研究分野が違ってもある程度は理解でき、興味の湧く授業に心がけている結果と考えられる。

地球環境科学専攻では、修士論文を書き上げるために野外での観察や観測、室内での実験が必要である。その際には、調査や観察に適した季節があるなど自然現象による制約や、実験機器の使用のスケジュールなどの条件を整える必要があり、自由な時間を必ずしも毎日確保できるとは限らない。「②予習と復習」の時間が十分に確保できていないのは、そのせいかもしれない。

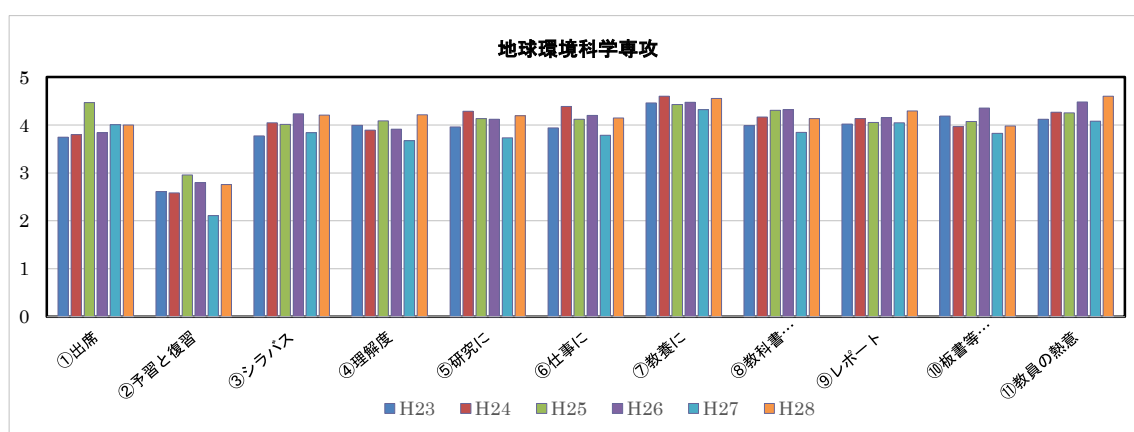


図 3.2.10 地球環境科学専攻の授業評価アンケート結果の推移

3.3 授業計画改善書の活用

(1) 機械工学専攻

学部（学科）と同様に、専攻の FD 委員が収集した授業計画改善書は、授業評価アンケートの評価点や科目 GPA とともに専攻教育評価委員会が整理して分析を行っている。専攻教育評価委員会は、整理した内容と分析した結果を「専攻教育評価委員会報告書」としてまとめている。この報告書は冊子と CD-ROM の形で保管され、授業改善を実施する際の資料として利用できるように全教職員に公開されている。

(2) 電気電子工学専攻

授業計画改善書は、各科目の授業評価アンケート評点とそのレーダーチャート、および授業評価アンケート回答用紙（実施済みのもの）と共に学科事務室にて保管され、教員はいつでも閲覧できる。主として理工学研究科 FD 委員が管理し、専攻 FD 委員会において授業改善に向けた活用方法等を議論している。

(3) 建築学専攻

前年度と同様に、授業改善計画書に関しては、全科目の評点を専攻内で閲覧可能にして問題点を共有することとしている。建築学専攻では、コースワーク科目など複数教員で担当する科目も多いため、それらの科目では、授業アンケートの結果を複数教員で確認し検討した

結果を授業改善に結び付けている。

(4) 化学生命・化学工学専攻

各教員は、授業計画改善書の作成により授業内容や進め方に問題がなかったか再確認するとともに、改善に向けた取り組みを継続的に行っている。FD委員は、各教員より提出された授業計画改善書を確認し、保管する。不備がある場合は、FD委員が差し戻しを行い、不備箇所を指摘して再提出してもらっている。問題が発見された場合には、専攻長と協議の上、対応を検討する。

(5) 海洋土木工学専攻

理工学研究科FD委員会が、博士前期課程の大学院生に対して実施する、授業評価アンケートの結果に基づき、各科目の担当教員が授業計画改善書を作成する。ところで、海洋土木工学専攻のコースワークは、環境システム工学コースと建設システム工学コースの二つのコースで構成されており、各コースで必修科目が異なる。各教員は、いずれか一つのコースを担当し、それぞれのコースに対して開催する環境システム科目部会、または、建設システム科目部会において、授業計画改善書を活用しながら、教育の点検及び改善を継続的に実施している。

(6) 情報生体システム工学専攻

情報生体システム工学専攻では平成22年度より、授業計画改善書を学科事務室に保管し、全ての教員が閲覧可能となるように管理している。各教員による授業改善への取り組み及び結果を教員全員で共有することで、情報生体システム工学専攻全体の教育内容への継続的な改善を試みる。

(7) 数理情報科学専攻

担当教員は授業アンケートに対して授業計画改善書を作成、提出し、保管はFD委員または授業担当教員自身が行っている。授業計画改善書には昨年と一昨年の評点を記入する欄があり、各教員が授業計画改善書を作成する際に評点の推移を確認することが、継続的かつ効率的な授業改善につながる重要な要素となっている。授業アンケートおよび授業計画改善書を専攻内の他の教員に公開するような体裁は、今のところっていない。

(8) 物理・宇宙専攻

授業アンケートを行った教員は、その結果を踏まえた授業計画改善書を作成し、各教員およびFD委員が保管している。これらの資料は、今のところ、他の教員に公開していないが、授業改善が目的ならば非公開でも本質的な問題はない。授業アンケートの実施率の数値はあまり高くないが、これにはやむを得ない実情がある。専攻の規模・授業の専門性の高さゆえに、受講生数は例年10人未満のものが大半だからである。少人数ゆえ、学生からの授業改善の要望は授業中や授業直後に教員に直接伝えることが主流である。無記名アンケートであっ

ても少人数ならば匿名性が完全に担保されていると院生には感じられない。一方、数値化がたやすい事項に主眼が置かれている従前の授業アンケートとそれに基づく授業計画改善書の提出は、授業改善を主な目的とするならば効果的ではないと感じられる。本質的な授業改善を望むには、従来とは全く異なる方法に挑戦し、その成果を広く共有することが重要である。

(9) 生命化学専攻

本年度も学生アンケート調査後、その結果を受け、各担当教員から授業計画改善書を提出いただいたが、対象となる12名の教員のうち、5名がアンケートを実施していないという状況であった。アンケート実施をしない理由としては、受講人数が少なく、アンケートの中身が特定の学生個人に関連づけられることを避けるためと推察された。これについては、授業アンケートがFDのためであり、特定の教員に対する批判や評価を行うためのものではないことを教員のみならず学生にも周知、理解してもらう必要性が感じられた。授業改善書の内容を見てみると、改善書を提出した各教員は、以前の学生による評価を参照し、工夫をしながら、授業の改善に取り組んでいることが分かった。全体として、各専攻、研究科全体のFDによる授業内容の向上のためには、アンケートを実施していない教員を減らす工夫が必要であり、例えば、アンケートの記入提出時に担当教員と同席しないようにするため、Webアンケートの導入等が必要であると考えられる。

(10) 地球環境科学専攻

授業を担当した教員は授業計画改善書を作成し、大学院係に提出している。そのため各教員とも各自の授業を見直し、授業形態や教材などについて様々な工夫を試みている。このような改善書作成という作業は毎年行われており、継続的に授業の改善が図られていると考えられる。なおアンケートの取りまとめで改善すべき点としては、個々の授業の受講生が少ないために、アンケートの回収ができる科目が少ないことである。そのため学科内全体の傾向を把握するには、やや難しさを感じる。

第4章 GPA制度の現状と学習成果

理工学研究科では、平成26年度よりGPA制度が導入され、昨年度はじめてGPA制度による修了生を輩出した。ここでは、平成27年度および平成28年度のM2生の累積GPAデータと総修得単位数データをもとにGPA制度の現状と学習成果について述べる。

4.1 工学系専攻のGPA制度の現状と学習成果報告（澤田 樹一郎）

工学系の研究科における平成27年度、平成28年度M2生の累積GPA、総修得単位のヒストグラムを図4.1(1),(2)に示す。両年度とも累積GPAは、約90%以上の学生がGPA3.0以上であり、また、 $3.8 < GPA \leq 3.8$ 又は $3.8 < GPA \leq 4.0$ の頻度が高く、多くの学生が教員から高い学習成果の評価を得ている。また、平成28年度は、累積GPA4.0の学生が多くなっている。一方、両年度とも、総修得単位数は、約90%の学生が履修基準の30単位ぎりぎりを修得している。多くの学生が履修基準ぎりぎりである状況は健全と言えず、貪欲な学習意欲を引き出す方策が必要である。

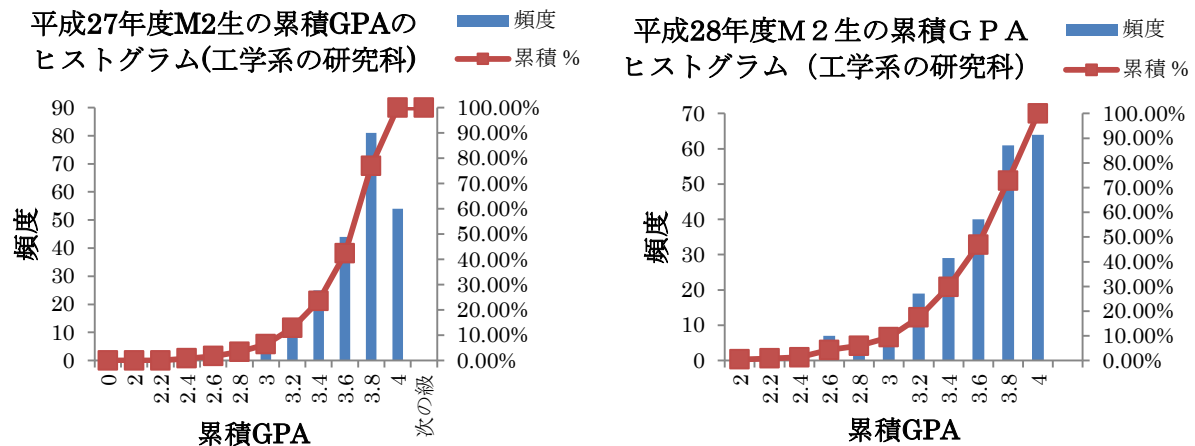


図 4.1(1) 平成27年度、平成28年度M2生の累積GPAのヒストグラム（工学系の研究科）

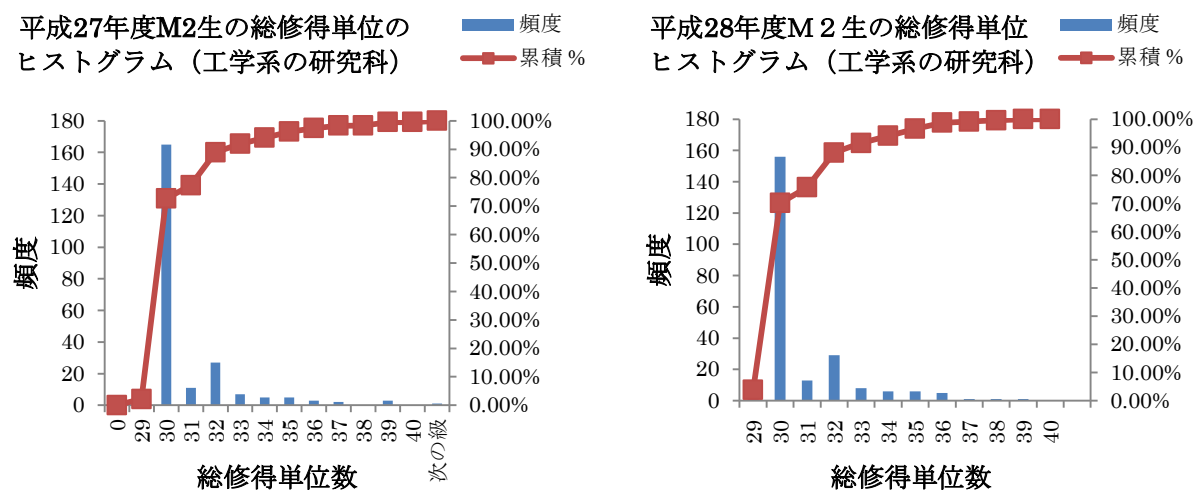


図 4.2(2) 平成27年度、平成28年度M2生の総修得単位数のヒストグラム（工学系の研究科）

4.2 理学系専攻のGPA制度の現状と学習成果報告（半田 利弘）

GPAの元となるGP(Grade Point)は従来のA~F表記を数字で置き換えただけで、本質的な違いはないが、その平均値であるGPAだけでは情報が圧縮されすぎており、成績指標としての妥当性や学生の科目履修選択の点でも悪影響が理学系では強く危惧されており、特に、学生が自分のGPAを高くするために履修科目を過度に絞り込むのではないかと懸念がある。平成26年度より博士前期課程修了要件にGPAの最低値が規定されたため、学生が従来以上にGPAを意識した科目選択を行う可能性があるため、その傾向を統計資料から検討した。

図4.2は、平成28年度大学院博士前期課程（理系4専攻）の修了生および在学生の取得単位数とGPAの相関図である。

まず、取得単位数が多い学生にはGPAが低い学生があまりいないことがわかる。これは、科目登録数が多すぎるために履修がおろそかになる学生というキャップ制導入の根拠となっている者は少数であることを物語っている。逆に、入学初年度を見ると、分布に下限の包絡線が明確に見られることから、優秀な学生は取得単位数もGPAも共に高く、取得可能単位数の制限は成績向上には逆行する可能性があることを示唆している。

図の左上にもプロットが多数ある。これは、GPAは高いのに履修単位数が極端に少ないことを意味する。ただし、これはほぼ全てがM2の2年目であり、実際に2年間の通期では該当者がいないことがわかる。

一方、M2の通期では先に指摘した包絡線よりも下に位置する者が増えており、取得単位数に比べてGPAが低い。ここに属する者は昨年度には見られなかったことから、平成26年度より導入されたGPA最低値の制限に過度反応して入学初年時に履修単位数を絞り込んでいた者が卒業のために取得した単位の成績が低かった結果という可能性も考えられる。しかし、それならば2年目以降のプロットで右下に位置するものが該当数必要であるが、それは見られない。この一群が何を意味するのかが解釈が難しく、今後の継続的な調査が必要であろう。

大学院では履修総単位数が少ないことや理系4専攻のみを対象学生数が限られているとはいえ、2年間だけでも傾向の違いが見られる。今後も継続的に検証していくことで、学生の成績評価として現在の単純GPAが妥当なのか、計算方法を改良したGPA（科目による重み付け、卒業要件単位数までの成績上位科目のみの平均など）なども考慮すべきであろう。

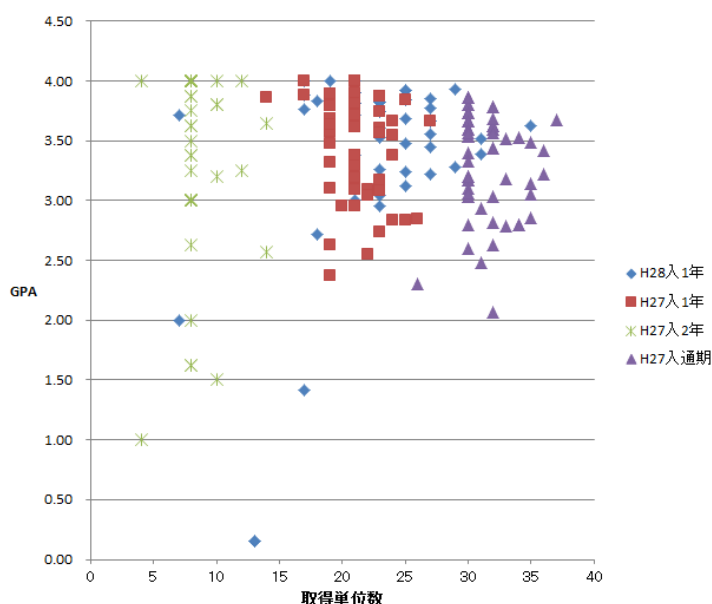


図4.2 単年度ごとの履修単位数とGPAとの相関
※1年は初年度履修分、2年は2年目以降履修分、通期は入学時以来の合算

第5章 学生の研究活動と教育成果（吉留 俊史，相場 慎一郎）

大学院生の研究発表の支援は FD 活動の目的の一つであることから，その実績を把握するために調査を実施した（表 5.1）。当該年度における在籍者数を表 5.2 に，受賞実績について表 5.3 に示す。

表 5.1 大学院生の研究成果の発表数

年度	分類		機械	電気	建築	化学	海洋	情報	数理	物理	生命	地環	合計
平成 22 年度	口頭発表 (含むポスター発 論 文	国際会議	3	7	2	53	4	2	1	6	27	11	116
		国際会議以外	44	65	38	126	29	46	4	9	41	19	421
	査読あり	査読あり	19	12	3	39	17	19	1	4	29	2	145
		査読なし	7	30	26	20	2	36	0	6	7	2	136
平成 23 年度	口頭発表 (含むポスター発 論 文	国際会議	1	5	1	49	2	6	0	3	8	11	86
		国際会議以外	15	60	38	135	34	35	1	14	26	26	384
	査読あり	査読あり	4	13	0	25	27	9	1	3	9	8	99
		査読なし	3	18	6	7	9	7	1	6	3	0	60
平成 24 年度	口頭発表 (含むポスター発 論 文	国際会議	6	21	2	43	20	3	0	9	15	3	122
		国際会議以外	32	66	46	141	18	28	0	49	52	20	452
	査読あり	査読あり	10	30	9	36	11	11	0	8	7	4	126
		査読なし	4	38	0	9	5	7	0	10	6	0	79
平成 25 年度	口頭発表 (含むポスター発 論 文	国際会議	9	27	2	40	8	15	0	2	10	4	117
		国際会議以外	80	78	32	104	15	50	0	17	34	8	418
	査読あり	査読あり	15	33	6	24	14	22	0	5	9	3	131
		査読なし	10	28	0	1	4	22	0	3	9	0	77
平成 26 年度	口頭発表 (含むポスター発 論 文	国際会議	8	25	2	28	2	12	0	8	7	7	99
		国際会議以外	68	88	24	164	25	56	3	36	32	13	509
	査読あり	査読あり	21	27	1	24	21	27	0	11	6	3	141
		査読なし	1	10	0	0	2	31	0	0	1	1	46
平成 27 年度	口頭発表 (含むポスター発 論 文	国際会議	8	13	1	63	2	6	0	20	7	0	120
		国際会議以外	64	54	31	182	22	43	5	36	39	15	491
	査読あり	査読あり	14	21	1	30	13	18	3	14	5	3	122
		査読なし	0	8	14	3	2	16	0	6	7	1	57
平成 28 年度	口頭発表 (含むポスター発 論 文	国際会議	10	14	12	71	3	2	0	7	23	1	143
		国際会議以外	47	42	34	195	12	48	1	32	56	17	484
	査読あり	査読あり	10	7	9	28	8	7	0	4	17	1	91
		査読なし	0	11	19	9	2	6	0	0	4	3	54

表 5.2 在籍者数（博士前期課程）

専攻名	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
機械	109	116	116	99	93	105	112
電気	106	105	104	95	96	104	98
建築	46	52	52	43	46	59	67
化学	132	88	88	84	85	80	89
海洋	39	32	32	26	30	26	18
情報	85	89	89	84	90	94	87
数理	25	24	24	21	20	15	13
物理	30	28	28	32	36	38	37
生命	36	32	32	34	33	43	47
地環	36	30	30	33	31	33	29
合計	644	596	595	551	560	597	597

表 5.3 受賞など

受賞者名	学年	受賞賞名等
城寿成	M2	第17回計測自動制御学会 システムインテグレーション部門講演会SI2016優秀講演賞
平航	M2	日本機械学会2016年度岡山賞
上笹貫滉大	M2	自動車技術会2016年度大学院研究奨励賞
塚元崇博	M2	日本材料学会九州支部 JSMS Kyushu Young Researcher Award
城島龍一郎	M2	日本材料学会高温強度シンポジウム ベストプレゼンテーション賞
上笹貫滉大	M2	自動車技術会2016年度大学院研究奨励賞
田口茂樹	M2	日本金属・鉄鋼協会九州支部合同学術講演大会 ポスター優秀賞
瀬野他 計6名	M2,M1	ETロボコン2016九州南地区大会 アドバンストクラス 総合 優勝
"	"	" アドバンストクラス 競技 優勝
"	"	" アドバンストクラス モデル審査 Gold Model
"	"	" 九州経済産業局長賞
"	"	ETロボコン2016チャンピオンシップ大会 アドバンストクラス 競技 第4位
待木祐人	M2	日本知能情報ファジィ学会九州支部学生優秀講演賞
辻井優伸	M2	2016 Thailand-Japan MicroWave Young Researcher Encouragement Award
辻井優伸	M2	2016 Thailand-Japan MicroWave Student Design Competition 3位
濱野皓志	M1	
平石貴将	M2	ヤングエンジニアポスターコンペティション(YPC)優秀発表賞
平石貴将	M2	IEEE IAS Japan Chapter Young Engineer Competition Award
西山 知宏	M1	11th Korean Rural Architecture Competition,2016韓国農林水産部長官賞(大賞)
高橋賢司	M2	
西田哲朗	M2	
塚崎克也	M1	
中村和史	M1	第11回 コロキウム構造形態の解析と創生2016 構造形態創生コンテスト 入選
小御門真伍	M1	JSCA 関西支部 特別企画 学生デザインコンペ 『第2回「情熱リアル デザイン選手権」-君たちの建築に注ぐ情熱をデザインしてください-』ホープ賞とガッツ賞
坂口智広	M1	第27回九州地区若手ケミカルエンジニア討論会優秀 ポスター賞
宮田英和	M2	日本エネルギー学会西部支部第1回学生・若手研究発表会学生賞(口頭発表の部)
宮地みどり	M2	日本エネルギー学会西部支部第1回学生・若手研究発表会学生賞(ポスターの部)
寺地晃佑	M1	第22回流動化・粒子プロセスシンポジウム 優秀ポスター賞
衛藤 卓磨	M2	平成28年度化学工学会九州支部学生賞審査会 学生賞
濱崎 研悟	M1	第4回がんと代謝研究会 優秀ポスター発表賞
野澤 賢	M1	化学工学会第48回秋季大会 分離プロセス部会ポスター賞
橋本 扶美	M2	Water and Environment Technology Conference 2016 プレゼンテーションアワード
原田晃行	M2	優秀ポスター賞、第65回高分子学会年次大会
広原知忠	M2	ポスター賞、第53回化学関連支部合同九州大会(高分子化学・繊維化学)
原田晃行	M2	ポスター賞、第53回化学関連支部合同九州大会(高分子化学・繊維化学)
原田晃行	M2	ベストポスター賞、日本ソルゲル学会 第14回討論会
今井健太	M2	優秀ポスター賞、第20回ケイ素化学協会シンポジウム
原田晃行	M2	Award for the excellent student poster presentation, Joint Symposium of JTBW2016 & KNJS2016
原田晃行	M2	Young Scientist Poster Award, The 11th SPSJ International Polymer Conference (IPC2016)
江頭直成	M1	高分子化学研究室合同合宿セミナー2016 優秀発表賞
馬場良太郎	M2	北九州市立大学・鹿児島大学合同シンポジウム ポスター賞
中内田拓也	M1	北九州市立大学・鹿児島大学合同シンポジウム ポスター賞
橋本大智	M1	北九州市立大学・鹿児島大学合同シンポジウム ポスター賞
阿多優里菜	M1	Joint Symposium of JTBW2016 & KNJS2016 Award for Excellent Poster Presentation
松本光	M2	第89回日本生化学会大会 若手優秀発表賞
中野智章	D3	2016年度日本コンクリート工学会 九州支部長賞
BUI QUANG HAO	M2	2016年度日本コンクリート工学会 九州支部長賞
小齊平慶	M2	コンクリートコンテスト ドラゴン部門優勝
高舒恒	M1	コンクリートコンテスト ドラゴン部門優勝
里山永光	M1	コンクリートコンテスト ドラゴン部門優勝
竹下麗華	M1	コンクリートコンテスト ニアピン部門優勝
藤元祐行	M1	第36回防錆防食技術発表会 若手技術者優秀発表賞
花田 涼	M2	4th International Kyushu Colloid Colloquium 優秀ポスター賞
横田璃里	M2	第40回蛋白質と酵素の構造と機能に関する九州シンポジウム 優秀ポスター賞
前田樹里	M1	第40回蛋白質と酵素の構造と機能に関する九州シンポジウム 最優秀ポスター賞
岸本聡	D1	日本ペプチド学会第48回若手ペプチド夏の勉強会 優秀講演賞
向大輝	M1	第53回化学関連支部合同九州大会 若手研究者奨励賞
鳥本陽	M1	Joint Symposium of JTBW2016 & KNJS2016: Award for the excellent student poster presentation

第6章 特筆すべき取組及び改善事例（甲斐 敬美）

平成27年度より理工学研究科では、海外研修を夏季に3ヶ月程度実施するために、前期と後期をさらに2分割する「学年4期分割授業日程」を導入した。平成28年度は集中講義を除く開講科目223のうち74科目がひとつの期で授業を実施している。工学系では43%、理学系では14%である。この制度においては、前期Q2（前期の後半）期間に必修科目を設定していないため、この時期での海外研修が可能である。新設した科目「理工系国際コミュニケーション海外研修（4単位）」は、Q2期間と夏季休業期間を通じた約3ヶ月を利用した短期留学により、国際コミュニケーションを通して、グローバルな理工系の課題・解決に取り組み、将来、国際社会で活躍する技術者・研究者を目指しグローバルに活動するための経験を養うことを目的として実施された。2.2で紹介したように本年度は、昨年度のサンディエゴ州立大学に加え、ニューヨーク・シティ大学およびノースダコタ州立大学へ18名の学生が派遣された。参加した学生は、それぞれの場所にて語学研修、理工学系研修、企業研修などを受けた。また、理工学研究科グローバル人材育成支援室によって、「平成27・28年度参加学生感想文集」も作成され、理工学研究科の教員に配布された。

第7章 今後の理工学研究科FD活動への期待（甲斐 敬美）

平成17年の中央教育審議会（平成17年9月5日）の答申（新時代の大学院教育－国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて）においては、個々の教員の活動は、各大学院における教員の組織的な役割分担や学問分野、時期等によって多様であることを踏まえ、「教育」か「研究」か、といった単純な区分ではなく、各大学院における自主的な調査研究に基づき、個々の教員の多様な活動状況を考慮した形で、活動評価を行っていく方法も有効であるとされている。また、教員の研究活動に関する評価は、実施されているが、教育活動に関する評価は、その指標に定性的なものが多く適切な指標設定が難しいことなどから、社会的にいまだ定着しているとは言い難いと指摘されている。そのため、教育活動に関する評価の指標として、例えば、学生による授業等の評価などが挙げられている。

理工学研究科は部局化により新しい組織として平成21年度にスタート以来、学生による授業アンケートを実施し、毎年度発行されるFD報告書においては、毎年度の結果がまとめられてきた。図3.1.1と図3.1.2に示された工学系および理学系の授業評価アンケートの結果を見ると、この6年の間での低下や上昇などのトレンドはないように思われる。ほとんどの項目が4前後の評点であるので、それ以上は望めないということも考えられるが、専攻によっては変化している専攻もあるし、専攻間の結果を比較すると0.5以上の差があるので、まだ、改善の余地はある。また、予習と復習の項目が低いことは、全教員の悩みの種と思われるが、この6年間低いままである。しかし、この項目は専攻間で2以上の差がついている上に、その傾向が年によって変化するわけではない。これらのことから、授業評価アンケートは実施しているだけで、その結果は講義の改善に役立っていないのではないだろうか。

大学院改革の一貫として、理工学研究科では、博士前期課程におけるグローバル人材養成の体制強化、博士後期課程におけるイノベーション人材養成の体制強化が打ち出されている。平成27年度には、留年をしない短期留学・現地調査実施可能とする学年4期分割授業が実施され、平成28年度からは、博士後期課程の3専攻が1専攻となり、基幹コースと先端科学技術コースが設けられた。た、地域の発展に寄与する人材育成に対しては、先端科学技術コースと連携させ、地域コトづくりセンターの創設による機能強化が図られる。このように、この数年の間にさまざまな取り組みがなされてきたし、将来も継続して常に組織改革がなされていくであろう。ただし、新しいシステムの導入とともに、それらの仕組みがうまく機能していくように構成員の教育研究能力を向上させる活動も並行して実施されることが望まれる。

医歯学総合 研究科

医歯学総合研究科 FD 活動報告

1. はじめに

医歯学総合研究科 FD 委員会は、大学及び研究科が目指す大学院教育の充実、活性化と、桜ヶ丘キャンパスの全ての教職員の教育への関心を高め、教育改善に資することを目的として、医学部 FD 委員会、歯学部 FD 委員会と協力して、本年度も活動を行った。

本年度の活動の特色は

- ① 医歯学総合研究科で受け入れている留学生を対象とした教育の充実を図るための
 - ✓ 留学生を受講生としている科目の授業公開
 - ✓ 授業評価アンケートによる「英語でのコミュニケーション」に関する調査
- ② ポートフォリオ利用の拡大を推進するための講習会による操作演習
- ③ 教育評価や専門医等制度導入に備えるための、医学教育、医療者教育の理解を図る講演会など、変化する教育のニーズを踏まえ、改善を推進するための活動を充実した点である。

2. 授業公開

授業公開は「優れた授業を公開し、参観をした教員が授業方法を学ぶ機会を提供する」ことを目的とし、今年度は留学生も受講している授業を公開授業とし、英語での教育や留学生の指導について参観者の理解を深め、授業改善の機会とした。従来よりも多くの教員が参加した。

日時	2016年7月7日(木) 6限目
科目・テーマ	生命科学英語 Life Science English (博士科目)
講師	草野 秀一 (分子ウイルス感染研究分野 准教授)
会場	医歯学総合研究科棟2 大学院講義室
参観者	10名 (対象 研究科教員、学生)
概要	留学生及び日本人学生を対象に実験の手法であるPCRの基礎と実際についての講義を行った。英語の教科書、参考資料を用いて、主として英語で講義、質疑を行い、適宜日本語での補足を行って進めていた。参観者はテーマ、講義の進め方に対して、学生との質疑や英語での教育の方法に関する評価と改善のための意見をアンケートに記載した。

日時	2016年11月16日(木) 6限目
科目・テーマ	バイオインフォマティクスと医学研究 (博士科目) 「臨床研究における倫理について」
講師	古川 龍彦 (分子腫瘍学分野 教授)
会場	共通教育棟 インテリジェント講義室
参観者	20名 (対象 研究科教員、学生)
概要	Gene Set Enrichment Analysis (GSEA)のソフトウェアの使用方法について、コンピュータを各自が用いて操作をしながら学ぶ授業であった。実際のデータを用いながら演習する形式であり、講師は受講生の間を巡回しながら指導を行っていた。参観者も操作を行いながら授業を参観した。難しい内容ではあったが重要な手法について学ぶ機会が得られ、さらに改善の為の意見もアンケートに記載した。それらの意見に対し、講師からも報告書が提出された。

3. 学生による授業評価アンケート

実施方法の概要 現在、授業科目の評価アンケート、演習・実験科目の研究環境と研究指導に関するアンケートを日本語と同じ内容の留学生用の英語のアンケート用紙により実施している。医歯学大学院係がアンケート用紙を作成、対象学生に配布、回収して集計業務を行った。また集計結果は科目責任者にフィードバックした。

講義科目アンケート 講義を主体とする科目アンケートは5名以上の受講生がいる科目を対象として授業評価9項目、自己評価2項目、全体評価とし、無記名により各項目について7段階の評定尺度で回答し、自由な意見も記載してもらった。今年度はシラバスの記載、シラバスと実際の教育との異同に関する2追加した。前期は対象20科目84枚、後期は対象9科目64枚の回答が得られた。評価内容は概ね良好であった。

演習、実験科目のアンケート 演習、実験科目についてのアンケートは2月に実施し、無記名で医系歯系の別、入学年度、演習科目の授業形態、内容と指導3項目、実験科目（研究指導）6項目、研究中断の有無、さらに正課、課外における英語によるコミュニケーション3項目について回答を求めた。選択項目以外は、5段階の評定尺度で回答した。

医系57枚（内留学生10名）、歯系23枚（内留学生2名）の回答が得られた。

医系 入学年度は平成18年（11年目）の学生が在籍しており、在籍期間が長い傾向が続いている。項目7で、「個人的理由以外での研究の中断が7名（12%）」となっており、昨年より減少した。科目の有用性、教員の対応・支援はほぼ高い評価を得ている。

歯系 学生の在籍期間は1名を除き4年以内である。個人的な理由以外での研究の長期中断が2名（12%）であり、昨年と同じ状況である。科目の有用性、教員の対応・支援は高い評価を得ている。

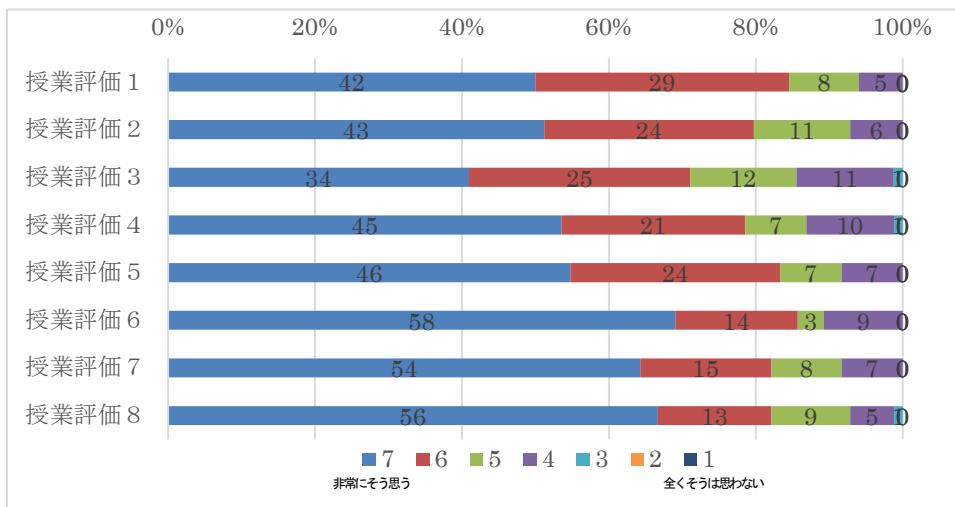
留学生の英語によるコミュニケーションの評価は「十分にできた」「概ねできた」となっている。「十分にできた」の比率を高める必要がある。

医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計 (H28年度 前期)

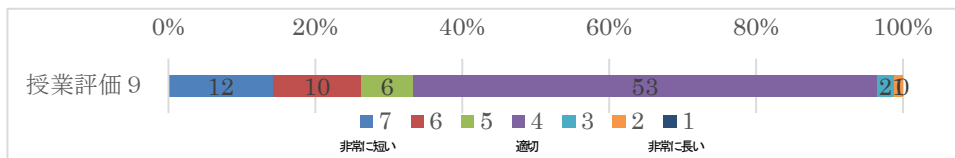
集計 20科目 アンケート回収枚数 84枚

【授業評価】

- この授業はあなたのニーズに合っていましたか
- この授業はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 講義の内容はよく理解できましたか
- この科目のシラバスには、必要な情報が記載されていましたか
- シラバスに記載された学習項目、教育方法、評価が行われましたか
- 講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか
- 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか

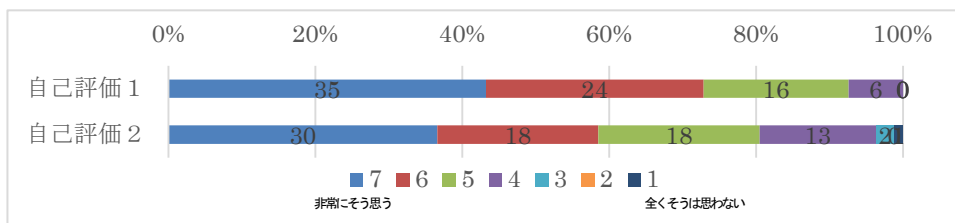


- 講義時間は適切でしたか

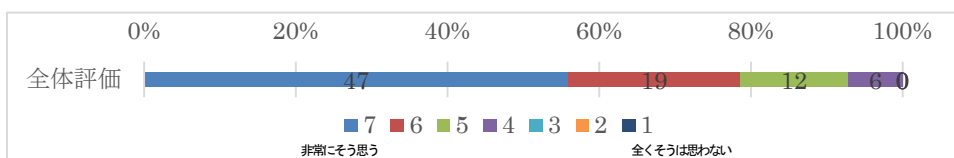


【自己評価】

- この授業で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 授業には積極的に参加しましたか (質問、自習など)



- ### 【全体評価】
- この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか

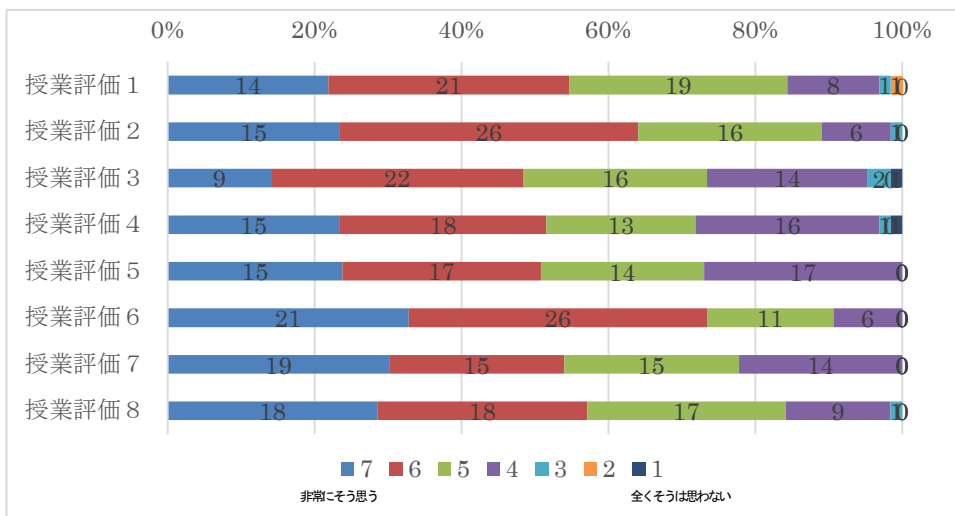


医歯学総合研究科 授業に関するアンケート全体集計 (H28年度 後期)

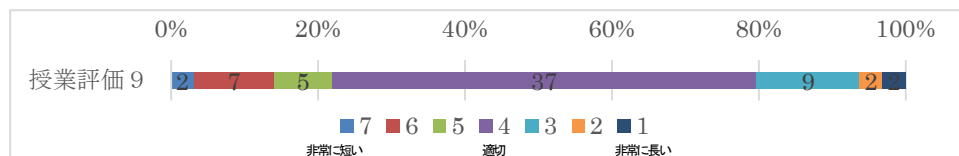
集計 9科目 アンケート回収枚数 64枚

【授業評価】

- この授業はあなたのニーズに合っていましたか
- この授業はあなたの現在、将来の研究に有用な内容でしたか
- 講義の内容はよく理解できましたか
- この科目のシラバスには、必要な情報が記載されていましたか
- シラバスに記載された学習項目、教育方法、評価が行われましたか
- 講義内容や配付資料などはよく準備されていましたか
- 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 教員は参考資料の掲示など、発展的な学習、研究を支援しましたか

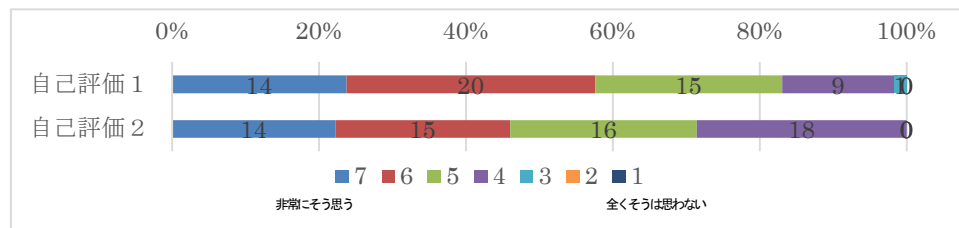


- 講義時間は適切でしたか

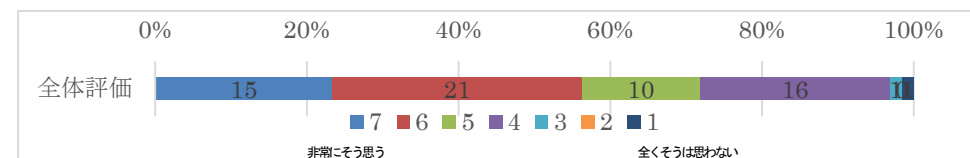


【自己評価】

- この授業で新しい知識や考え方を習得しましたか
- 授業には積極的に参加しましたか (質問、自習など)



【全体評価】 この授業に満足し、他の学生にも受講を薦めますか



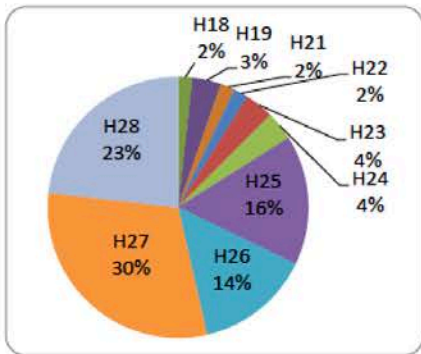
実験科目等アンケート

医系

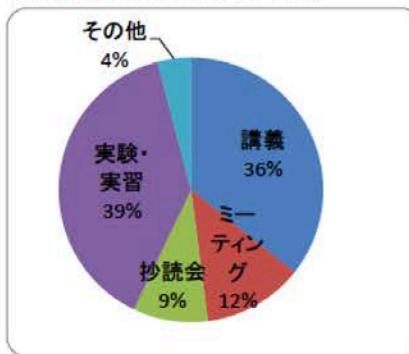
学生による授業評価アンケート(2017年 2月実施)

アンケート回収枚数(医系) 57枚(内、留学生10名)

2 入学年度はいつですか



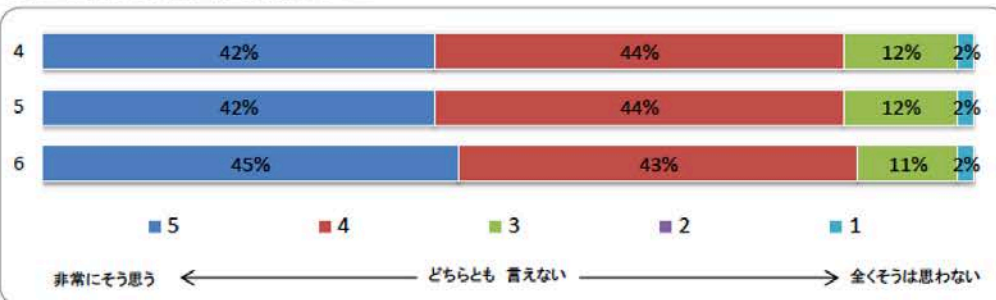
3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)



4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか

5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか

6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか



実験科目(研究指導)

1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることはできましたか

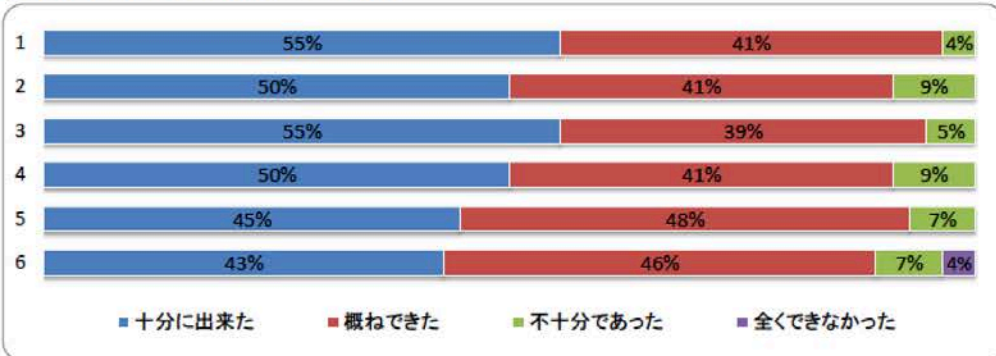
2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか

3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか

4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか

5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか

6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか

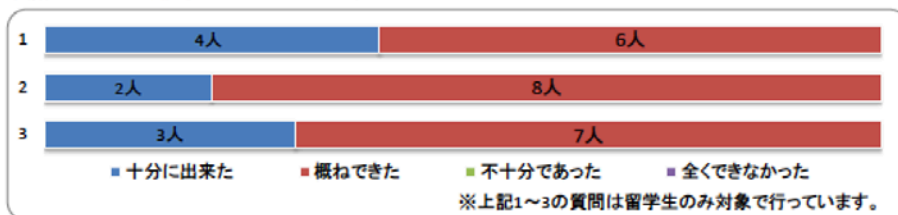


7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありましたか



以下は正課・課外における英語でのコミュニケーションに関する質問です。各質問にお答えください。

- 1 あなたの指導を担当する教員や研究室のスタッフの英語能力に満足していますか。
- 2 英語もしくはあなたの母国語によって学習や研究、滞在に関する十分な情報を得ることができていますか？
- 3 英語で教えてもらう授業に満足していますか。



自由記載

特に良かった点をお聞かせください

- 指導教官から常に親身なご指導を頂きました。
- 文献だけではわからない箇所、発表の仕方、資料の作成など丁寧に指導された点。
- また、研究に関する新しい知見や社会情勢などの情報提供もその都度指導があった点。
- 私の実験でいい点は、先輩から多くのことを学ぶことで、そして彼らはいつでも私に協力的です。
- 困ったときにはいつでも質問できる。
- 論文検索の環境や研究の環境が整っていること。
- 丁寧に論文指導をして頂いたことはもちろん、いろいろなことに挑戦できる環境・機会を整えて下さり、感謝しております。
- 私の教授や研究室のメンバーはとても協力的で、フィールドワークをする機会を与えてくれる。よって、私は練習することができて、能力が身につきました。
- 研究スキルコース
- レビュー論文を書くこと
- 対面的に指導を細かくしていただいた
- 研究等の指導を仰ぐ際に、研究方法や参考資料について詳細に説明を頂くことが出来た。
- 主研究領域に加え、関連領域も含めて幅広く学べた
- 講義は少人数性であり質問しやすい環境にある
- 研究遂行のめどができました。
- 倫理学で国立がん研究センターの上園先生の講義はとてもおもしろかった。
- 少人数でdiscussionできた。
- 実験技術
- 私の監督はいつも私の質問に答えてくれて、私にアドバイスをしてくれます。
- 実験で使用するものには何の不足もありませんでした。
- 私の所属する研究室の施設は十分に整備しており、とてもいい環境です。
- 技術者はとても親切で教えることをいとわず、実験を手伝ってくれます。
- 私のプロジェクトでない研究でも、研究室で行われた他の実験を観察することを許可してくれます。

改善すべき点をお聞かせください

- 博士課程(特に医系)は純粋な学生ではないことが多いと思います。
- 平日はdutyがあることを前提にカリキュラムを組む、連絡を頂くなど配慮が全くといっていいほどないと思います。
- 指導が細かくはない。
- 私の知識を向上させるためには抄読会がもっと増えるといいと思います。
- 研究スキルコース
- 研究者用の専用スペース(在籍中)が確保できると嬉しい。個人別専用机。
- 遠隔授業を増やしてほしいです。
- 研究論文を書く方法
- 私は一生懸命働かなければならない。
- 倫理面においては十分な講義はあるが、論文作成の方法などについての講義があればよいと思う

医歯学総合研究科における英語でのコミュニケーションについてご意見があればお知らせください。

※この質問は留学生のみ対象で行っています。

- 学生オフィスで英語でのコミュニケーションをとることができなかった。
- 学務課に少なくとも1人は英語が話せるスタッフが必要だと鹿児島大学大学院医歯学総合研究科の外国人留学生は全員思っています。
- 先生と私はいい関係が持っています。効率的にコミュニケーションをとることは、必要な提案と議論を得るために最も重要です。
- すべての講師が英語で積極的に話すことができるため、実験コースはうまく行えます。
- 私の監督は十分な英語を話すことができます。私はインターネットから研究資料を検索することができます。

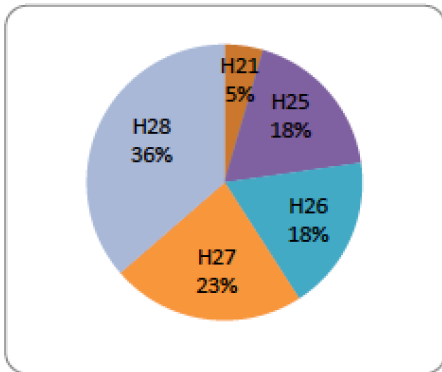
その他、自由に感想をお書きください

- 博士課程は研究をすることが本分ですので、特に講義を頂く必要はございません。
- ありがとうございました。
- 他大学(関連研究科)との共同授業(遠隔)があるとよい。
- eラーニング方式でも授業があるとよい。
- いつも私の教授・監督・研究室の責任者に感謝します。実際、彼らは非常に親切で協力してくれます。

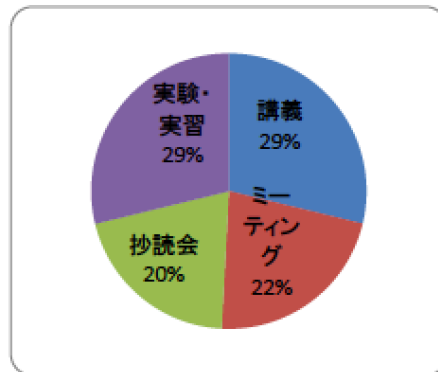
学生による授業評価アンケート(2017年 2月実施)

アンケート回収枚数(歯系) 23 枚(内、留学生2名)

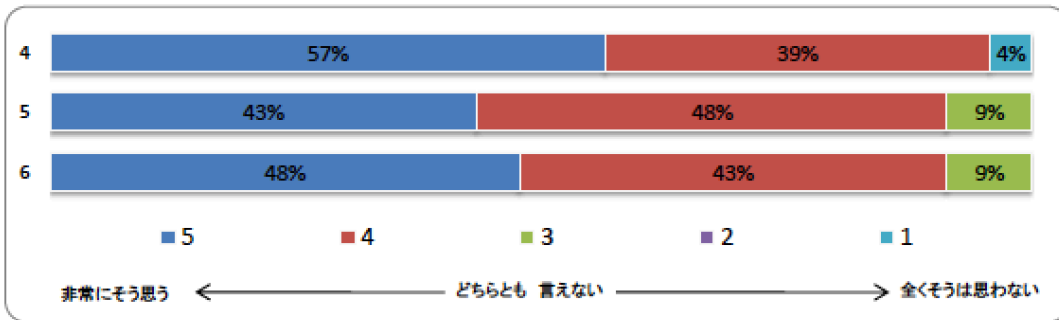
2 入学年度はいつですか



3 あなたが受講している授業科目の授業形態は、次のうちのどれですか(複数回答可)

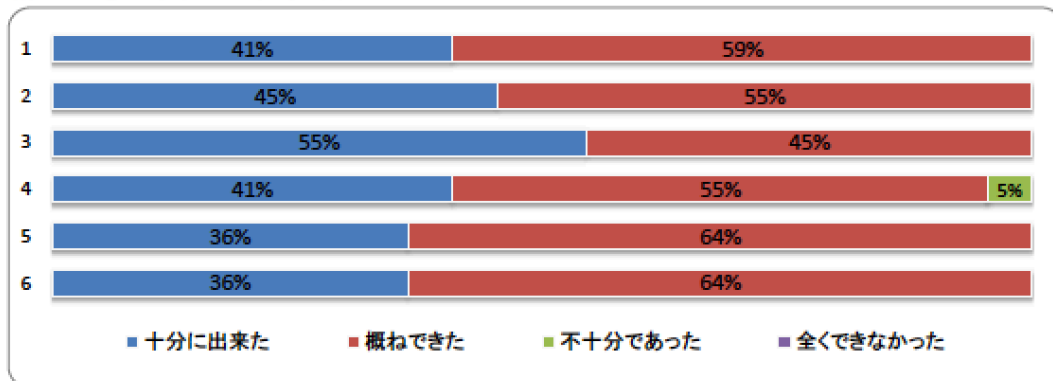


- 4 あなたが受講している授業科目はあなたの研究に有用な内容でしたか
- 5 教員はあなたの質問を促し、適切に対応しましたか
- 6 教員は発展的な学習、研究を支援しましたか

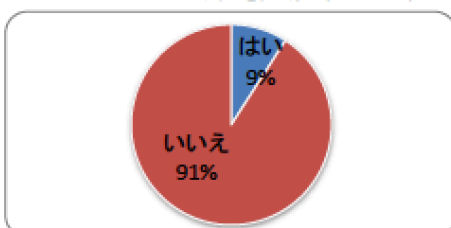


実験科目(研究指導)

- 1 直面している問題を解決するために常に教員と討議し、指導を受けることはできましたか
- 2 研究の遂行と発表に関する倫理的対応の指導を受けましたか
- 3 論文や参考資料を用いる環境は整備されていましたか
- 4 効率的、効果的な研究を用いる環境は整備されていましたか
- 5 研究開発に必要な考え方を修得できましたか
- 6 論文作成を自ら行うための指導は受けましたか

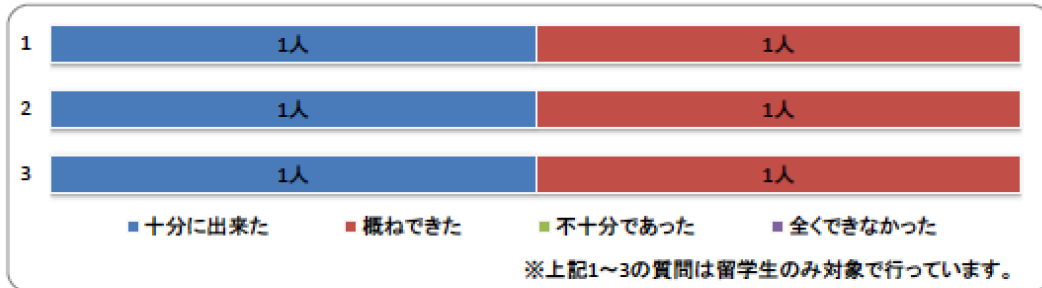


7 個人的な理由以外で研究を長期にわたって中断せざるを得ないことはありましたか



以下は正課・課外における英語でのコミュニケーションに関する質問です。各質問にお答えください。

- 1 あなたの指導を担当する教員や研究室のスタッフの英語能力に満足していますか。
- 2 英語もしくはあなたの母国語によって学習や研究、滞在に関する十分な情報を得ることができていますか？
- 3 英語で教えてもらう授業に満足していますか。



自由記載

特に良かった点をお聞かせください

- 社会人大学院生で遠方から通っていますが、配慮していただき単位を順調にとることが出来て感謝しています。
- すぐ近くに上の先生がいるので色々質問しやすかった。
- 研究指導
- ミーティングをフレキシブルに聞いてもらえた
- 臨床面と基礎面の双方から研究に対するアプローチが出来た
- さまざまな分野の最新の研究内容について理解を深めることができて有意義でした

改善すべき点をお聞かせください

- 講義はほとんどなく、あっても意味がなく、もっと基本的な研究に役立つ講義を行ってほしい。教育システムの確立が必要と思われます。
- 研究棟自体が古く、水もれなど(配管から)あまりきれいな環境ではなかった。
- 受講生の数が少なく、自分一人受講で申し訳ない講義もある。
- 研究施設へのアクセスは優れています。しかし、マニュアルの多くは英語版では提供されていません。そのため、私は課題を完了するために時間がかかりました。
- 私は教員の説明を理解できないこともあるので、英語のマニュアルは非常に役に立ちます。

医歯学総合研究科における英語でのコミュニケーションについてご意見があればお知らせください。

※この質問は留学生のみ対象で行っています。

- スタッフの中には英語を話せる人もいますが、教室、研究室、事務室などの環境はまだ英語での会話の改善が必要です。

その他、自由に感想をお書きください

- 昔からこうだから、自分のときはこうだったと経験から何かを決める先生が多いように思う。世代も変わるので新しいやり方や考え方をとり入れてほしい。
- 研究の時間の確保が難しい
- しかし、私は鹿児島大学にきて嬉しいです。ありがとうございます。

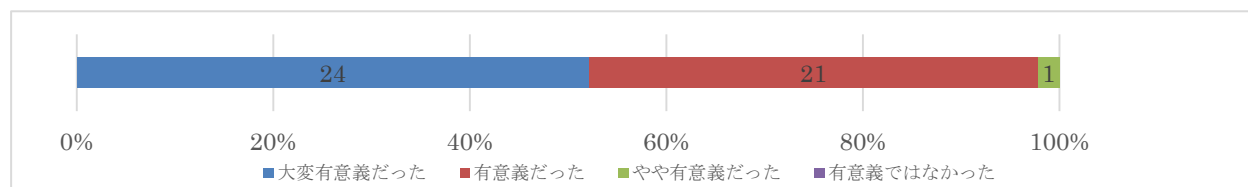
4. 講演会

日時	2017年10月7日(金) 17:30~19:00
テーマ	医学教育の課題と展望
講師	鈴木 康之(岐阜大学医学教育開発研究センター 教授、日本医学教育学会理事長)
主催	医歯学総合研究科FD委員会
共催	医学部FD委員会、歯学部FD委員会
会場	共通教育棟6階インテリジェント講義室
参加者	54名(研究科医系18名 歯系7名、医学部保健学科12名、附属病院4名、その他3名、未回答10名)
概要	<p>社会状況が大きく変化している中で、今後どのような医師・医療人を育てるべきか、そのためにどのような教育と学習がなされるべきか、卒前・卒後の課題を提示し、医学教育学の観点から展望いただいた。国際的な動向、日本小児科学会で推進している専門医研修プログラムにおける医師像と研修制度、さらに医学教育の分野別評価の目的と評価の内容など、多岐にわたる最新の情報が説明され、臨床教育における学習と指導の技能についても丁寧に解説された。</p> <p>本講演会に先立ち、鈴木教授には本学の小児科臨床実習の実際を見学いただき、診療参加型実習における学生指導について評価と改善のための提言もいただいた。</p>

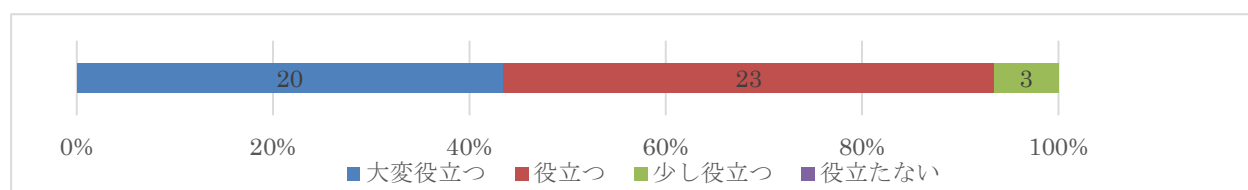
講演会実施後アンケート

回答者44名(回答率 81.5%)

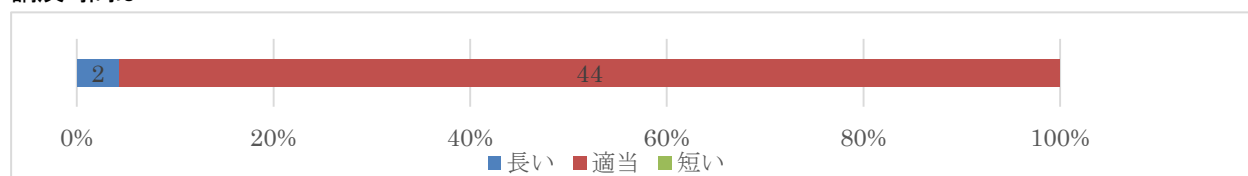
今回の講演会はあなたにとって



得られた知識は今後の実務に



講演時間は



今回の講演会内容についてのご感想・ご要望などお書きください。

- 医学教育の現在の方向性を知ることが出来、有意義であった。

- 看護学教育においてもアウトカムとマイルストーンを明確にしていきたい。
- 教育者としての学識をふやしていきたい。
- 「自身の振り返りに使える評価表はぜひこれから活用したい」と思いました。参加してよかったです。
- 医学教育全般について、示唆に豊むご講演でした。大変有意義だったと思います。
- 参加してよかったです。
- 医学教育について色々考える機会になりました。
- 医学教育についての広範な知識を分かり易く教えていただいた。歴史が良くわかりました。来年のJACME認証に向けて具体的な内容がわかって良かった。
- 包括的、わかりやすい、現実感ありで良かったです。
- 大変分かり易いご講演で良かったと思います。ありがとうございました。
- 医学教育を概観することが出来た。
- 良い内容でした。
- 包括的で解りやすいご講演でした。事例を元に、具体的な効果向上や改善点も掲示して頂ければ良かったと思います。
- コ・メディカル教育にも役立つ内容でした。
- 教育研究の具体的な例(内容)を示して欲しかった。
- とてもわかりやすい講演でとてもためになりました。
- 分野は違うが、身近な職種の教育の動きを知るとてもよい機会となりました。また、専門職者を育てるための教育として参考になるお話でした。
- 医学教育が内包する複雑で重要な課題を平明な語り口でご講演いただき、大変有意義な機会となりました。
- 医学に教育的な面を強化することの大事さを認識することになった。
- 医療人は、教育者であるということに、改めて認識した。教育という分野は、その評価を行うスケールが非常に難しく、結果もすぐにはでないが、将来これからの医療の分野にとって大切なものであると感じた。
- 医療教育を学問として認識できたのが新しい発見でした。
- 小さなことでも役割を与えることが大切とのことですので、実践していきたいです。
- 分野別認証の具体的なイメージができて、わかりやすかったと思います。
- アウトカム基盤型教育の考え方は興味深かった。
- 包括的にわかりやすい講演でした。

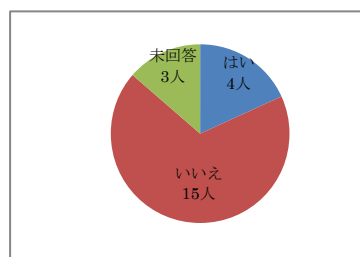
5. 桜ヶ丘キャンパス学習支援システムの活用

1) e-learning 講習会

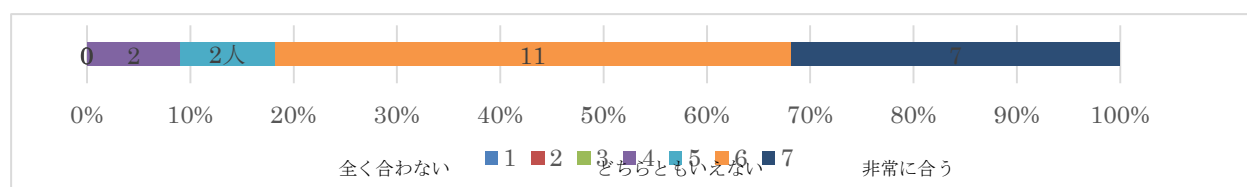
日時	2017年2月13日(火) 16:30~18:00
テーマ	e-learning 講習会「e-Learning (Moodle、e-ポートフォリオ) アドバンス講座」
講師	村永 文学 (医学部・歯学部附属病院 医療情報部 講師)
主催	医歯学総合研究科FD委員会
共催	医学部FD委員会、歯学部FD委員会
会場	共通教育棟6階インテリジェント講義室
参加者	23名 (研究科医系3名 歯系7名、医学部保健学科9名、附属病院医系1名、未回答3名)
概要	桜ヶ丘キャンパスでe-learningシステムとして利用できるMoodle、e-portfolioシステムの紹介の後に、参加者は各自のIDパスワード(学生、指導者)を用いて、Moodleシステムを用いたコース設定、教材の提供、レポート提出、小テストの実施、ポートフォリオへの振り返りの記録等を体験した。医学科、歯学部、保険学用のe-portfolioシステムでの教育到達目標達成度の管理、自己学習目標の記録と自己評価機能、コースの振り返りとコメント、臨床実習症例登録・評価機能の紹介もあった。

指導対象者：学部学生(17) 大学院生(7) 研修医(2) 看護師(1) 他医療職(1) その他(3)

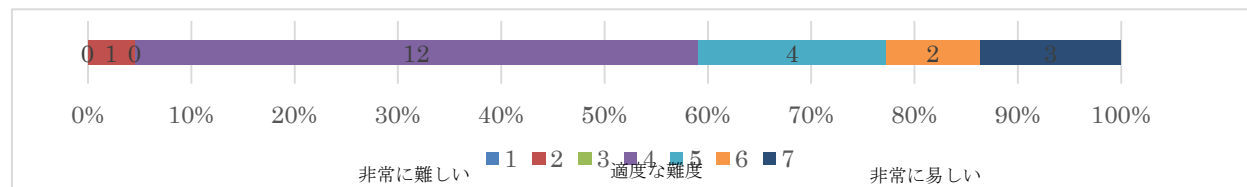
既にMoodle等を授業等で使用されていますか



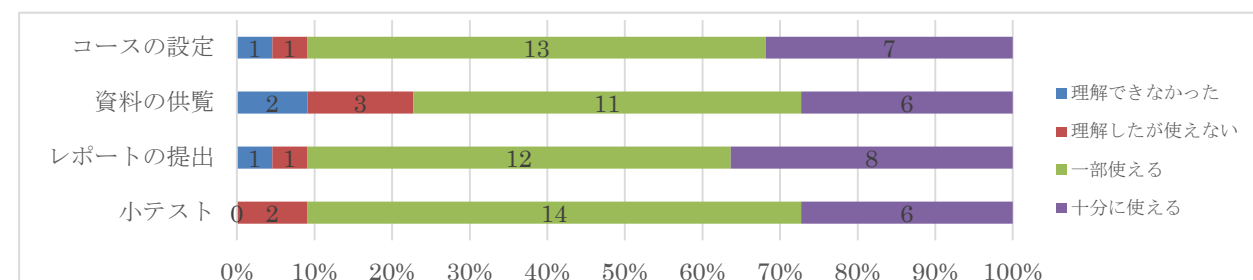
【1 このプログラムは先生のニーズにあっていましたか？】



【2 講義とグループ作業の難度は？】



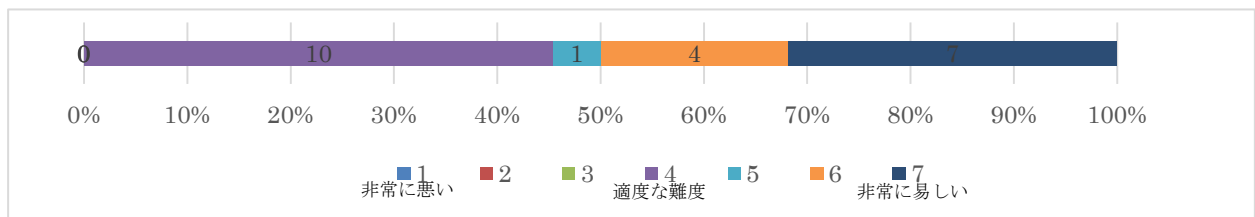
【3 Moodleの以下の機能は理解できましたか？】



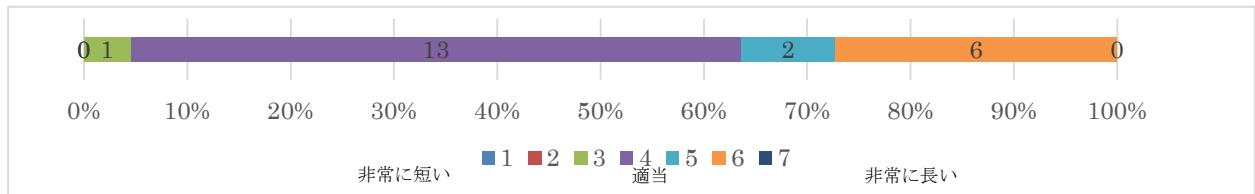
【4 e-ポートフォリオの以下の機能は理解できましたか？】



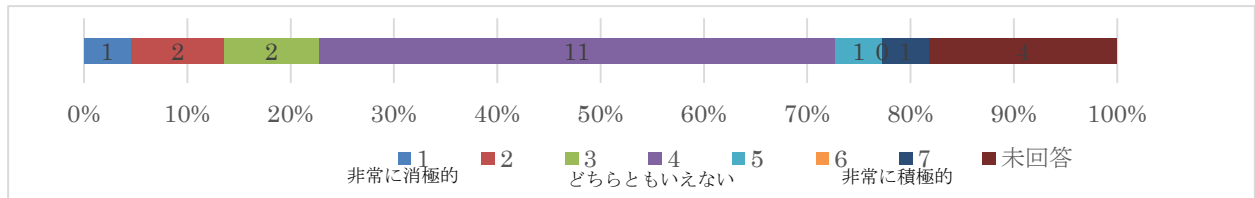
【5 講師の指導は？】



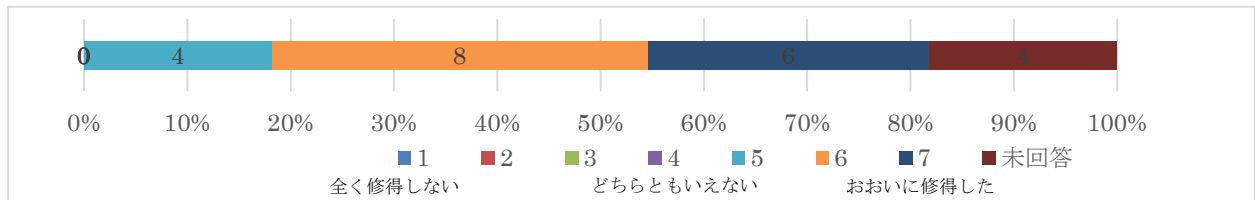
【6 時間は？】



【7 積極的に質問等をしましたか？】



【8 新たな知識、技能を修得しましたか？】



【9 どのようなことが修得できたかお書きください】

- Moodleの小テスト作成について、既に登録してあるコースの編集について
- Moodleを理解した(4名)
- e-ポートフォリオの操作方法を初めて修得した。
- よくわかっていなかったなので、どのように使うかがわかってよかった。
- 実習技術習得にすぐに使えそうです。
- 症例レポート、運用・評価について

6. おわりに

医歯学総合研究科FD委員会では、継続して実施している桜ヶ丘Moodle、医学部・歯学部e-ポートフォリオの講習会の内容の充実を図り、教育への学習支援システムの導入を推進してきた。授業評価アンケートの内容も、少しずつではあるが、教育への要請に対応できているかを評価するための評価項目を追加するなど、改善を目指してきた。医学教育、医療者教育は教育の質と、医療人としての成果がともに問われており、FDの意義はますます重要となっている。全学の目標である教員の参加率75%は端正することはできたが、診療に携わり、多様な業務を担っている桜ヶ丘キャンパスの教員が、関心を持ち、より参加しやすいFD活動のあり方は、引き続き検討しなければならない課題となっている。

保健学研究科

平成28年度 保健学研究科FD活動報告

1. はじめに

平成28年度の保健学研究科FD委員会の主な活動として、以下をおこなった。

- 1) 学生による授業評価、
- 2) 修士論文発表会への教員の参加

以下にその概略を述べる。

2. 学生による授業評価アンケートの実施とその結果の検討並びに授業評価結果の教員へのフィードバック

1) 対象科目と方法

実習、演習と非常勤講師による授業を除く、全ての授業科目を対象に、学生による授業評価を例年通り実施した。学生による授業評価は各授業の最終日に学生にアンケート票を配布し、無記名で記載してもらい、学生代表に回収し、封筒に入れ、厳封し、学務課に提出してもらった。授業評価の中の評価項目は以下の通りである。「学生自身の自己評価」、「授業について」、「教員について」、そして「自由記述」から構成されている。

<授業評価アンケート>

学生自身の自己評価

101 出席状況は良好だった。

(5:非常に良好だった、4:かなり良好だった、3:良好だった、2:良くなかった、1:非常に良くなかった)

102 授業に意欲的に取り組む努力をした。

(5:非常に努力した、4:かなり努力した、3:努力した、2:あまり努力しなかった、1:努力しなかった)

103 授業の予習あるいは復習をした。

(5:非常に予習復習をした、4:かなり予習復習をした、3:予習復習をした、2:あまり予習復習をしなかった、1:予習復習をしなかった)

授業について

201 授業科目にふさわしい内容だった。

(5:非常にふさわしかった、4:かなりふさわしかった、3:ふさわしかった、2:あまりふさわしくなかった、1:ふさわしくなかった)

202 シラバスの内容は明確だった。

(5:非常に明確であった、4:かなり明確であった、3:明確であった、2:あまり明確でなかった、1:明確でなかった)

203 授業内容はシラバスに沿ったものであった。

(5:非常に沿っていた、4:かなり沿っていた、3:沿っていた、2:あまり沿っていなかった、1:沿っていなかった)

204 授業の難易度は以下の通りだった。

(5: 丁度良かった, 4: やや簡単だった, 3: 簡単だった, 2: かなり難しかった, 1: 非常に難しかった)

205 この授業を他の学生にも勧めたいと思う。

(5: 非常にそう思う, 4: かなりそう思う, 3: そう思う, 2: あまり思わない, 1: 思わない)

206 この授業は自分にとって価値があった。

(5: 非常にそう思う, 4: かなりそう思う, 3: そう思う, 2: あまり思わない, 1: 思わない)

教員について

301 話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすかった。

(5: 非常にそう思う, 4: かなりそう思う, 3: そう思う, 2: あまり思わない, 1: 思わない)

302 授業は時間どおり行われた。

(5: 非常にそう思う, 4: かなりそう思う, 3: そう思う, 2: あまり思わない, 1: 思わない)

303 教師の授業に対する熱意を感じた。

(5: 非常に感じた, 4: かなり感じた, 3: 感じた, 2: あまり感じなかった, 1: 感じなかった)

304 授業中、オフィスアワー等で、質問や相談に丁寧に応じてくれた。

(5: 非常にそう思う, 4: かなりそう思う, 3: そう思う, 2: あまり思わない, 1: 思わない)

自由記述

この授業をより良くするための意見や要望、受講者としての自分を省みた上での感想などを自由に書いてください。

2) 学生による授業評価アンケートの結果

前期開講分は23科目に依頼し、全科目からアンケートを回収した(回収率100%)。後期開講分は11科目に依頼し、全科目から回答を回収し得た(回収率100%)。前期開講、後期開講別にアンケートの中の各項目について評価点(1~5)の平均値と標準偏差を求めた。点数が高いほど評価が良いことを示している。また、前期開講科目と後期開講科目を合わせた全体での評価点の平均値も求め、過去5年間との比較を行った。28年度前期開講科目および後期開講科目の平均点を表1に示す。

表1. 平成26年度学生による授業評価の前期・後期別の点数の比較(平均点)

質問項目	前期開講科目	後期開講科目
出席状況は良好であった	4. 71	4. 55
授業に意欲的に取り組む努力をした	4. 53	4. 60
授業の予習あるいは復習をした	3. 96	4. 16
授業科目にふさわしい内容だった	4. 80	4. 72
シラバスの内容は明確だった	4. 71	4. 59
授業内容はシラバスに沿ったものであった	4. 66	4. 60
授業の難易度は丁度良かったか	4. 63	4. 61
この授業を他の学生にも勧めたいと思う	4. 73	4. 56
この授業は自分にとって価値があった	4. 72	4. 79
教員の話し方は明瞭で聞きやすく、説明も分かりやすかった	4. 83	4. 81

授業は時間どおり行われた	4. 79	4. 74
教師の授業に対する熱意を感じた	4. 82	4. 78
授業中、オフィスアワー等で、質問や相談に丁寧に応じてくれた	4. 76	4. 79

*各質問項目に対して1点から5点の5段階で評価

3) 結果の解釈

①「学生自身の自己評価」について

「授業の予習あるいは復習をした」という項目が、前期、後期いずれもやや低い点数であった(3.96と4.16)。「出席状況は良好であった」や「授業に意欲的に取り組む努力をした」については、いずれも良好は結果であった。

②「授業について」と「教員について」

平成28年度の前期、後期ともに全項目で良好な結果であった。

4) 学生による授業評価結果アンケート結果の教員へのフィードバック

各授業科目についての各学生からのアンケート票(自由記述も記載されたものあり)は当該科目の担当教員に返して、今後の授業方法についての参考資料としてもらった。自由記述には、特に教員に伝えたメッセージが具体的に記載されており、教員にとって貴重なフィードバックとなっていると思われた。

3. 修士論文発表会への教員の参加

各領域(看護学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻)で、修士論文発表会に教員が参加し、学生が発表する論文について教員が質問し、活発な意見交換を行った。

4. おわりに

学生による授業評価アンケートは、特に自由記載事項について各教員が今後の授業に活かせるものとなることを期待したい。オムニバス方式で開講されている科目は、担当教官ごとに学生による授業評価を行ったため、回答数が多く、学生の負担増となっている。今後検討の余地ありと思われる。修士論文発表会へ教員の参加と教員による修士論文評価についてはこれまでよりもさらにより長い時間をかけて行うべきかと思われた。

(文責：医学部FD委員会保健学科部会長 新地 洋之)

司法政策 研究科

1 組織体制

鹿児島大学大学院司法政策研究科（以下、「法科大学院」という）における F D を企画・実施する組織として、鹿児島大学大学院司法政策研究科運営規則に基づき、教育活動点検評価委員会（以下、「F D 委員会」という）が設置されている。

F D 委員会の役割は、法科大学院の教育内容の点検・評価・改善に関すること全般にわたり、その具体的な活動は、「教育活動点検評価活動の実施に関する申し合わせ」に基づいて、各年度の F D 委員会が定める活動計画によって決定される。例年実施する活動としては、以下の諸活動が挙げられる。

- ①法科大学院における教育指針・到達目標の検討
- ②学生による授業評価アンケートの実施
- ③学生による期末試験等に対するアンケートの実施
- ④教員相互の授業参観
- ⑤教員自身による映像での自己点検
- ⑥成績評価総括の取りまとめ
- ⑦授業改善のための取組みに関する報告・検討会
- ⑧教員の外部研修の推進
- ⑨法科大学院認証評価および国立大学法人としての各評価への対応
- ⑩ F D 報告書の作成

法科大学院における F D 活動は、すべての教員を対象として実施している。研究者教員と実務家教員の双方とも、専任教員及びみなし専任教員も含めて、F D 活動に参加している。F D 懇談会の開催は、学期の始めに非常勤教員に対しても案内されている。

授業評価アンケート、授業のビデオ録画、教員相互の授業参観については、専任教員の担当科目のみならず、非常勤教員の担当科目も対象としている。

2 F D 活動の概要

平成 28 年度に行った F D 活動の概要は、以下のとおりである。

【4月】

- F D 懇談会（13 日）
- 主な検討内容：
 - 平成 28 年度前期 F D 活動計画の確認
- F D 委員会（27 日）、
- 主な検討内容：
 - 平成 28 年度前期 F D 委員会活動計画の策定

【5月】

FD委員会（25日）

主な検討内容：

○平成28年度前期中間授業評価アンケート結果の検討と、FD活動計画・経費要求書の確認。

【6月】

FD懇談会（8日）

主な検討内容

○授業評価アンケートの回収率と今後のアンケート継続方針の確認。

○アンケート結果に対する担当教員の所管と対応の集約状況報告と学生向け公開方法の確認。

○司法試験・短答試験結果に対する検証。

FD委員会（29日）

主な検討内容：

○平成28年中間授業評価アンケート結果に対する担当教員の所感と対応の確認。

○授業のビデオ収録と教員の閲覧方法に関する確認。

○FD予算の執行方針確認およびFD講演会の実施時期に関する確認。

【7月】

FD懇談会（13日）

主な検討内容：

○平成28年度前期最終授業評価アンケートの実施報告（集計結果と回収率等）

○授業収録映像の活用に関する意見交換。

【8月】

FD委員会（31日）

主な検討内容：

○平成28年度前期成績評価総括と、各学生の成績及び学習状況に対応した指導の方向性の検討。

○平成28年度前期（最終）授業評価アンケートの結果に対する担当教員の所管と対応の確認。

○FD講演会の実施に向けた準備作業進捗状況の確認。

【9月】

FD講演会の開催（27日）

主な内容：

獨協大学法科大学院の花本広志教授によるFDワークショップ「アクティブラーニング型授業の方法と工夫——法学教育をより効果的かつ魅力的なものにするために」の開催

【10月】

FD委員会（26日）

主な検討内容：

○平成28年度後期FD活動実施計画の策定。

○平成28年度後期（中間）授業評価アンケート実施スケジュールの確認。

【1月】

□FD懇談会（11日）

□主な検討内容

○平成28年度後期（中間）授業評価アンケートの回収率や集計結果および担当教員の所管と対応に関する意見交換。

○平成28年度後期（最終）アンケートの実施スケジュール等の確認。

○平成28年度後期末試験の適切な実施・評価を通じて学生の能力を高める研究科教員の所期の目的を確認。その目的達成を目指した教員の体制を確認。（教務委員とFD委員の連携対応など）

□FD委員会（31日）

□主な検討内容：

○平成28年度後期最終授業評価アンケート実施報告と回答内容に関する検討

○平成28年度後期授業収録の完了報告と各教員の閲覧方法の確認。

○FD経費の執行状況確認と今後の執行計画に関する検討。

【2月】

□FD委員会（28日）

□主な検討内容：

○平成28年度後期成績評価総括の確認

○平成28年度のFD活動実績（教員の参加率を含む）に関する意見交換

3 FD活動の内容

（1）学生による授業評価アンケートの実施

教育内容や教育方法に対する学生からの評価は、①授業評価アンケート、②「学期末試験」「出題の趣旨／採点のポイント」に対するアンケート、③クラスワークによる担任との相談や懇談、④その他の方法を通じて実施された。

法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目については、①授業中間アンケート（授業のおよそ半分を経過した、前期は5月、後期は11月）、②授業終了時のアンケートを実施している。講義終了時だけでなく、進行中の授業に対する学生の評価を把握し、開講中の講義の改善に当該学生の評価を活かすために行った。なお、履修者が2名以下の講義については、匿名性が失われることから、これらのアンケートの実施を見合わせている。その場合では、講義担当教員と学生との意思疎通を密にし、適宜講義内で学生の評価を把握して、講義の改善を図り、アンケートが実施されないことのデメリットを解消している。

「学期末試験」「出題の趣旨／採点のポイント」に対するアンケートは、法律基本科目および司法試験の選択科目となっている分野の科目について、期末試験が終了したのち、各科目の成績評価総括報告書が公開された時点で、学生に対するアンケートを実施して、①期末試験の出題が、「基本的な法的知識や体系的理解」「法的思考能力」「事案の事実を把握し分析する能力」をそれぞれどの程度問うものであったか、②成績評価総括報告書に記載された「出題の趣旨／採点のポイント」が、自身の答案を見直して復習するのに資するものであるかどうかを評価した。

上記すべてのアンケート結果は、授業で用いている電子シラバス・システムに掲載されることにより、当該科目の履修者のみならず、すべての学生に向けて公開された。また、最終アンケートについては、翌年度の担当教員が同一である場合は、翌年度のシラバス・システムの欄にも、参考データとしてアンケート結果が掲載された。

授業評価アンケート（中間・最終）の結果が通知されたのち、法律基本科目および司法試験の選択

科目となっている分野の科目については、担当教員がアンケート結果に対する「所感と対応」の作成を行った。

(2) クラスワークによる担任との相談や懇談

クラスワークによる担任との相談や懇談では、学生を1～3名程度のクラスに分けて、これに対して1名の担任と1名の副担任を割り当てて、教員が学生の学修全般や学生生活をケアした。

(3) 教員相互の授業参観

法科大学院においては、各教員はすべての授業を自由に相互参観することができる。また、学期ごとに最低でも1回は、他の教員による授業を参観した。

授業参観の感想・評価等については、各教員から報告書として提出され、報告書は、当該科目の担当教員に送付されると同時に、FD懇談会において回覧され、授業改善のための検討資料とされた。

(4) 授業のビデオ収録参観

授業を学期ごとに1回ずつビデオ収録し、ネットワーク上のサイトで随時閲覧できる体制を構築している。また、DVDによる画像の配布に対応できる体制も整備した。各教員は、自分自身の講義をこのビデオ映像で視聴して、改善点や成功している点を自ら点検するためのツールとして活用した。さらに収録した映像を使った法学教育の実施について教員間で意見交換を行った。

(5) 外部研修等への参加

今年度は、外部研修として4月に同志社大学において開催された臨床法学教育学会に専任教員1名が参加して発表を行うと共に授業方法に関するセッションに参加した。また12月に九州大学法科大学院において開催された研修会「ローヤリング科目の教え方についての説明会」に専任教員1名が参加した。また、研究科長および教務委員長は、九州大学、熊本大学、琉球大学の研究科長、教務委員長が参加する「九州・沖縄地区四大学教育連携協議会」において実習科目の取扱い等について意見交換を行った。11月には、熊本大学法科大学院の紺屋博昭副研究科長らが来学し、教育活動等の意見交換を、研究科長らと行った。さらに中央大学研究開発機構の機構教授である角田篤泰特任教授来訪時には、専任教員に対してICTを活用した法学教育に関する研修を実施した。これらの他機関との意見交換等により得られた知見がFD懇談会で報告された後、教員相互で討議・総括がなされた。

(6) FD研修会の開催

平成28年9月に、司法政策教育研究センターとの共催により、獨協大学法科大学院の花本広志教授を招聘し、FDワークショップ「アクティブラーニング型授業の方法と工夫——法学教育をより効果的かつ魅力的なものにするために」を開催した。花本教授は、法科大学院の授業において、いわゆるアクティブ・ラーニングの手法を全面的に取り入れた教育を実践しており、その方法・成果は、学会等で報告されている。当日は、出席した教員を学生役として、日頃、花本教授が実践しているアクティブラーニング型授業を実際に行い、体験するとともに、花本教授から、教授が考えるアクティブラーニング型授業の必要性、質を高めるための工夫など、アクティブラーニング型授業のポイントが説明された。これを踏まえて、本学の法科大学院におけるこれまでの教育実践を振り返りつつ、さらなる授業の活性化に向けた施策について、また、学部におけるアクティブラーニング型授業実施の可能性について、活発な意見交換がなされた。本学からは、本研究科の教員の他、法文学部を主担当とする教員や教育学部を主担当とする教員、教育センターを主担当とする教員が多数参加した。

この研修会を通じて、法科大学院における教育手法の効果とその限界、学部における法学教育への応用可能性について、知見を共有することができた。

(7) 成果に結びつかせるための方策・工夫

法科大学院のFD活動は、教員間の問題意識を共通化するとともに、その取組みを具体的な成果に結びつけるため、①情報伝達の双方向・多方向性、②日常的な意見交換の実施を重視している。

法科大学院におけるFD活動は、月例で開催されるFD懇談会を中核的な「場」として実施している。授業参観の結果、授業評価アンケートの結果、授業評価アンケートに対する応答内容、各教員が参加した外部研修など、各教員がそれぞれに行ったFD活動は、すべて定例のFD懇談会の席上で全員に対して開示される。そして、懇談会では、各種報告書等の内容に基づいて、自由な意見交換が行われる。これによって、個々の活動を記録・蓄積するだけでなく、その成果を常に全教員がリアルタイムに近い形で共有し、即時に議論の対象とすることによって、個々の活動により得られた知見を多面的に検証し、共有している。

また、この懇談会を数回にわたって開催することによって、授業改善のための情報交換・意見交換を特別な「行事」に仕立てるのではなく、日々の教育活動や研究科運営と一体化した日常的な取組みとしている。懇談会では、FD委員会が設定したテーマに限らず、各分野や各教員から授業や学生の状況に関する問題提起を自由に行う時間帯を設けている。

臨床心理学 研究科

臨床心理学研究科平成 28 年度 FD 活動報告

1. 平成 28 年度活動報告の概要

本研究科における教育の内容及び方法の改善を図るための FD 活動は、活動の重要性を鑑みて定例開催の研究科会議として位置付け、平成 28 年度もほぼ毎月 12 回開催した。専任教員の参加率は研究科会議として位置付けたこともあり全て 100%であった。平成 28 年度活動計画及び活動実施状況のまとめは表 1 に示したとおりである。詳細については別途、項目別に示すが概要は以下の通りである。

先ず、学生による授業評価アンケートに関しては、その結果の共有及び相互理解を通して授業改善が適切に行えるように各セメスターに 2 回、1 年で合計 4 回行い、かつ、各回において授業評価改善報告書作成を各教員に義務付けて授業改善に努めた。

平成 28 年度の各月におけるテーマは、以下の表 2 に示した通りである。また、授業改善の取り組みばかりでなく、臨床心理士養成において不可欠な臨床心理実践における職業倫理・研究倫理に関する授業方法の検討や、臨床心理実習科目の教育方法の改善及び客観的評価に関する検討等の課題を幅広く設定し実施した。特に、今年度は職業倫理教育に関しただけでなく、研究倫理教育についても取り上げて実施した。そのために、FD 活動に関する経験の豊かな講師を外部から招聘し、実務家教員の教育上の経験の確保、教育研究教員の実務上の知見の確保に資するなど教員相互の研鑽に努めた。さらには、臨床心理士養成大学院連絡協議会 FD 研修会へ参加し情報収集及び意見交換を行った。その結果を持ち帰り、臨床実習教育の在り方について FD 会議で検討した。

以下、具体的な活動内容を項目別に報告する。

表 1 平成 28 年度 FD 活動計画・活動実施状況のまとめ

企画 1	企画名：臨床心理実践倫理及び研究倫理に関する研修会
	実施時期：, 後期セメスターに 2 回実施
	関連する FD 事項：⑨, ⑩
	備考：招聘講師の日程調整の都合で、前期セメスターに 1 回実施予定の研修会が後期 11 月にずれ込んだが、計画の 1 回目を西九州大学教授、西村喜文氏を招聘し、「臨床心理学研究における倫理問題を考える～研究倫理について」というテーマで行った。2 回目は長崎純心女子大学の中村真樹准教授を招聘し「臨床心理実習教育としての地域支援活動の在り方について」というテーマで行った。ともに参加率 100%であった。
企画 2	企画名：授業評価アンケート
	実施時期：前期 2 回, 後期 2 回 (各セメスター 7 回目と 14 日回目に実施。合計 4 回実施)

	<p>関連する FD 事項：⑫</p> <p>備考：学生による授業評価アンケート結果の共有及び相互理解を通して、授業改善が適切に行えるよに各 Semester に 2 回、1 年で合計 4 回行い、各回において授業評価改善報告を各教員に義務付けて授業改善に努めた。</p>
企画 3	<p>企画名：臨床心理実習教育の現状と GPA 導入へ向けた実習評価の可能性の検討</p> <p>実施時期：4 月</p> <p>関連する FD 事項：⑥</p> <p>備考：臨床心理士養成の専門職大学院における臨床心理実習の客観的評価の再検討と GPA 導入へ向けた実習評価の可能性についての検討を行うため、平成 28 年 3 月に日本大学大学院及び国際医療福祉大学大学院の 2 校に教員を派遣し現状調査と意見交換を行った結果をもとに臨床心理実習科目の GPA 導入について検討を行った。参加率は 100%であった。また、臨床心理士養成大学院競技会の FD 研修会に参加し情報集を行った。</p>
企画 4	<p>企画名：臨床心理実習に関する学生の到達度自己チェックと学生—教員によるフォローアップセッションを通じた授業改善</p> <p>実施時期：各 Semester 終了後の 8 月及び 2 月に各 1 回ずつ実施</p> <p>関連する FD 事項：⑦, ⑫</p> <p>備考：臨床心理実習に関する学生のセルフモニタリング結果を受けて、学生と教員との間で臨床心理実習に関してフォローアップセッションを行った結果の振り返りを各臨床ゼミ単位で実施し、それらの結果を FD 会議にて共有し、臨床心理実習教育の授業改善に向けた全教員による協議を行った。参加率は 100%であった。</p>
企画 5	<p>企画名：学外実習における教育改善と実習評価項目の見直しについて</p> <p>実施時期：各 Semester 終了後の 8 月及び 2 月に各 1 回ずつ実施</p> <p>関連する FD 事項：⑦, ⑫</p> <p>備考：学外実習先の専門家（教育、医療、福祉、司法・矯正各領域の臨床心理士）を招いて臨床心理実習の効果的なあり方や実習教育改善のための検討を、各 Semester 終了後の 8 月及び 2 月に各 1 回ずつ実施し、臨床実習評価項目の見直しを図った。実務家教員による拡大実習委員会での改善案を FD 会議に提出し全教員で協議した。参加率は 100%であった。</p>

2. 全教員による研究科 FD 会議（FD 研修会も含む）の定例化

上記に示したように、平成 27 年度から定例の FD 会議（FD 研修会を含む）を、ほぼ毎月行うべく体制を整え、より実践的な FD 活動実施に向けてテーマを決め FD 活動の充実を

図った。今年度は臨床心理実習科目の授業改善に関わるテーマが中心となった。主なテーマは、授業改善の取り組みばかりでなく、職業倫理・研究倫理、臨床心理実習科目の教育方法の改善及び客観的評価に関する検討、等を掲げている。各月におけるテーマは以下の表に示した通りである。

表 2 平成 28 年度 FD 会議開催日と内容 (FD 研修会を含む)

	年 月 日	テーマ
第 1 回 FD 会議	平成 28 年 4 月 20 日	1.平成 28 年度の FD 活動計画について 2.FD 研修報告 (日本大学・国際医療福祉大学の視察・意見交換について)
第 2 回 FD 会議	平成 28 年 5 月 20 日	1. 授業評価アンケートについて 1)授業評価アンケートの文言修正 2. フォローアップセッションについて 1) アンケート結果の共有 2) 運用及び項目の見直しについて 3. 授業公開について
第 3 回 FD 会議	平成 28 年 6 月 22 日	1. 臨床心理士の職業倫理・研究倫理を考える 1 ※臨床心理士会「倫理ガイドライン」第七条「著作等における事例の公表及び心理査定用具類の取り扱い」を参考に
第 4 回 FD 会議	平成 28 年 7 月 20 日	臨床心理士養成大学院協議会 FD 研修会について
第 5 回 FD 会議	平成 28 年 9 月 21 日	来年度のフォローアップセッションに向けて 1) チェックシートの項目修正について 2) 運用の見直しについて
第 6 回 FD 会議	平成 28 年 10 月 19 日	平成 28 年度前期授業評価第 2 回目の結果のまとめと意見交換
第 7 回 FD 会議	平成 28 年 11 月 30 日	「臨床心理学分野における研究倫理」 (招聘講師: 西村喜文先生 (西九州大学子ども学部心理カウンセリング学科))
第 8 回 FD 会議	平成 29 年 12 月 14 日	フォローアップセッション実施要領案について
第 9 回 FD 会議	平成 29 年 2 月 1 日 (予定)	臨床心理実習における個人情報保護について

第10回FD会議	平成29年2月20日	「臨床心理実習教育としての地域支援活動の実際について考える」（招聘講師：中村真樹先生（長崎純心女子大学）
----------	------------	--

※定例会議に位置付け、教員の出席率は100%であった。

3. 授業評価アンケートの実施と臨床心理学研究科の独自の取り組みとしてのフォローアップセッションの実施

1) 授業評価アンケートの実施

(1) 実施対象科目と実施時期

学生による授業評価アンケートは、本研究科開講科目の全て（全ての講義科目、演習科目、実習科目）が対象となり、前期は6月中旬と7月下旬の2回、後期は11月中旬と2月上旬の2回、毎年計4回のアンケートを実施した。なお、各セメスター2回目のアンケートは最終の授業回（概ね、14回目）までに行い、その評価結果に対する授業改善報告を最終回には必ず学生に行えるように実施時期を設定している。

(2) 評価項目

評価項目内容について、学生の意見や教職員間での話し合いを通して、本年度は評価項目を講義科目、演習科目、実習科目について用語を整理すること、回答の負担軽減のために同じような質問内容に関しては整理し直した。各々の学生自身の理解度評価や授業内容に関する評価、ならびに自由記述で行った。具体的には以下の通りである。

<講義科目>

1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか。
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか
(テキスト・資料等を使用した場合のみ回答してください)。
3. 本講義科目の内容は理解できましたか。
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか。
5. 本講義科目の内容に満足していますか。
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください。
7. 本講義科目に対するご意見を自由に書いてください。

<演習科目>

1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか。
2. 本演習科目の内容は理解できましたか。
3. 本演習科目の内容に満足していますか。
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか。
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか。

6. 本演習科目を総合的に 5 段階で評価してください。
7. 本演習科目に対するご意見を自由に書いてください。

<実習科目>

1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか。
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか。
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか。
5. 本実習科目を総合的に 5 段階で評価してください。
6. 本実習科目に対するご意見を自由に書いてください。

(3) 結果

結果は以下の通りであった。

表 3. 前期第 1～2 回目の講義科目における授業評価 (3 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.3	4.4	5.0	3.7	4.3
2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.7	4.6	5.0	3.7	4.6
3. 本講義科目の内容は理解できましたか	5.0	2.7	4.3	5.0	3.7	4.3
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.0	4.5	5.0	3.3	4.4
5. 本講義科目の内容に満足していますか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.7	4.5
6. 本講義科目を総合的に 5 段階で評価してください	5.0	3.3	4.5	5.0	3.7	4.5

(科目名)臨床心理学原論／発達障害者心理臨床論／臨床心理学入門

表 4. 前期第 1～2 回目の演習科目における授業評価 (5 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.2	4.5	5.0	3.8	4.7
2. 本演習科目の内容は理解できましたか	5.0	3.0	4.3	5.0	3.4	4.5
3. 本演習科目の内容に満足していますか	5.0	3.4	4.5	5.0	3.4	4.5
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.4	4.6	5.0	3.4	4.6

5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.0	4.5	5.0	3.6	4.6
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.4	4.6	5.0	3.8	4.6

(科目名)総合的事例研究演習Ⅰ／臨床心理査定演習Ⅰ／臨床心理面接演習Ⅰ／
臨床心理関連行政論／臨床心理事例研究演習Ⅰ

表5. 前期第1～3回目の学内実習科目における授業評価（4科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか	5.0	3.8	4.7	5.0	3.5	4.6
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	5.0	3.3	4.7	5.0	2.5	4.6
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	2.8	4.4	5.0	2.5	4.4
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか	5.0	2.5	4.3	5.0	2.8	4.5
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.0	4.4	5.0	2.8	4.5

(科目名)臨床心理実践研究Ⅰ／臨床心理実践研究Ⅲ／
臨床心理査定・面接実習Ⅰ／臨床心理査定・面接実習Ⅲ

表6. 前期第1～2回目の学外実習科目における授業評価（3科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか				5.0	4.5	4.9
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか				5.0	3.0	4.7
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	(実施なし)			5.0	3.0	4.5
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか				5.0	3.5	4.7
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください				5.0	3.5	4.8

(科目名)臨床心理地域援助実習Ⅰ／臨床心理地域援助実習Ⅲ

表7. 後期第1～2回目の講義科目における授業評価（4科目平均評価点）

	第1回目			第2回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本講義科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.5	4.5	5.0	3.3	4.6

2. 本講義科目のテキスト・資料等は適切でしたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.3	4.6
3. 本講義科目の内容は理解できましたか	5.0	3.3	4.4	5.0	3.3	4.4
4. 本講義科目を通して臨床心理学の理論に興味が増しましたか	5.0	3.5	4.6	5.0	3.5	4.6
5. 本講義科目の内容に満足していますか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.3	4.6
6. 本講義科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.5	4.5	5.0	3.8	4.6

(科目名)臨床心理面接学原論／ストレスマネジメント論／認知行動療法論／遊戯療法論

表 8. 後期第 1～2 回目の演習科目における授業評価 (8 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本演習科目を熱心に受講しましたか	5.0	3.3	4.5	5.0	3.6	4.5
2. 本演習科目の内容は理解できましたか	5.0	2.9	4.2	5.0	3.1	4.2
3. 本演習科目の内容に満足していますか	5.0	3.3	4.3	5.0	3.1	4.4
4. 本演習科目を通して講義(理論)の理解や実習体験の理解につながりましたか	5.0	3.0	4.3	5.0	3.1	4.4
5. 本演習科目を通して臨床心理学に興味が増しましたか	5.0	3.0	4.3	5.0	3.4	4.5
6. 本演習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.4	4.4	5.0	3.1	4.4

(科目名)総合的事例研究演習Ⅱ／臨床心理査定演習Ⅱ／司法・矯正心理臨床論／
青年期心理臨床論／臨床心理面接演習Ⅱ／臨床心理事例研究演習Ⅱ／
医療心理臨床論／エスノグラフィック心理臨床論

表 9. 後期第 1～2 回目の学内実習科目における授業評価 (4 科目平均評価点)

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか	5.0	3.0	4.6	5.0	3.8	4.6
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか	5.0	3.0	4.5	5.0	3.3	4.5
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか	5.0	2.8	4.4	5.0	3.0	4.4
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか	5.0	3.0	4.4	5.0	2.5	4.4
5. 本実習科目を総合的に5段階で評価してください	5.0	3.0	4.4	5.0	2.5	4.4

(科目名)臨床心理実践研究Ⅱ／臨床心理実践研究Ⅳ／
臨床心理査定・面接実習Ⅱ／臨床心理査定・面接実習Ⅳ

表 10. 後期第 1～2 回目の学外実習科目における授業評価（2 科目平均評価点）

	第 1 回目			第 2 回目		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
1. あなたは本実習科目に熱心に取り組みましたか				5.0	3.5	4.8
2. 本実習科目での実習体験を通して臨床心理学や臨床業務にイメージが増しましたか				5.0	3.5	4.8
3. 本実習科目で講義や演習で学んだことが役に立ちましたか		(実施なし)		5.0	3.5	4.5
4. 本実習科目での実習体験に満足していますか				5.0	3.0	4.6
5. 本実習科目を総合的に 5 段階で評価してください				5.0	3.5	4.7

(科目名)臨床心理地域援助実習Ⅱ／臨床心理地域援助実習Ⅳ

(4) 集計結果のフィードバックと授業評価報告書の提出及び授業改善に向けた組織的対応

学生による授業評価結果は、例年通り、匿名性が担保された状態で各担当教員に集計結果がフィードバックされ、各担当教員は集計結果の確認後に、授業に対する自己評価を行った上で、改善方向及び改善策を含めた授業評価報告書を作成した。そして、該当月の翌月の FD 会議にて全教員でアンケート結果に関する討議を行い、教育内容及び方法の改善の検討を行った。さらに、自由記述欄での意見を含めた授業評価結果について全教員による FD 会議、拡大教務委員会・拡大実習委員会等における検討を行い、教育ニーズに応じた授業科目の内容検討および刷新を実行し教育改善に活かすことができた。

(5) 臨床心理学研究科独自の取り組みとしてのフォローアップセッション

臨床心理実習においては、学生が主体的に到達度評価を行い、かつ、教員が学生に対して適切なフィードバックを行える形での教育方法の構築が重要課題となっている。そのことを鑑みて、平成 26 年度より本研究科では、表 2 に示したサマリーを使って臨床心理実習に関する実習科目の到達度を学生が主体的に評価し、それを受けた形でフォローアップセッションを行ってきた。本年度も同様に各セメスター後に 1 回ずつ実施し、より客観的な臨床心理実習評価の実現とそれを反映した教育方法の改善を行うべく努力を続けた。

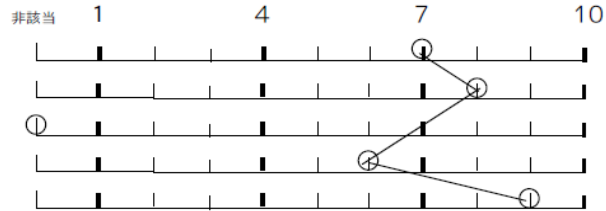
しかしながら、これまでのような方法でのチェックリストによる到達度評価は、現実に即さない評価項目があったり、客観的に自己評価すること自体にも葛藤が生じたりするという意見が上がった。そのため、本年度からはチェックリストを使うか否かは学生の判断に任せ、サマリーを基にして到達度のポートフォリオを自ら作成し 2 年間の成長を自己点検するような形式に変更した。但し、指導教員とのフォローアップセッションについては昨年同様に行い、自己評価と併せて相互的に教育効果を判断するようにしたところ、臨床心理実習に対する教育効果を確認できる実践的な FD 活動として活用することができた。

サマリー

<専門職学位課程 年 期>

記入例

1. ○○○
2. △△△
3. □□□
4. ◇◇◇
5. ◎◎◎



*項目の評点をプロットし、各カテゴリーのプロフィールを作成

*実施していない項目は「非該当」に○印

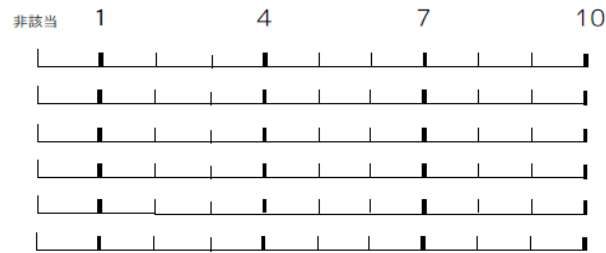
A.実習における基本項目

1. 倫理
2. 姿勢
3. 社会性



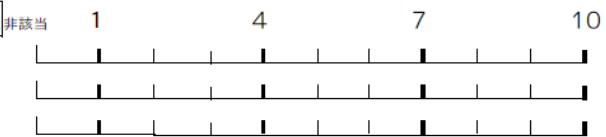
B.学内実習

- I. 相談室
 1. 電話・受付
 2. 陪席
 3. 面接
 4. 心理検査
- II. ロールプレイ
- III. スーパービジョン



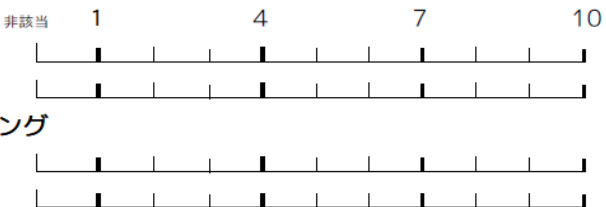
C.ケースカンファレンス

1. 報告者
2. レジユメ
3. 出席者



D.学外実習

- I. 学外実習
 1. 適切な行動
 2. 理解の深化
- II. 報告会・総括シェアリング
 1. 報告者
 2. 出席者



4. 外部講師の招聘による FD 研修会

平成 28 年度は下記の通り、「臨床心理学分野における研究倫理とその教育方法」と題して、西九州大学子ども学部心理カウンセリング学科教授の西村喜文先生を外部からの特別講師として招聘した。これまで、臨床心理士として必須の職業倫理についての研修は行ってきていたが、研究倫理について実例に基づいて研修が行われたことは役立った。また、第 2 回目の外部講師による FD 研修会は、「臨床心理実習教育としての地域支援活動の実際について考える」と題して、長崎純心女子大学の中村真樹先生より話題提供頂き、特に、発達障害者に対する地域支援の在り方について質疑を行った。

1) 平成 28 年度第 1 回 FD 研修会

日時：2018 年 11 月 30 日（水）13:30～16:00

場所：法文棟 1 階小会議室

講師：西村喜文先生（西九州大学子ども学部心理カウンセリング学科）

演題：臨床心理学分野における研究倫理とその教育方法

2) 平成 28 年度第 2 回 FD 研修会

日時：2019 年 2 月 20 日（水）13:30～16:00

場所：総合教育研究棟 102 教室

講師：中村真樹先生（長崎純心女子大学）

演題：臨床心理実習教育としての地域支援活動の実際について考える

5. 学外で行われる FD 研修会への教員派遣及び FD に関する情報収集・意見交換

平成 28 年度における FD 活動での学外への教員派遣は、日本臨床心理士養成大学院協議会第 3 回 FD 研修会に教員 1 名（金坂准教授）を派遣した。研修内容は「スーパービジョンのあり方について考えるー臨床心理士教育が抱える諸課題ー」であり、養成大学院におけるスーパービジョンのあり方についての意見交換が行われた。

6. 特筆すべき取組みや改善事例

1) FD 活動の組織的対応の充実

平成 27 年度までの取組みをさらに強化する意味で、本年度もほぼ月に 1 回のペースで FD 活動を研究科の定例会議として位置付けたため、参加率も引き続き 100%を維持しており、FD 活動の定着化が進んだ。

結果、学生の授業評価アンケートへの具体的な改善策として、アンケート結果を教員へのフィードバックや授業評価報告書の提出だけに留めず、該当月の翌月の FD 会議等を利用して全教員でアンケート結果に関する討議を行い、教育内容及び方法の改善の検討を行うことが可能になった。さらに、自由記述欄での意見を含めた授業評価結果について全教員による FD 会議、拡大教務委員会・拡大実習委員会等における検討を行い、教育ニーズに応

じた授業科目の内容検討および刷新を実行した。

2) 臨床心理実習評価の客観性を担保するためのフォローアップセッションの継続

臨床心理学研究科設置以来の重要な FD 事項である講義・演習・実習全科目における GPA 導入に向けて、既に、講義・演習科目は GPA 導入されているが、実習科目については臨床実習の客観的評価の方法が得にくく実現できていない。そのため、平成 27 年度においても、情報収集を目的に他の臨床心理養成大学院への教員派遣を行ってきた。しかしながら、わが国において臨床心理実習の客観的評価を実施できている大学院がなく、現状では導入の困難さが伺えた。そこで、本年度においても、客観的な評価として高めるための対策として昨年度より復活させた、フォローアップセッションを今年度も実施し、より客観的な臨床心理実習評価の実現とそれを反映した教育方法の改善を目指し実行した。結果、学生にとっては、自身でセルフモニタリングし、主体的な到達度評価を行うための目標設定と課題が明確になり、それをポートフォリオ化することによって 2 年間の成長を自己点検することが可能になったと好評である。同時に、指導教員とのフォローアップセッションを通して相互的に教育効果を判断し、実践的な FD 活動として継続している。

文責：平成 28 年度 FD 委員長・松木 繁

連合農学 研究科

F D活動報告書
(平成28年度)



大学院連合農学研究科

平成29年3月

大学院連合農学研究科 F D 活動報告

1. はじめに

大学院連合農学研究科は、佐賀大学、琉球大学と鹿児島大学の3大学4研究科が連合した農水産学系の独立博士課程大学院で、高度な専門的能力と豊かな学識をそなえた研究者の養成を目的として、構成大学が連合し、多彩な教員組織を構築して、研究施設及び設備も連合しながら教育研究体制を整えて、社会・世界に貢献する博士を輩出することを目指している。また、社会人並びに外国人留学生を積極的に受け入れ、東アジアにおける農水産学の教育研究の中核となるとともに、農水産業及び地域の発展に寄与することを目的としている。

本研究科は、1988(昭和63年)に設立され、平成19年度宮崎大学の離脱に伴って、平成21年度に4専攻11連合講座を3専攻9連合講座に改組し、単位制導入の改革を行った。平成28年4月1日現在、日本人学生66名、外国人留学生49名、計115名が在籍している。

博士の学位は、12単位以上修得の上、学位論文の審査及び最終試験に合格して授与されるが、新カリキュラムとして職業人教育や国際感覚を養うことを意図した人材養成学生支援セミナーや国際農学特別講義などを創設することで大学院教育の実質化を目指している。さらに、年に一度、地理的に離れた3構成大学の学生が一堂に会して行う農学特別講義Ⅰ(一般セミナー)の実施や、多地点制御遠隔講義システムを用いた授業を行うことで教育方法等の工夫を行っている。

また、本研究科では、学生1人に対し、主指導教員1人、副指導教員2人の計3人による指導体制をとっており、1年次の学生には「中間報告会」、2年次の学生には「中間発表会」を課し、その達成状況の検証を実施している。

F D活動に関しては、平成19年度に代議委員会のサブ委員会としてF D委員会が設けられ、農学特別講義Ⅰ(一般セミナー)を中心とした授業アンケートや修了生アンケートの集計・解析評価を行い、改善に向けて取り組んでいる。

平成22年度は、3年に1度実施してきた自己評価・自己点検を行った。そして、さらにその自己評価書に基づき、平成12年度以来途絶えていた外部評価も受けて、21年改組後の連合農学研究科の教育システムや改善状況を把握することにした。平成24年度には、本研究科における学位の質の保証を確立し、研究者、技術者、教育者として地域社会及び国際社会に幅広く貢献できるリーダーを養成するために、3つのポリシーを策定した。

平成28年度のF D活動としては、F D委員会を4回開催し、「学生教育の改善及び教育体制の向上を図ること」をテーマに掲げ、本研究科における課題及びアンケートのデータ分析、それに伴う改善に向けた検討を継続して行い、今後の英語教育の充実に向けて、学生の海外研修等への意識調査を実施し、教員対象の英語講義のためのセミナー開催などを実施した。



上、右写真：
多地点制御遠隔講義システムを用いた授業
（農学特別講義Ⅱ（連合一般ゼミナール）
の様子

2. 「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」の開講

平成28年度鹿児島大学大学院連合農学研究科（博士課程）「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」が平成28年11月7日（月）から11月9日（水）までの3日間の日程で行われた。この一般セミナーの趣旨は、「鹿児島大学大学院連合農学研究科に在籍する学生を対象とし、連合大学院教育の理念に基づき実施することにある。本年度は琉球大学農学部が世話係となり、那覇市内の自治会館を会場とした。実施内容は外部講師によるセミナー（4コマ）、1年生による専攻セミナーおよび2年生による情報交換セミナーに加え、研究施設見学、交流会などある。本年度の参加学生数は74人（内訳：1年生39人、2年生33人、3年生2人；日本人学生35人、外国人学生39人）であった。初日のセミナーは、西村章先生（武田薬品工業(株)日本開発センタークリニカルサイエンスディレクター）による「日本での新薬製造承認申請における必要データ」をテーマに講義が行われた。新薬開発に関するプロセスを詳しく紹介され、受講生には大いに参考になったように見受けられた。

2日目は、佐伯雄一先生（宮崎大学農学部教授）による「農耕地におけるダイズ根粒菌のゲノム生態学的研究」、加藤進先生（三重大学伊賀研究拠点特任教授）による「狼煙あるいは烽火考—サイエンスからの想いを馳せて—」、後藤貴文先生（九州大学大学院農学研究院准教授）による「代謝プログラミングと国内草資源による新しい和牛肉生産に関する研究」が講義された。佐伯先生には、ダイズ根粒菌の生態形成と環境要因について、加藤先生には古代の伝達手段である狼煙における材料や風向・風速、可視範囲などによる科学的検証について、後藤先生には代謝プログラミングによるウシの産肉性（肉質、肉量）をコントロールした効率的・省力的家畜飼養システムについての3テーマが詳しく紹介がなされた。いずれも興味深い内容であった。午後からは、専攻セミナーが行われた。昨年度は分野間の交流を促すことを意図して専攻の壁を取り除く形で学生の振り分けを行って実施されたが、今年度もそれに倣いクラス分け（4班）を行った。1年生においてはデータを用いて自己紹介および研究テーマのプレゼンテーション（持ち時間5分）、2年生においては口頭による自己紹介（持ち時間2～3分）が実施された。専攻内であれば当然、自分の研究分野以外でも触れる機会が多いが、専攻外分野の研究内容や手法についてはなかなか触れる機会が少ない。学生の視野を広げることに繋がる有意義なものであった。

専攻セミナー終了後、ポスターセッション（情報交換セミナー）が行われた（2年生32人）。文字の多用により、理解するのに時間がかかるポスター発表もあったが、全体としてそれぞれ自己の研究成果を視覚に訴えた分かりやすいポスター作りがなされていた。

最終日の3日目は、施設見学と閉講式が行われた。9時半に沖縄科学技術大学院大学（OIST）（恩納村在）に到着し、スタッフの与那嶺さん外による施設概要説明・研究室訪問が行われた。参加者は、充実した施設・少人数制の下で実施されている最先端の研究に関心を抱き、刺激を受けていた。特に代議委員については、本研究科の充実や改善に繋がるなんらかのヒントを得たものとする。

平成28年度 農学特別講義(一般セミナー) 日程表

会場: 自治会館

	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00
11/7(月)						14:15	14:45	15:30	17:00	17:30	
						受付 14:15-14:45	閉講式・写真撮影 14:45-15:30	セミナーA 「日本での新薬製造承認申請における必要データ」 西村 章 武田薬品工業(株) 日本開発センター クリニカルサイエンス ディレクター 15:30-17:00	交流会 17:00-19:00		
11/8(火)	9:00	10:30	10:40	12:10	13:10	14:40	14:50	16:20	16:30	18:00	
	受付 8:30-9:00	セミナーB 「農耕地におけるダイズ根粒菌のゲノム生態学的研究」 佐伯 雄一 宮崎大学農学部教授 9:00-10:30	休憩	セミナーC 「狼煙ある! は烽火考-サイエンスからの想いを馳せて」 加藤 進 三重大学伊賀研究拠点 特任教授 10:40-12:10	昼食 12:10-13:10	セミナーD 「代謝プログラミングと国内草資源による新しい和牛肉生産に関する研究」 後藤 貴文 九州大学大学院農学研究院 准教授 13:10-14:40	休憩	専攻セミナー 1年生全員 14:50-16:20	休憩	情報交換セミナー(ポスターセッション) 2年生全員 16:30-18:00	
11/9(水)	9:00	10:30	10:40	12:10	12:40						
	受付 8:30-9:00	施設見学	休憩	施設見学	閉講式 12:10-12:40						



『農学特別講義(一般セミナー)』

“Agricultural Science (General Seminar)”

平成28年11月7日-9日 自治会館 2階

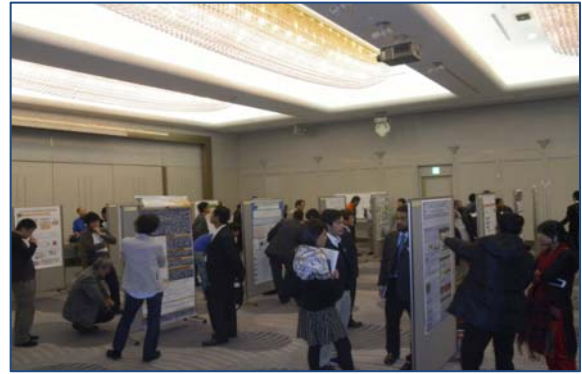
November 7-9, 2016 JICHIKAIKAN 2F

鹿児島大学大学院連合農学研究科

The United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University



1日目 セミナーAの様子



ポスターセッション（情報交換セミナー）

「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」参加学生から徴した平成28年度のアンケートの集計結果は次表のとおりである。〔参加学生：73名 アンケート提出者：56名 アンケート回収率：76.7%〕

平成28年度農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）アンケート調査結果

・セミナーの理解度について

〔回答項目〕	セミナーA	セミナーB	セミナーC	セミナーD
ほぼ理解できた	38名 (67.9%)	38名 (67.9%)	35名 (62.5%)	39名 (69.6%)
半分程度理解できた	17名 (30.4%)	17名 (30.4%)	20名 (35.7%)	16名 (28.6%)
理解できなかった	1名 (1.7%)	1名 (1.7%)	1名 (1.8%)	1名 (1.8%)

・セミナーの規格・運営について

〔回答項目〕	日程（時期）	日程（日数）	会場
良い	53名 (94.6%)	51名 (91.1%)	51名 (91.1%)
悪い	1名 (1.8%)	4名 (7.1%)	2名 (3.5%)
その他	2名 (3.6%)	1名 (1.8%)	3名 (5.4%)

・専攻セミナーについて

〔回答項目〕	グループの分け方
良い	46名 (82.1%)
改善すべき	10名 (17.9%)
無回答	0名

・専攻・情報交換セミナーについて

〔回答項目〕	プレゼンテーション	ポスターセッション	交流会について
意義がある	38名 (67.9%)	52名 (92.8%)	48名 (85.8%)
少しは意義がある	16名 (28.5%)	2名 (3.6%)	4名 (7.1%)
その他	2名 (3.6%)	2名 (3.6%)	4名 (7.1%)
無回答	0名	0名	0名

①セミナーの理解度について

ほとんどの講義で、日本語と英語の併用で実施していることにより、理解度が上がっているが、内容が専門的すぎず、理解がしやすかったという意見もあった。

また、ほとんどの講義について、「非常に解りやすく、有意義なテーマだった。」「研究内容、研究成果、利用方法等興味深かった。」等の意見が見られたが、講義内容が専門性の高いものについては、理解が困難だったとの意見があった。

②セミナーの運営・企画等について

「時期」「日数」「会場」については、約 90%の学生から「良い」との評価を得られているため、今後も従来通りの実施方法を考えている。

③専攻セミナー・ポスターセッションについて

もう少し少人数のグループにして、意見交換ができるシステムにすれば、内容が充実するのではないかという意見があった。

専攻セミナーのグループ分けを行うことで、交流の機会を減らしているように感じる。写真撮影などの時間を削ってでも、学生の研究紹介・自己紹介は全体向けにした方が良いという意見があった。

④セミナー全般について

- ・普段自分の研究と向き合っているだけでは分からないことが多くあり、充実した内容であった。
- ・施設見学は、非常に良かった。最先端を誇る施設を見ることができた。
- ・セミナーは分かりやすく、長年研究している方々のプロフェッショナルな考え方やプレゼンテーションの仕方はとても勉強になり、自身の研究にも参考になる部分がたくさんあった。また、ポスターセッションでは様々な分野の方々に指摘、感想を頂きとても有意義だった。

次年度の鹿児島大学水産学部当番の開催においては、今回のアンケート結果を踏まえて、検討していくこととした。

3. 人材養成学生支援セミナー

(1) 人材養成学生支援セミナー I

平成 22 年度から、本研究科では、博士課程修了者が社会から何を求められているかを理解し、今後の修学姿勢及び社会へ出る際の心構え等の修得に役立てることを目的に、各方面の第一線で活躍する方々からより実践的な講演をしていただく機会として、「人材養成学生支援セミナー I」を開催している。

平成 28 年 7 月 15 日（金）、佐賀大学農学部学生演習室をメイン会場として、鹿児島大学連合農学研究科会議室、鹿児島大学水産学部図書館水産分館セミナールーム、そして琉球大学農学部会議室の各会場を SINET で結び、「人材養成学生支援セミナー I 2016」が開催された。4 コマで 0.5 単位であるが、例年同様、各会場に講師をお招きして講義をしていただく形式で実施された。各会場から、それぞれ 1 つの演題が配信された。各会場とも、連大以外の学生や教員の参加もみられ、充実した内容のセミナーとなった。

全ての講演が、講演者自らの経験を踏まえた大変多岐にわたる内容であった。起業や将来の目標設定に際してのアドバイス、会社組織における研究開発、博士課程を経ての就職活動の心構え、そして、ベンチャー企業における製品開発のキーポイント等々、いずれも大変示唆に富む興味深い内容であっ

た。さらに、全ての講師の方々が、大変念入りな準備をした上で今回のセミナーに臨んでいただいたこともあり、熱心に各講演に耳を傾ける聴講学生の表情が印象に残っている。
4つの講演の後、総合討論が行われた。今回のセミナーは講師全員が民間企業の方であり、通常の大学の講義では聴けない興味深い内容であった。その為、各会場より多数の質問が寄せられ、各質問に対して全ての講師の方々から其々示唆に富む真摯な回答がなされた。

(2) 人材養成学生支援セミナーⅡ（洋上セミナー）

我が国の水産食糧は黒潮域に分布する回遊性魚介類にも依存おり、これらの資源量は黒潮域の海洋環境と生態系を介した気候変動の影響を受けて大きく変動することが知られている。本洋上セミナーは、このような黒潮域へ出かけ、受講者みんなで協力しながら海洋観測と取得データの考察を行い、食糧を支える海の環境や生態系について知るという科目である。

平成28年度は、11月12日～20日（9日間）水産学部の練習船「かごしま丸」に乗船して、実践的な学習、高度な専門能力を涵養することを目指し、連大生5名が参加した。

参加した5人の学生全員が農水圏資源環境科学・水産資源環境科学に所属する鹿児島大学の学生であった。そのため、学生の専門性と実習内容が近かったこともあり、洋上実習に対する学生の評価もよかった。主な評価理由は、「かごしま丸」という国内でも最先端の観測設備を備えた巨大施設を利用して、連大生と専門家が協働して観測するという特殊体験にあることが、実習レポートから覗える。

今年度の洋上セミナーでは、観測実習以外に、連大生が相互に自己紹介・研究紹介を行う機会を設け、実習生活での連携を高める試みをした。また、他大学・他研究機関から乗船した若手研究者にキャリア形成と研究の経験談や考え方を講演して頂き、連大生の将来設計に役立てる試みをした。特に、講演会は、講演者それぞれの人生観・研究観がストレートに伝わってきて、学生に好評であった。一方、まだまだ不十分な点は、観測目的・観測機器・取得データの解説に十分な時間を割けなかった点である。この点は、来年度以降、さらなる改善が必要である。

人材養成学生支援セミナーⅠ・Ⅱともに継続実施し、地域社会、国際社会で幅広く活躍できる能力と意識の養成に繋がるよう、今後も整備していかねなければならない。

平成28年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科「人材養成学生支援セミナーⅠ 2016」日程表

	8:50	9:00	10:20	10:30	11:50	13:00	14:20	14:30	15:50	16:00
7月15日(金) July 15(Fri)	開講 挨拶 Opening	講義1 Lec1 「農学部の研究者だった自分が経営者となるまで何を考えていたのか」 小平 勲太 小平株式会社 代表取締役 社長 Kanta KOBIRA Kobira Ltd.	休憩 Break	講義2 Lec2 「仕事としての研究開発について」 稲福 桂一郎 金秀バイオ株式会社 研究開発部執行役員部長 Keiichiro INAFUKU Kanehide Bio Co.,Ltd.	昼食 Lunch Time	講義3 Lec3 「企業から見た博士の価値とは？そして、博士のキャリアとは？」 黒木 豊 日本たばこ産業株式会社 経営企画部 Yutaka KUROKI Japan Tobacco Inc.	休憩 Break	講義4 Lec4 「理系大学院生が企業で活躍するためには何が必要か、今なにをすべきか」 織田 康則 株式会社 ビークル マネージャー Yasunori ODA Beacle, Inc.	休憩 Break	総合討論会 Discussion
		講義大学		鹿児島大学(水産) Kagoshima University(Fish.)		琉球大学 University of the Ryukyus		鹿児島大学(農学) Kagoshima University(Agri.)		佐賀大学 Saga University

場所：各大学 SINET 設置教室 Place: Sinet room of each University
 佐賀大学：佐賀大学農学部1号館南棟1階学生演習室
 鹿児島大学(農)：鹿児島大学連合農学研究科3階会議室
 鹿児島大学(水産)：鹿児島大学附属図書館水産分館セミナールーム
 琉球大学：琉球大学農学部2階会議室



人材養成学生支援セミナーⅠ：
鹿児島大学連合農学研究科会議室での様子。
他構成大学へは SINET にて配信。

洋上セミナー
(練習船かごしま丸甲板にて)



4. 分野別セミナーの開催

平成 24 年度から、構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的とした「分野別セミナー」を開催している。

2 月 28 日(火)に、外部講師による講演二題（「口臭のメカニズム」日本大学松戸歯学部 多田 充裕先生、「スフィンゴ糖脂質の化学構造の多様性」滋賀大学教育学部 糸乗 前先生）を実施した。その後、学生 11 名（博士課程学生 5 名）によるポスター発表を行い、質疑応答を行った。さらに、交流会で情報交換を行った。

3 月 1 日(水)は工場見学を実施した。午前に醤油、業務用加工食品・調味料を開発、製造している創業 135 年の宮島醤油妙見工場を見学し、宮島醤油基礎研究室の加藤富民雄氏から説明を受けた。午後は明治 8 年から日本酒を製造している天山酒造を見学し、七田謙介社長の説明を受けた。

平成 28 年度は、学生の多数参加があり、教員 21 名、学生 14 名の合計 35 名が集い、参加学生は、講演、ポスター発表および交流会等を通して、分野の近い大学院生同士の情報交換や指導教員以外の教員からのアドバイスを受け、今後の博士論文研究の遂行と論文作成に本セミナーの成果が反映されると思われる。また、農芸化学分野に関わる工場での博士号を持つ研究員との交流や伝統的な日本酒製造現場の見学は、今後の進路選択や就職後の業務に大いに役立つものと考えられる。



分野別セミナー 会場内



多田先生講演「口臭のメカニズム」



糸乗先生講演
「スフィンゴ糖脂質の化学構造の多様化」



「宮島醤油妙見工場」見学



「天山酒造」見学

5. 修了生，学生を対象としたアンケートの実施

例年、修了生を対象としたアンケートを実施している。

これは、自己点検・評価の参考とするため、平成 18 年 4 月に、平成 11～17 年度修了者を対象に郵により実施したのが始まりで、以後は修了時に学生から回答してもらう形を取っており、平成 24 年度からは、Web による入力方式で行っている。

さらに、平成 25 年度からは在學生へのアンケートを開始した。これは、FD 委員会において、現在連大で学ぶ学生から一番身近な現場の声を聞くことで、より学生の声が反映されるのではないかとの見解から、実施を決定したものである。

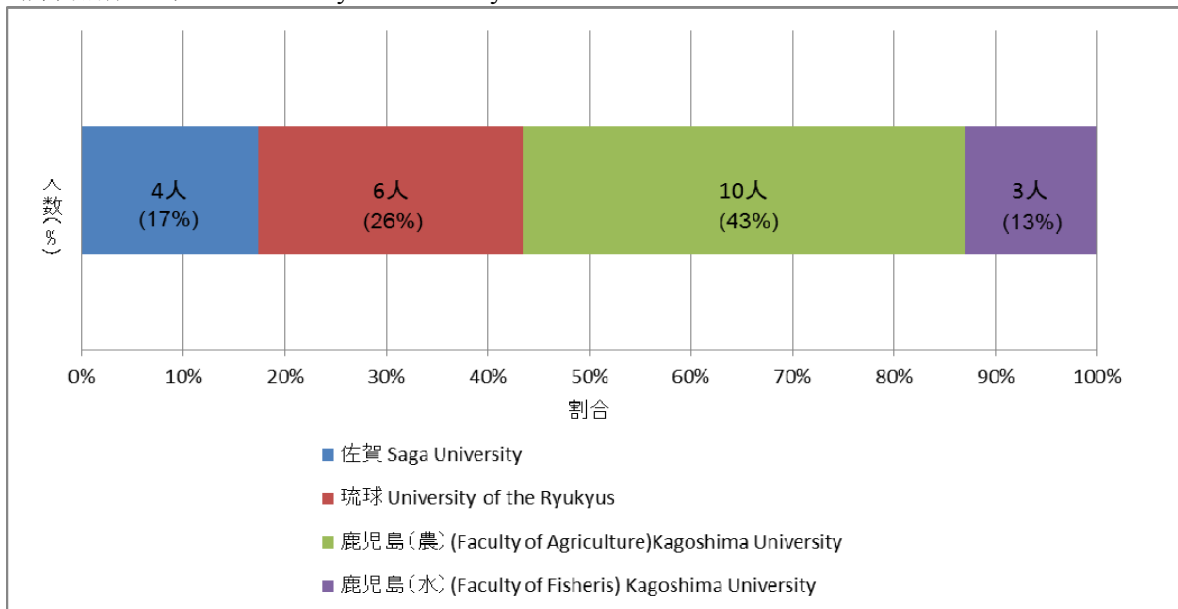
(1) 平成 28 年度修了生へのアンケート集計結果

H28 年度 3 月修了生 26 名中、回答学生 23 名（日本人 13 名，留学生 10 名）

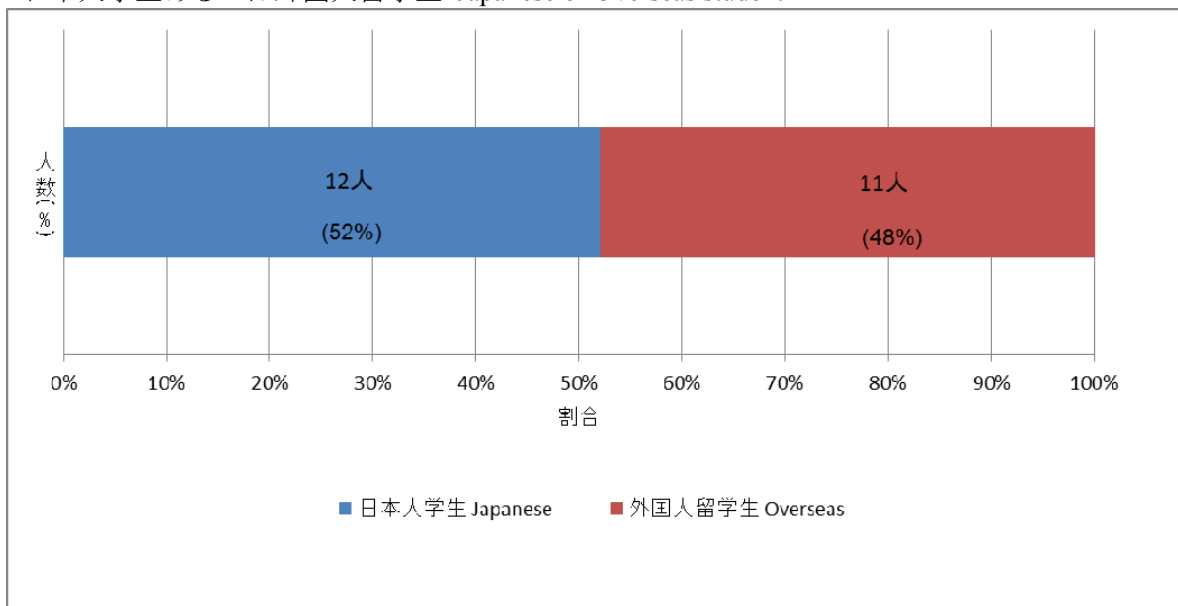
回答率 88%

(以下アンケート項目より一部抜粋)

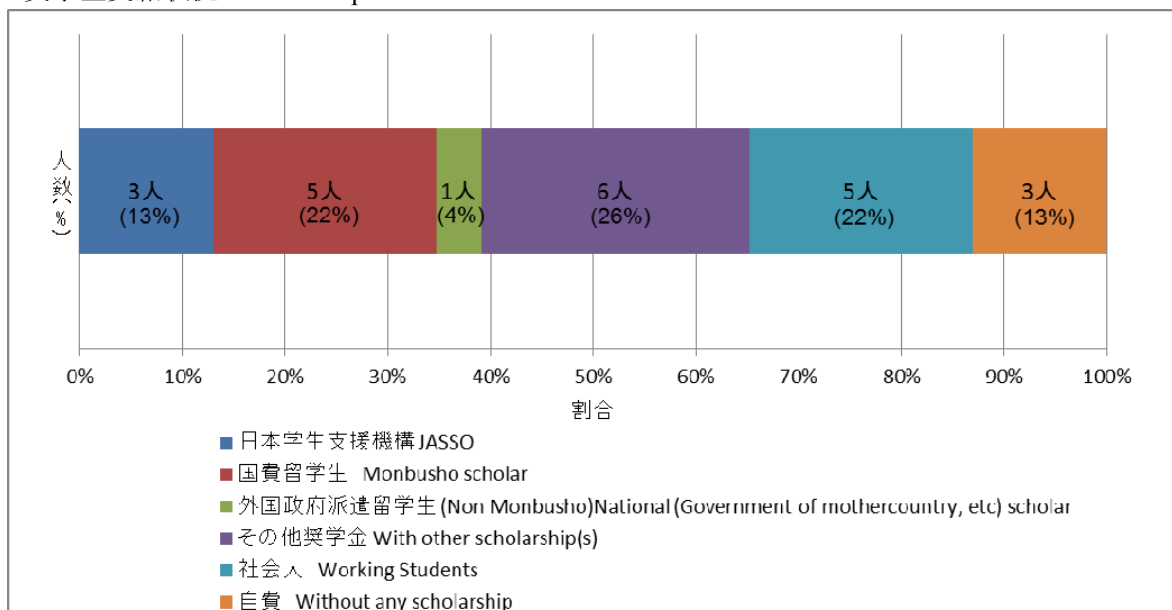
・所属構成大学は University with where you are affiliated



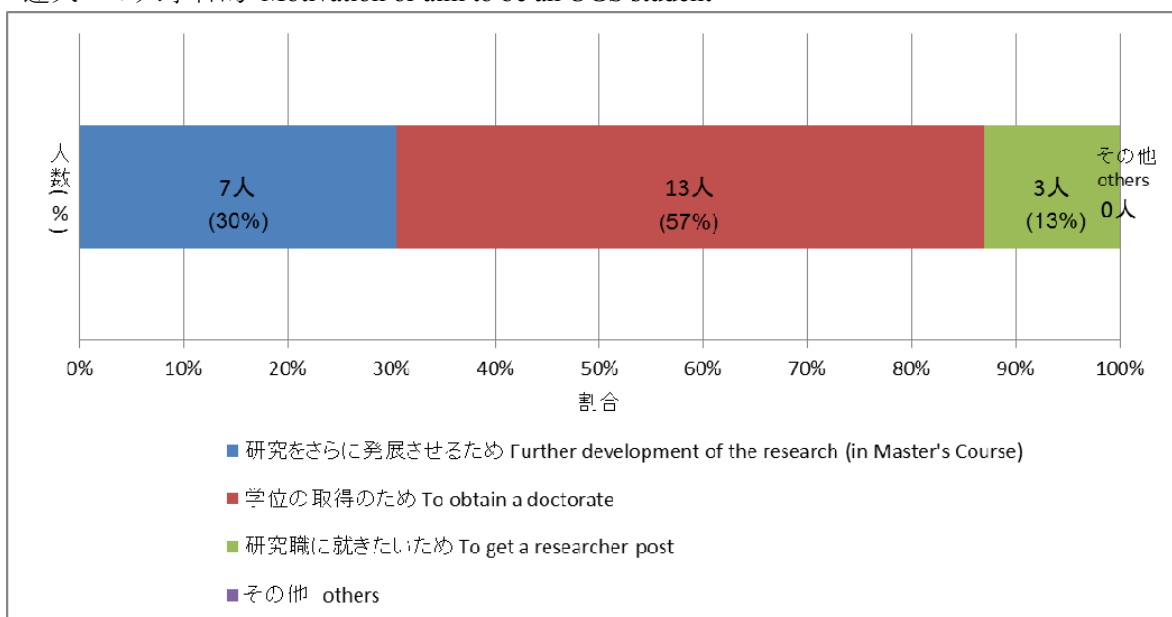
・日本人学生あるいは外国人留学生 Japanese or Overseas student



・奨学金受給状況 Scholarship



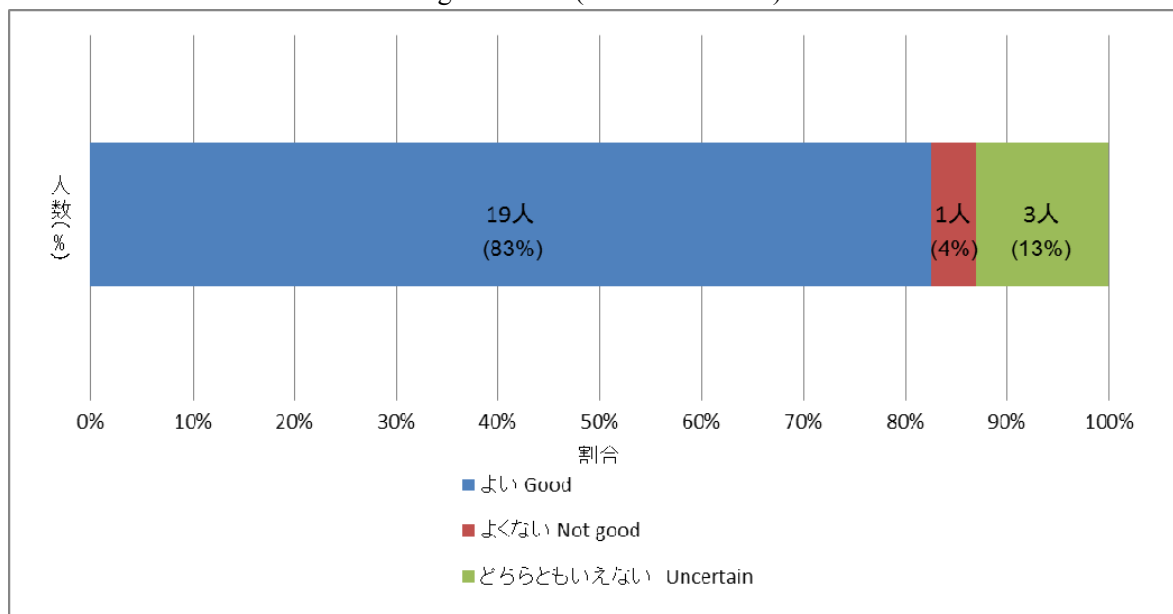
・連大への入学目的 Motivation or aim to be an UGS student



1. 講義・セミナーについて On the Lecture and Seminar

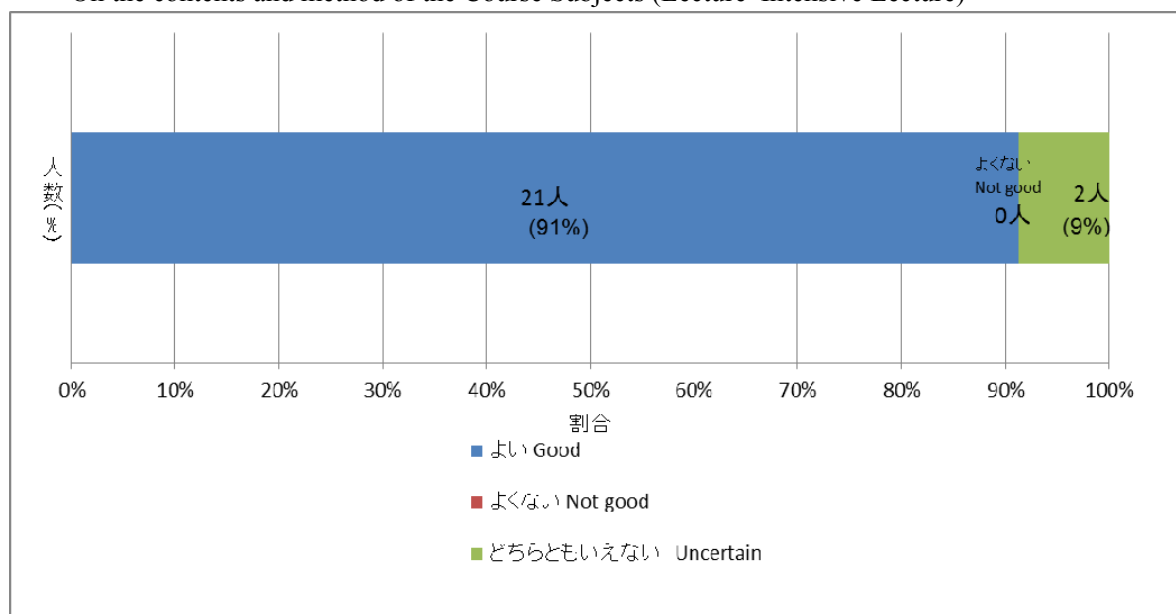
1-1. 農学特別講義 I (一般セミナー) の内容・方法について

On the contents and method of Agriculture I (General Seminar)



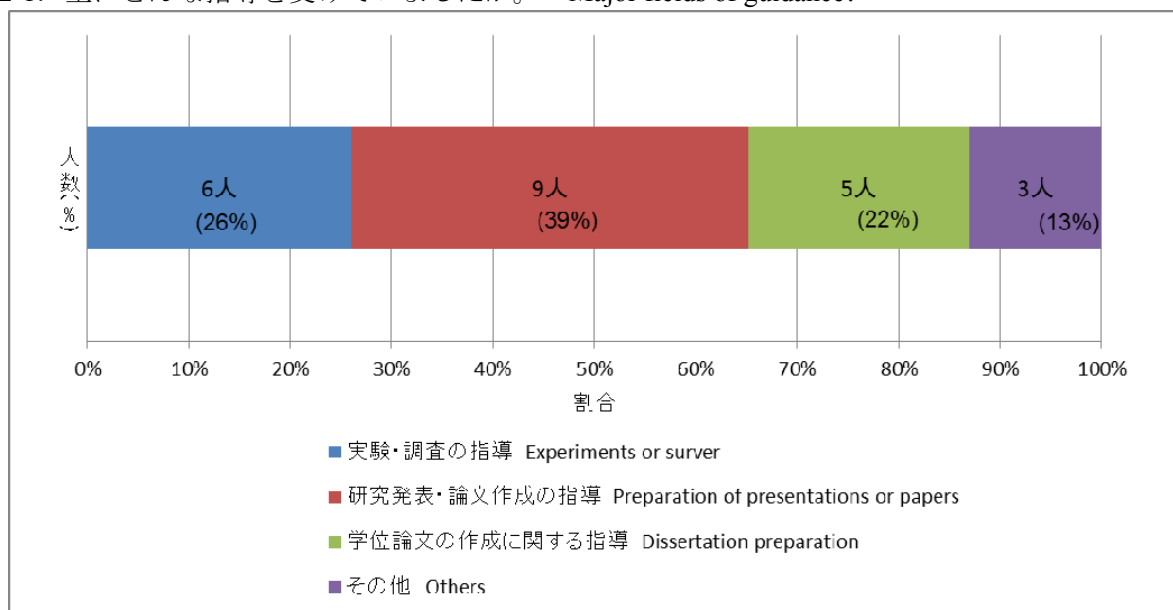
1-2. 専攻別講義・特論の内容・方法について

On the contents and method of the Course Subjects (Lecture・Intensive Lecture)

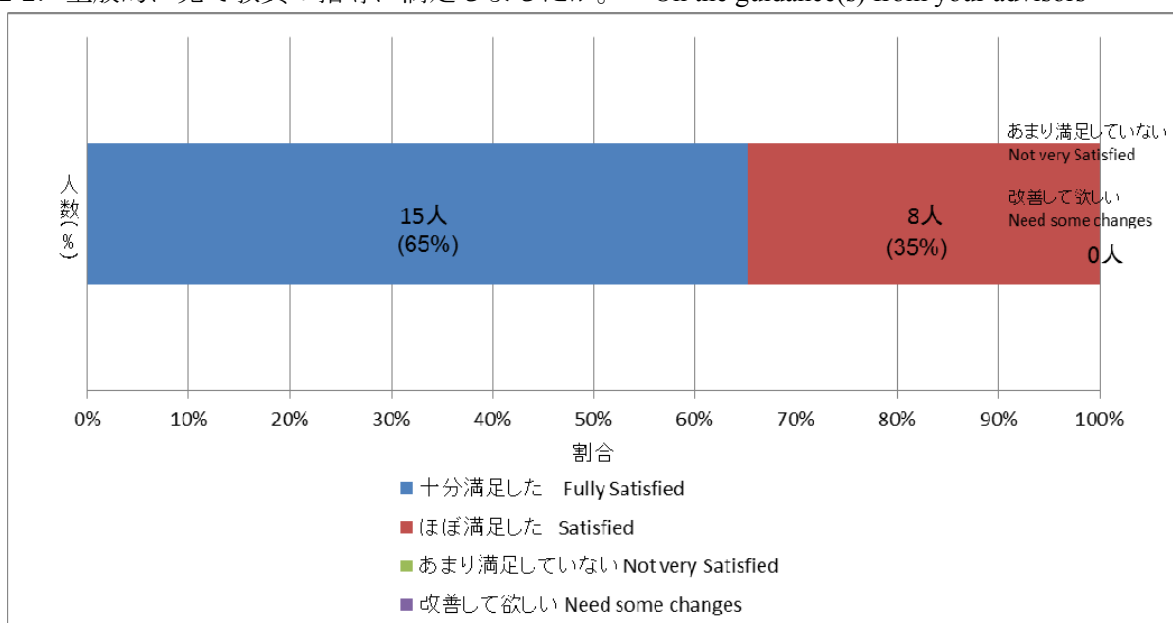


2. 研究及び指導について Your research and guidance from your advisors

2-1. 主にどんな指導を受けていましたか。 Major fields of guidance?

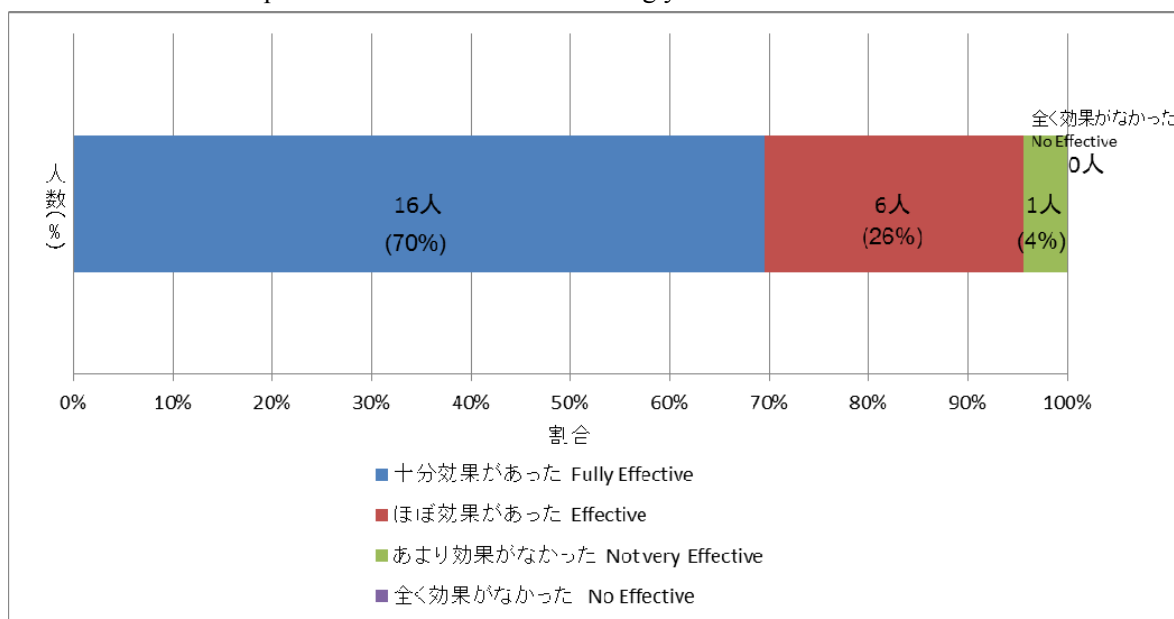


2-2. 全般的に見て教員の指導に満足しましたか。 On the guidance(s) from your advisors



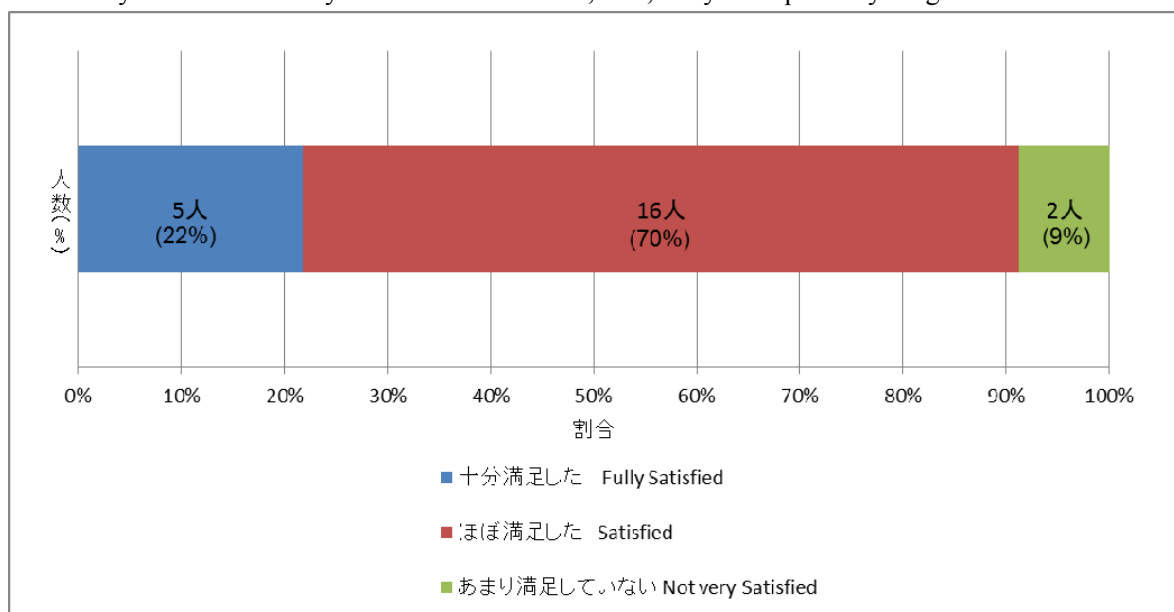
2-3. 中間発表はあなたの研究を進める上で効果がありましたか。

Was the midterm presentation effective in advancing your research?



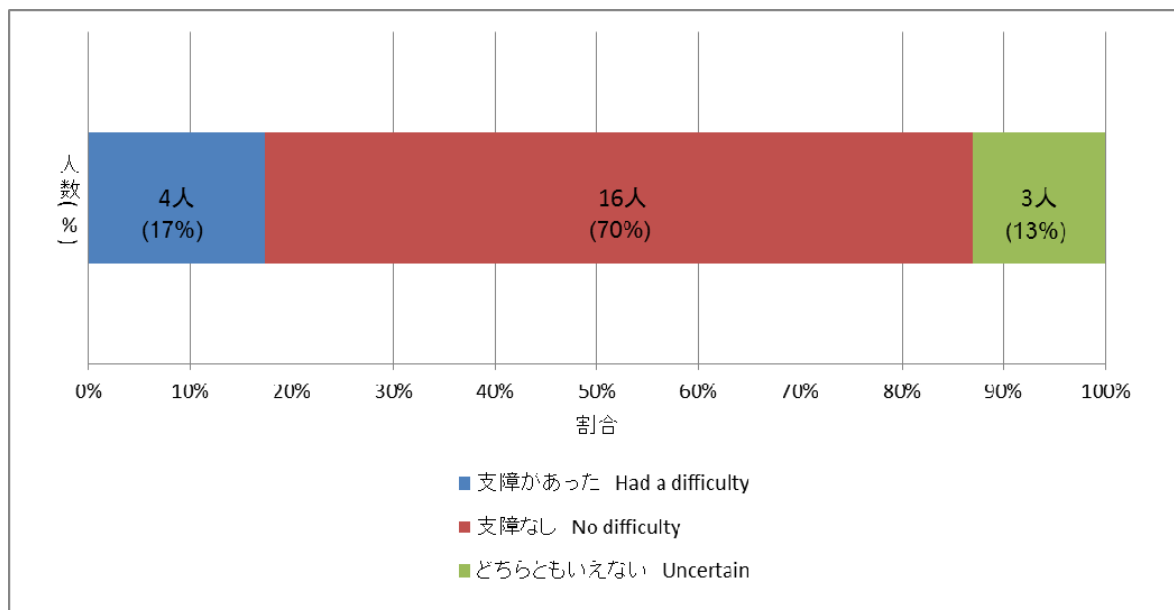
2-4. あなたの研究成果に満足していますか。また、得られたものがありましたか。

Are you satisfied with your results of research, also, did you acquire anything ?



2-5. 研究設備等で研究を遂行する上で何か支障がありましたか。

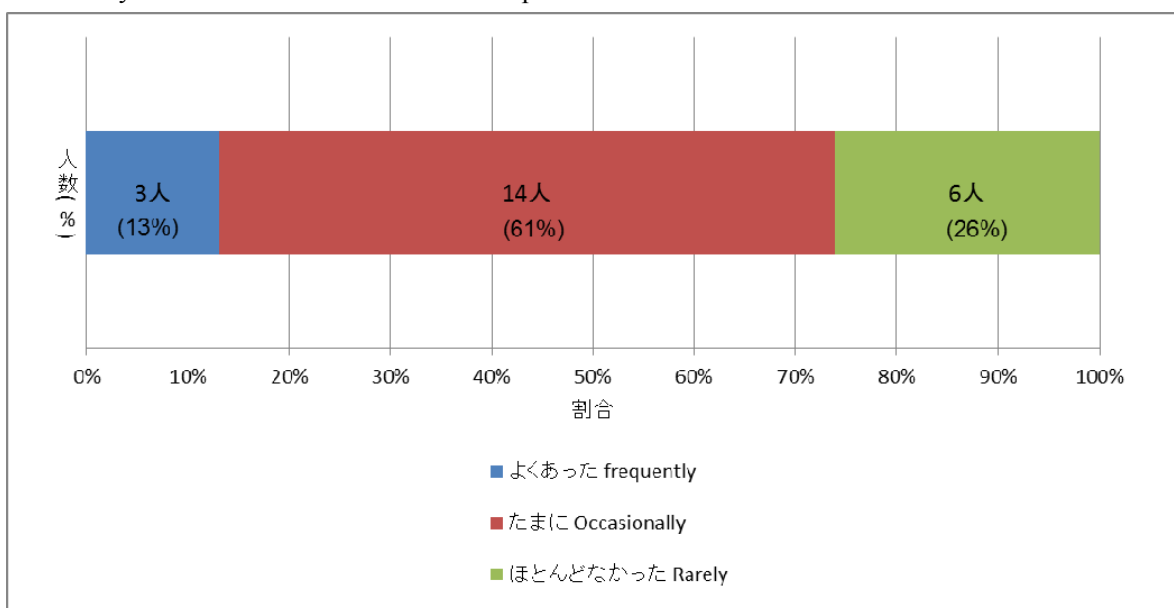
Did you have any difficulty with the university facilities and equipment for your study?



3. 学生生活について On your everyday life as UGS students

3-1. 他の構成大学とは情報交換や交流がありましたか。

Did you communicate with students or professors of other affiliated universities?



各セミナーの内容、教員の指導、研究設備等への評価が高い中、他の構成大学間の情報交換や交流については、あまり交流が図れなかったとの意見があり、他の大学の学生とのコミュニケーションを深める機会を望む声が多かった。学生間の交流不足については、例年意見が挙げられており、交流の機会を設ける場を広げるべく、平成24年度から分野別セミナーの継続などを実施しており、今後も、学生交流の機会の必要性を追求していくこととしたい。

また、中間発表会は学位論文作成への推進のためにも非常に有効であったとの評価が高く、研究をまとめるのにとっても重要で、実験の方向性等の調整にもつながり様々な視点からの助言がもらえるなどの意見があり、平成29年度におけるFD活動の一環として反映させるようにしたい。

(2) 平成 28 年度 2 年生へのアンケート集計結果

対象学年 (2 年生) 33 名中、回答学生 21 名 (日本人 12 名, 留学生 9 名), 回答率 64%
回答学生在籍校内訳 (佐賀 3 名, 琉球 9 名, 鹿児島(農)6 名, 鹿児島(水産)3 名)

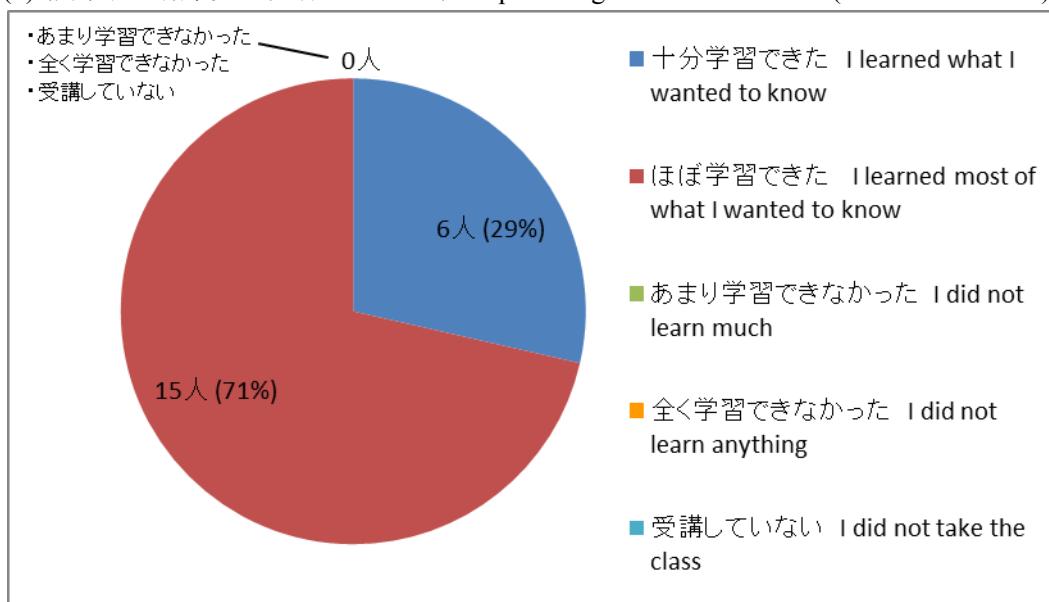
(以下アンケート項目より一部抜粋)

1. 講義・セミナーについて Lectures/Seminars

1-1. 研究科共通セミナーについて、十分学習できましたか。

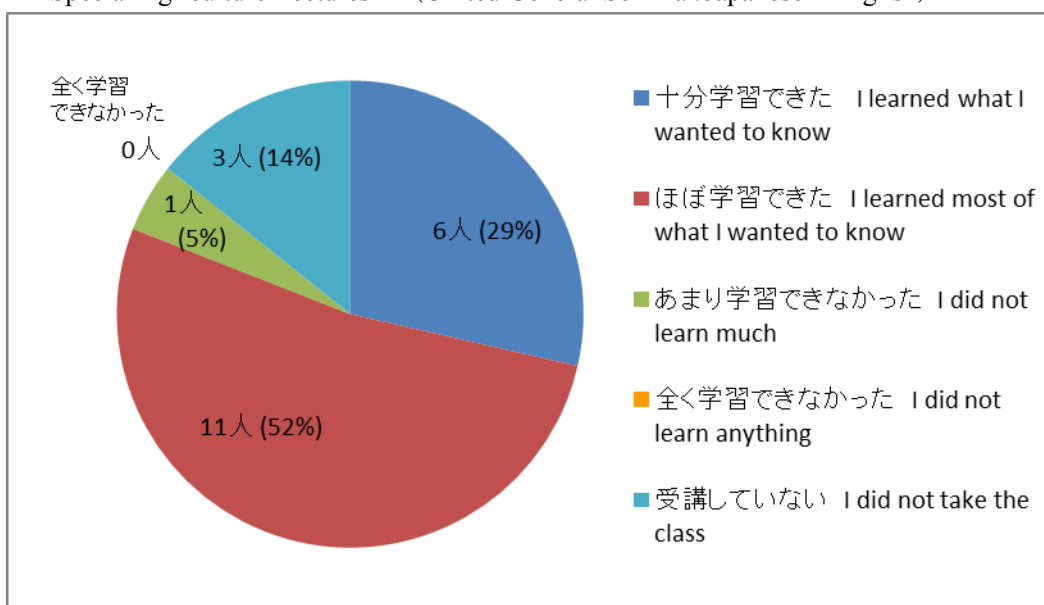
Did the joint Graduate School seminars teach you what you wanted to know?

(1) 農学特別講義 I (一般セミナー) Special Agriculture Lectures 1 (General Seminars)

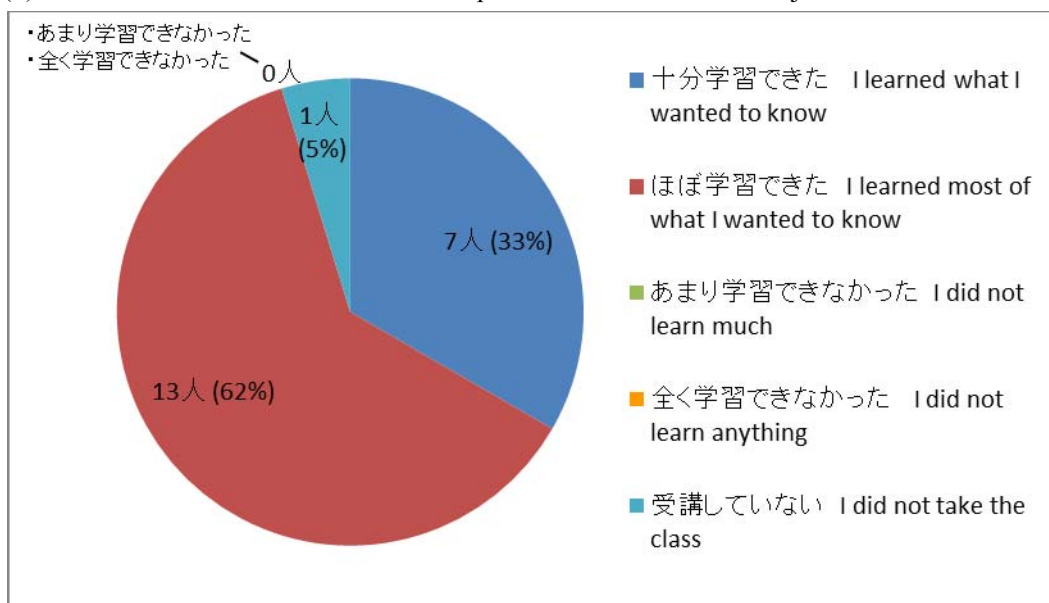


(2) 農学特別講義 II (連合一般セミナー (日本語 6 月・英語 11 月))

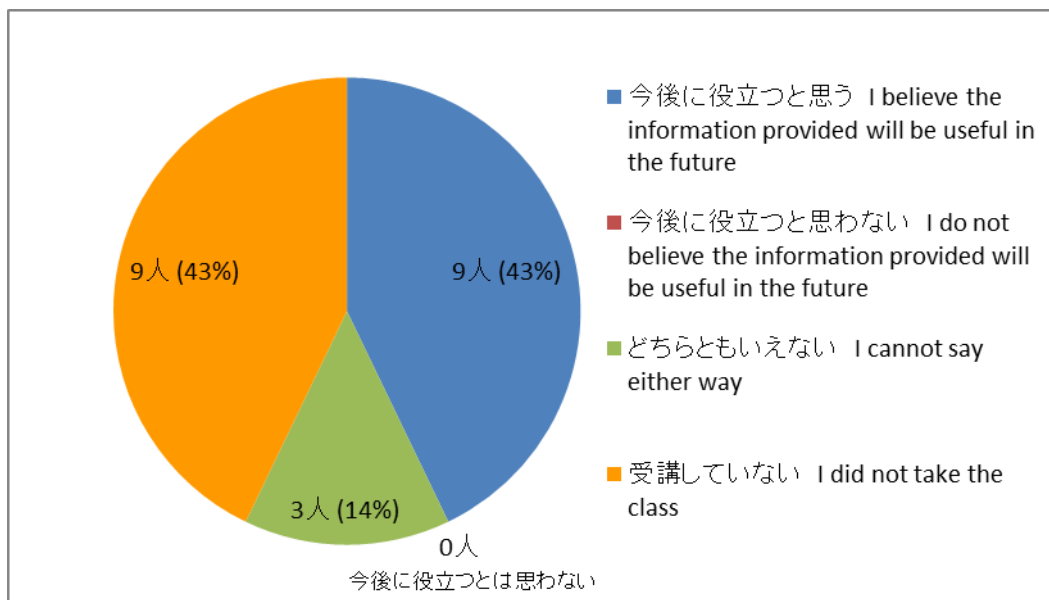
Special Agriculture Lectures II (United General Seminar/Japanese・English)



(3) 専攻別特別講義・特論 Lectures/Special seminars for each Major

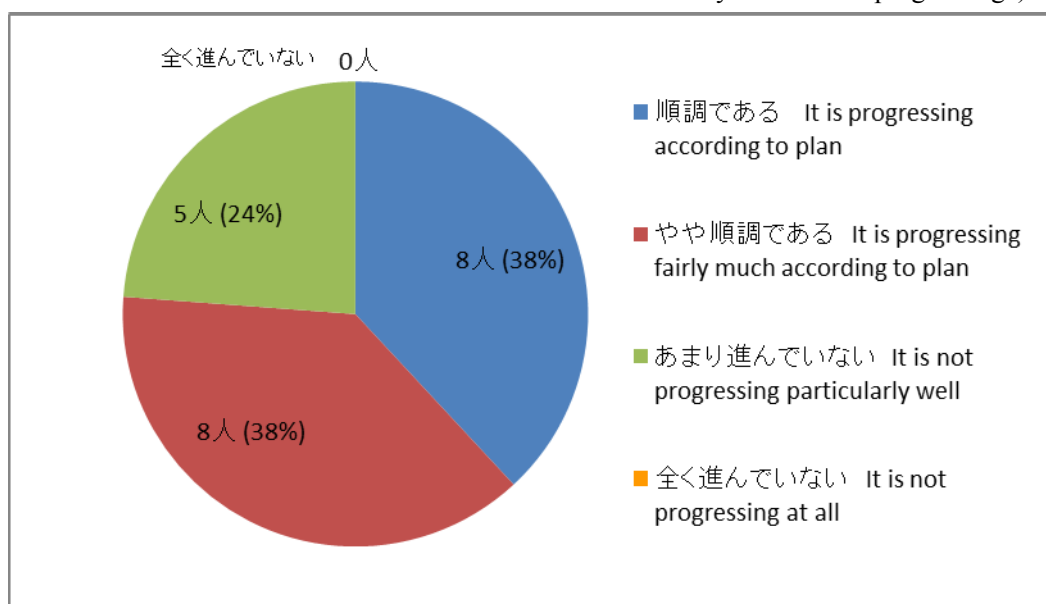


(4) 人材養成学生支援セミナー Student support seminars for human resource development



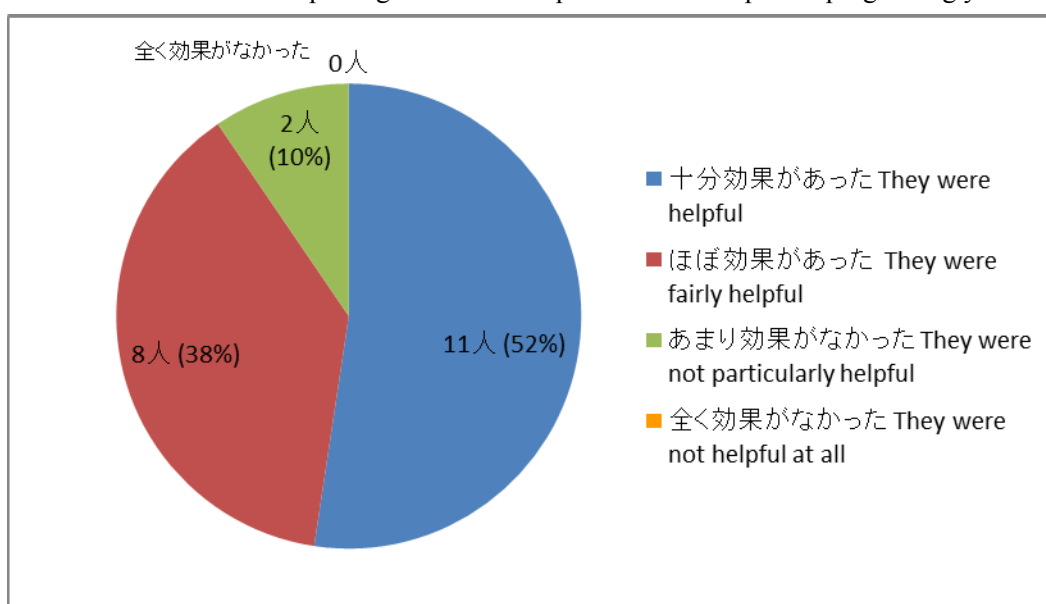
2. 研究・指導について Research/Teaching

2-1. 研究の進捗状況について教えてください。 How is your research progressing?)



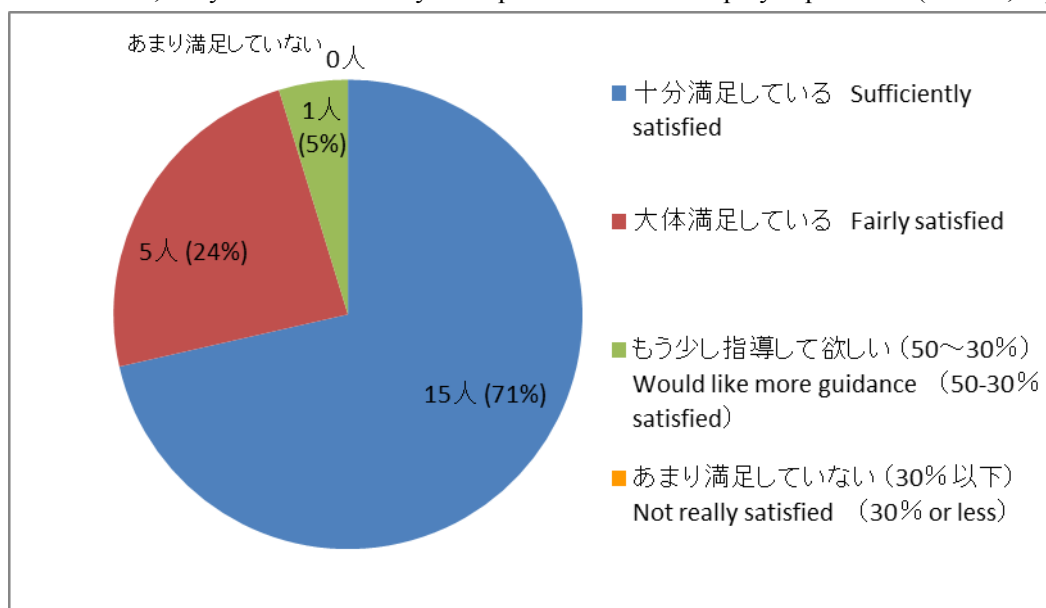
2-2. 中間報告会及び中間発表会は、あなたの研究を進める上で効果がありましたか。

Were the mid-term reporting and mid-term presentations helpful in progressing your research?



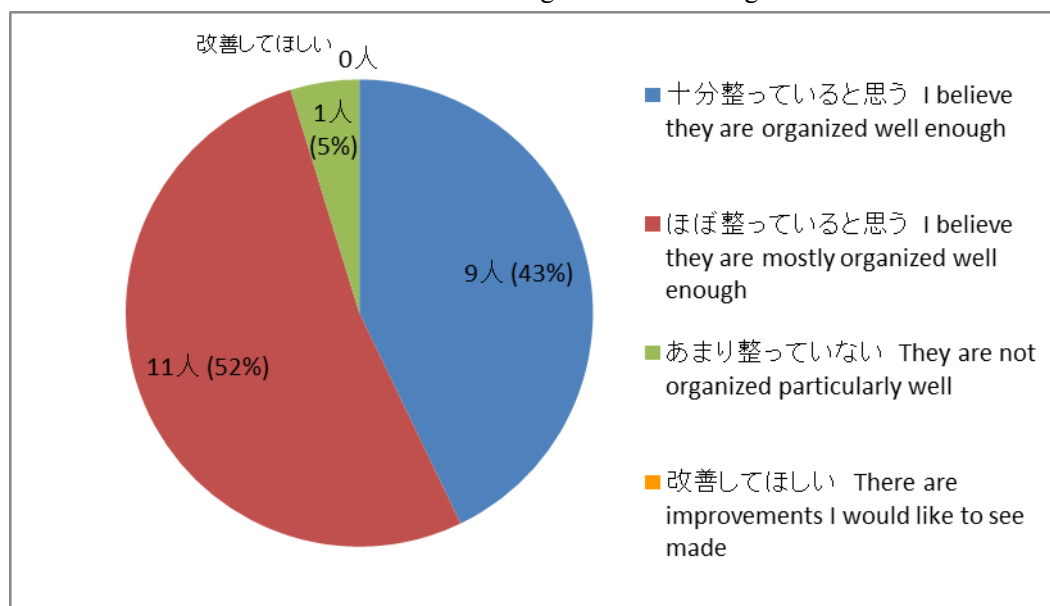
2-3. 全般的に見て主指導教員及び第1副指導教員の指導に満足していますか。
(アドバイス・サポート等)

Overall, are you satisfied with your supervisor and first deputy supervisor? (Advice, support, etc.)



2-5. 研究設備・環境等は十分整備されていると思いますか。

Are the research facilities/environment organized well enough?



各セミナーの内容、教員の指導、研究設備等に関しては、ほぼ満足している回答が多かったが、一般セミナーでの日本語と英語の統一性や専門用語に対する補助、専攻別講義での共通項を生かした授業など、講義の実施方法への要望も見られた。

また、英語教育の向上(英語による授業拡大)については、英語学習の講義や機会を増やして欲しい、などの意見があり、グローバル化が求められる中、教員の英語講義のあり方と併せて早急な検討を進めていく必要がある。

各種情報の伝達のあり方についても、学生から改善を求める声があり、学生に必要な情報が届いていないケースがあった。研究設備等に関しても、情報不足や使用方法の指導などに対する具体的な意見も見られ、今後、教職員ともに現状の見直しを行い、FD委員会を中心に改善策を検討し、FD活動の一

環として反映させていきたい。

これらのアンケートについては、今後も継続して実施し、年度ごとの比較も含めてデータ分析を行い、FD活動の源として本研究科の教育研究の将来に役立たせていきたいと考える。

6. その他のFD活動

ティーチング・アシスタント制度による活動実態把握

ティーチング・アシスタント（TA）制度は、大学院学生の処遇の改善とともに、指導者としてのトレーニングの機会提供を目的として実施しており、平成18年度からTA業務に従事する連大生を対象にアンケート形式の「TA活動実施報告書」を提出させ、さらに平成19年度からはTAの指導を受けた学生を対象にしたアンケート形式の「TA活動評価調査」を実施して、その内容を分析することによりTA活動の実態把握に努めている。

また、平成21年度から、TA採用学生及び当該学生の指導教員を対象に、「大学の教育理念とTAの心構え」「TA業務に関わる注意事項」「安全衛生」を指導することを目的とした「TA研修会」を構成大学毎に実施しており、TA活動に携わる学生への事前指導を遂行している。

今年度の報告書では、教えてもらう立場から教える立場になることで学ぶことが多かったこと、自分自身の知識、学力を高めることの意識が強くなったことなどが多く見られた。今後も、TAに求められること、TAに何が必要かを見極めて、学生の研究指導能力の向上に繋がるよう、教員からの指導助言も取り入れるなど、改善を図っていくこととしたい。

7. おわりに

本研究科のFD活動については、平成18年度末から平成19年度にかけて、FDに関する規則や委員会の整備を行い、教育研究のより一層の充実に向けた体制が整ったといえる。各種アンケートを実施し、その集計結果に対してFD委員会で意見交換を行い、次年度に反映できるようFD委員会及び代議委員会において早急に検討し、改善できる部分については、見直しを図るように教職員で協力して進めているところである。

今後は、本研究科でのFD委員会を含むさまざまなFD活動を、いかに今後の教育力、特に博士課程学生に対する研究指導能力の向上に反映させていくか、また、国際化が進む昨今の状況においては、学生・教員共に英語学習への対応が急務とされ、グローバル人材の育成を目指し、英語教育の向上（英語による授業拡大）や日本人学生の海外派遣促進を行うことが検討課題であると思われる。

現在、本研究科では標準修業年限内での学位取得率が低下しており、これまでも学位取得率向上対策の一環として、1年次に中間報告、2年次に中間発表会を義務化させ、主指導教員から1年次終了時点で「研究指導報告書」を、2年次終了時点で「研究経過の『中間報告会』終了報告書」を提出させ、研究の進捗状況を確認するシステムを導入している。この制度をさらに有効化するために、平成23年度からは、2年生対象の「中間発表会」は、多地点制御遠隔講義システムを利用して、専攻ごとに合同で行い、お互いに相対的な進捗状況等を把握できるようにした。さらに、平成24年度からは、関係講座にかかわらず、学生及び教員ともに他の講座の発表にも参加するように推進し、自己研鑽の要素となり、研究の推進に繋がることを目指している。この「中間報告会」及び「中間発表会」については、学生ア

ンケートや修了生アンケートにおいて、研究を進める上でも、学位論文作成においても非常に有意義なものとなっているとの評価が高く、今後も継続して推進していくとともに、より良い方法を模索していきたい。

また、平成 25 年度から在学生にもアンケートを実施し、ニーズを把握するとともに問題点などを改善していくこととしており、今後も、標準修業年限内での学位取得率の向上も含め、学生及び指導教員双方を意識した取り組みの推進を図りたい。そして、「大学院博士課程におけるFD活動とは何か」という原点に立ち返り、教育研究力向上のための一層の努力をしていきたいと考える。

平成 28 年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科FD委員会委員

委員長	糴 井 和 朗	研究科長
委員	寺 田 竜 太	副研究科長
委員	早 川 洋 一	(佐賀大学)
委員	白 武 義 治	(佐賀大学)
委員	屋 宏 典	(琉球大学)
委員	中 村 真 也	(琉球大学)
委員	中 西 良 孝	(鹿児島大学)
委員	境 雅 夫	(鹿児島大学)
委員	木 村 郁 夫	(鹿児島大学)